

茨城県教育財団文化財調査報告第284集

# 村松白根遺跡 2

大強度陽子加速器施設事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

下 卷

平成19年3月

日本原子力研究開発機構  
高エネルギー加速器研究機構  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第284集

むら まつ しら ね  
村松白根遺跡 2

大強度陽子加速器施設事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

下 卷

平成19年3月

日本原子力研究開発機構  
高エネルギー加速器研究機構  
財団法人 茨城県教育財団

# 目 次

## — 下 卷 —

### 第3章 調査の成果

#### 第3節 遺構と遺物

5	5・6・8b区の遺構と遺物	331
(1)	建物跡	331
(2)	整地面	405
(3)	井戸跡	449
(4)	畝状遺構	451
(5)	炉跡	455
(6)	粘土貼土坑	456
(7)	土坑	462
(8)	貝集積地	484
(9)	ピット群	486
00	道路跡	500
01	区画状遺構	501
02	不明遺構	503
03	土壇墓	506
04	遺構外出土遺物	508
	第4節まとめ	515
	付 章	561
	写真図版	
	付 図	

## 5 5・6・8b区の遺構と遺物

建物跡25軒、整地面25か所、井戸跡1基、畝状遺構2か所、道路跡1条、区画状遺構3条が確認された。また、建物跡や整地面に伴わない炉9基、粘土貼土坑23基、土坑146基、貝集積地3か所、ピット13か所、不明遺構2基、土塚墓4基が確認された。以下、各項の遺構と遺物について記述する。

### (1) 建物跡

#### 第74号建物跡 8b区SI-1・HK-4（第400～405図）

**位置** 調査区北部のL9c7区を中心に位置している。東側には第84・85号整地面が隣接している。

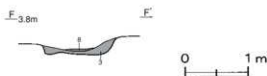
**重複関係** 東部上面に第80号整地面が構築されている。

**確認状況** 表砂を約2.3m除去し、標高4.0～4.1mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と北東に並ぶ柱穴6か所が確認された。

**規模と施設** 南部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、南北22.0m、東西16.5mが確認された。この黒色土面の南東部から、桁行3間、梁行1間と推定される北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-35°-E。規模は桁行5.8m、梁行2.7mで、面積は15.7㎡である。柱間寸法は桁行が1.8～2.0m、梁間が2.7mを基調としている。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑1基、土坑3基が構築されている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ10～14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。北東棟の周囲の床は、やや締まっている。北東棟の西側に平行する溝状の落ち込みが確認された。規模は、確認できた長さ8.9m、幅0.7～1.7cm、深さ8～10cmで雨落ち溝の可能性が考えられる。

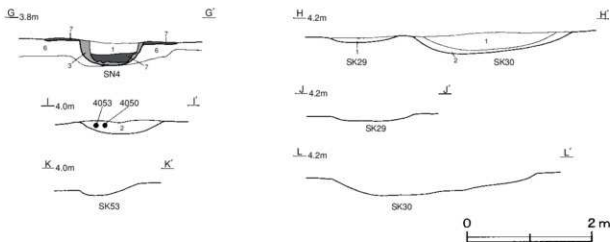
**炉**（第400図）建物内のはほぼ中央部に位置し、厚さ10～15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土下層から第8層の焼砂が検出されている。



第400図 第74号建物跡炉土層図

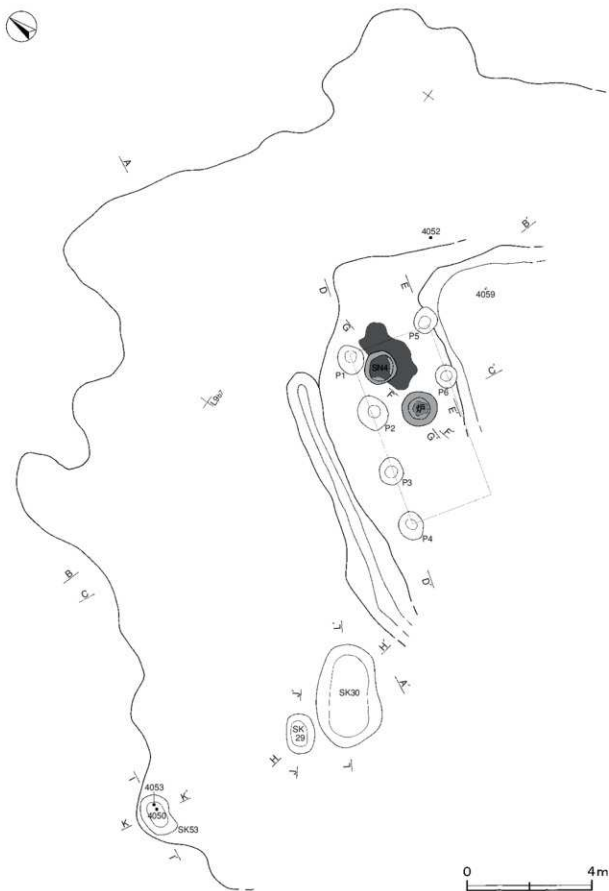
**ピット** 6か所。深さ67～86cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。

**土坑**（第401図）第4号粘土貼土坑は建物内の北部、第29・30・53号土坑は黒色土面の南西部に位置している。第4号粘土貼土坑は、厚さ約14cmの粘土を貼り付けて構築されている。粘土貼土坑及び土坑の覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積した層である。

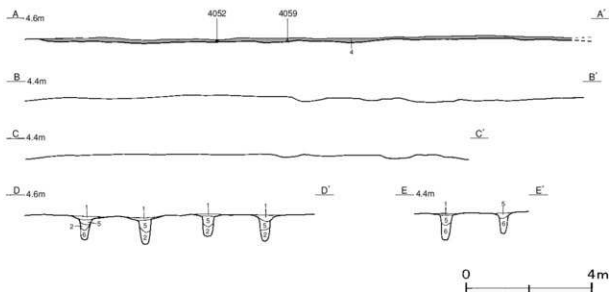


第401図 第74号建物跡土坑土層図





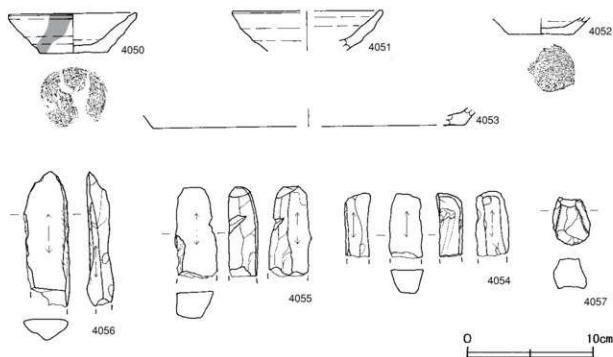
第402図 第74号建物跡実測図(1)



第403図 第74号建物跡実測図(2)

**遺物出土状況** 土師質土器片45点（小皿1，皿36，鍋8），石器6点（砥石4，火打石2），金属製品3点（小刀，釘，古銭），が出土している。4050・4053は第53号土坑内，4052は東部の黒色土中，4059は東部の黒色土下からそれぞれ出土している。

**所見** 桁行3間，梁行1間の北東棟を主体とした黒色土の生活面と考えられる。建物内からは，炉と粘土貼土坑が隣接して確認され，調理場として機能していた可能性が高い。時期は，4050～4053から16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第404図 第74号建物跡出土遺物実測図(1)



第405図 第74号建物跡出土遺物実測図(2)

第74号建物跡出土遺物観察表 (第404・405図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4050	皿	土師質土器	10.1	3.2	5.4	石英・雲母・赤色粒子	灰黄褐色	普通	底部回転糸切り 外面煤付着	SK53内	60%
4051	皿	土師質土器 [11.8]	(3.1)	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口クロナデ	覆土中	20%	
4052	皿	土師質土器 -	(1.3)	[5.2]	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	東部黒色土中	10%	
4053	焙烙*	土師質土器 -	(1.4)	[24.8]	石英・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	内面ナデ	SK53内	5%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4054	砥石	(5.1)	2.1	1.9	(39.1)	凝灰岩	砥面3面 他は剝離面	覆土中	
4055	砥石	(7.2)	3.3	2.1	(69.9)	凝灰岩	砥面2面 側面整形時の加工痕有り	覆土中	
4056	砥石	(10.6)	3.6	1.6	(79.2)	凝灰岩	砥面2面 砥面やや湾曲	覆土中	PL87
4057	火打石	3.8	2.9	2.4	34.3	石英	一部の稜が摩滅	覆土中	PL87
4058	釘	(3.3)	0.4	0.6	(4.1)	鉄	断面長方形 先端部欠損	覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4059	永樂通寶	2.49	0.69	0.10	3.40	1408	銅	真書	東部黒色土下	

### 第75号建物跡 8b区HK-1 (第406~409図)

**位置** 調査区北部のL8a0区を中心に位置している。

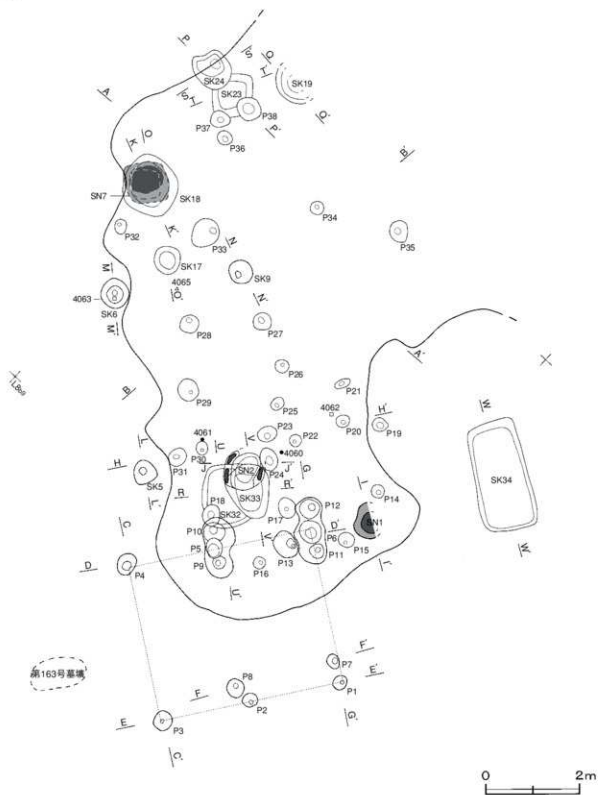
**重複関係** 第11号土坑の上面に構築されている。

**確認状況** 表砂を約2.3m除去し、標高3.6~4.1mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑、土坑と柱穴13か所、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑、土坑と柱穴25か所が確認された。

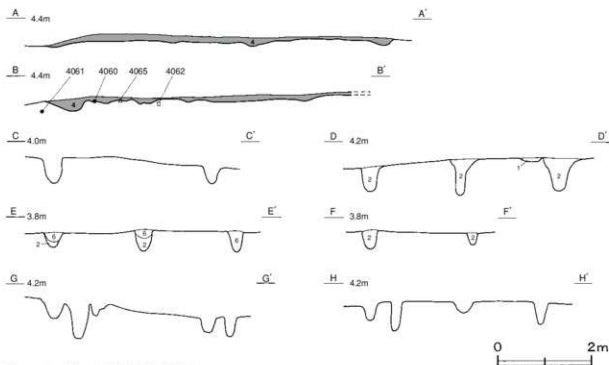
**規模と施設** 北部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、長軸は10.9mだけ確認され、短軸7.7mである。平面形は不定形と推定され、長軸方向はN-30°-Wである。ピットの配列から、桁行2間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-35°-E、規模は桁行4.0m、梁行3.3mで、面積は13.2㎡である。柱間寸法は桁行が2.0m、梁間が3.3mを基調としている。付属施設として、粘土貼土坑3基、土坑11基が構築されている。

**床** 北部から南部にかけて緩やかに傾斜している。厚さ4~12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

**ピット** 38か所。P1~P6は深さ34~78cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。P7~P12は深さ26~48cmで、北東棟を支えた柱穴の可能性が高い。P13~P38は深さ13~64cmで、そのほとんどが黒色土面の下から確認された柱穴であるが、ピットの配列から上屋構造を想定できなかった。

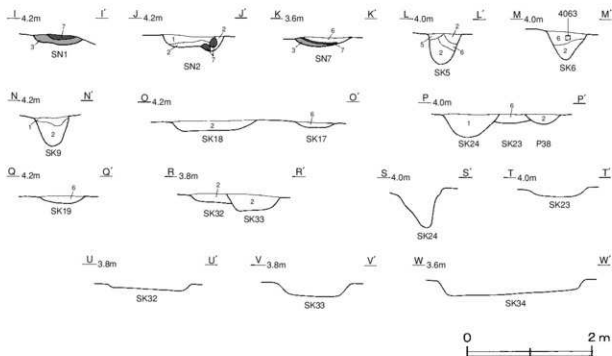


第406图 第75号建物迹实测图(1)



第407図 第75号建物跡実測図(2)

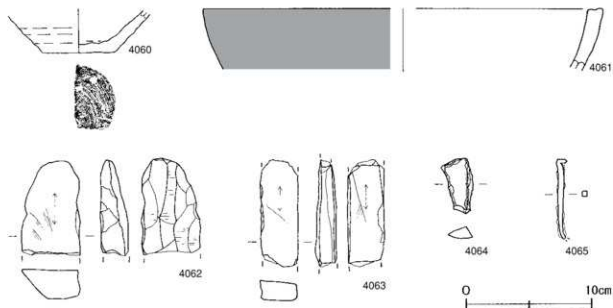
**土坑** (第408図) 第1・2号粘土貼土坑は南部、第9号土坑は中央部、第5・6号土坑は南西部にそれぞれ位置している。黒色土面の下層からは、第7号粘土貼土坑と第17~19・23・24号土坑が北西部、第32・33号土坑が中央部、第34号土坑が東部からそれぞれ確認されている。第1号粘土貼土坑は、底部のみ遺存している。第1・2・7号粘土貼土坑は、厚さ2~8cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第5・6層の黒色土C・D層が人為堆積した層である。



第408図 第75号建物跡土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片20点（皿18、鍋2）、石器3点（砥石2、火打石1）、金属製品1点（釘）が出土している。4060～4062は南部の黒色土中から黒色土下にかけてそれぞれ出土している。4063は第6号土坑内、4064はP4内から出土している。

**所見** 床面が北部から南部にかけて緩やかに傾斜していることや居住を想定させる出土遺物や炉も確認されていないことから、簡易的な小屋を伴う屋外の作業場であったと考えられる。時期は、最初の遺構確認面で検出されていることと4060・4061から16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第409図 第75号建物跡出土遺物実測図

第75号建物跡出土遺物観察表（第409図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4060	皿	土師質土器	-	(3.3)	[5.8]	長石・雲母・赤色粒子	普通	橙	内底面横ナデ	南部黒色土中	20% PL74
4061	焙烙	土師質土器	[31.8]	(4.9)	-	長石・石英・雲母	普通	褐灰	口縁部内・外面横ナデ 外面縦ナデ	南部黒色土下	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4062	砥石	(7.6)	4.7	2.4	(90.8)	凝灰岩	紙面1面 他は整形時の加工痕有り	南部黒色土中	
4063	砥石	(8.5)	3.0	1.6	(64.4)	凝灰岩	紙面2面 他は剥離面	SK 6内	
4064	火打石	4.3	2.5	1.0	8.8	瑪瑙	一部の微が密減	P4内	
4065	釘	(6.3)	0.4	0.4	(6.9)	鉄	断面方形 先端部欠損	北西部黒色土中	

#### 第76号建物跡 8b区HK-12（第410～413図）

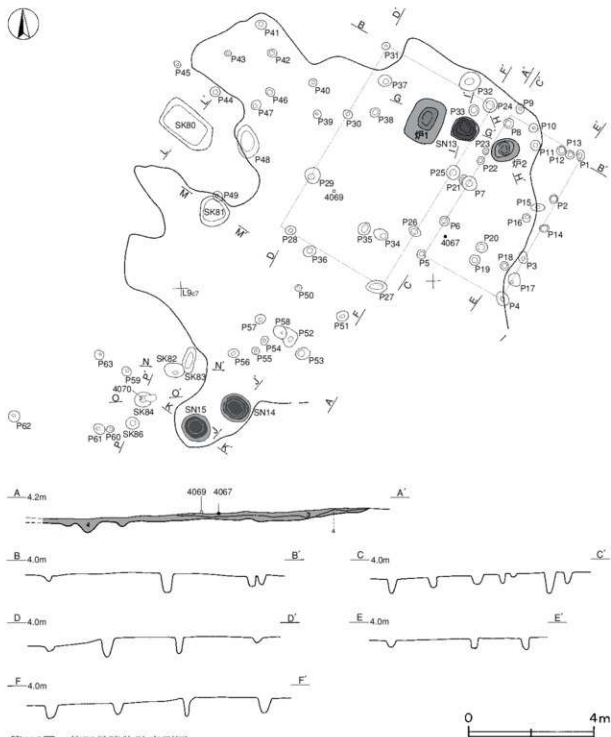
**位置** 調査区北部のL9b8区を中心に位置している。

**確認状況** 第74号建物跡を約0.2m掘り下げた標高3.5～3.9mで、黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑と土坑、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑、土坑と柱穴63か所が確認された。

**規模と施設** 南部の一部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、長軸は14.9mだけが確認され、短軸10.6mである。平面形は不定形と推定され、長軸方向はN-39°-Eである。ピットの配列から、桁行3間、

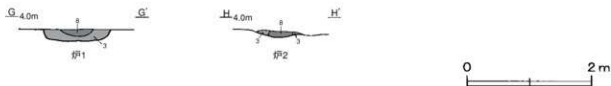
梁行1間の北東棟の建物跡2棟が隣接して確認された。東側に位置している建物跡の桁行方向は $N-32^{\circ}-E$ 、規模は桁行5.2m、梁行2.8mで、面積は14.6 $m^2$ である。柱間寸法は桁行が1.2~2.1mと不規則で、梁間は2.9mを基調としている。西側に位置している建物跡の桁行方向は $N-33^{\circ}-E$ 、規模は桁行6.7m、梁行3.8mで、面積は25.5 $m^2$ である。柱間寸法は桁行が2.0~2.4m、梁間が3.8mを基調としている。付属施設として、竈2基、粘土貼土坑3基、土坑6基が構築されている。

床 北部から南部にかけて緩やかに傾斜している。厚さ14~32cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第410図 第76号建物跡実測図

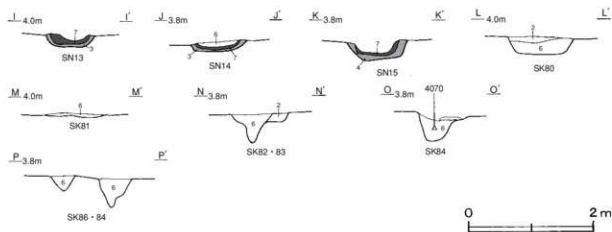
炉（第411図）炉1・2は北東部に位置し、第13号粘土貼土坑と隣接している。炉1は厚さ8～18cm、炉2は厚さ4～7cmの黒色土を貼り付けて構築されている。どちらの炉からも、第8層の焼砂が検出されている。



第411図 第76号建物跡炉土層図

ピット 63か所。P1～P6は深さ32～69cmで東側の北東棟を支えた主柱穴、P7～P23は深さ14～66cmで東側の北東棟を支えた柱穴か間仕切の柱穴と考えられる。P24～P31は深さ16～62cmで西側の北東棟を支えた主柱穴、P32～P37は深さ10～60cmで西側の北東棟を支えた間仕切りあるいは補助柱穴と考えられる。P38～P63は深さ10～63cmで、規則性がなく性格不明である。

土坑（第412図）第13号粘土貼土坑は炉と隣接する東部、第80・81号土坑は西部に位置している。第14・15号粘土貼土坑と第82～84・86号土坑は、黒色土面の下層からそれぞれ確認されている。第13号粘土貼土坑は厚さ6～16cmの粘土、第14・15号粘土貼土坑は厚さ3～7cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

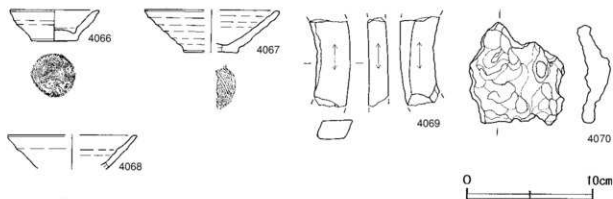


第412図 第76号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片19点（小皿1、皿18）、須恵器片1点（坏）、土製品1点（不明）、石器2点（砥石）、金属製品3点（椀状滓1、不明2）が出土している。4067は東部、4069は中央部の黒色土上面、4068はP41内、4070は第84号土坑内からそれぞれ出土している。

所見 桁行4間、梁行1間の北東棟が2棟並んで構築されている。建物内の北東部からは炉と粘土貼土坑が隣接して確認され、調理場として機能していた可能性が高い。時期は、第74号建物跡の下層から検出されていることから、ほぼ同時期の16世紀後半と考えられる。





第413図 第76号建物跡出土遺物実測図

第76号建物跡出土遺物観察表 (第413図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4066	小皿	土師質土器	7.0	2.5	3.6	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	95% PL73
4067	皿	土師質土器 [10.6]	3.3	[4.2]		石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	東部黒色土上面	20%
4068	皿	土師質土器 [10.0]	(2.7)	-		石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外周口クロナデ	P41内	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4069	砥石	(7.0)	3.2	1.5	(52.2)	凝灰岩	紙面3面 他は剥離面	中央部黒色土上面	
4070	板状洋	8.1	7.5	2.7	141.6	鉄	地黒褐色 表面暗褐色	SK84内	

#### 第77号建物跡 6区S I-1・SD-2 (第414~417図)

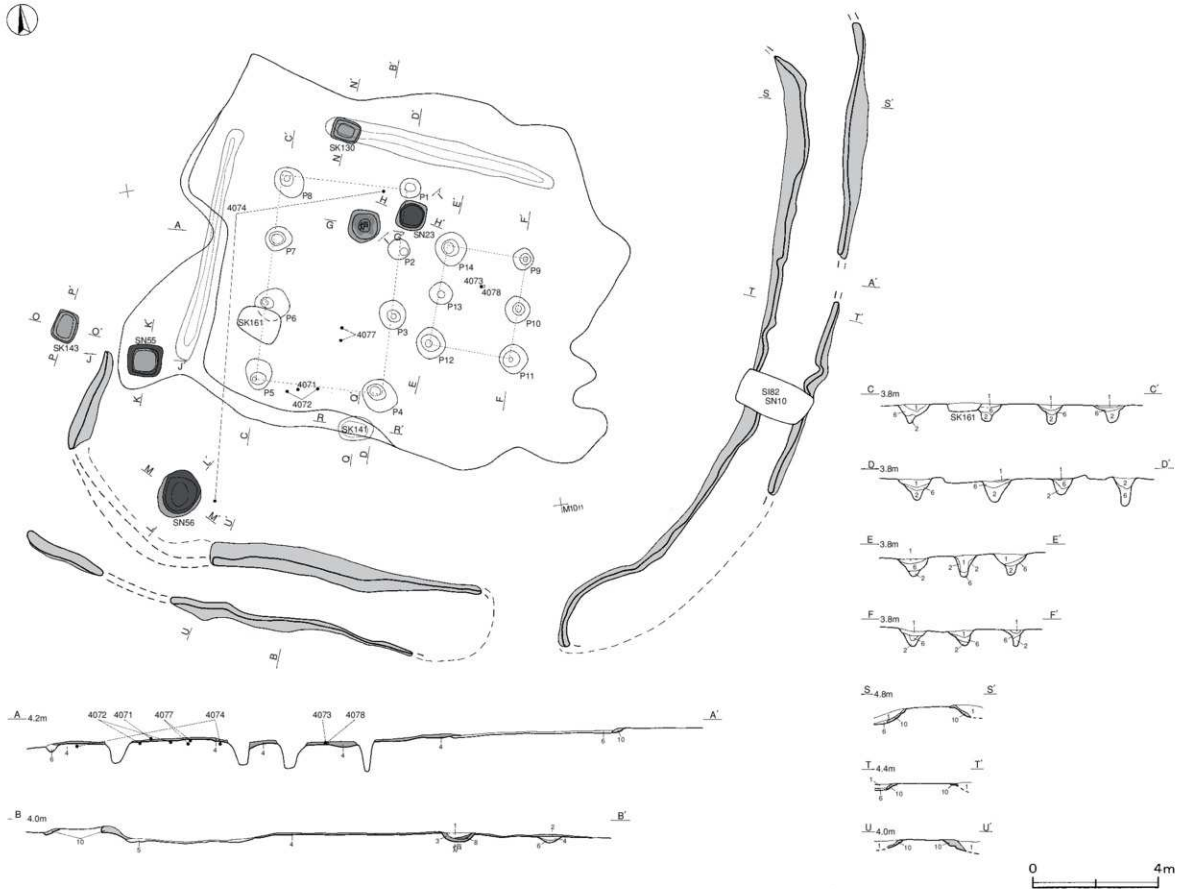
**位置** 調査区中央部のM9c9区を中心に位置している。

**重複関係** 西部上面に第89・90号整地面、東部上面に第82号建物が構築されている。また、第10号粘土貼土坑と第161号土坑に掘り込まれている。

**確認状況** 第90号整地面を0.2m掘り下げた標高3.3~3.8mで、黒色土面と黒色土面を囲むローム土の区画状の高まりが確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と北東に並ぶ柱穴14か所、さらに黒色土を除去して土坑と溝が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸14.4m、短軸11.2mの不定形で、長軸方向はN-71°-Wである。ピットの配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟と桁行2間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。前者の桁行方向はN-16°-E、規模は桁行6.6m、梁行4.1mで、面積は27.1㎡である。柱間寸法は桁行が2.1~2.5m、梁間が4.1mを基調としている。後者の桁行方向はN-20°-E、規模は桁行3.2m、梁行2.6mで、面積は8.3㎡である。柱間寸法は桁行が1.6m、梁間が2.6mを基調としている。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑3基、土坑3基が構築されている。また、建物跡の土台である黒色土面の外側、東部から南部にかけてローム土で構築された第2号区画状遺構が確認されている。長さ約35m、幅2.2~2.4m、高さは最大で50cmである。黒色土面から第2号区画状遺構までは、南西部が約0.2mと隣接し、南部から東部にかけてが約7mと広がっている。遺存しているローム土の断面形がハの字状であることから、本来は土手状の高まりであったと考えられ、南部には建物に通じる出入り口を設けている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ約3~18cmの黒色土を貼り付けて構築されている。黒色土面下から、建物跡の南北軸と北東軸に平行する2条の溝が確認されている。どちらも長さ約7.5m、幅0.4~0.9m、深さ約20cmである。

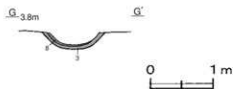


第414图 第77号建物跡・第2号区画状遺構実測図

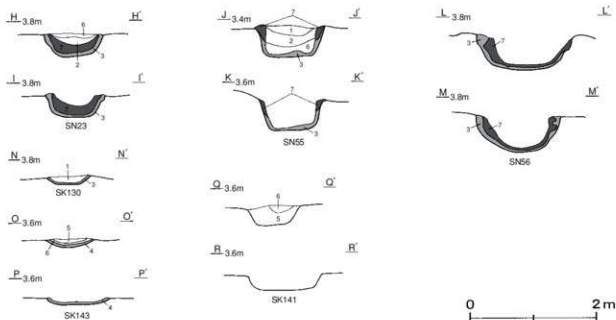
炉（第415図）3間×1間の北部に位置し、第23号粘土貼土坑と隣接している。厚さ5～7cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土下層からは、第8層の焼砂が検出されている。

ピット 14か所。P1～P8は深さ52～90cmで、3間×1間の建物を支えた主柱穴と考えられる。P9～P14は深さ35～69cmで、2間×1間の建物を支えた主柱穴と考えられる。

土坑（第416図）第23号粘土貼土坑は炉の東部、第55号粘土貼土坑と第143号土坑は西部、第56号粘土貼土坑は南西部、第130号土坑は北部にそれぞれ位置している。第141号土坑は黒色土面の下層から確認されている。第23号粘土貼土坑は厚さ7～17cmの粘土、第55・56号粘土貼土坑は厚さ3～8cmの粘土、第130・143号土坑は厚さ2～4cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第5・6層の黒色土C・D層が人為堆積した層である。



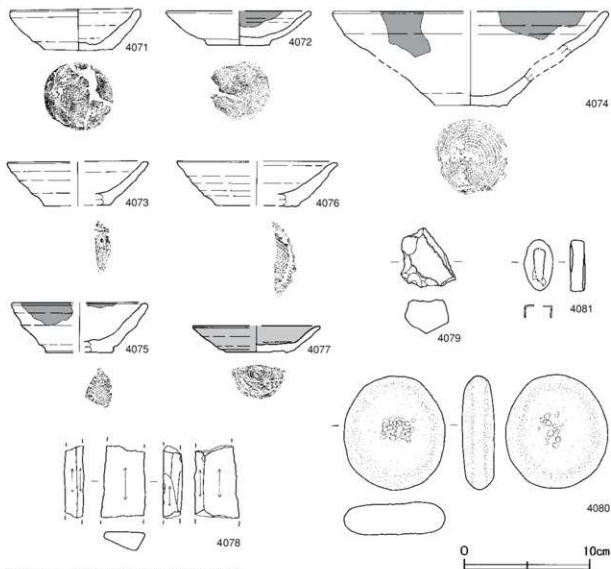
第415図 第77号建物跡炉土層図



第416図 第77号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片45点（皿36、鍋7、甕2）、陶器片3点（皿）、須恵器片2点（甕）、石器3点（敲石、砥石、火打石）、金属製品6点（緑1、不明5）が出土している。遺物は、黒色土面に多く散在している。4071・4072は南部、4073・4078は東部、4077は中央部の黒色上面から黒色土下にかけてそれぞれ出土している。また、4077は中央部黒色土下と南部砂層から出土した破片が同一のものと考えられる。

所見 桁行3間、梁行1間の北東棟と桁行2間、梁行1間の北東棟が並んでいる分棟型の施設と考えられる。主な生活の場は炉が付設されている前者の建物と推察され、後者は出土遺物も少ないことから倉庫又は馬屋として機能していた可能性が高い。時期は、4077から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。



第417図 第77号建物跡出土遺物実測図

第77号建物跡出土遺物観察表 (第417図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4071	皿	土師質土器	10.2	3.2	5.4	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	南部黒色土上面	90% PL76
4072	皿	土師質土器 [11.3]	2.7	4.9	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	内面煤付着	南部黒色土下	40%
4073	皿	土師質土器 [11.0]	3.5	[5.2]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り		東部黒色土中	20%
4074	土師質土器	[20.6]	[7.5]	5.7	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	内・外面煤付着	中部黒色土下・東部黒色土	20%
4075	皿	土師質土器 [10.6]	3.9	[5.2]	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転糸切り	内・外面煤付着	SK143内	20%
4076	皿	土師質土器 [12.8]	3.5	[6.4]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り		SK143内	20%
4078	板瓦	陶器	[10.0]	2.1	4.8	灰白・にぶい赤褐	鉄軸	有り	張り込め	東部黒色土中	30%
4079	火打石	燧石	4.7	4.3	2.7	54.1				覆土中	
4080	敷石	砂岩	9.0	8.1	2.5	280.0				覆土中	
4081	緑	鉄	4.1	2.2	1.1	(12.9)				覆土中	PL90

### 第78号建物跡 6区HK・6・7 (第418~421図)

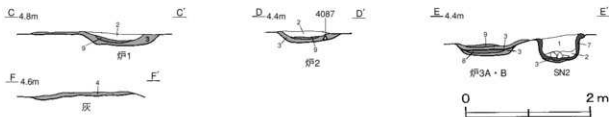
**位置** 調査区北部のL10:11区を中心に位置している。西側には第79号建物跡が隣接している。

**確認状況** 表砂を約2.6m掘り下げた標高4.3~4.4mで、黒色土面が確認された。黒色土面と周囲の砂層から灰と粘土貼土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸14.1m、短軸6.8mの不定形で、長軸方向はN-2°-Eである。付属施設として、炉4基、粘土貼土坑2基、土坑2基が構築されている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ6~12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。黒色土面は第3層の黒色土A層と第4層の黒色土B層に分層され、第3層は締まりが強く硬化している。また、炉1の南東部から投棄された灰状の黒色土が確認されている。

**炉** (第418図) 炉1は東部の砂層、炉2・3A・Bは中央部の黒色土面に位置し、炉1は第1号粘土貼土坑、炉3A・Bは第2号粘土貼土坑に併設されている。いずれの炉も、厚さ2~10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。炉3は造り替えが認められ、炉3Bの上に炉3Aが構築されている。炉1・2・3Aの覆土下層から第9層の灰層、炉3Bから第8層の焼砂が検出されている。



第418図 第78号建物跡炉・粘土貼土坑・灰土層図

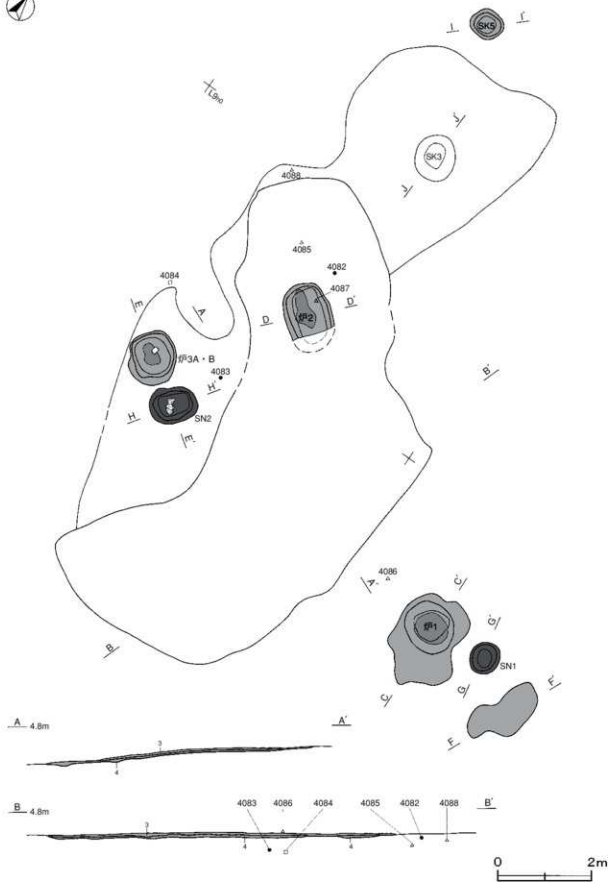
**土坑** (第419図) 第1・2号粘土貼土坑はそれぞれ炉の東部、第3号土坑は黒色土面の北部、第5号土坑は北部の砂層に位置している。第1号粘土貼土坑の壁面にはウバ貝が貼り付けられている。第2号粘土貼土坑の底面には長径30~40cm、短径20~25cm、厚さ5~10cmの丸い砂岩が並んで置かれていた。第1・2号粘土貼土坑は厚さ3~10cmの粘土、第5号土坑は厚さ2~6cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積した層である。



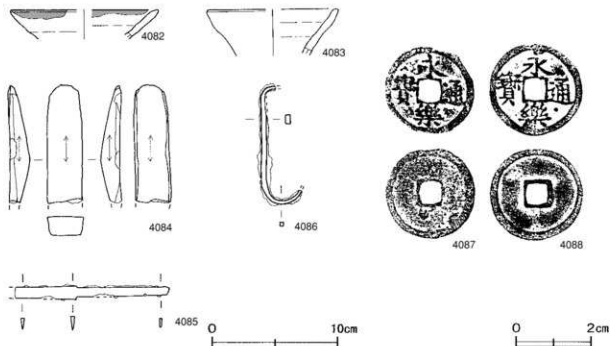
第419図 第78号建物跡土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片23点(皿)、陶器片1点(甕)、須恵器片1点(坏)、石器1点(砥石)、金属製品5点(小刀2、耳金1、古銭2)が出土している。4082・4083・4085・4088は中央部の黒色土下、4087は炉2内、4084は西部、4086は東部の砂層からそれぞれ出土している。

**所見** 炉と生活用具が確認され床面の締まりが強いことから、建物跡と判断した。炉と粘土貼土坑が併設された遺構が2か所確認されており、どちらも調理場として機能していた可能性が高い。時期は、隣接する第79号建物跡とはほぼ同時期の16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第420图 第78号建物跡実測図



第421図 第78号建物跡出土遺物実測図

第78号建物跡出土遺物観察表 (第421図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4082	皿	土師質土器	[11.6]	(2.3)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面コロナデ 内・外面削直	中央部黒色土下	20%
4083	皿	土師質土器	[10.2]	(3.7)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面コロナデ	中央部黒色土下	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4084	砥石	(8.4)	2.8	1.7	(64.5)	凝灰岩	砥面4面 砥面湾曲	西部砂層	
4085	小刀	(12.3)	1.0	0.2~0.3	(9.4)	鉄	切先部欠損 両側	中央部黒色土下	PL91
4086	耳金	9.4	0.4	0.7	(21.4)	鉄	断面長方形 両端部欠損	東部砂層	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4087	永樂通寶	2.42	0.63	0.09	2.26	1408	銅	真書	中央部黒色土下	
4088	永樂通寶	2.49	0.62	0.10	2.88	1408	銅	真書 鋳込み不足の穴有り	中央部黒色土下	

### 第79号建物跡 6区HK-10 (第422~427図)

**位置** 調査区北部のL9j8区を中心に位置している。東側には第78号整地面が隣接している。

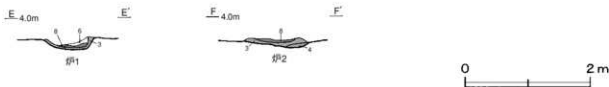
**重複関係** 東部が第89・90号整地面の上面に構築されている。下面の第88号土坑をP7が掘り込んでいる。

**確認状況** 表砂を約2.9m除去し、標高3.5~4.1mで黒色土面が確認された。黒色土面及び砂層から炉、粘土土坑、土坑と柱穴8か所、さらに黒色土を除去して土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸17.7m、短軸12.2mの不定形で、長軸方向はN-5°-Wである。付属施設として、炉2基、粘土土坑3基、土坑7基が構築されている。

**床** 北部はやや高く、中央部から南部にかけてはほぼ平坦である。厚さ6~10cmの黒色土を貼り付けて構築され、締まりが強い。

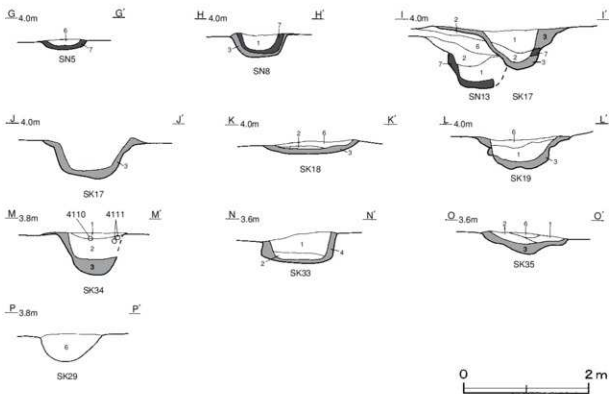
炉（第422図）炉1・2は北東部の砂層に位置し、炉1は第18号土坑、炉2は第5・8号粘土貼土坑と隣接している。厚さ2～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。どちらも底面から第8層の焼砂が検出されている。



第422図 第79号建物跡炉土層図

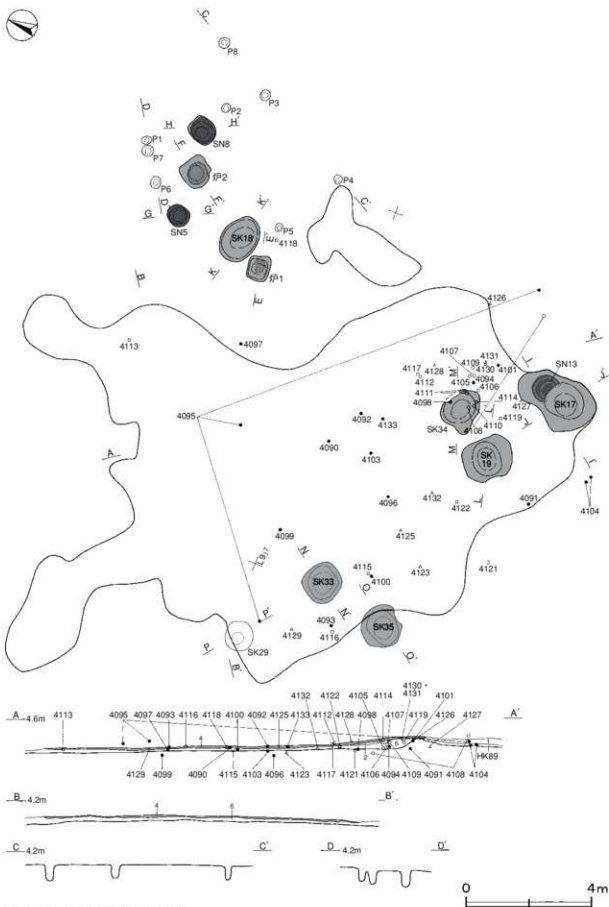
ピット 8か所。深さ18～53cmで、炉の周囲に集中している。P1～P3は北西軸に並んでいるが、対応するピットは確認できなかった。配列に規則性はなく、性格は不明である。

土坑（第423図）第5号粘土貼土坑は炉2の西部、第8号粘土貼土坑は炉2の東部、黒色土で構築された第18号土坑は炉1の北東部に位置している。黒色土で構築された第17・19・34号土坑は南部に位置している。黒色土面の下層からは、第13号粘土貼土坑が南部、第29号土坑と黒色土で構築された第33・35号土坑が西部からそれぞれ確認されている。第5号粘土貼土坑は厚さ10～19cmの粘土、第8・13号粘土貼土坑は厚さ4～13cmの粘土、第17～19・33・35号土坑は厚さ2～17cmの黒色土、第34号土坑は厚さ4～26cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第423図 第79号建物跡土坑土層図

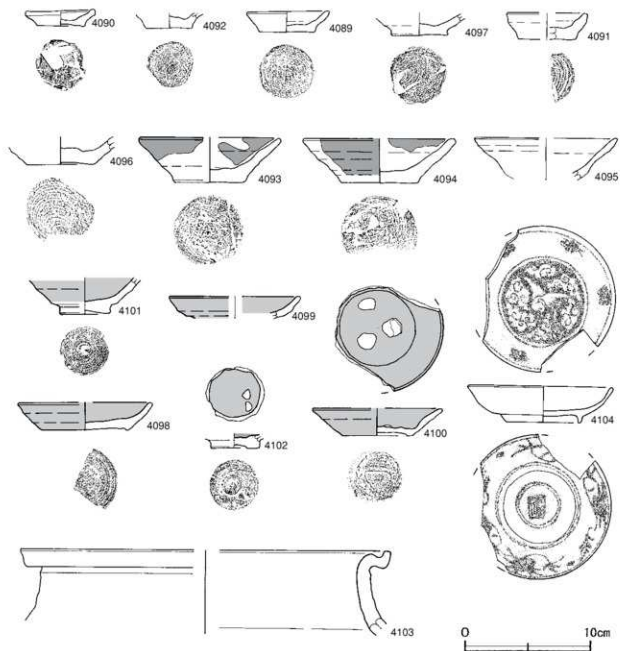




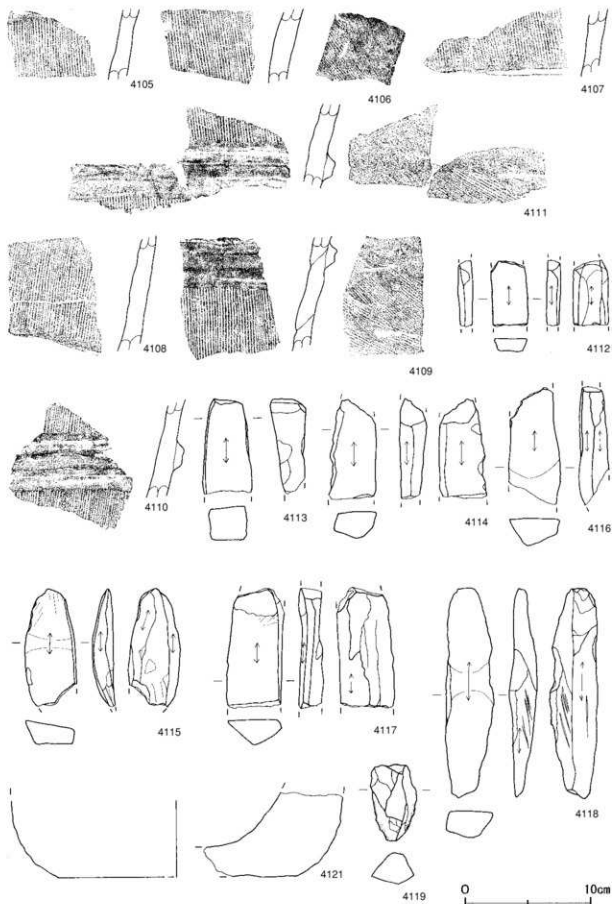
第424图 第79号建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片133点(小皿6, 皿117, 鍋10), 陶器片8点(皿4, 碗3, 甕1), 磁器片1点(皿), 土製品15点(円筒埴輪), 石器・石製品16点(砥石11, 火打石1, 石鉢3, 相輪1), 金属製品14点(小刀1, 釘2, 耳金2, 吊金具1, 古銭3, 不明5), 骨角製品1点(筭)が出土している。遺物は, 南部を中心に多く散在している。4090~4092・4094・4096・4098・4101・4103は南部, 4093・4100・4115・4116は第35号土坑付近のそれぞれ黒色土上面から黒色土下にかけて出土している。また, 4104は南部の砂層から, 4105~4111の円筒埴輪片は主に南部の黒色土下からまをもって確認されている。

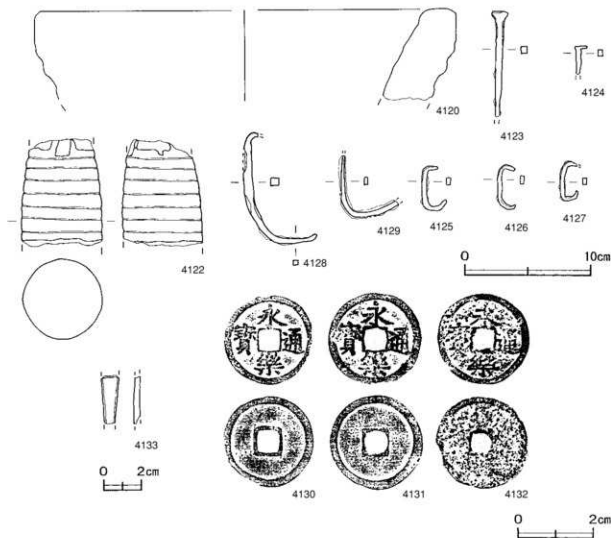
**所見** 炉と生活用具が確認され床面の締まりも強いことから, 建物跡と判断した。主な生活地点は黒色土面の中央部, 炉付近の北東部は調理場として機能していた可能性が高い。出土した円筒埴輪片は, 黒色土と共に他地域から持ち込まれたことを示す資料である。時期は, 4100・4104から16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第425図 第79号建物跡出土遺物実測図(1)



第426図 第79号建物跡出土遺物実測図(2)



第427図 第79号建物跡出土遺物実測図(3)

第79号建物跡出土遺物観察表 (第425~427図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4089	小皿	土師質土器	6.4	1.8	4.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面横ナデ	覆土中	100% PL73
4090	小皿	土師質土器	5.4	2.5	3.8	長石・雲母・赤色粒子	明褐	普通	底部回転赤切り	南部黒色土下	80%
4091	小皿	土師質土器	[6.2]	2.1	[4.4]	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転赤切り	南部黒色土下	45%
4092	小皿	土師質土器	-	(2.2)	3.7	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転赤切り	南部黒色土中	20%
4093	皿	土師質土器	[11.0]	3.6	5.4	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面渦巻状のナデ 内・外面磨付	SK33付着黒色土上面	70% PL76
4094	皿	土師質土器	[11.9]	3.5	6.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面横ナデ 内・外面磨付	南部黒色土下	40% PL76
4095	皿	土師質土器	[11.2]	(3.3)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面クロナデ	黒色土上面・南部磨付	20%
4096	皿	土師質土器	-	(2.2)	5.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面渦巻状のナデ	南部黒色土下	10%
4097	皿	土師質土器	-	(1.8)	4.4	雲母	橙	普通	底部回転赤切り	東部砂層	20%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	磁付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4098	丸皿	陶器	[10.4]	2.2	[6.8]	灰白・にぶい黄	灰釉	内・外面施釉 高台内嵌輪	瀬戸・美濃 16C後半	南部黒色土下	25% 大塚3
4099	丸皿	陶器	[10.2]	(1.7)	-	灰青・にぶい黄	灰釉	内・外面施釉	瀬戸・美濃	中央部黒色土下	10% 大塚期
4100	椀皿	陶器	[10.0]	2.2	5.6	褐灰・明赤褐	鉄釉	足裏にナデ 内面横ナデ	瀬戸・美濃 16C後半~17C初	SK33付着黒色土下	6% 大塚 PL6
4101	天目茶碗	陶器	-	(2.9)	3.9	にぶい黄・黒	鉄釉	内反り高台	瀬戸・美濃	南部黒色土下	30% 大塚後期
4102	天目茶碗カ	陶器	-	(1.1)	3.8	灰緑・黒褐	鉄釉	高台部施釉	瀬戸・美濃	覆土中	10%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	磁付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4103	壺	陶器	[29.4]	(6.7)	-	灰褐色	-	口縁部N字状	常滑 13C後半-14C	南部黒色土下	36 6式ⅠⅡ区
4104	皿	磁器	11.5	2.8	5.8	灰白・黒クワア系	染付・透明釉	見込丸底文 高台内「南」字	豊後国豊前 16C前半-17C初	南部砂層	70% PL68

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4105	円筒埴輪	(5.8)	-	1.3	(75.9)	長石・石英	内面斜位のナデ 外面縦位のハケ目	南部黒色土下	
4106	円筒埴輪	(5.9)	-	1.5	(99.4)	長石・石英	内面斜位のハケ目 外面縦位のハケ目	南部黒色土下	
4107	円筒埴輪	(5.3)	-	1.4	(104.5)	長石・石英	内面斜位のナデ 外面縦位のハケ目	南部黒色土下	
4108	円筒埴輪	(9.3)	-	1.5	(156.8)	長石・石英	内面斜位のナデ 外面縦位のハケ目	南部黒色土下	
4109	円筒埴輪	(9.1)	-	1.4	(179.8)	長石・石英	内面斜位のハケ目 外面縦位のハケ目後凸部貼り付け	南部黒色土下	PL83
4110	円筒埴輪	(7.8)	-	1.4	(165.8)	長石・石英	内面縦位のナデ 外面縦位のハケ目後凸部貼り付け	SK34内	PL83
4111	円筒埴輪	(6.8)	-	1.5	(245.0)	長石・石英	内面斜位のハケ目後ナデ 外面縦位のハケ目後凸部貼り付け	SK34内	PL83
4112	砥石	(5.1)	2.9	1.2	(26.2)	凝灰岩	砥面4面 整形時の加工痕有り	南部黒色土中	
4113	砥石	(7.5)	3.9	2.9	(107.3)	凝灰岩	砥面1面 断面四角形	北部黒色土中	
4114	砥石	(7.9)	3.8	2.1	(78.8)	凝灰岩	砥面3面 他は剥離面	南部黒色土中	
4115	砥石	(9.4)	4.0	1.8	(71.6)	凝灰岩	砥面4面 砥面湾曲	SK33付近黒色土下	
4116	砥石	(9.4)	4.1	2.4	(88.3)	凝灰岩	砥面3面 砥面やや湾曲	SK33付近黒色土上	
4117	砥石	(9.5)	4.2	2.0	(102.6)	凝灰岩	砥面3面 整形時の加工痕有り	南部黒色土上	
4118	砥石	16.7	3.8	2.1	123.4	凝灰岩	砥面3面 砥面湾曲・捲痕有り	砂1付近砂層	
4119	火打石	6.0	3.6	2.5	49.0	石英	一部の稜が摩滅	南部黒色土下	PL87
4120	石鉢	[33.6]	(7.2)	-	(472.0)	砂岩	口縁部片 内面摩滅	覆土中	
4121	石鉢	-	(6.6)	[18.8]	(1020.0)	砂岩	底部片 内面摩滅	南部砂層	
4122	相輪	(8.5)	6.4	6.4	(445.0)	砂岩	8条の線刻が走る	南部黒色土下	PL88
4123	釘	(8.4)	0.5	0.6	(11.4)	鉄	断面長方形 頭部扁平 先端部欠損	南部黒色土下	PL93
4124	釘	(2.3)	0.4	0.5	(1.9)	鉄	断面長方形 先端部欠損	覆土中	
4125	耳金	3.5	0.4	0.6	6.7	鉄	完存 断面長方形	南部黒色土下	PL92
4126	耳金	3.5	0.3	0.7	4.4	鉄	完存 断面長方形	南部砂層	PL92
4127	耳金	3.1	0.4	0.6	(3.6)	鉄	ほぼ完存 断面長方形	南部黒色土下	PL92
4128	吊金具	8.8	0.7	0.6	(18.5)	鉄	ほぼ完存 断面長方形	南部黒色土上	PL93
4129	不明	(4.9)	0.3	0.6	(11.9)	鉄	両端部欠損 断面長方形	SK33付近黒色土中	
4133	筭	(3.0)	(0.9)	(0.4)	(0.8)	骨	胴部遺存 断面長方形	南部黒色土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4130	永樂通寶	2.44	0.60	0.09	2.64	1408	銅	真書	南部黒色土下	
4131	永樂通寶	2.50	0.62	0.07	2.74	1408	銅	真書	南部黒色土下	
4132	永樂通寶	2.47	0.52	0.11	3.38	1408	銅	真書	南部黒色土下	

## 第80号建物跡 6区HK-12 (第428・429図)

**位置** 調査区北部のL10e3区を中心とする。第1号区画状遺構内に位置している。

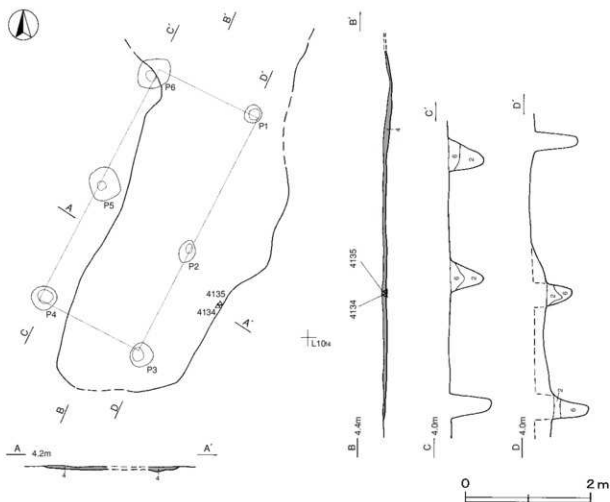
**重複関係** 上面に第93号整地地面が構築されている。下面の第96号整地地面をP3・P4が掘り込んでいる。

**確認状況** 第93号整地地面を約0.2m掘り下げた標高約4.0mで、黒色土面が確認された。さらに黒色土を除去して、主に北東に並ぶ柱穴6か所が確認された。

**規模と施設** 北部が調査区域外に延びているため、確認できた黒色土の範囲は、長径は6.3mだが確認され、短径2.6mである。平面形は不整楕円形と推定され、長径方向はN-60°-Wである。ピットの配列から、桁行2間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-28°-E。規模は桁行4.1m、梁行1.8mで、面積は7.4m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行が1.8～2.3m、梁間が1.8mを基調としている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ3～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

**ピット** 6か所。深さ54～82cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。



第428図 第80号建物跡実測図

**遺物出土状況** 金属製品2点（古銭）が、東部の黒色土中から出土している。

**所見** 黒色土面の下層から桁行2間、梁行1間の北東棟が確認された。北部が調査区域外に延びていることから、更に広がっていることも想定される。小規模な建物で、簡易的な小屋あるいは倉庫の可能性が高い。時期は、上面の第93号整地面や周囲の遺構の状況から16世紀後半から17世紀と考えられる。



第429図 第80号建物跡出土遺物実測図

第80号建物跡出土遺物観察表（第429図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初跡年	材質	特 徴	出土位置	備考
4134	□□□□	2.35	0.52	0.17	3.24	-	銅	判読不明	東部黒色土中	
4135	□□□□	2.30	0.69	0.13	2.64	-	銅	判読不明	東部黒色土中	

### 第81号建物跡 6区HK-13 (第430~435図)

**位置** 調査区北部のL 9g6区を中心に位置している。東側には第88・97号整地面が隣接している。

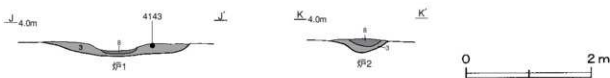
**重複関係** 第22号土坑に掘り込まれている。南部の上面に第79号建物が構築されている。

**確認状況** 表砂を約3.2m除去し、標高3.6~3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉と貝集積地、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑、土坑と北東と北西に並ぶ柱穴35か所が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸16.9m、短軸12.5mの不定形で、長軸方向はN-64°-Wである。ピットの配列から、桁行4間、梁行2間の北東棟の建物に、桁行4間、梁行2間の北西棟の建物が取り付くように配されている。北東棟の桁行方向はN-32°-E、規模は桁行8.2m、梁行3.2mで、面積は26.2㎡である。柱間寸法は桁行が1.8m、梁間が1.5mを基調としている。北西棟の桁行方向はN-53°-W、規模は桁行8.4m、梁行4.0mで、面積は33.6㎡である。柱間寸法は桁行が1.8~2.5m、梁間が2.0mを基調としている。付属施設として、炉2基、粘土貼土坑1基、土坑3基が構築され、貝集積地1か所が確認されている。

**床** はほぼ平坦で、炉2の南部は締まりの強い硬化面である。厚さ約10~20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

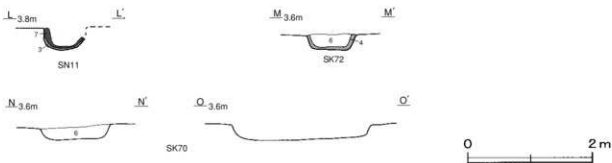
**炉** (第430図) 炉1・2は北東棟の北部と中央部に位置している。炉1は厚さ5~18cm、炉2は厚さ4~10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。どちらも覆土下層から、第8層の焼砂が検出されている。



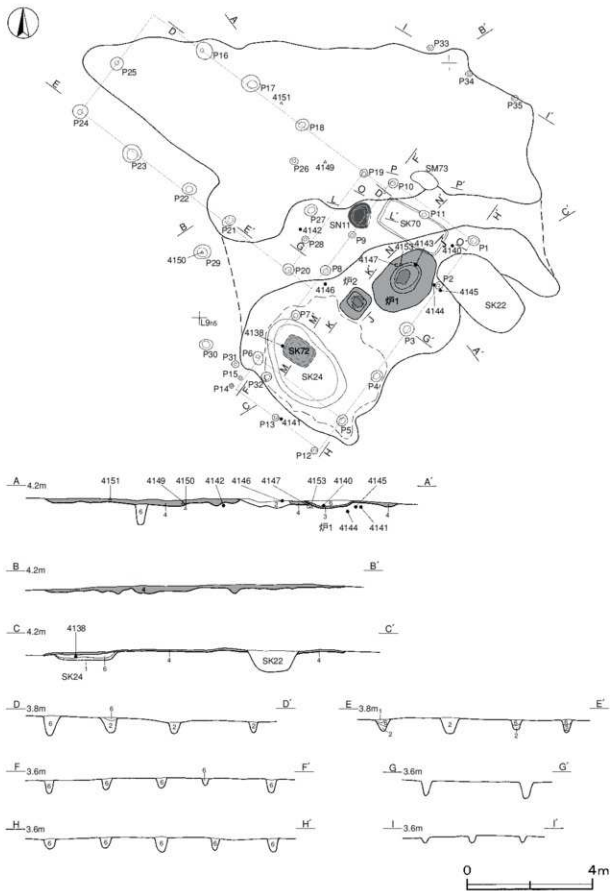
第430図 第81号建物跡炉土層図

**ピット** 35か所。P 1~P 11は深さ24~47cmで、北東棟を支えた支柱穴と考えられる。P 12~P 15は深さ33~46cmで、北東棟の南部に取り付いた簡易的な庇と考えられる。P 16~P 25は深さ31~54cmで、北西棟を支えた支柱穴と考えられる。P 26~P 28は深さ28~38cmで、北西棟を支えた間仕切り又は補助支柱穴と考えられる。P 29~P 35は深さ18~42cmで、規則性がなく性格不明である。

**土坑** (第431図) 第11号粘土貼土坑、第70号土坑は中央部、第24号土坑は南部の黒色土面の下層からそれぞれ確認されている。また、第72号土坑は第24号土坑の下から確認されている。第11号粘土貼土坑は厚さ2~5cmの粘土、第72号土坑は厚さ3~5cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



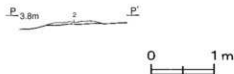
第431図 第81号建物跡土坑土層図



第432图 第81号建物跡実測図



**貝集積地**（第433図）第73号貝集積地は中央部の黒色土面に位置している。長径0.9m、短径0.5mの不整楕円形で、貝層の厚さは4cmである。



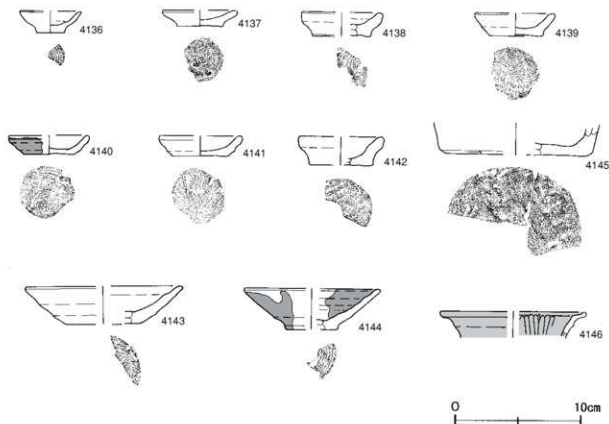
第433図 第81号建物跡貝集積地土層図

第73号貝集積地出土貝種一覧表

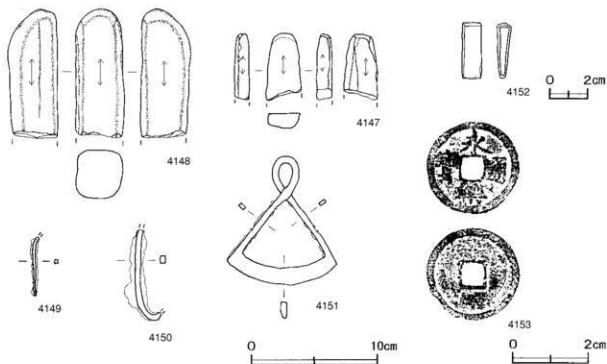
No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	カキ細片	525.0	91.15			2	ウバガイ細片	51.0	8.85		

**遺物出土状況** 土師質土器片58点（小皿7、皿44、鉢6、鉢カ1）、陶器片2点（皿）、石器2点（砥石）、金属製品6点（釦1、釘1、耳金1、古銭1、不明2）が出土している。遺物は、炉1・2付近の黒色土上面から黒色土下にかけて多く散在している。4140・4144～4147・4153は南部の黒色土上面から黒色土下にかけて、4141は南部の砂層、4143は炉1内、4136はP2内、4137はP16内、4152はP19内、4138は第24号土坑内からそれぞれ出土している。

**所見** 桁行4間、梁行2間の北東棟に、桁行4間、梁行2間の北西棟が取り付くような配置から、曲屋と考えられる。主たる生活地点は、建物跡の規模から北西棟と推察され、炉が並んで確認された北東棟は調理場として機能していた可能性が高い。時期は、4146から16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第434図 第81号建物跡出土遺物実測図(1)



第435図 第81号建物跡出土遺物実測図(2)

第81号建物跡出土遺物観察表 (第434・435図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4136	小皿	土師質土器	[4.6]	1.7	[2.2]	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転赤切り	P 2内	25%
4137	小皿	土師質土器	[5.6]	1.3	[3.6]	長石・赤色粒子	明赤褐色	普通	内底面横ナデ	P 16内	40%
4138	小皿	土師質土器	[6.0]	1.9	[4.4]	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転赤切り	SK24内	25%
4139	小皿	土師質土器	[6.2]	1.8	4.1	長石・雲母	橙	普通	底部回転赤切り	覆土中	50%
4140	小皿	土師質土器	[6.2]	1.5	4.0	長石・赤色粒子	橙	普通	底部回転赤切り 外面煤付着	南部黒色土下	40%
4141	小皿	土師質土器	[6.4]	1.6	4.4	雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	底部回転赤切り	南部砂層	30%
4142	小皿	土師質土器	[6.6]	2.3	[5.0]	雲母	橙	普通	内底面横ナデ	中央部砂層	40%
4143	皿	土師質土器	[12.0]	3.0	[5.8]	長石・雲母	明赤褐色	普通	底部回転赤切り	如1内	20%
4144	皿	土師質土器	[10.6]	3.3	[4.0]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転赤切り 内・外面煤付着	南部黒色土下	20%
4145	鉢*	土師質土器	-	(2.5)	[11.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	内面ナデ 外面ヘラナデ	南部黒色土下	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・施薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4146	折縁皿	陶器	[11.2]	(2.1)	-	灰青・オリーブ青	灰釉	白線部玉縁状 内面ノギ入り	瀬戸・尾張 基C(8世-10C)	南部黒色土上面	10% 大宮4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4147	砥石	(5.2)	2.7	1.2	(25.7)	凝灰岩	砥面4面 断面四角形	南部黒色土下	
4148	砥石	(10.2)	3.7	3.9	(222.0)	砂岩	砥面4面 断面四角形	覆土中	
4149	釘	(4.8)	0.3	0.3	(2.2)	鉄	断面長方形 頭部欠損	北部黒色土中	
4150	耳金*	(7.7)	0.4	0.6	(21.3)	鉄	断面長方形 両端部欠損	西部砂層	
4151	不明	10.3	8.7	0.5	45.1	鉄	断面長方形 下部は扇状で厚み有り	北部黒色土中	
4152	銅	2.9	0.8	1.0	4.0	銅	完存 差穴は角錐	P19内	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4153	永樂通寶	2.49	0.64	0.12	3.46	1408	銅	黄青	南部黒色土下	

**第82号建物跡** 6区HK-16 (第436~441図)

**位置** 調査区中央部のM10d3区を中心に位置している。

**重複関係** 第2号区画状遺構の上面に構築されている。

**確認状況** 表砂を約2.4m除去し、標高4.2~4.6mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と貝集積地、さらに黒色土を除去して炉、土坑と主に北東に並ぶ柱穴16か所が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸11.2m、短軸7.4mの不定形で、長軸方向はN-5°-Wである。付属施設として、炉3基、粘土貼土坑3基、土坑5基が構築され、貝集積地1か所が確認されている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ6~30cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

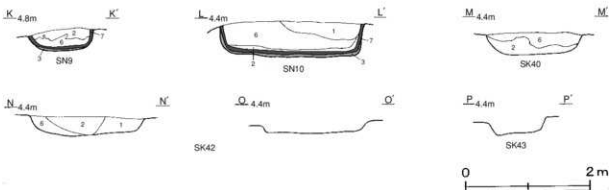
**炉** (第436図) 炉1は東部の黒色土面、炉2は西部の砂層に位置し、炉3は黒色土下の砂層から確認されている。炉1・2は厚さ3~5cm、炉3は厚さ4~12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。炉1・3の覆土下層から第8層の焼砂、炉2の覆土下層から第9層の灰が検出されている。



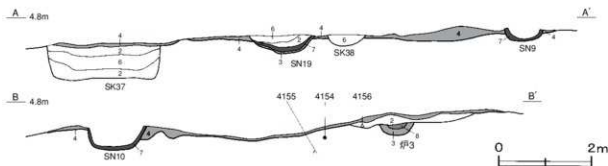
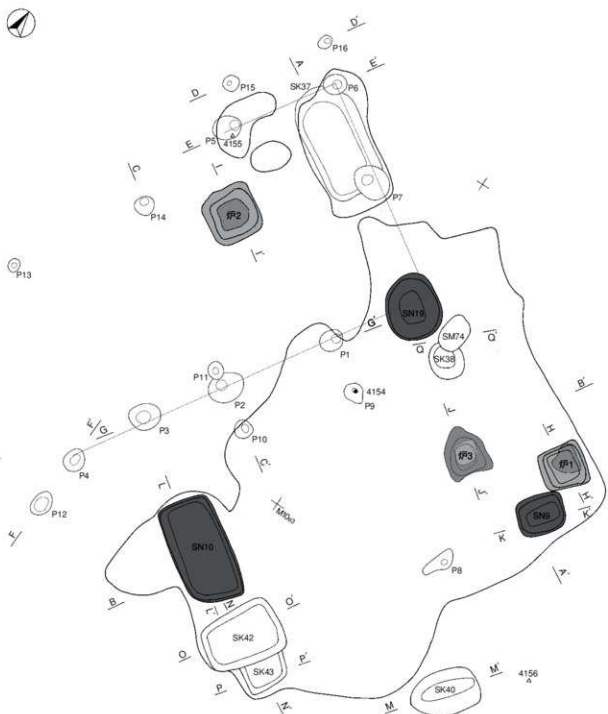
第436図 第82号建物跡炉土層図

**ピット** 16か所。P 1~P 4は深さ63~82cm、P 5・P 6は深さ75・44cmで、どちらも北東軸に並ぶ柱穴である。P 7は深さ71cmで、P 6と北西軸に並ぶ柱穴である。P 8~P 16は深さ14~63cmで、配列が不規則なため性格不明である。

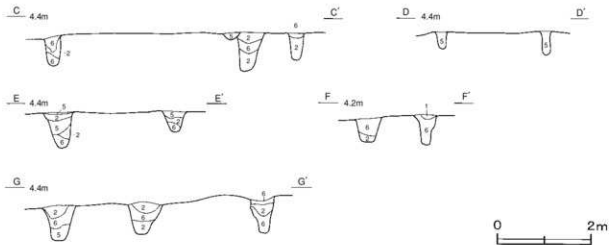
**土坑** (第437図) 第9号粘土貼土坑は炉1と隣接している。第19号粘土貼土坑、第38号土坑は黒色土面の北部、第10号粘土貼土坑、第42・43号土坑は黒色土面の南部にそれぞれ位置している。第40号土坑は南部の砂層に位置している。第37号土坑は黒色土面の下層から確認されている。粘土貼土坑は、厚さ3~11cmの粘土を貼り付けて構築されている。粘土貼土坑と土坑の覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第437図 第82号建物跡土坑土層図



第438图 第82号建物跡実測図(1)

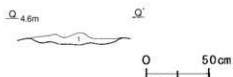


第439図 第82号建物跡実測図(2)

**貝集積地** (第440図) 第74号貝集積地は北部の黒色土面に位置している。長径0.8m、短径0.6mの楕円形で、貝層の厚さは10cmである。

第74号貝集積地出土貝種一覧表

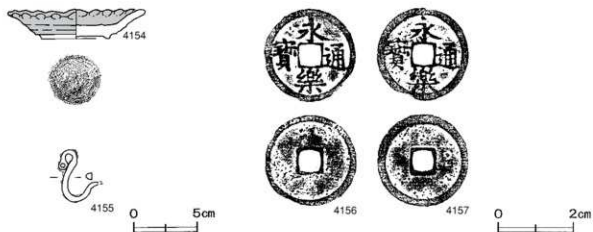
No.	貝種	重さ	比率	枚数	備考
1	マツカサガイ細片	75.0	100.00		淡水



第440図 第82号建物跡貝集積地土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片3点(小皿, 皿, 鍋), 陶器片1点(皿), 須恵器片1点(坏), 金属製品5点(釣針1, 古銭2, 不明2)が出土している。4154はP9内, 4155はP5内, 4157は第10号粘土貼土坑内, 4156は東部の砂層からそれぞれ出土している。

**所見** 柱穴は方形に並ばないが、調理場とみられる炉と粘土貼土坑が確認されたことから建物跡と判断した。北東軸に並ぶ柱穴を基準にすると、炉2は建物の北部に位置する炉と考えられる。また、炉1と第9号粘土貼土坑は調理場として、第10号粘土貼土坑は水溜として機能していた可能性が高い。時期は、4154から16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第441図 第82号建物跡出土遺物実測図

第82号建物跡出土遺物観察表 (第441図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	胎付・軸差	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4154	椀皿	陶器	10.8	2.3	5.3	におい貫登・斑黄	鉄軸	内面黒い・外 黒台輪付(産前)	瀬戸・美濃 16C Ⅱ-17C Ⅱ	P 9内	70%大器4 PL65
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考	
4155	釣針	4.2	0.5	0.5	(6.8)	鉄	ほぼ定存	銜部に環2か所有り	P 5内	PL95	
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特	徴	出土位置	備考
4156	永樂通寶	2.56	0.61	0.12	3.64	1408	銅	真書		東部砂層	
4157	永樂通寶	2.48	0.55	0.11	3.12	1408	銅	真書		SN10内	

第83号建物跡 6区SB-1・HK-18 (第442～451図)

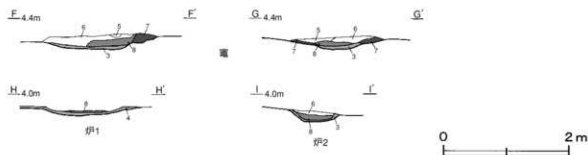
位置 調査区中央部のM9j3区を中心に位置している。南側には第98号整地面が隣接している。

確認状況 表砂を約3.0m除去し、標高約4.0mで黒色土面が確認された。黒色土面から竈、粘土貼土坑、土坑、貝集積地と北西に並ぶ柱穴9か所が確認された。さらに黒色土を10cm除去した標高3.9mで、第2次面の黒色土面、竈、粘土貼土坑と柱穴2か所が確認された。

規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は、長軸13.2m、短軸10.4mの不定形で、長軸方向はN-47°-Eである。第2次面の黒色土の範囲は、長軸4.2m、短軸3.8mの不定形で、長軸方向はN-54°-Wである。ピットの配列から、桁行3間、梁行2間の北西棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-45°-W、規模は桁行6.5m、梁行4.8mで、面積は31.9㎡である。柱間寸法は桁行が1.5～3.0m、梁間が2.4・2.5mでやや不均一である。付属施設として、竈1基、炉2基、粘土貼土坑3基、土坑1基が構築され、貝集積地1か所が確認されている。

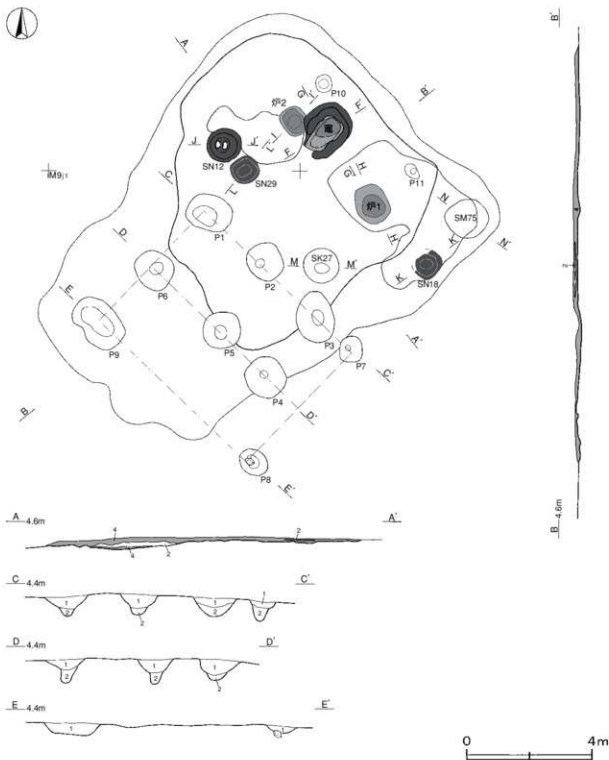
床 中央部から北部の竈付近にかけて15cmほど一段高くなっている。第1次面は厚さ8～12cmの黒色土、第2次面は確認できた部分で厚さ2～4cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

竈・炉 (第442図) 竈は第1次面の北部、炉1・2は第2次面の黒色土面にそれぞれ位置している。竈は長軸1.7m、短軸1.4mの隅丸長方形である。南部を焚口部とし、周囲は幅30～50cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第5・6層の黒色土C・D層が人為堆積し、最下層は第8層の焼砂が検出されている。炉1は第2次面の黒色土をそのまま掘り込んだだけの炉である。炉2は厚さ2～4cmの黒色土を貼り付けて構築されている。炉1・2は、第8層の焼砂が検出されている。

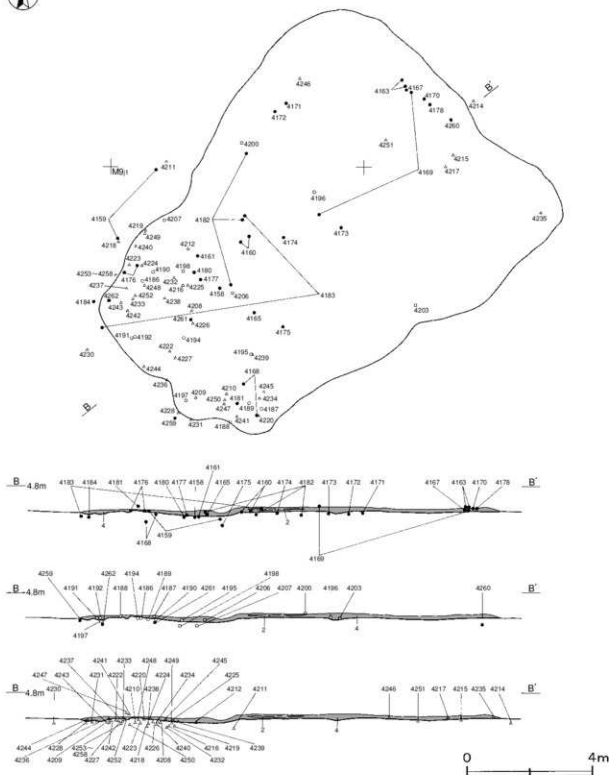


第442図 第83号建物跡炉・竈土層図

ピット 11カ所。P1～P6は深さ62～80cmで、北西棟を支えた主柱穴と考えられる。P7～P9は深さ26～70cmで、北西棟の桁行と梁行の延長線上に位置していることから、P1～P6に伴う補助柱穴と考えられる。2次面から確認されたP10・P11は深さ30・32cmで、性格は不明である。



第443図 第83号建物跡実測図

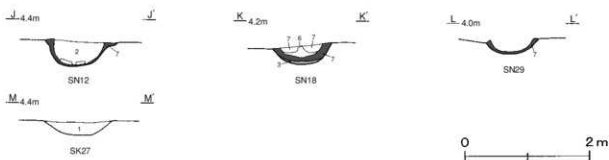


第444図 第83号建物跡遺物平面実測図

土坑（第445図）第1次面では、第12号粘土貼土坑が竈の西部、第27号土坑がP3の北部に位置している。第2次面では、第18号粘土貼土坑が炉1の南東部、第29号粘土貼土坑が炉2の南西部に位置している。粘土貼土坑は、厚さ2～10cmの粘土を貼り付けて構築されている。第12号粘土貼土坑の底面には、長径25・30cm、短径

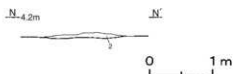


15cm、厚さ4・6cmほどの平らな砂岩2個を並べて貼り付けている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。第18号粘土貼土坑は第6層の黒色土D層と第7層の粘土ブロック層が、第27号土坑は第1層の砂A層がそれぞれ堆積した層である。



第445図 第83号建物跡土坑土層図

**貝集積地** (第446図) 第1次面から確認された第75号貝集積地は、東部の黒色土面に位置している。径1.2mほどの円形で、貝層の厚さは8cmである。



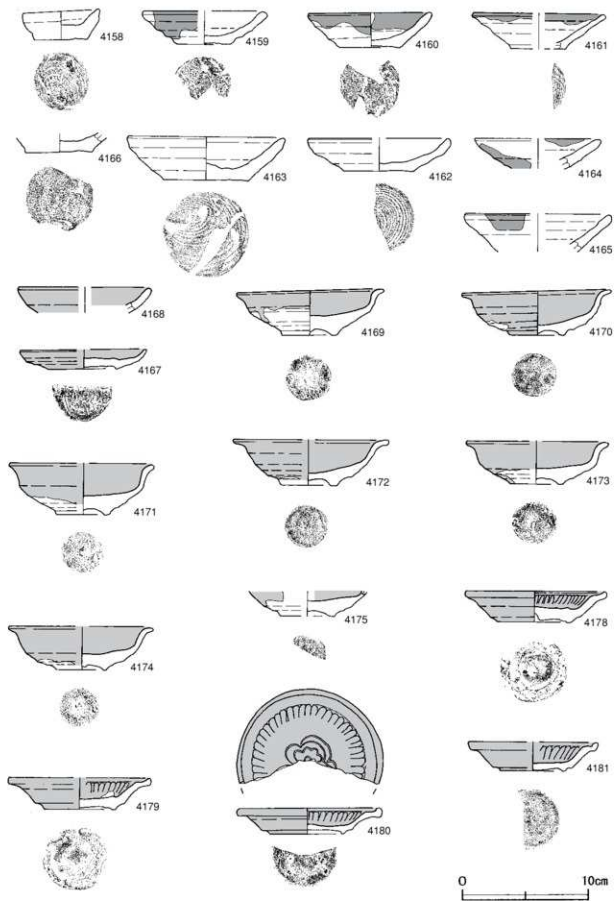
第446図 第83号建物跡貝集積地土層図

第75号貝集積地出土貝種一覧表

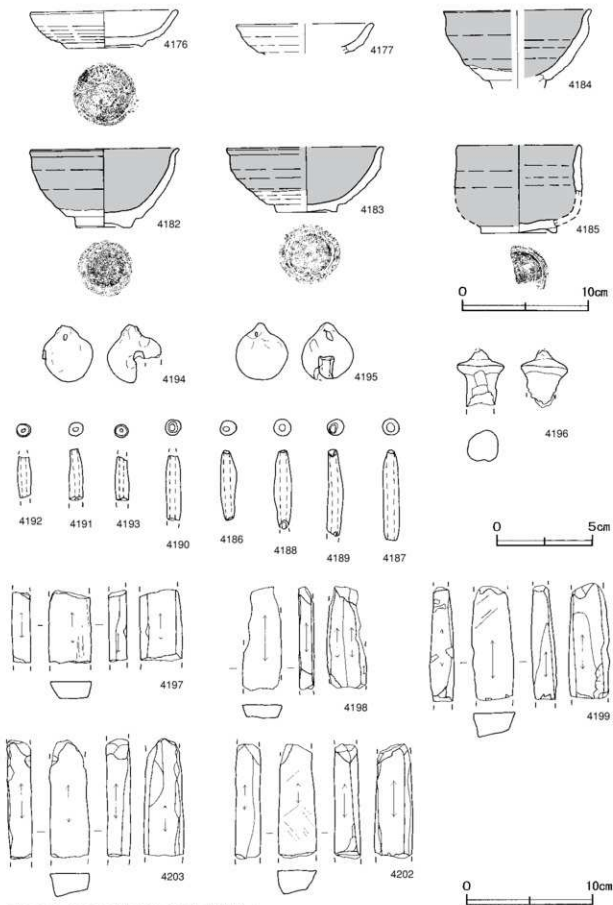
No.	貝種	重さ	比率	枚数	備考	No.	貝種	重さ	比率	枚数	備考
1	オオタニシ	45.0	0.50	6	淡水	5	ハマグリ	120.0	1.34	8	
2	カキ	65.0	0.72			6	ウバガイ	6,460.0	71.94		
3	マツカサガイ細片	205.0	2.28		淡水	7	ウバガイ細片	2,000.0	22.27		
4	コタマガイ	85.0	0.95	4							

**遺物出土状況** 土師質土器片123点(小皿3、皿116、鍋4)、陶器片68点(皿55、碗13)、須恵器片1点(甕)土製品12点(土錘8、土鈴2、不明2)、石器15点(砥石12、火打石3)、金属製品92点(小刀7、鏃1、小札1、鎌2、包丁カ1、鉄鍋2、火打金1、新1、釘10、耳金3、吊金具2、毛抜1、紡錘車1、紡錘2、環状金具1、壺金1、煙管1、古銭12、不明42)、骨角製品4点(筭)、鉄滓1点が出土している。これらの遺物は黒色土上面から黒色土下にかけて出土し、調査第6区の中でも出土量が極めて多い。土師質土器や陶器は、竈付近と南西部から出土している。管状土錘は8点出土し、すべて南西部に集中している。砥石・火打石は、中央部から南西部にかけて点在している。金属製品は小刀・釘・新・鉄鍋など種類も豊富で、南西部を中心とする広範囲に散在している。4253～4258の古銭は、南西部の砂層からまとめて検出されている。

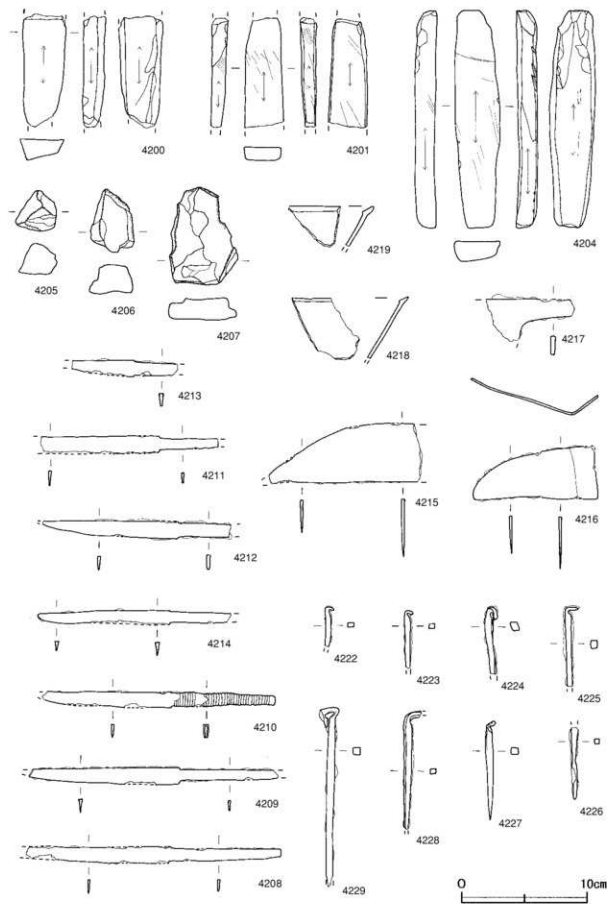
**所見** 床面が一段高く構築されている北部に、付属施設である炉や粘土貼土坑が集中している。床面は2面確認され、それぞれの床面から確認された竈あるいは炉付近には、粘土貼土坑がセットで付設されている。生活雑器である陶器や土師質土器、管状土錘などの土製品、小刀・新などの鉄製品や砥石などさまざまな遺物が出土している。これらの遺物や付属施設の位置から、北部は居住を中心に、南部は作業場として機能していたと考えられ、番匠や漁業にも従事していたことも推測される。時期は、竈付近から出土した4169・4170から17世紀前半と考えられる。



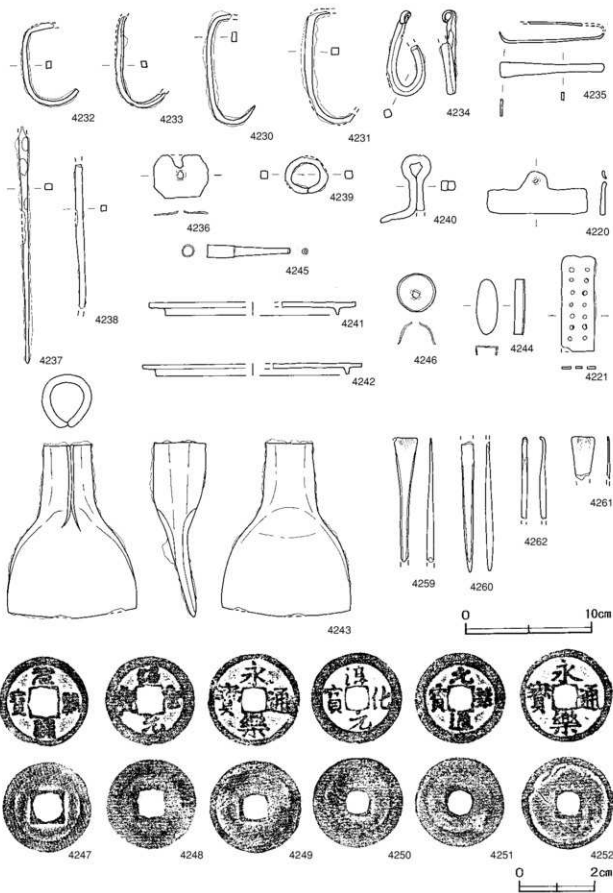
第447図 第83号建物跡出土遺物実測図(1)



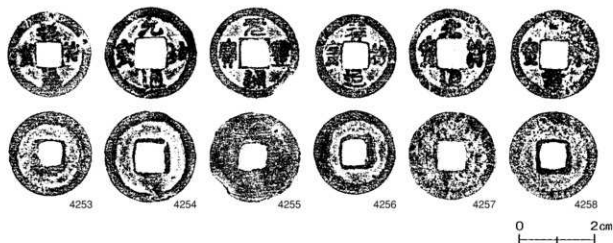
第448图 第83号建物跡出土遺物実測図(2)



第449圖 第83号建物跡出土遺物実測図(3)



第450图 第83号建物跡出土遺物実測図(4)



第451図 第83号建物跡出土土物実測図(5)

第83号建物跡出土土物観察表 (第447~451図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4158	小皿	土師質土器	6.0	2.4	4.2	雲母	橙	普通	底部回転糸切り	南西部黒色土下	95% PL73
4159	小皿	土師質土器	[9.4]	2.6	[4.2]	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転糸切り 外面覆付着	西部砂層	30%
4160	小皿	土師質土器	9.6	2.8	4.7	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	底部回転糸切り 内・外面覆付着	中央部黒色土下	60% PL74
4161	皿	土師質土器	[10.4]	2.8	[4.4]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 内・外面覆付着	南西部黒色土下	20%
4162	皿	土師質土器	[11.0]	2.6	[5.6]	長石・雲母	明赤褐	普通	内底面渦巻状のナデ	覆土中	40%
4163	皿	土師質土器	12.2	3.4	6.7	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面渦巻状のナデ	北部黒色土上面	90% PL78
4164	皿	土師質土器	[10.0]	(2.3)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面コロナデ 内・外面覆付着	覆土中	20%
4165	皿	土師質土器	[11.6]	(3.0)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面コロナデ 外面覆付着	南西部黒色土中	20%
4166	皿	土師質土器	-	(1.5)	[5.3]	雲母	橙	普通	内底面横ナデ	覆土中	20%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	施付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4167	内丸皿	陶器	[9.9]	1.5	5.3	灰白・オリーブ黄	灰釉	重なるA胎 高台内面ナデあり	瀬戸・美濃 16C後葉	北部黒色土上面	40% 大塚4
4168	丸皿	陶器	[10.4]	(2.0)	-	灰白・浅黄	灰釉	内・外面施釉	瀬戸・美濃	南西部黒色土下	20%
4169	皿	陶器	11.6	3.7	4.4	灰・明褐	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	北部・中央部混合	7% 1-2 PL6
4170	皿	陶器	11.8	3.7	4.2	灰・赤褐	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	北部黒色土上面	8% 1-2 PL6
4171	皿	陶器	[11.1]	4.1	4.2	灰・にぶい黄褐	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	SN12付近	7% 1-2 PL6
4172	皿	陶器	[12.2]	3.6	4.4	灰・明赤褐	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	SN12付近	60% 1-2
4173	皿	陶器	[11.1]	3.4	4.2	灰・にぶい橙	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	中央部黒色土下	60% 1-2
4174	皿	陶器	[11.3]	3.4	3.8	灰・橙	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	中央部黒色土下	60% 1-2
4175	皿	陶器	-	(2.0)	[4.2]	灰・橙	薬灰釉	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	南西部黒色土下	20% 1-2
4176	丸皿	陶器	11.6	2.9	5.9	灰白・灰白	長石釉	高台内ビン裏3か所有り	瀬戸・美濃 17C前葉	南西部黒色土下	6% 大塚 PL6
4177	丸皿	陶器	[10.6]	(2.3)	-	灰白・灰白	長石釉	内・外面施釉	瀬戸・美濃 17C前葉	南西部黒色土中	20% 大塚4
4178	折縁皿	陶器	11.0	2.5	5.6	灰白・オリーブ黄	灰釉	体部内ナデ 高台内面ナデあり	瀬戸・美濃 17C前葉	北部黒色土上面	7% 大塚 PL6
4179	折縁皿	陶器	[11.0]	2.5	5.6	灰白・オリーブ黄	灰釉	体部内ナデ 高台内面ナデあり	瀬戸・美濃 17C前葉	覆土中	6% 大塚 PL6
4180	折縁皿	陶器	11.2	2.1	5.9	灰・オリーブ黄	灰釉	体部内ナデ 高台内面ナデあり	瀬戸・美濃 17C前葉	南西部黒色土下	6% 大塚 PL6
4181	折縁皿	陶器	[10.2]	2.3	5.2	灰白・オリーブ黄	灰釉	体部内ナデ 高台内面ナデあり	瀬戸・美濃 17C前葉	北部黒色土上面	30% 大塚4
4182	天目茶碗	陶器	11.6	6.3	4.4	灰白・にぶい黄褐	鉄釉	口縁部中外反する 内反り高台	瀬戸・美濃 17C後葉	中央部・東西部混合	6% 大塚 PL6
4183	天目茶碗	陶器	[12.2]	5.2	4.8	灰白・黒	鉄釉	口縁部やや外反する 輪高台	瀬戸・美濃 17C後葉	中央部・東西部混合	4% 大塚 PL6
4184	天目茶碗	陶器	[11.6]	(6.3)	-	灰白・黒	鉄釉	口縁部やや外反する	瀬戸・美濃 17C後葉	南西部砂層	35% 大塚4
4185	筒形碗	陶器	[9.6]	[7.0]	6.0	灰白・灰白	灰釉	体部から直立する 付台高台	瀬戸・美濃 17C後葉	覆土中	20% 大塚4

番号	器種	長さ	幅(器高)	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
4186	管状土鉢	3.2	0.8	0.8	2.0	雲母	定形 孔径0.3cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4187	管状土鉢	4.8	0.9	0.9	3.1	雲母	定形 孔径0.5cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4188	管状土鉢	(4.2)	0.9	0.9	(2.9)	雲母	ほぼ定形 孔径0.4cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4189	管状土鉢	(4.6)	0.9	0.8	(3.3)	長石・雲母	ほぼ定形 孔径0.4cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4190	管状土鉢	(3.5)	0.9	0.8	(2.4)	長石・雲母	孔径0.4cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4191	管状土鉢	(2.7)	0.8	0.8	(1.6)	長石	孔径0.4cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4192	管状土鉢	(2.2)	0.7	0.7	(1.3)	雲母・赤絵	孔径0.3cm 外面ナデ	南西部黒色土中	PL84
4193	管状土鉢	(2.4)	0.7	0.7	(1.2)	雲母	孔径0.2cm 外面ナデ	覆土中	PL84
4194	土鈴	3.0	2.7	2.8	(6.9)	長石・雲母	外面ナデ 鈴口1/2欠損	南西部黒色土中	PL83
4195	土鈴	3.0	2.8	2.8	(13.1)	長石・雲母	外面ナデ 鈴口一部欠損 中玉遺存	南西部黒色土中	PL83
4196	不明	(3.2)	2.5	2.5	(9.5)	長石・雲母	人型* 頸部笠状	中央部黒色土中	PL84
4197	砥石	(5.7)	3.4	1.4	(49.2)	凝灰岩	砥面4面 断面四角形 整形時の加工痕有り	南西部黒色土下	
4198	砥石	(8.2)	3.2	1.2	(45.5)	凝灰岩	砥面5面 整形時の加工痕有り	南西部黒色土下	
4199	砥石	(9.0)	3.2	1.9	(84.9)	凝灰岩	砥面4面 砥面やや湾曲	覆土中	
4200	砥石	(8.9)	3.4	1.7	(750.0)	凝灰岩	砥面3面 整形時の加工痕有り	SN12付近	
4301	砥石	(8.7)	3.1	1.3	(53.5)	凝灰岩	砥面4面 砥面に擦痕有り	覆土中	
4302	砥石	(9.0)	3.1	2.2	(85.1)	凝灰岩	砥面4面 砥面に擦痕・整形時の加工痕有り	覆土中	
4303	砥石	(9.3)	3.1	1.9	(91.3)	凝灰岩	砥面4面 断面四角形	東部黒色土中	
4304	砥石	17.3	3.6	1.7	157.9	凝灰岩	砥面4面 砥面に擦痕有り	覆土中	PL86
4305	火打石	3.3	3.2	2.4	23.3	石英	一部の縁が摩滅	覆土中	PL87
4306	火打石	5.0	3.5	2.2	48.1	石英	一部の縁が摩滅	南西部黒色土中	PL87
4307	火打石	7.8	5.4	1.7	103.7	珪瑁	一部の縁が摩滅	南西部黒色土下	PL87
4308	小刀	(20.3)	1.4	0.2	(20.2)	鉄	刃先部欠損 両側	南西部黒色土下	PL91
4309	小刀	(19.8)	1.3	0.2	(23.5)	鉄	刃先部・茎部一部欠損 両側	南西部黒色土中	PL91
4310	小刀	(18.6)	1.1	0.2	(20.7)	鉄	刃先部欠損 柄巻遺存 両側	南西部黒色土下	PL91
4311	小刀	(14.2)	1.3	0.2	(21.5)	鉄	刃先部・茎部一部欠損 両側	西部砂層	PL91
4312	小刀	(14.9)	1.5	0.2~0.3	(28.5)	鉄	刃先部・茎部一部欠損 両側*	南西部黒色土中	
4313	小刀	(8.5)	1.4	0.3	(8.9)	鉄	刃先部・茎部一部欠損 両側	覆土中	
4314	小刀	(15.4)	1.1	0.3	(12.8)	鉄	茎部一部欠損 刃部の中央部摩滅 両側	北部砂層	
4315	鎌	(12.1)	(4.6)	0.3	(46.9)	鉄	刃部 曲刃鎌	北部黒色土下	PL89
4316	鎌*	(10.0)	4.8	0.2	(33.5)	鉄	刃部屈曲 曲刃鎌	南西部黒色土下	PL89
4317	包丁*	(7.1)	(3.4)	0.4	(27.2)	鉄	刃部一部遺存	北部黒色土中	
4318	鉄鍋	-	(4.9)	-	(27.8)	鉄	口縁部片 口縁部内面に残有り	西部砂層	PL95
4319	鉄鍋	-	(3.2)	-	(21.2)	鉄	口縁部片 口縁部内面に残有り	南西部黒色土中	PL95
4320	火打金	8.0	3.4	0.4	37.9	鉄	山型 打撃部厚い 孔有り	南西部黒色土中	PL94
4321	小札	7.6	2.7	0.2	(18.0)	鉄	孔は14か所で径2~3mm 下部一部欠損	覆土中	PL90
4322	釘	(3.2)	0.5	0.3	(2.6)	鉄	断面長方形 先端部欠損	南西部黒色土下	
4323	釘	(4.7)	0.5	0.4	(4.9)	鉄	断面長方形 先端部欠損	南西部黒色土下	
4324	釘	(5.4)	0.6	0.6	(11.4)	鉄	断面四角形 頭部屈曲 両端部欠損	南西部黒色土中	
4325	釘	(6.3)	0.5	0.6	(14.9)	鉄	断面長方形 先端部欠損	南西部黒色土中	PL93
4326	釘	(5.8)	0.4	0.4	(4.2)	鉄	断面方形 頭部欠損	南西部黒色土下	
4327	釘	7.9	0.6	0.5	8.6	鉄	完存 断面方形	南西部黒色土下	PL93
4328	釘	(9.3)	0.5	0.4	(16.5)	鉄	断面長方形 両端部欠損	南西部黒色土下	PL93
4329	釘*	(14.3)	0.6	0.6	(18.7)	鉄	断面方形 頭部環状 先端部欠損	覆土中	PL93
4330	耳金	8.8	0.4	0.9	(23.6)	鉄	ほぼ完存 断面長方形	西部砂層	PL92
4331	耳金	(8.9)	0.6	0.6	(27.0)	鉄	断面方形 両端部一部欠損	南西部黒色土下	PL92
4332	耳金*	(6.5)	0.4	0.5	(14.2)	鉄	ほぼ完存 断面長方形	南西部黒色土下	
4333	吊金具	(7.3)	0.4	0.5	(9.8)	鉄	断面方形 両端部欠損	南西部黒色土中	
4334	吊金具*	6.8	0.6	0.6	(22.8)	鉄	断面方形 頭部環状 先端部欠損	南西部黒色土下	
4335	毛抜	8.3	0.7~1.3	0.2	(7.1)	鉄	刃部・腰部一部欠損 鋸歯形	北東部黒色土上面	
4336	紡錘車	4.4	3.5	0.1	(7.6)	鉄	紡輪 平面は八角形 中央に方形の孔有り	南西部黒色土中	PL95
4337	紡錘	(18.9)	0.5	0.5	(28.9)	鉄	断面方形 頭部欠損	南西部黒色土下	
4338	紡錘	(11.6)	0.5	0.5	(16.4)	鉄	断面方形 両端部欠損	南西部黒色土下	
4339	環状金具	(2.9)	3.3	0.6	(8.4)	鉄	断面方形 リング状	南西部黒色土中	
4340	密金	5.4	(4.1)	0.7	(14.9)	鉄	断面長方形 頭部環状	南西部黒色土下	PL95
4341	不明	[16.4]	1.0	-	(41.9)	鉄	平面は円形 底部に高台有り	南西部黒色土上面	
4342	不明	[17.4]	0.9	-	(59.8)	鉄	平面は円形 底部に高台有り	南西部黒色土下	PL89

番号	器種	長さ	幅(器高)	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
4243	新	13.8	10.3	4.2	653.0	鉄	定存 柄の接合部円形	南西部黒色土下	PL89
4244	鉢	4.3	1.7	0.8	3.6	銅	平面は楕円形 側面に沈線有り	南西部黒色土中	PL90
4245	煙管	6.6	小口径1.0	口付径0.4	3.9	銅	吸い口 肩部設有り	南西部黒色土中	PL94
4246	不明	径3.0	高さ1.7	-	4.9	銅	中心に孔有り 鈴々	SN12付近	PL95
4259	弁	(9.9)	(1.7)	0.5	(3.5)	骨	竿部下位欠損 直線的 両面擦痕有り	南西部砂層	
4260	弁	(10.3)	(1.0)	0.6	(4.4)	骨	竿部遺存 直線的	北部黒色土上面	
4261	弁	(3.4)	1.9	0.2	(1.3)	骨	頭部遺存 やや湾曲 両面擦痕有り	南西部黒色土下	
4262	弁	(6.4)	(0.4)	0.5	(1.2)	骨	耳掻部遺存 直線的	南西部黒色土下	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特 徴	出土位置	備考
4247	元祐通寶	2.38	0.76	0.09	3.16	1086	銅	篆書	南西部黒色土上面	
4248	熙寧元寶	2.42	0.75	0.09	3.34	1094	銅	行書	南西部黒色土下	
4249	水滸通寶	2.54	0.64	0.12	3.38	1408	銅	真書	南西部黒色土下	
4250	淳化元寶	2.45	0.54	0.09	3.22	990	銅	行書	南西部黒色土下	
4251	元祐通寶	2.44	0.66	0.14	3.82	1086	銅	行書	北部黒色土下	
4252	水滸通寶	2.56	0.65	0.07	2.56	1408	銅	真書 駒込み不足の穴有り	南西部黒色土中	
4253	□□通寶	2.27	0.64	0.11	2.46	-	銅	真書 判読不明	南西部砂層	
4254	元祐通寶	2.45	0.83	0.09	2.32	1086	銅	行書 駒込み不足の穴有り	南西部砂層	
4255	元豊通寶	2.41	0.74	0.07	2.44	1078	銅	篆書	南西部砂層	
4256	祥符通寶	2.35	0.72	0.09	1.96	1008	銅	真書	南西部砂層	
4257	元符通寶	2.35	0.83	0.15	1.90	1098	銅	行書	南西部砂層	
4258	□□通寶	2.35	0.70	0.12	2.58	-	銅	判読不明	南西部砂層	

#### 第84号建物跡 6区HK-19 (第452~455図)

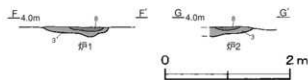
**位置** 調査区南部のN9g3区を中心に位置している。北西側には第98号整地地面が隣接している。

**確認状況** 表砂を約2.9m除去し、標高3.9~4.1mで黒色土面が確認された。

黒色土面から炉、粘土貼土坑と土坑が確認された。さらに黒色土を約10cm除去した標高4.0mで、第2次面の黒色土面とそれに伴う粘土貼土坑、柱穴14か所が確認された。

**規模と施設** 第1次面の黒色土の範囲は、長軸8.7m、短軸4.5mの不定形で、長軸方向はN-41°-Wである。第2次面の黒色土の範囲は、長軸13.8m、短軸4.7mの不定形で、長軸方向はN-26°-Eである。付属施設として、炉2基、粘土貼土坑3基、土坑4基が構築されている。

**床** 両面ともほぼ平坦である。第1次面は厚さ5~30cmの黒色土、第2次面は厚さ4~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。



第452図 第84号建物跡炉土層図

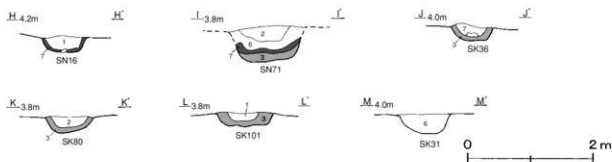
**炉** (第452図) 炉1・2は第1次面の北西部に位置し、炉1は第16号粘土貼土坑と隣接している。どちらも、厚さ4~11cmほどの黒色土を貼り付けて構築され、覆土下層から第8層の焼砂が検出されている。

**ピット** 14か所。P1~P3は深さ52~71cmで、北西軸に並ぶ柱穴である。P4・P5は深さ52・70cmで、P1~P3の南西部に対応する位置の柱穴である。P6~P14は深さ12~47cmである。P1~P14は建物の柱穴と考えられるが、上屋を想定できる位置に配列されていないため、規模や棟向を確定できなかった。

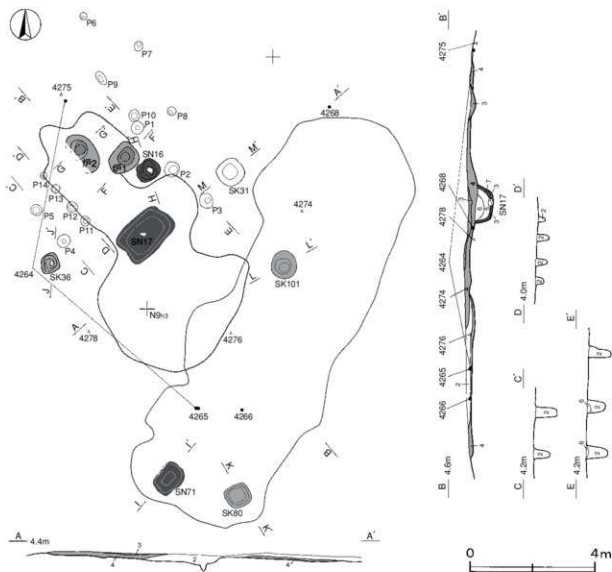
**土坑** (第453図) 第1次面では、第16号粘土貼土坑が炉1の東部、黒色土で構築された第36号土坑が西部の砂層に位置している。第2次面では、第17号粘土貼土坑が確認されている。さらにその下層からは、第71号粘土貼土坑と黒色土で構築された第80・101号土坑が確認されている。粘土貼土坑は厚さ2~13cmの粘土、第36・



80・101号土坑は厚さ5～20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第16・17号粘土貼土坑の底面には長径20cm、短径16・14cm、厚さ8・14cmの平らな砂岩が埋設され、第36号土坑の底面には長径16cm、短径14cm、厚さ6cmの平らな砂岩が貼り付けられている。粘土貼土坑及び土坑の覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第5・6層の黒色土C・D層が人為堆積した層である。また、第36号土坑の覆土は、第7層の粘土ブロックを主体に埋め戻している。



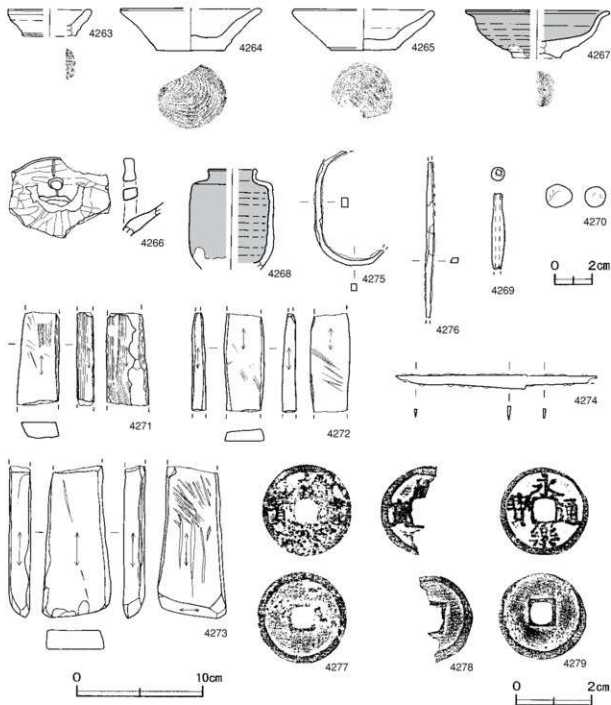
第453図 第84号建物跡土坑土層図



第454図 第84号建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片40点（小皿2、皿20、銅16、甕2）、陶器片3点（皿2、茶入1）、土製品2点（土鍾、中玉）、石器5点（砥石4、火打石1）、金属製品10点（小刀1、耳金1、棒状金具1、古銭3、不明4）が出土している。遺物は、第2次面の黒色土上面に多く散在している。4265・4266・4274・4276は第2次面の黒色土上面から出土している。また、4275は北西部の砂層、4268は北東部の砂層、4278は南西部の砂層からそれぞれ出土している。

**所見** 上屋を想定される柱穴の配列は確認できなかったが、調理場とみられる炉と粘土貼土坑の施設や床面が2面確認されたことから建物跡と判断した。時期は、4267から17世紀前半と考えられる。



第455図 第84号建物跡出土遺物実測図

第84号建物跡出土遺物観察表 (第455図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4363	小皿	土師質土器	[6.4]	2.1	[4.2]	雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	底部回転糸切り	SN16内	15%
4364	皿	土師質土器	[11.0]	3.3	5.4	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面渦巻状のナデ	黒色土層・砂層間	35%
4365	皿	土師質土器	[10.8]	3.2	5.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	2次面黒色土上面	35%
4366	注口付鍋	土師質土器	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	内面ナデ 外面へう磨き 外面面取	2次面黒色土上面	5% PL80

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4367	皿	陶器	[11.2]	3.9	[3.8]	にぶい褐・灰黄	薬灰釉	高台部土見せ 雲巾	肥前 17C 前葉	覆土中	4% 1-2 凡砂
4368	茶入	陶器	[3.6]	(8.0)	-	灰白・灰褐	鉄釉	唇裏 体部外面下端露胎	瀬戸・美濃	北東部砂層	35% PL69

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4369	管状土鉢	(4.0)	0.8	0.7	(4.0)	長石・雲母	ほぼ定形 孔径0.3cm 外面ナデ	覆土中	
4270	中玉	長径1.4	短径1.2	1.1	1.7	雲母	指頭によるナデ(珠)	P 5内	
4271	砥石	(7.3)	3.4	1.3	(53.2)	凝灰岩	紙面1面 胎は整形時の加工痕有り	P 5内	
4272	砥石	(7.8)	3.2	1.1	(45.7)	凝灰岩	紙面4面 紙面に擦痕有り	覆土中	
4273	砥石	(12.1)	5.5	1.6	(200.4)	砂岩	紙面5面 紙面に擦痕有り	覆土中	
4274	小刀	15.9	1.2	0.2~0.3	(13.5)	鉄	ほぼ定存 両端カ	2次面黒色土上面	PL91
4275	耳金	(9.1)	0.5	0.7	(20.4)	鉄	断面長方形 両端部欠損	北西部砂層	
4276	棒状金具	(12.4)	0.5	0.4	(13.3)	鉄	断面四角形 両端部欠損	2次面黒色土上面	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4277	水口通寶	2.43	0.49	0.12	3.20	1408	銅	真書 永樂通寶カ	SN16内	
4278	□-一寶	-	0.64	0.09	(1.18)	-	銅	真書 判読不明 欠け	南西部砂層	
4279	永樂通寶	2.40	0.61	0.10	3.28	1408	銅	真書	覆土中	

## 第85号建物跡 6区SB-6・HK-21 (第456~458図)

位置 調査区南部のN 8a8区を中心に位置している。東側には第83・91号建物跡が隣接している。

重複関係 下面の第91号整地をP 1が掘り込んでいる。

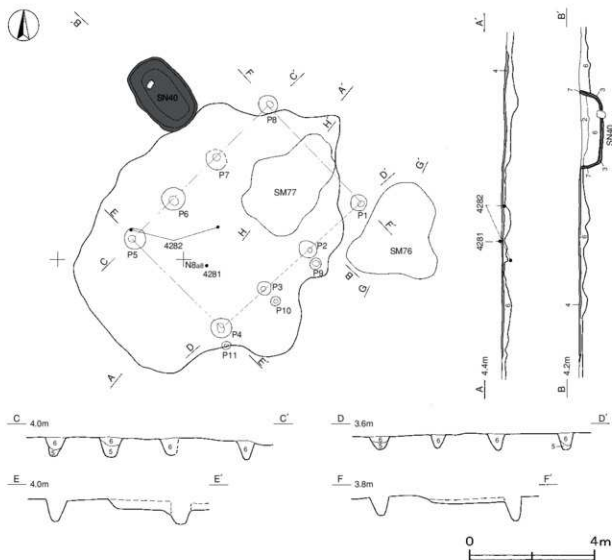
確認状況 表砂を約3.4m除去し、標高3.7~3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土土坑と貝集積地。さらに黒色土を除去して主に北東に並ぶ柱穴11か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は、長軸10.1m、短軸7.7mの不定形で、長軸方向はN-41°-Eである。ピットの配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-48°-E、規模は桁行6.0m、梁行4.0mで、面積は24.0㎡である。柱間寸法は桁行が1.8~2.1m、梁間が4.0mを基調としている。付属施設として、粘土貼土坑1基が構築され、貝集積地2か所が確認されている。

床 はほぼ平坦で、厚さ4~9cmの黒色土を貼り付けて構築されている。締まりは強い。

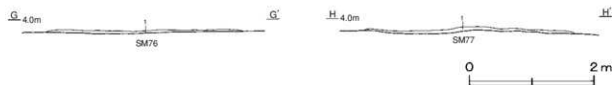
ピット 11か所。P 1~P 8は深さ42~65cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。P 9~P 11は深さ16~23cmで、それぞれP 2~P 3の南西側に隣接している。やや小さい柱穴であり、P 2~P 3に伴う補助柱穴と考えられる。

土坑 (第456図) 第40号粘土貼土坑は北西部の砂層に位置し、厚さ3~9cmの粘土を貼り付けて構築されている。底面には長径30cm、短径18cm、厚さ26cmの平らな砂岩が埋設されている。覆土は、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第456図 第85号建物跡実測図

**貝集積地** (第457図) 第76号貝集積地は東部の砂層, 第77号貝集積地は東部の黒色土面に位置している。第76号貝集積地は長軸3.2m, 短軸2.6mの不定形で, 貝層の厚さは4cmである。第77号貝集積地は長軸3.2m, 短軸2.3mの不定形で, 貝層の厚さは6cmである。



第457図 第85号建物跡貝集積地土層図

第76号貝集積地出土貝種一覧表

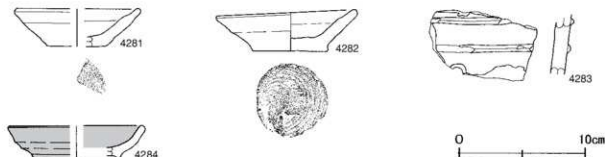
No.	貝種	重さ	比率	数	備考	No.	貝種	重さ	比率	数	備考
1	サルゴウガイ	55.0	0.28	2		5	コマタガイ	285.0	1.44	46	
2	カキ細片	150.0	0.76			6	チョウセンハマグリ	175.0	0.89	5	
3	マツカサガイ	250.0	1.27		淡水	7	ウバガイ	8,080.0	40.91	1-301-30	
4	シジミ属	95.0	0.48		淡水または汽水	8	ウバガイ細片	10,660.0	53.97		

第77号貝集積地出土貝種一覧

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	サルボウガイ	40.0	0.21	1		5	シジミ属	2.0	0.01	1	淡水または汽水
2	カキ	140.0	0.73	1		6	ウバガイ	8,080.0	42.38	483	
3	ペンケイガイ	140.0	0.73	2		7	ウバガイ細片	10,660.0	55.91		
4	マツカサガイ	5.0	0.03	2							

**遺物出土状況** 土師質土器片10点（皿8、鍋1、火鉢1）、陶器片1点（皿）、須恵器片2点（坏、盤）、金属製品2点（不明）、瓦片1点が出土している。4281は中央部の黒色土上面、4282は中央部の黒色土下、4283・4284は覆土からそれぞれ出土している。

**所見** 桁行3間、梁行1間の北東棟の建物跡と考えられる。屋外に位置している粘土貼土坑は鹹水槽と同様の構造であることから、水溜として機能していたと推測される。時期は、東側に隣接する第83号建物跡と同時期の17世紀前半と考えられる。



第458図 第85号建物跡出土遺物実測図

第85号建物跡出土遺物観察表（第458図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4281	小皿	土師質土器	[9.4]	3.0	[4.6]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部黒色土上面	20%
4282	皿	土師質土器	11.0	3.4	6.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面横ナデ	中央部黒色土下	55%
4283	火鉢	土師質土器	-	(5.6)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面2条の隆帯貼り付け	覆土中	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4284	丸皿	陶器	[10.6]	2.6	[6.8]	灰白・オリーブ灰	灰緑	内・外面施釉 前り出し高台	瀬戸・美濃	覆土中	5% 大塚期

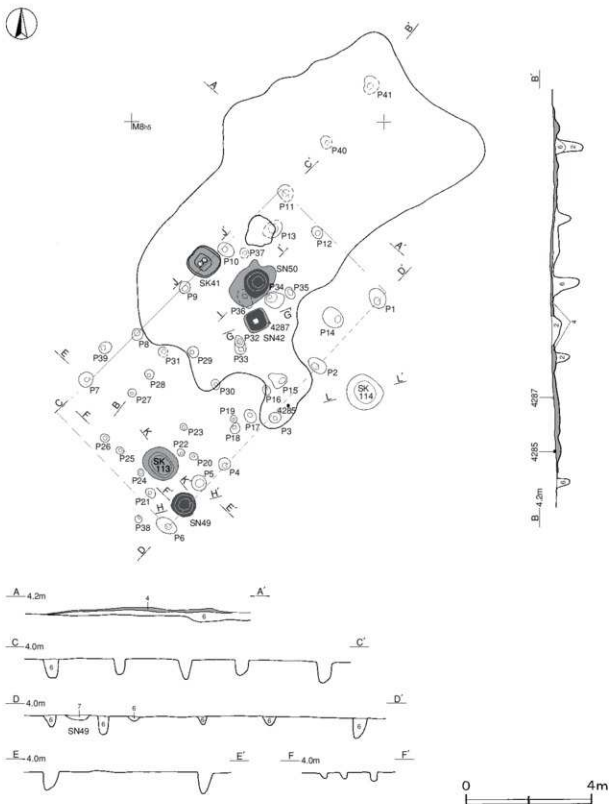
**第86号建物跡** 6区SB-5・HK-22（第459～461図）

**位置** 調査区中央部のM8i6区を中心に位置している。北東側には第90号建物跡が隣接している。

**確認状況** 表砂を約3.2m除去し、標高3.6～3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から土坑、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑、土坑と主に北東に並ぶ柱穴41か所が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸11.2m、短軸5.7mの不定形で、長軸方向はN-41°-Eである。ピットの配列から、桁行4間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-42°-E、規模は桁行10.2m、梁行5.0mで、面積は51.0㎡である。柱間寸法は桁行が不規則、梁間が5.0mを基調としている。付属施設として、粘土貼土坑3基、土坑3基が構築されている。

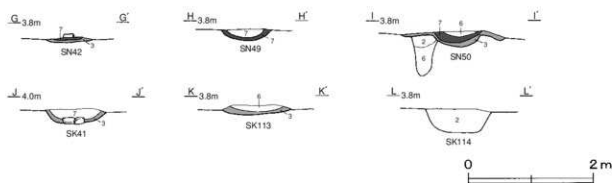
**床** はほぼ平坦で、厚さ6～14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。締まりは強い。



第459図 第86号建物跡実測図

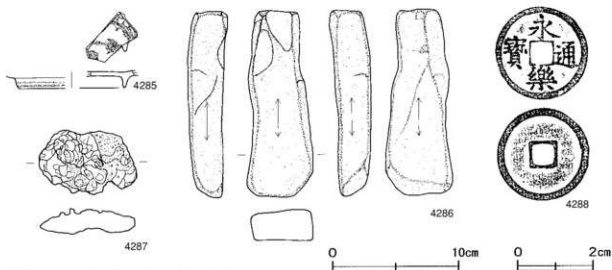
ピット 41か所。P 1～P 12は深さ18～70cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。P 13～P 37は深さ18～69cmで、上屋を支えた柱穴か間仕切り用の柱穴と考えられる。P 38～P 41は深さ37～79cmで、建物跡の外側に位置し、性格は不明である。

**土坑** (第460図) 第41号土坑は黒色土面の南西部に位置している。黒色土面の下層からは、第42・50号粘土貼土坑が中央部、第114号が南東部、第49号粘土貼土坑と黒色土で構築された第113号土坑が南部からそれぞれ確認されている。粘土貼土坑は厚さ2～14cmの粘土、第41・113号土坑は厚さ4～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第42号粘土貼土坑は底面のみ確認され、径16cm、厚さ4cmほどの平らな砂岩が貼り付けられている。第41号土坑の底部には、一辺15cm、厚さ10cmほどの平らな砂岩2個が埋設されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層、第6層の黒色土D層と第7層の粘土ブロックが人為堆積した層である。



第460図 第86号建物跡土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片5点(皿3, 鍋2), 磁器片1点(皿), 石器1点(砥石), 金銅製品1点(古銭), 鉄滓1点が出土している。4285・4287は南部の黒色土上面, 4288は第114号土坑内からそれぞれ出土している。  
**所見** 桁行4間, 梁行1間の北東棟の建物跡と考えられる。生活雑器類の出土は極めて少なく炉も確認されなかったことから, 作業小屋の可能性が高い。主な作業場は, 粘土貼土坑及び土坑が集中している南部と考えられる。時期は, 最初の遺構確認面から検出され, 第83号建物跡と同じ層位であることから17世紀前半と考えられる。



第461図 第86号建物跡出土遺物実測図

第86号建物跡出土遺物観察表 (第461図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4285	皿	磁器	-	(1.3)	[8.4]	灰白・灰白	染付・透明釉	見込みに草花文*	景徳鎮窯系*	南部黒色土上面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4286	砥石	14.7	5.3	3.2	345.0	砂岩	砥面4面 断面四角形	覆土中	PL86
4287	鉄滓	7.8	5.1	2.0	117.3	鉄	表面暗褐色 地黒褐色	南部黒色土上面	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4288	水滸通寶	2.47	0.59	0.15	5.80	1408	銅	真青	SK114内	

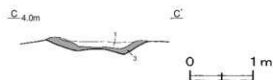
### 第87号建物跡 6区SB-2・HK-24 (第462~466図)

**位置** 調査区中央部のM9f4区を中心に位置している。南側には第83号建物跡が位置している。

**確認状況** 表砂を約3.2m除去し、標高約3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と主に北東に並ぶ柱穴8か所、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸14.8m、短軸12.2mの不定形で、長軸方向はN-56°-Wである。ピットの配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-40°-E、規模は桁行6.1m、梁行3.8mで、面積は23.2㎡である。柱間寸法は桁行が1.9~2.1m、梁間が3.8mを基調としている。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑3基、土坑2基が構築されている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ6~11cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

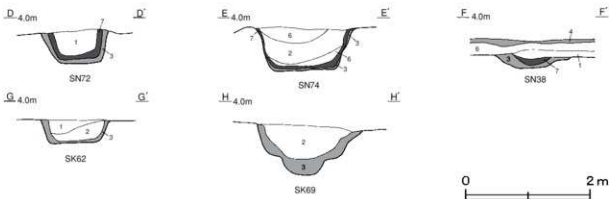


**炉** (第462図) 炉は北東棟の北部に位置し、第72号粘土貼土坑と隣接している。厚さ3~9cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積し、底面から微量の焼砂が検出されている。

第462図 第87号建物跡炉土層図

**ピット** 8か所。P1~P7は深さ46~93cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。P8は深さ82cmで、北東棟の外側に位置し、性格は不明である。

**土坑** (第463図) 第72号粘土貼土坑は炉の東部、黒色土で構築された第69号土坑は中央部、第74号粘土貼土坑は東部、黒色土で構築された第62号土坑は西部にそれぞれ位置し、第38号粘土貼土坑は黒色土の下層から確認されている。粘土貼土坑は厚さ3~11cmの粘土、第62・69号土坑は厚さ3~27cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

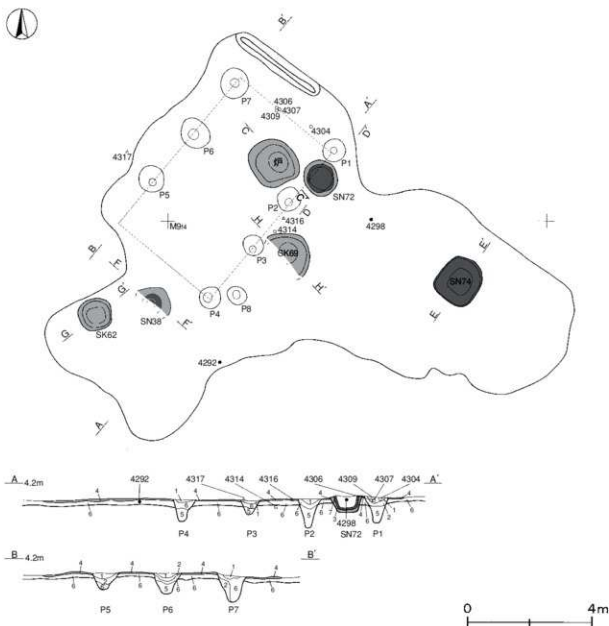


第463図 第87号建物跡土坑土層図

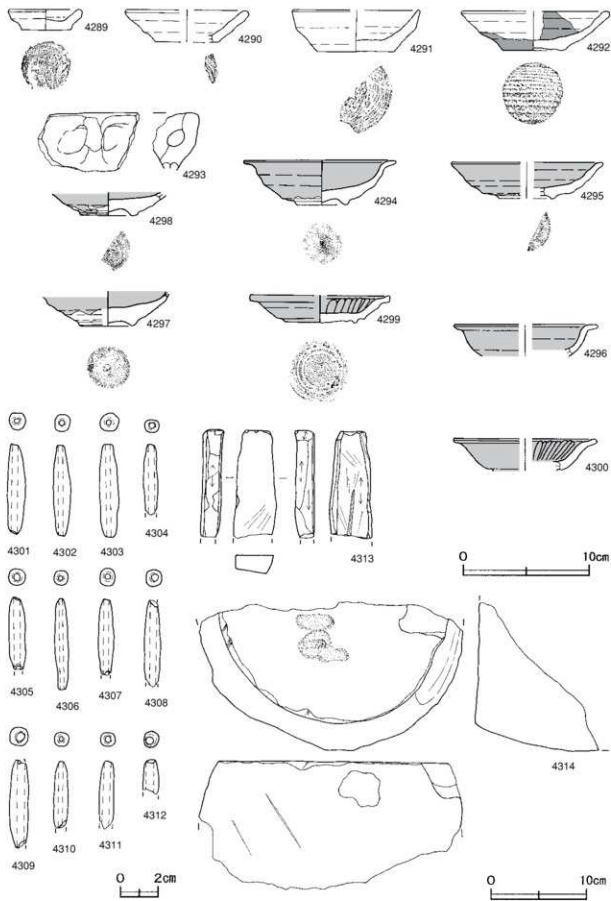


**遺物出土状況** 土師質土器片24点（小皿2，皿18，鍋3，火鉢1），陶器片12点（皿），磁器1点（碗），土製品12点（土鍾），石器2点（砥石1，台石カ1），金属製品8点（包丁1，釘1，毛抜1，古銭1，不明4）が出土している。4292は南部の黒色土下，4298・4314は中央部の黒色土下，4316は中央部の黒色土上面，4317は西部の砂層，4291・4313は第74号粘土貼土坑内からそれぞれ出土している。また，4304・4306・4307・4309の管状土鍾は，建物跡の北部からまともって確認されている。

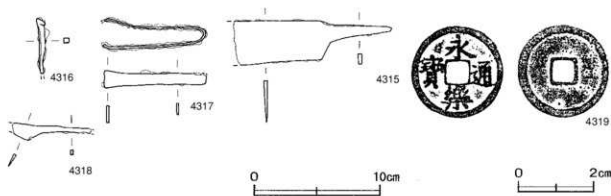
**所見** 建物内の北部には炉と第72号粘土貼土坑が隣接しており，調理場として機能していたと考えられる。屋外の東部に位置している第59号粘土貼土坑は鹹水槽と同様の構造であり，水溜りとして使用されていたと考えられる。また，管状土鍾の出土位置から，建物の北東部には投網が置かれていたことも想定される。時期は，4294～4300から17世紀前半と考えられる。



第464図 第87号建物跡実測図



第465图 第87号建物跡出土遺物実測図(1)



第466図 第87号建物跡出土遺物実測図(2)

第87号建物跡出土遺物観察表 (第465・466図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4289	小皿	土師質土器	5.4	1.6	3.9	雲母	橙	普通	底部回転未切り	覆土中	100% PL73
4290	小皿	土師質土器	[9.4]	2.5	[5.0]	長石・雲母	明赤褐	普通	底部回転未切り	覆土中	20%
4291	小皿	土師質土器	[9.8]	3.3	6.0	雲母・赤色穀子	橙	普通	底部回転未切り	SN74内	30%
4292	皿	土師質土器	[11.4]	3.1	4.8	雲母	明赤褐	普通	内底面強い横ナテ 内・外面傑付着	南部黑色土下	60%
4293	内耳鍋	土師質土器	-	(4.6)	-	長石・雲母	黄灰	普通	口縁部横ナテ 外面傑付着	覆土中	5%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・軸葉	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4294	皿	陶器	11.8	3.5	4.0	灰・明赤褐	墨灰軸	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	覆土中	70% PL68
4295	皿	陶器	[11.8]	2.9	[14.4]	灰白・灰白	墨灰軸	高台部土見せ	肥前 17C前葉	覆土中	40%
4296	皿	陶器	[11.2]	(2.5)	-	灰・灰	墨灰軸	体部内・外面口クロナテ	肥前 17C前葉	覆土中	10%
4297	皿	陶器	-	(2.8)	4.4	灰白・灰白	墨灰軸	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	覆土中	60%
4298	皿	陶器	-	(1.8)	4.4	灰黄白・灰白	墨灰軸	高台部土見せ 兜巾	肥前 17C前葉	中央部黑色土下	15%
4299	折縁皿	陶器	[10.9]	2.2	5.6	灰白・灰白	灰軸	9部内面ナテ 高台部ナテ	肥前・肥前 17C前葉	覆土中	45% 大家4
4300	折縁皿	陶器	[11.2]	(2.6)	-	灰白・オリーブ黄	灰軸	体部内面ソダ	肥前・肥前 17C前葉	覆土中	20% 大家4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4301	管状土鉢	4.8	0.9	1.0	3.5	長石	定形 孔径0.4cm 外面ナテ	覆土中	PL84
4302	管状土鉢	4.8	0.9	0.9	3.7	長石・雲母	定形 孔径0.4cm 外面ナテ	覆土中	PL84
4303	管状土鉢	5.0	1.1	1.0	4.2	長石	定形 孔径0.2cm 外面ナテ	覆土中	PL84
4304	管状土鉢	(4.8)	0.8	0.7	(1.7)	長石	孔径0.4cm 外面ナテ	北部黑色土中	PL84
4305	管状土鉢	(3.9)	0.9	0.9	(2.6)	長石	孔径0.4cm 外面ナテ	覆土中	PL84
4306	管状土鉢	4.8	0.8	0.8	2.2	長石	定形 孔径0.3cm 外面ナテ	北部黑色土中	PL84
4307	管状土鉢	4.0	0.8	0.9	(2.5)	長石・赤色穀子	ほぼ定形 孔径0.4cm 外面ナテ	北部黑色土中	PL84
4308	管状土鉢	(4.7)	0.9	0.9	(2.8)	長石	孔径0.5cm 外面ナテ	覆土中	PL84
4309	管状土鉢	4.7	1.0	1.0	(3.2)	長石・雲母	ほぼ定形 孔径0.5cm 外面ナテ	北部黑色土中	PL84
4310	管状土鉢	(3.6)	0.8	0.8	(1.7)	長石・雲母	孔径0.3cm 外面ナテ	覆土中	PL84
4311	管状土鉢	(3.5)	0.8	0.8	(1.7)	雲母	孔径0.3cm 外面ナテ	覆土中	
4312	管状土鉢	(1.8)	0.8	0.8	(0.8)	長石・雲母	孔径0.5cm 外面ナテ	覆土中	
4313	砥石	(8.6)	3.4	1.5	(72.0)	凝灰岩	砥面6面 砥面に筋状の溝・推痕有り	SN74内	PL86
4314	台石	径(28.0) 厚さ(133)	-	-	(3350.0)	凝灰岩	側張りの円筒状 表面・端面に使用痕有り	中央部黑色土下	
4315	包丁	(12.6)	3.3	0.3	(38.6)	鉄	刃部一部・基部遺存	覆土中	PL89
4316	釘	(4.4)	0.4	0.4	(4.4)	鉄	断面方形 頭部屈曲 先端部欠損	中央部黑色土上面	
4317	毛抜	8.2	1.3	0.2	(11.6)	鉄	断面長方形 銀杏形	西部砂層	PL92
4318	はさみ	(6.2)	(1.4)	0.2	(10.2)	鉄	刃部一部遺存 断面長方形	覆土中	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4319	永通寶	2.45	0.60	0.13	4.18	1408	銅	黄書	覆土中	

第88号建物跡 6区HK-28 (第467~470図)

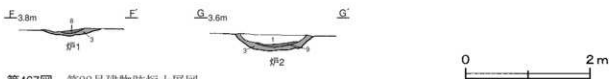
位置 調査区中央部のM9a3区を中心に位置している。西側には第2号欽状遺構、南側には道路跡が隣接している。

確認状況 表砂を約3.2m除去し、標高3.6~3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と柱穴1か所、さらに黒色土を除去して炉、粘土貼土坑、土坑と主に北東に並ぶ柱穴14か所が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は、長軸18.1m、短軸14.5mの不定形で、長軸方向はN-46°-Wである。付属施設として、炉2基、粘土貼土坑6基、土坑5基が構築されている。

床 はほぼ平坦で、厚さ4~28cmの黒色土を貼り付けて構築されている。西部に粘土塊が確認されている。

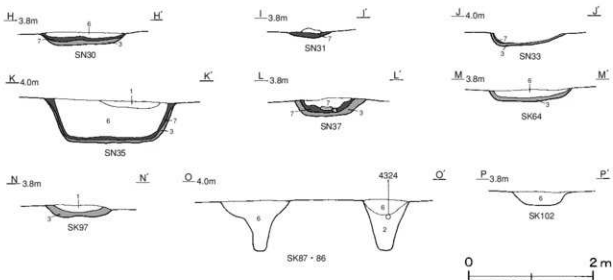
炉 (第467図) 炉1は北東部の黒色土面、炉2は南西部の砂層に位置している。炉1は厚さ3~5cm、炉3は厚さ4~10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。炉1からは第8層の焼砂、炉2からは第9層の灰が検出されている。



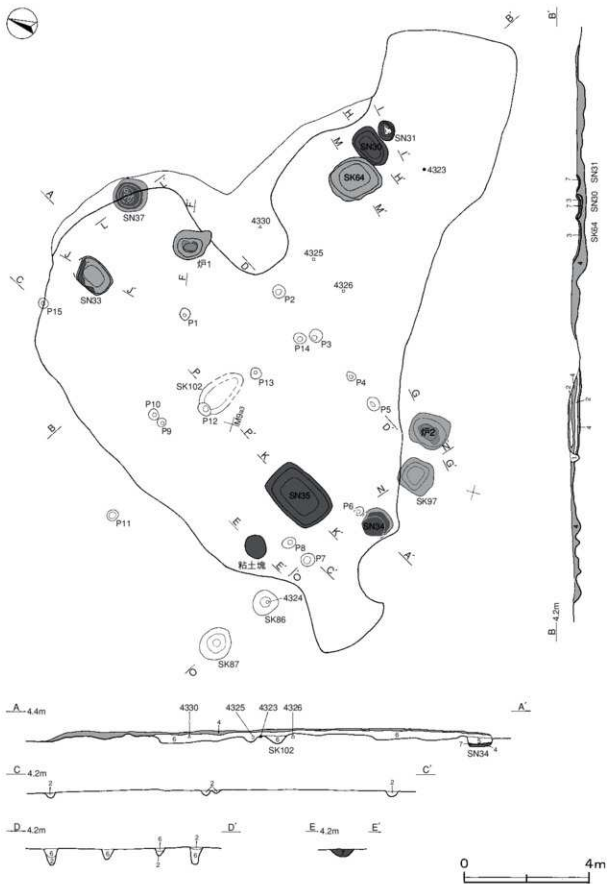
第467図 第88号建物跡炉土層図

ピット 15か所。P 1は深さ28cmで、黒色土面から確認されている。P 2~P 5は深さ25~55cmで、北東軸に並ぶ柱穴である。P 6~P 15は深さ10~57cmで、上屋を支えた柱穴又は間仕切り用の柱穴と考えられる。

土坑 (第468図) 第33号粘土貼土坑は北部、第35号粘土貼土坑は南西部、第30・31号粘土貼土坑と第64号土坑は東部にそれぞれ位置している。黒色土面の下層からは、第34号粘土貼土坑と黒色土で構築された第97号土坑が南西部、第37号粘土貼土坑が北部、第86・87号土坑が西部、第102号土坑が中央部からそれぞれ確認されている。粘土貼土坑は厚さ3~11cmの粘土、第64・97号土坑は厚さ4~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第31号粘土貼土坑の底面には長径32cm、短径20cm、厚さ6cmほどの平らな砂岩が、第37号粘土貼土坑の底面には長径10~15cm、短径6~8cm、厚さ4~6cmほどの平らな砂岩4個が貼り付けられている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第5・6層の黒色土C・D層、第7層の粘土ブロックが人為堆積した層である。



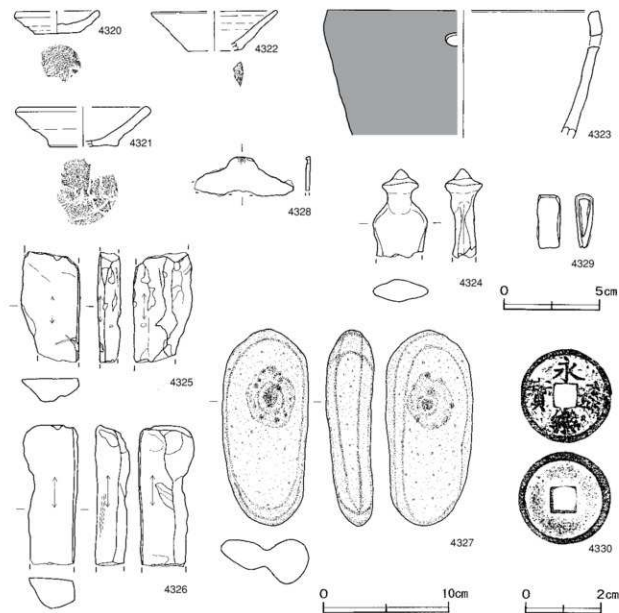
第468図 第88号建物跡土坑土層図



第469图 第88号建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片29点(小皿1, 皿27, 鍋1), 陶器片3点(皿), 土製品2点(土鍾, 不明), 石器4点(砥石3, 敲石1), 金属製品4点(銅, 火打金, 古銭, 不明)が出土している。4323は東部の黒色土下, 4325・4326・4330は中央部の黒色土下, 4324は第86号土坑内からそれぞれ出土している。

**所見** 上屋を想定される柱穴の配列は確認できなかったが, 炉と生活用具の内耳鍋や火打金が出土していることから建物跡と判断した。時期は, 最初の遺構確認面から検出されていることから, 16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第470図 第88号建物跡出土遺物実測図

第88号建物跡出土遺物観察表 (第470図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4320	小皿	土師質土器	[6.4]	1.8	3.6	長石・石英・雲母	橙	普通	内底面渦巻状のナデ	覆土中	30%
4321	皿	土師質土器	[10.0]	3.2	[5.4]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	40%
4322	皿	土師質土器	[9.8]	3.1	[4.4]	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面口クロナデ	覆土中	25%
4323	内耳鍋	土師質土器	[20.6]	[10.6]	-	長石・雲母・赤色粒子	赭灰	普通	体部端ナデ 体部口ナデ 体部底面ナデ	東部黒色土下	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4324	不明	(4.7)	2.9	1.1	(13.8)	長石・石英	大型* 頸部笠状 断面扁平	SK86内	PL84
4325	砥石	(8.8)	4.6	1.8	(83.9)	凝灰岩	砥面3面 他は剥離面	中央部黒色土下	
4326	砥石	(11.1)	4.3	2.2	(173.1)	凝灰岩	砥面3面 他は剥離面 整形時の加工痕有り	中央部黒色土下	
4327	砥石	15.4	6.8	3.8	471.0	凝灰岩	両面に敲打痕有り	覆土中	
4328	火打金	(7.8)	(3.1)	0.3	(21.4)	鉄	山型 打撃部一部欠損 孔有り	覆土中	PL94
4329	罎	2.8	0.9	1.1	4.1	鉄	定存 墓穴は角楕	覆土中	PL90

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4330	水渠通寶	2.45	0.61	0.11	2.82	1408	銅	真書	中央部黒色土下	

### 第89号建物跡 6区H K-29 (第471~474図)

**位置** 調査区南部のN 8d8区を中心に位置している。北側には第92号建物跡が隣接している。

**確認状況** 表砂を約3.2m除去し、標高約3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と主に北西に並ぶ柱穴8か所、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑が確認された。

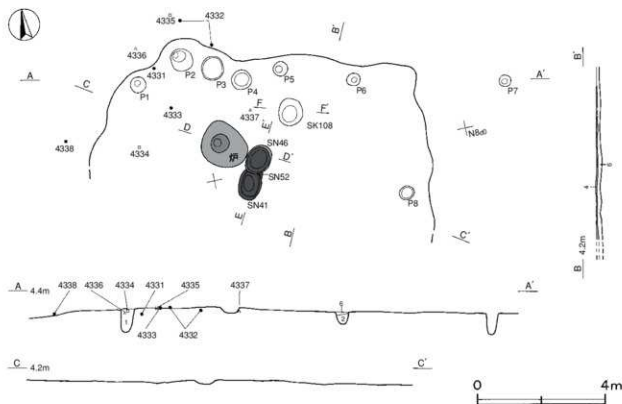
**規模と施設** 南部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、南北7.1m、東西10.7mが確認された。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑3基、土坑1基が構築されている。

**床** はほぼ平坦で、厚さ3~6cmの黒色土を貼り付けて構築されている。

**炉** (第471図) 中央部の黒色土面に位置し、第41・46号粘土貼土坑と併設されている。厚さ7~19cmの黒色土を貼り付けて構築され、覆土からは第8層の焼砂が検出されている。



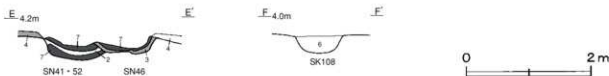
第471図 第89号建物跡炉土層図



第472図 第89号建物跡実測図

ピット 8か所。P1・P4・P6・P7は深さ17~73cmで、北西軸に並ぶ柱穴である。P2・P3・P5・P8は深さ35~85cmで、不規則なため性格不明である。北西軸に並ぶ柱穴と対応する柱穴は確認できなかった。

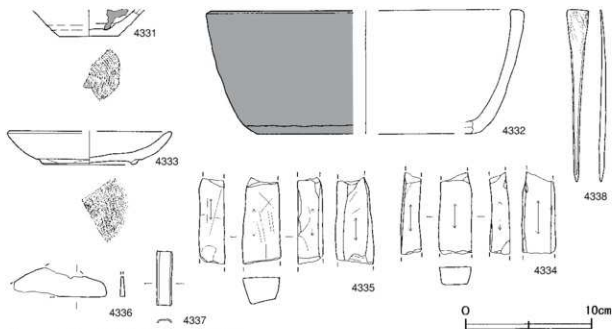
土坑 (第473図) 第41・46号粘土貼土坑は炉の東部、第108号土坑は黒色土面に位置している。第52号粘土貼土坑は、第41号粘土貼土坑の下層から確認されている。粘土貼土坑は、厚さ5~13cmの粘土を貼り付けて構築されている。土坑及び粘土貼土坑の覆土は、第2層の砂B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第473図 第89号建物跡土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片5点(皿2, 鍋3), 陶器片1点(皿), 石器3点(砥石), 金属製品4点(火打金1, 不明3), 骨角製品1(弁)が出土している。遺物は、中央部から北西部にかけて散在している。4331は北西部の黒色土下, 4332・4335・4336は北西部の砂層, 4333・4334は西部の黒色土面, 4337は中央部の黒色土下からそれぞれ出土している。

所見 南部が調査区域外に延びているため、全体を捉えることができなかった。黒色土面から、調理場とみられる炉と粘土貼土坑が確認され、火打金や内耳鍋などの生活道具が出土していることから建物跡と判断した。時期は、4333から17世紀前半と考えられる。



第474図 第89号建物跡出土遺物実測図

第89号建物跡出土遺物観察表 (第474図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4331	皿	土師質土器	-	(2.1)	[4.6]	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り 内面磨付着	北西部黒色土下	15%
4332	内耳鍋	土師質土器	[25.2]	9.8	[17.4]	長石・石英・赤色粘土	黒	普通	体部下端ヘラナデ 外面磨付着	北西部砂層	10%



番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	磁付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4333	丸皿	陶器	[12.8]	2.7	[7.0]	灰白・灰白	長石軸	付合 見込内ビシ組付有	瀬戸・美濃 17C前期	西部黒色土上面	25% 大塚4
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
4334	砥石	(6.4)	2.6	1.6	(46.2)	凝灰岩	砥面4面	断面四角形	西部黒色土上面		
4335	砥石	(6.9)	3.0	1.9	(67.6)	凝灰岩	砥面4面	砥面に擦痕有り	北西部砂層		
4336	火打金	(7.4)	(2.3)	0.4	(13.3)	鉄	山型	頂部・打撃部一部欠損	北西部砂層		
4337	不明	4.4	1.3	0.05	(2.8)	銅	両側面屈曲		中央部黒色土下		
4338	弁	13.7	1.7	0.5	5.0	骨	完存	やや湾曲 両面擦痕有り	西部砂層	PL70	

### 第90号建物跡 6区SB-7・HK-30 (第475~478図)

**位置** 調査区中央部のM8f8区を中心に位置している。南側には第86号建物跡が隣接している。

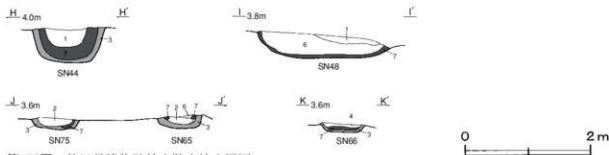
**確認状況** 表砂を約3.3m除去し、標高3.5~3.7mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑と北東に並ぶ柱穴8か所、さらに黒色土を除去して粘土貼土坑と主に北東に並ぶ柱穴31か所が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸9.3m、短軸5.8mの不定形で、長軸方向はN-56°-Eである。ピットの配列から、桁行4間、梁行1間の北東棟の建物に、桁行3間、梁行1間の北東棟の建物が取り付くように配されている。4間×1間の桁行方向はN-48°-E、規模は桁行8.7m、梁行4.6mで、面積は40.0㎡である。柱間寸法は桁行が不規則で、梁間が4.6mを基調としている。3間×1間の桁行方向はN-48°-E、規模は桁行6.9m、梁行3.3mで、面積は22.7㎡である。柱間寸法は桁行が2.0~2.5m、梁間が4.4mを基調としている。付属施設として、粘土貼土坑5基が確認されている。

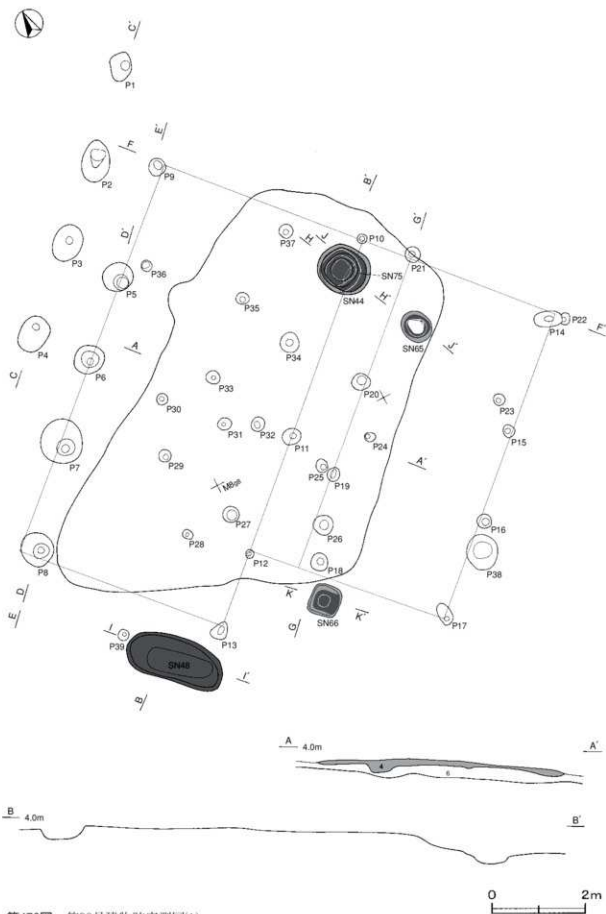
**床** はほぼ平坦で、厚さ4~14cmの黒色土を貼り付けて構築されている。締まりは強い。

**ピット** 39か所。黒色土面と同じ層位で確認されたP1~P8は、深さ58~76cmである。黒色土面の下層から確認されたP9~P39は、深さ18~43cmである。ピットの配列から、P1~P4は北東軸に並ぶ横列状の柱穴と考えられる。P5~P13は4間×1間の北東棟を支えた主柱穴、P27~P37・P39は間仕切り用の柱穴又は補助柱穴と考えられる。P14~P21は3間×1間の北東棟を支えた主柱穴、P22~P26・P38は間仕切り用の柱穴又は補助柱穴と考えられる。

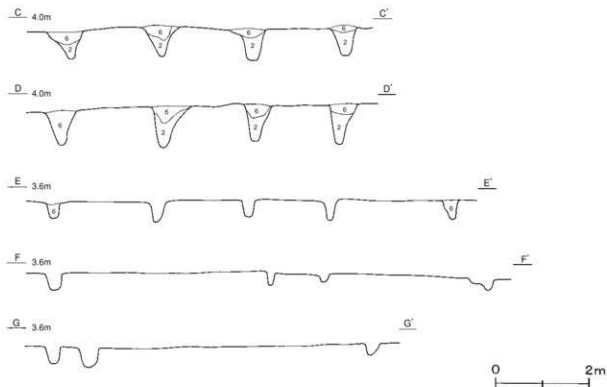
**土坑** (第475図) 第44号粘土貼土坑は黒色土面の北東部、第48号粘土貼土坑は南西部の砂層に位置している。黒色土面の下層からは、第65・75号粘土貼土坑が北東部、第66号粘土貼土坑が南部から確認されている。第48・65・66・75号粘土貼土坑は厚さ3~5cm、第44号粘土貼土坑は厚さ8~18cmの粘土を貼り付けて構築されている。第65号粘土貼土坑の底面には、長径40cm、短径30cm、厚さ8cmほどの平らな砂岩が埋設されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第4層の黒色土B層、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第475図 第90号建物跡粘土貼土坑土層図

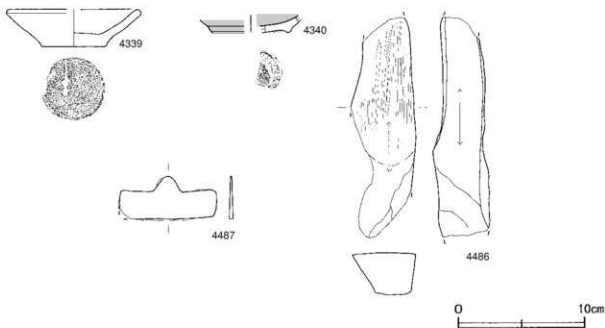


第476図 第90号建物跡実測図(1)



第477図 第90号建物跡実測図(2)

**遺物出土状況** 土師質土器片11点(小皿1, 皿6, 鍋4), 陶器片2点(皿), 石器1点(砥石), 金属製品4点(火打金1, 不明3)が出土している。4339は第48号粘土貼土坑内, 4340は第44号粘土貼土坑内から出土している。  
**所見** 桁行4間, 梁行1間の北東棟に, 桁行3間, 梁行1間の北東棟が取り付くような配置から, 曲屋と考えられる。主な生活の場は, 黑色土面と第44号粘土貼土坑の遺存していた4間×1間の北東棟と考えられる。時期は, 最初の遺構確認面から検出され, 第83号建物跡とはほぼ同じ層位であることから17世紀前半と考えられる。



第478図 第90号建物跡出土遺物実測図

第90号建物跡出土遺物観察表 (第478図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4339	皿	土師質土器 [10.0]	3.0	5.0	長石・雲母		橙	普通	底部回転成形	SN48内	30%

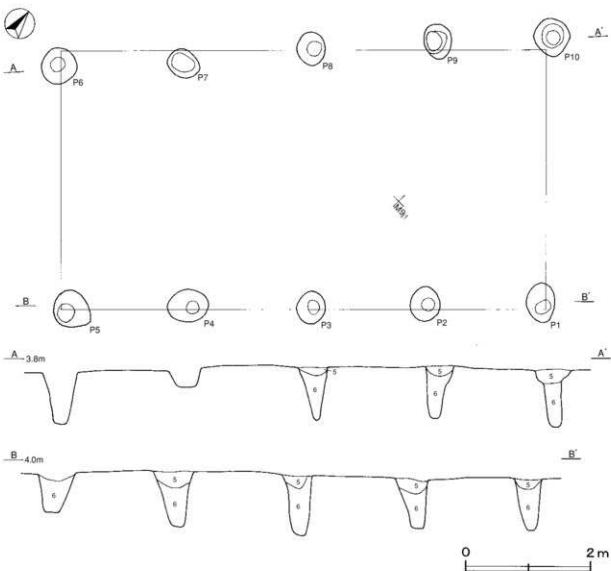
番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4340	丸皿	陶器	-	[1.4]	[6.0]	灰白・浅黄	灰釉	白・黒・赤・黄・緑・青・紫・赤・黒	瀬戸・美濃	SN44内	10% 大泉期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4486	砥石	(17.5)	5.1	4.4	(388.0)	凝灰岩	砥面2面 他は剥離面 砥面やや湾曲	覆土中	
4487	火打金	7.7	3.4	0.3	(32.7)	鉄	山梨 打撃部一部欠損	覆土中	PL94

第91号建物跡 6区SB-3 (第479図)

位置 調査区中央部のM8j0区を中心に位置している。東側には第83号建物跡が隣接している。

重複関係 第3号井戸跡の上面に構築されている。



第479図 第91号建物跡実測図

**確認状況** 表砂を約3.2m除去し、標高3.6～3.8mの黒色土D層を主体とする砂層から確認された。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行4間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-45°-E、規模は桁行7.7m、梁行4.1mで、面積は31.6㎡である。柱間寸法は桁行が2.0m、梁間が4.1mを基調としている。ビット 10か所。P1～P6・P8～P10は深さ63～98cm、P7は深さ32cmで北東棟を支えた支柱穴と考えられる。

**所見** 第83号建物跡とはほぼ同じ層位で、西部に並んでいることから、倉庫として機能していた可能性が高い。時期は、第83号建物跡と同時期の17世紀前半と考えられる。

#### 第92号建物跡 6区SB-4 (第480～482図)

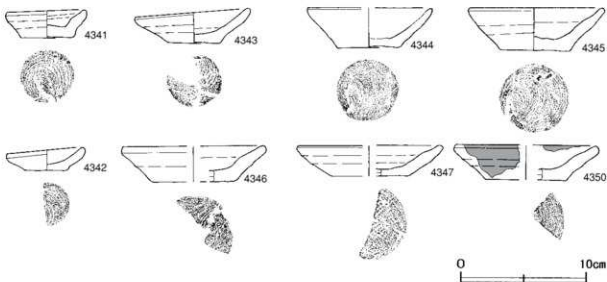
**位置** 調査区南部のN8b0区を中心に位置している。南側には第89号建物跡が隣接している。

**確認状況** 第98号整地面の西側を約0.2m掘り下げた標高3.6～3.8mで、黒色土D層を主体とする砂層から確認された。

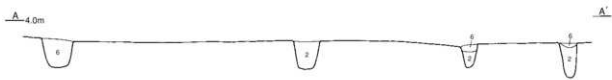
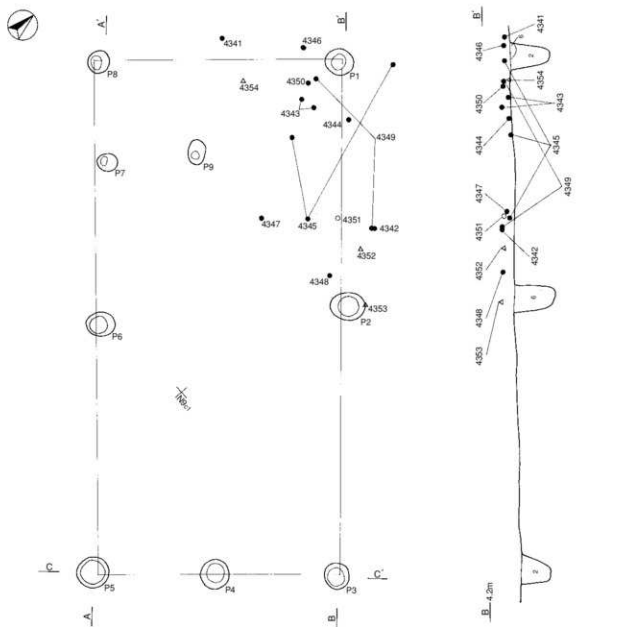
**規模と施設** ビットの配列から、桁行2間、梁行2間の北西棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-49°-W、規模は桁行8.2m、梁行3.8mで、面積は31.2㎡である。柱間寸法は桁行が4.0・4.2m、梁間が1.9mを基調としている。ビット 9か所。P1～P8は深さ37～66cmで、北東棟を支えた支柱穴と考えられる。P9は深さ33cmで、間仕切り用の柱穴と考えられる。

**遺物出土状況** 土師質土器片10点(小皿3、皿7)、土製品1点(土錘)、金属製品3点(小刀、耳金カ、古銭)が出土している。4341～4354はいずれも北部の砂層に散在している。

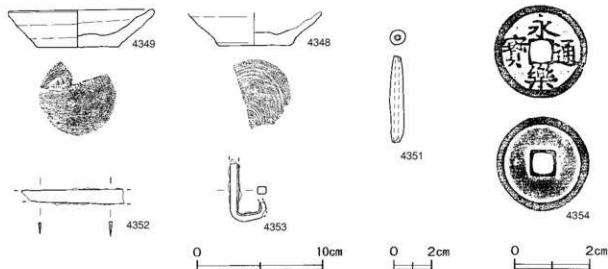
**所見** 桁行の柱間が約4mと長い。桁行2間、梁行2間の北西棟と考えられる。炉や粘土貼土坑などが認められないことや建物の構造から、作業小屋あるいは倉庫の可能性が高い。時期は、南側に隣接する第89号建物跡と同時期の17世紀前半と考えられる。



第480図 第92号建物跡出土遺物実測図(1)



第481图 第92号建物跡実測图



第482図 第92号建物跡出土遺物実測図(2)

第92号建物跡出土遺物観察表 (第480・482図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4341	小皿	土師質土器	6.2	2.3	4.2	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	北部砂層	95% PL.73
4342	小皿	土師質土器	6.1	1.8	3.4	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	北部砂層	50%
4343	小皿	土師質土器	9.0	2.8	4.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	北部砂層	50% PL.74
4344	小皿	土師質土器	[9.8]	3.3	5.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	北部砂層	75% PL.74
4345	皿	土師質土器	10.3	3.5	5.6	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面渦巻き状のナデ	北部砂層	90% PL.77
4346	皿	土師質土器	[11.2]	2.8	[6.4]	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	北部砂層	40% PL.77
4347	皿	土師質土器	[11.0]	2.5	[6.0]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り後スノコ状の圧痕	北部砂層	20%
4348	皿	土師質土器	-	(2.7)	5.6	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	北部砂層	20%
4349	皿	土師質土器	11.4	2.5	6.4	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面渦巻き状のナデ	北部砂層	55% PL.77
4350	皿	土師質土器	[11.0]	2.3	[6.4]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り 内・外面煤付着	北部砂層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特 徴	出土位置	備考
4351	管状土鉢	4.6	0.8	0.8	2.4	長石・雲母	定形 孔径0.3cm 外面ナデ	北部砂層	
4352	小刀	(8.2)	(1.2)	0.1~0.2	(8.4)	鉄	刃部の破片	北部砂層	
4353	耳金	(4.6)	0.7	0.6	(12.1)	鉄	断面長方形 両端部欠損	北部砂層	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初周年	材質	特 徴	出土位置	備考
4354	永樂通寶	2.49	0.59	0.10	3.20	1408	銅	真書	北部砂層	

### 第93号建物跡 6区S B-8 (第483図)

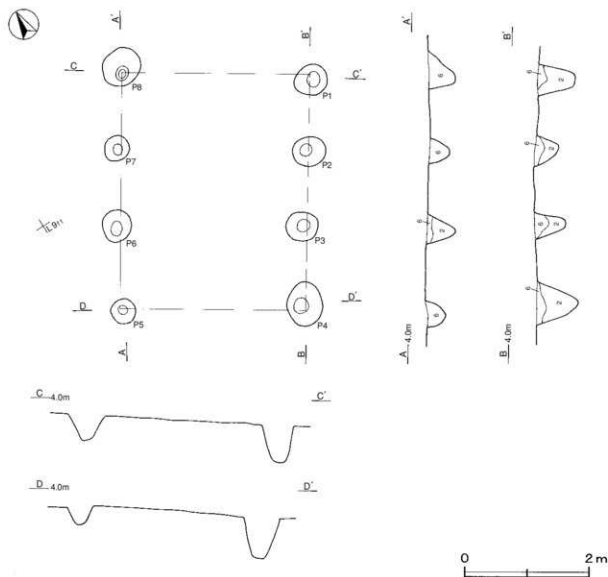
**位置** 調査区北部のL9f1区を中心に位置している。北西側には第96号建物跡が隣接している。

**確認状況** 第17号不明遺構を約0.2m掘り下げた、標高約3.6mの砂層から確認された。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-34°-E.、規模は桁行3.8m、梁行3.0mで、面積は11.4㎡である。柱間寸法は桁行が1.2m、梁間が3.0mを基調としている。

**ビット** 8か所。深さ32~67cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。

**所見** 桁行3間、梁行1間の北東棟と考えられ、小規模な作業小屋あるいは倉庫の可能性が高い。時期は、最終遺構確認面から検出されていることから、周囲の遺構と同時期の16世紀後半と考えられる。



第483図 第93号建物跡実測図

#### 第94号建物跡 6区P g-11北部 (第484・485図)

**位置** 調査区北部のL 8 i 9区を中心に位置している。南側には第95号建物跡が隣接している。

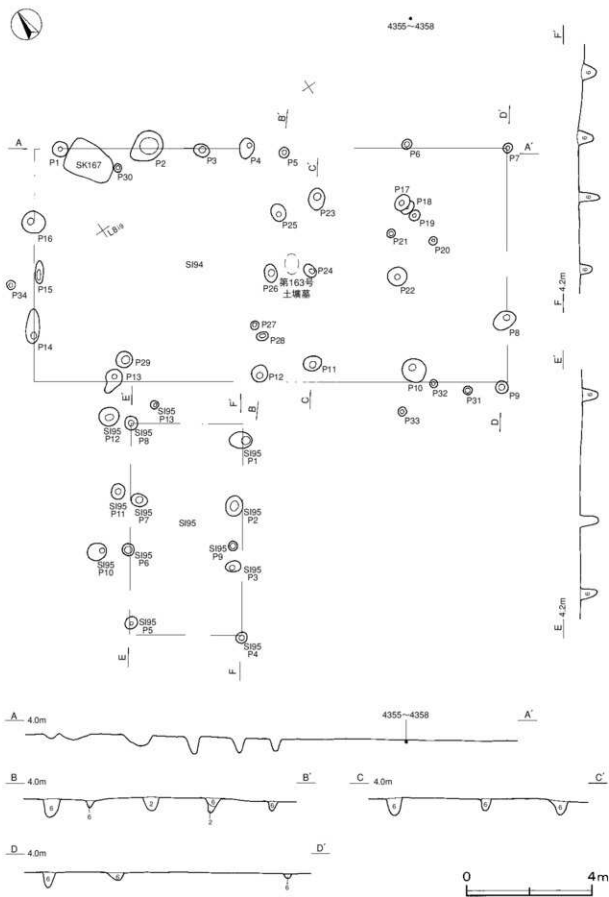
**重複関係** 上面に第2・3号畝状遺構が構築されている。

**確認状況** 第2・3号畝状遺構を約0.2m掘り下げた、標高約3.6mの砂層から確認された。また、同じ砂層面から第167号土坑と第163号土壇墓が確認されている。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行4間、梁行2間と想定される北西棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-56°-W、規模は桁行15.1m、梁行7.3mで、面積は110.2㎡である。柱間寸法は桁行が2.5~4.0mと不均一で、梁間是不規則である。

**ビット** 34か所。P 1~P 16は深さ15~58cmで、北西棟を支えた主柱穴及び柱穴と考えられる。P 17~P 30は深さ14~66cmで、間仕切り用の柱穴又は補助柱穴と考えられる。P 31~P 34は深さ26~41cmで、性格は不明である。

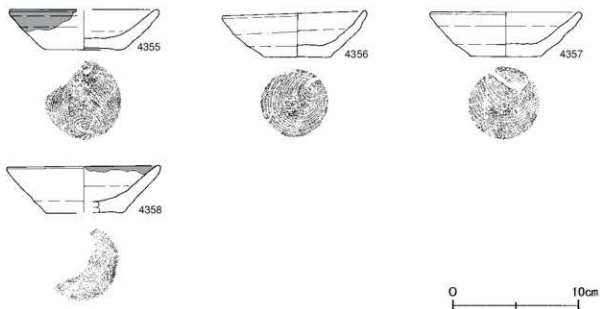




第484图 第94·95号建物迹実测图

**遺物出土状況** 土師質土器4点(皿)が北東部の砂層から出土している。

**所見** 黑色土面を除去した後に確認された柱穴である。柱穴の配列から、桁行4間、梁行2間の北西棟と想定した。本跡は母屋、隣接する第95号建物跡は倉庫的な建物の可能性が高い。時期は、最終遺構確認面から検出されていることから、周囲の遺構と同時期の16世紀後半と考えられる。



第485図 第94号建物跡出土遺物実測図

第94号建物跡出土遺物観察表 (第485図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4355	皿	土師質土器	[11.6]	3.2	6.2	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外面塚付着	北東部砂層	75% PL.78
4356	皿	土師質土器	11.0	3.7	5.4	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	北東部砂層	75% PL.76
4357	皿	土師質土器	11.6	3.6	5.6	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	北東部砂層	70% PL.78
4358	皿	土師質土器	12.1	3.8	6.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 内面塚付着	北東部砂層	50% PL.78

#### 第95号建物跡 6区Pg-11南部 (第484図)

**位置** 調査区中央部のM8a8区を中心に位置している。北側には第94号建物跡が隣接している。

**重複関係** 上面に第3号畝状遺構が構築されている。

**確認状況** 第3号畝状遺構を約0.1m掘り下げた、標高約3.7mの砂層から確認された。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-36°-E、規模は桁行6.7m、梁行3.6mで、面積は24.1㎡である。柱間寸法は桁行が不規則で、梁間が3.6mを基調としている。

**ビット** 13か所。P1～P8は深さ41～68cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。P9～P13は深さ41～72cmで、主柱穴付近に位置していることから補助柱穴と考えられる。

**所見** 柱穴の配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟と考えられる。北東部に隣接している第94号建物跡に付随する倉庫的な建物の可能性が高い。時期は、最終遺構確認面から検出されていることから、周囲の遺構と同時期の16世紀後半と考えられる。

**第96号建物跡** 6区S B-9 (第486図)

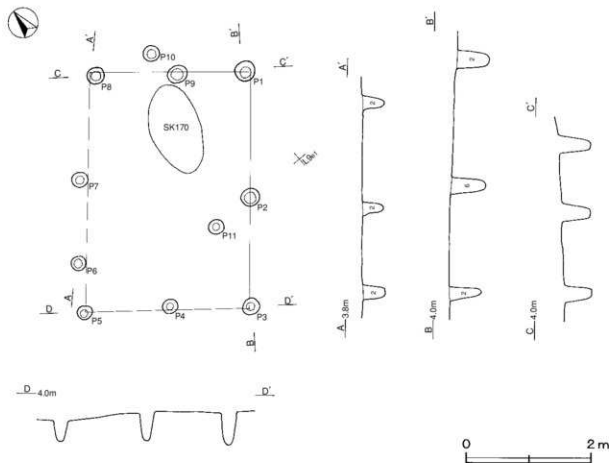
**位置** 調査区北部のL 8d0区を中心に位置している。南西側には第93号建物跡が隣接している。

**重複関係** 上面に第100号整地面が構築され、第170号土坑に掘り込まれている。

**確認状況** 第100号整地面を約0.1m掘り下げた、標高約3.6mの砂層から確認された。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行2間、梁行2間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-40°-E。規模は桁行3.8m、梁行2.6mで、面積は9.9㎡である。柱間寸法は桁行が1.6~2.2m、梁間が1.3mを基調としている。ビット 11か所。P 1~P 9は深さ33~56cmで、北東棟を支えた主柱穴及び柱穴と考えられる。P 10・P 11は深さ53・52cmで、性格は不明である。

**所見** 小規模な建物跡で、何らかの作業小屋あるいは倉庫の可能性が高い。時期は、最終遺構確認面から検出され、第100号整地面の下層から確認されていることから、16世紀後半と考えられる。



第486図 第96号建物跡実測図

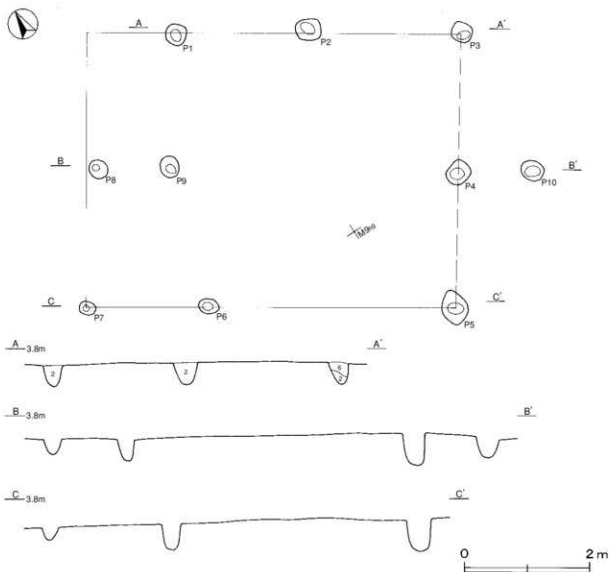
**第97号建物跡** 6区P g-8 (第487図)

**位置** 調査区中央部のM 9 g8区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.4m除去し、標高約3.6mの砂層から確認された。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行3間、梁行2間の北西棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-56°-W、規模は桁行5.9m、梁行4.4mで、面積は26.0㎡である。柱間寸法は桁行が不規則で、梁間が2.2mを基調としている。  
**ビット** 10か所。P1～P8は深さ20～52cmで、北西棟を支えた主柱穴と考えられる。P9・P10は深さ36・30cmで、間仕切り用の柱穴又は補助柱穴と考えられる。

**所見** 小規模な作業小屋あるいは倉庫の可能性が高い。時期は、最終遺構認面から検出されていることから、周囲の遺構と同時期の16世紀後半と考えられる。



第487図 第97号建物跡実測図

**第98号建物跡** 8b区Pg-3 (第488図)

**位置** 調査区北部のK9j8区を中心に位置している。東側には第14号ビット群が隣接している。

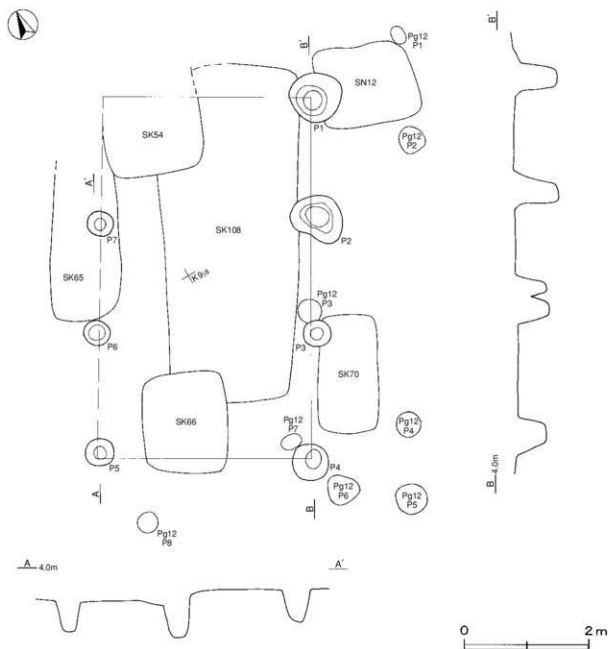
**重複関係** 第65・70・108号土坑、第12号粘土貼土坑、第12号ビット群を掘り込み、第54・66号土坑と重複している。

**確認状況** 第85号整地地面を約0.4m掘り下げた標高3.7~3.9mの砂層から確認された。

**規模と施設** ビットの配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟の建物跡が確認された。桁行方向はN-32°-E、規模は桁行5.8m、梁行3.4mで、面積は19.7㎡である。柱間寸法は桁行が1.8~2.0m、梁間が3.4mを基調としている。

**ビット** 7か所。深さ49~77cmで、北東棟を支えた主柱穴と考えられる。P1と対応する梁行の柱穴は、砂層が崩れてしまったため確認できなかった。

**所見** 柱穴の配列から、桁行3間、梁行1間の北東棟と考えられる。時期は、第85号整地地面の下層から検出されていることから、それより若干古い16世紀後半と考えられる。



第488図 第98号建物跡実測図

表44 5・6・8b区建物跡一覧表

番号	旧遺構番号	位置	種類・種類	黒色土			形状	厚さ (cm)	建 物 跡										付属施設	ビ ット	備考 新旧関係 旧→新
				標高 (m)	東西 最大幅 (m)	南北 最大幅 (m)			長軸方向	柱間 数	規模 幅×趾 (m)	面積 (㎡)	棟向	桁行 柱間 (m)	梁行 柱間 (m)						
74	8b区 S11・ HK4	L9c7	-	40-41	南北 (22.0)	東西 (16.5)	-	10-14	3-5-E	3×1	5.8×2.7	15.7	北東棟	1.6-2.0	2.7	併: S11, S29, 30-32	6	71-76a跡			
75	8b区 HK1	L8a0	3-3-F	16-41	(10.9)	7.7	[不定形]	4-12	3-3-E	2×1	4.0×3.3	13.2	北東棟	2.0	3.3	S11・2・7, SK3(6・9・17・19・20・21・24)	38	S11→2層1F-10a跡, 71-72跡			
76	8b区 HK12	L9b8	3-3-F	15-19	(14.9)	10.6	[不定形]	11-22	3-3-E	3×1	3.2×2.8	14.6	北東棟	1.2-2.1	2.9	併: 2, S13-15, SK30-34	63	71-76, 72a-73a跡, 71-72a-73a跡			
77	6区 S11・ SD1	M9c9	3-7-F	13-38	14.4	11.2	不定形	3-18	3-3-E	3×1	6.6×4.1	27.1	北東棟	2.1-2.5	4.1	併: S13-15, SK10-16, 10, 12, 13, 14, 15	14	4層→S110-S111, 3層1F-11a跡, 4層1F→3層1F跡			
78	6区 HK6・ 7	L10i1	3-2-E	13-44	14.1	6.8	不定形	6-12	-	-	-	-	-	-	-	併: 2・1A・1B, S11・2, SK3-5	-	-			
79	6区 HK10	L9j8	3-3-F	13-41	17.7	12.2	不定形	6-10	-	-	-	-	-	-	-	併: 2, S13-14, SK10-19, 20, 23-25	8	3層→4層, 3層→4層, 71-72跡			
80	6区 HK12	L10k3	3-3-F	4.0	(6.3)	2.6	[不明]	3-8	3-3-E	2×1	4.1×1.8	7.4	北東棟	1.8-2.3	1.8	-	6	3層→4層, 71-72跡			
81	6区 HK13	L9g6	3-3-F	16-28	16.9	12.5	不定形	10-20	3-3-E	4×2	8.2×3.2	26.2	北東棟	1.8	1.5	併: 1, S11, SK21-20, 72, SK3	35	4層→5層, 4層跡1F-71跡, 4層跡1F→2層跡			
82	6区 HK16	M10j3	3-3-F	12-46	11.2	7.4	不定形	6-20	-	-	-	-	-	-	-	併: 1・2・3, S13-18, SK3-20, 21-24, SK7	16	71-72跡			
83	6区 SB1・ HK18	M9j3	3-3-F	4.0	13.2	10.4	不定形	8-12	3-3-E	3×2	6.5×4.8	31.9	北西棟	1.3-2.0	2.4-2.5	併: S12, SK2, SK5	9	71-72跡, 71-72跡			
84	6区 HK19	N9g3	3-3-F	19-41	8.7	4.5	不定形	3-20	-	-	-	-	-	-	-	併: 2, S13, SK1-3	2	-			
85	6区 SB9・ HK19	N8a8	3-3-E	18-40	13.8	4.7	不定形	4-14	-	-	-	-	-	-	-	併: 7, SK6-10	14	71-72跡, 76-76a跡			
86	6区 SB5・ HK22	M8i6	3-3-E	16-38	11.2	5.7	不定形	6-14	3-3-E	4×1	10.2×5.0	51.0	北東棟	不明	5.0	SK2-3, 5, SK4・11・13	41	71-72跡, 71-72跡			
87	6区 SB2・ HK24	M9i4	3-3-F	3.8	14.8	12.2	不定形	6-11	3-3-E	3×1	6.1×3.8	23.2	北東棟	1.9-2.1	3.8	併: S13, 72, 73, SK2-3	8	71-72跡			
88	6区 HK28	M9a3	3-3-F	16-38	18.1	14.5	不定形	4-28	-	-	-	-	-	-	-	併: 2, S13-31, 32-35, SK6-8, 9-9', 10	15	-			
89	6区 HK29	N8d8	-	3.8	南北 (7.1)	東西 (10.7)	-	3-6	-	-	-	-	-	-	-	併: S11, 16-18, SK3	8	-			
90	6区 SB7・ HK30	M8f8	3-3-E	15-37	9.3	5.8	不定形	4-14	3-3-E	4×1	8.7×4.6	40.0	北東棟	不明	4.6	併: 8, 9, 10, 11	30	併→3層1F-71跡, 併→3層1F-71跡, 併→3層1F-71跡			
91	6区 SB3	M8j0	-	16-38	-	-	-	3-6	3-3-E	4×1	7.7×4.1	31.6	北東棟	2.0	4.1	-	10	71-72跡			
92	6区 SB4	N8b0	-	16-38	-	-	-	3-6	3-3-E	2×2	8.2×3.8	31.2	北西棟	1.0-1.2	1.9	-	9	71-72跡, 併			
93	6区 SB8	L9f1	-	3.6	-	-	-	3-6	3-3-E	3×1	3.8×3.0	11.4	北東棟	1.2	3.0	-	8	71-72跡			
94	6区 Pg11 北部	L8i9	-	3.6	-	-	-	3-6	3-3-F	[8×2]	15.1×7.3	110.2	北西棟	2.5-4.0	不明	-	34	71-72跡, 併			
95	6区 Pg11 南部	M8a8	-	3.7	-	-	-	3-6	3-3-E	3×1	6.7×3.6	24.1	北東棟	不明	3.6	-	13	71-72跡			
96	6区 SB-9	L8e0	-	3.6	-	-	-	3-6	3-3-E	2×2	3.8×2.6	9.9	北東棟	1.6-2.0	1.3	-	11	併→3層1F-71跡, 併			
97	6区 Pg8	M9b9	-	3.6	-	-	-	3-6	3-3-F	3×2	5.9×4.4	26.0	北西棟	不明	2.2	-	10	71-72跡			
98	8b区 pg3	K9j8	-	17-39	-	-	-	3-6	3-3-E	3×1	3.8×3.4	19.7	北東棟	1.8-2.0	3.4	-	7	SK6-7, 併, SK10, 併→3層1F-71跡			

表45 5・6・8b区建物跡竈・炉一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
SI74	炉	L 9 e7	3.8	-	1.1	1.1	15	円形	10-15	-	縦斜	平坦		(8b区 SK 28)
	炉1	L 9 a8	3.8	N-29°-E	1.4	1.1	12	隅丸長方形	8-18	-	縦斜	皿状		(8b区 SK 85)
SI76	炉2	L 9 a9	3.8	N-73°-E	0.9	0.7	11	楕円形	4-7	-	縦斜	皿状		(8b区 SK 89)
	炉	M 9 f9	3.6	-	1.0	1.0	20	不整形方形	5-7	-	縦斜	平坦		(6区 SK 131)
SI78	炉1	L 10 j1	4.5	N-2°-W	2.1	1.4	8	不整形円形	2-10	-	縦斜	平坦		(6区 SK 1)
	炉2	L 10 i2	4.2	N-50°-W	[1.5]	1.0	12	[隅丸長方形]	4-8	-	縦斜	平坦		炉3B→本跡 (6区 SK 10)
	炉3A	L 9 i0	4.2	N-55°-W	1.2	1.0	8	不整形円形	5-9	-	縦斜	平坦		本跡→炉3A (6区 SK 2A)
	炉3B	L 9 i0	4.0	-	[1.1]	[1.0]	5	[不整形円形]	4-8	-	縦斜	平坦		(6区 SK 2B)
SI79	炉1	L 9 i9	3.7	N-60°-W	0.8	0.7	17	不整形長方形	2-8	-	縦斜	皿状		(6区 SK 14)
	炉2	L 9 h9	3.4	N-73°-E	1.0	0.9	8	不整形長方形	2-8	-	縦斜	皿状		(6区 SK 16)
SI81	炉1	L 9 g6	3.7	N-49°-E	2.3	1.6	18	不整形円形	5-18	-	縦斜	皿状	土師質土器(皿)	(6区 SK 23)
	炉2	L 9 g6	3.7	N-42°-E	0.9	0.8	13	長方形	4-10	-	縦斜	皿状		(6区 SK 28)
SI82	炉1	M 10 d4	4.6	-	1.0	1.0	12	方形	3-5	-	縦斜	平坦		(6区 SK 21)
	炉2	M 10 c1	4.2	-	1.2	1.1	12	方形	3-5	-	縦斜	皿状		(6区 SK 20)
	炉3	M 10 d3	4.3	N-59°-W	1.1	0.9	10	不定形	4-12	-	縦斜	皿状		(6区 SK 39)
SI83	竈	M 9 i3	4.1	N-44°-E	1.7	1.4	18	隅丸長方形	4	-	縦斜	平坦		(6区 SN 15)
	炉1	M 9 j3	4.1	N-22°-W	1.2	1.0	18	楕円形	-	-	縦斜	平坦		(6区 SK 99)
	炉2	M 9 i2	3.8	N-40°-W	0.9	0.8	15	隅丸長方形	2-4	-	縦斜	平坦		(6区 SK 63)
	炉1	N 9 f2	3.7	N-41°-E	1.0	0.8	7	不整形円形	5-11	-	縦斜	皿状		(6区 SK 30)
SI84	炉2	N 9 f2	3.7	N-39°-W	1.4	(0.6)	5	[楕円形]	4-10	-	縦斜	皿状		(6区 SK 32)
	炉	M 9 e4	3.7	-	1.5	1.4	8	隅丸長方形	3-9	-	縦斜	平坦		(6区 SK 65)
SI88	炉1	L 9 j4	3.6	N-42°-W	1.3	0.9	6	不定形	3-5	-	縦斜	皿状		(6区 SK 82)
	炉2	M 9 b3	3.3	N-9°-E	1.3	1.1	19	隅丸長方形	4-10	-	縦斜	皿状		(6区 SK 96)
SI89	炉	N 8 e8	3.8	N-54°-W	1.5	1.3	8	楕円形	7-19	-	縦斜	皿状		(6区 SK 104)

表46 5・6・8b区建物跡粘土貼土坑一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
SI74	SN 4	L 9 e7	3.8	-	1.0	1.0	18	円形	10-12	14	縦斜	平坦		
	SN 1	L 8 a0	3.9	N-25°-W	0.8	(0.4)	-	[楕円形]	6-14	8	-	-		
SI75	SN 2	L 8 a0	3.9	N-25°-W	0.9	(0.8)	18	[楕円形]	-	2	縦斜	平坦		
	SN 7	K 8 j8	3.5	-	0.9	0.9	7	方形	4-8	3	縦斜	皿状		
	SN 13	L 9 a9	3.8	N-62°-W	0.8	0.7	9	円形	3-5	6-16	縦斜	皿状		
SI76	SN 14	L 9 c7	3.5	N-57°-W	1.0	0.8	8	楕円形	3-8	3-6	縦斜	平坦		
	SN 15	L 9 d7	3.5	N-31°-W	0.9	0.8	21	楕円形	5-12	4-7	縦斜	平坦		
	SN 23	M 9 c0	3.6	-	0.9	0.9	18	隅丸長方形	4-10	7-17	縦斜	皿状		
SI77	SN 55	M 9 d7	3.3	-	1.1	1.0	44	方形	5-10	3-7	外傾	平坦		
	SN 56	M 9 e7	3.5	N-40°-E	1.6	1.4	48	楕円形	3-11	4-8	外傾	平坦		
SI78	SN 1	L 10 i3	4.5	N-18°-E	0.7	0.6	28	楕円形	1-2	3-10	縦斜	平坦		
	SN 2	L 9 i0	4.1	N-37°-E	1.0	0.7	34	楕円形	1-2	3-7	外傾	平坦		
	SN 5	L 9 h9	3.5	-	0.7	0.7	28	円形	-	10-19	縦斜	皿状		
SI79	SN 8	L 9 h0	3.7	N-23°-E	0.9	0.7	24	隅丸長方形	5-8	4-12	縦斜	皿状		
	SN 13	M 9 a9	3.5	-	0.8	(0.5)	42	[円形]	-	7-13	縦斜	皿状		本跡→SK17
SI81	SN 11	L 9 g6	3.6	N-21°-E	0.8	[0.7]	28	[不整形円形]	2-4	2-5	縦斜	平坦		
	SN 9	M 10 d4	4.6	N-40°-E	1.0	0.8	26	長方形	3-5	3-5	縦斜	平坦		
SI82	SN 10	M 10 e2	4.3	N-56°-W	2.3	1.2	46	長方形	2-6	3-7	外傾	平坦	古銭	
	SN 19	M 10 c3	4.4	N-52°-W	1.4	1.2	22	楕円形	3-6	4-11	縦斜	皿状		
SI83	SN 12	M 9 i2	4.0	-	1.1	1.1	35	円形	-	2-8	縦斜	皿状		
	SN 18	M 9 j4	3.8	-	0.9	(0.7)	24	[円形]	-	6-10	縦斜	皿状		
	SN 29	M 9 i2	3.8	-	0.8	0.8	18	隅丸長方形	-	4-6	縦斜	平坦		
SI84	SN 16	N 9 f3	3.9	N-40°-E	0.8	0.6	22	不定形	-	3-6	縦斜	平坦	土師質土器(小皿)古銭	
	SN 17	N 9 g3	3.7	N-43°-E	1.8	1.2	42	不整形長方形	3-8	6-13	縦斜	皿状		
	SN 71	N 9 i3	3.6	N-38°-E	(1.0)	(0.8)	38	[長方形]	6-19	2-12	縦斜	凸凹		

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			概	形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径)(m)	短軸(径)(m)	深さ(cm)								
SI85	SN 40	M 8 i 7	3.7	N-41°-W	2.5	1.6	58	隅丸長方形	3-6	3-9	傾斜	平坦			
	SN 42	M 8 i 5	3.6	-	0.7	0.7	-	方形	5	2-4	-	-			
SI86	SN 49	N 8 a 5	3.6	-	0.8	0.8	13	円形	-	4-7	傾斜	皿状			
	SN 50	M 8 i 5	3.6	N-48°-E	1.6	1.0	8	不整形円形	6	6-14	傾斜	皿状			
SI87	SN 38	M 9 i 3	3.4	-	(0.9)	(0.8)	-	[方形]	3-15	7-11	傾斜	平坦			
	SN 72	M 9 e 5	3.8	-	1.2	1.1	38	円形	6	7-8	外傾	平坦			
	SN 74	M 9 f 6	3.8	-	1.5	1.4	60	隅丸長方形	3	3-9	外傾	平坦	土師質土器(皿)破片	(6区SK59)	
	SN 30	M 9 a 5	3.6	N-35°-E	1.3	0.8	9	不整形長方形	4-9	3-6	傾斜	平坦		本跡→SK64	
SI88	SN 31	M 9 a 5	3.6	N-53°-E	0.7	0.6	-	楕円形	-	5	傾斜	皿状			
	SN 33	L 9 i 3	3.7	N-28°-E	(1.3)	0.9	16	溝状方形	2-4	3	傾斜	平坦			
	SN 34	M 9 b 2	3.6	N-50°-W	(1.0)	1.0	20	[楕円形]	3-6	4	外傾	平坦			
	SN 35	M 9 a 2	3.7	N-31°-E	2.1	1.4	60	長方形	5	4	傾斜	平坦			
	SN 37	L 9 i 4	3.5	-	1.1	1.1	22	円形	6-12	5-11	傾斜	皿状			
SI89	SN 41	N 8 d 8	3.8	N-15°-E	(0.8)	0.7	12	[楕円形]	-	5-9	傾斜	皿状		本跡→SN46	
	SN 46	N 8 c 8	3.8	N-30°-E	0.9	0.8	19	楕円形	3-7	5-8	傾斜	皿状		SN41・52→本跡	
	SN 52	N 8 d 8	3.7	N-30°-E	1.0	0.5	6	隅丸長方形	-	9-13	傾斜	皿状		本跡→SN64	
SI90	SN 44	M 8 f 9	3.8	N-24°-W	1.2	1.0	30	楕円形	6-12	8-18	外傾	平坦	陶器(皿)		
	SN 48	M 8 g 7	3.5	N-44°-W	2.1	1.0	34	楕円形	-	4	傾斜	平坦	土師質土器(皿)		
	SN 65	M 8 f 9	3.4	N-26°-W	0.7	0.6	10	楕円形	9	3	外傾	皿状			
	SN 66	M 8 g 8	3.3	-	0.7	0.7	5	方形	2-6	5	傾斜	平坦			
	SN 75	M 8 f 9	3.4	-	0.8	0.8	12	隅丸方形	5-8	4	外傾	平坦		(6区SK151)	

表47 5・6・8b区建物跡土坑一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			概	形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径)(m)	短軸(径)(m)	深さ(cm)								
SI74	SK 29	L 9 d 5	3.9	N-50°-E	1.3	0.9	8	楕円形	-	-	傾斜	平坦			
	SK 30	L 9 d 5	4.0	N-53°-E	3.2	2.1	34	楕円形	-	-	傾斜	皿状			
	SK 53	L 9 e 4	3.8	N-26°-E	1.4	1.0	21	楕円形	-	-	傾斜	皿状	土師質土器(黒-地器)		
	SK 5	L 8 a 9	3.8	-	0.5	0.5	50	円形	-	-	外傾	皿状			
	SK 6	L 8 a 9	3.8	-	0.6	0.6	44	円形	-	-	傾斜	皿状	砥石		
	SK 9	K 8 j 9	4.0	-	0.5	0.5	46	円形	-	-	外傾	皿状			
	SK 17	K 8 j 9	3.9	-	0.6	0.6	6	円形	-	-	傾斜	平坦			
SI75	SK 18	K 8 j 8	3.9	N-50°-W	1.4	1.1	14	楕円形	-	-	傾斜	平坦			
	SK 19	K 8 i 9	3.9	N-84°-W	(1.0)	(0.3)	12	[楕円形]	-	-	傾斜	皿状			
	SK 23	K 8 j 8	3.8	-	0.9	0.9	14	方形	-	-	傾斜	平坦		本跡→SK24	
	SK 24	K 8 j 8	3.8	N-86°-W	0.9	0.7	36	不整形円形	-	-	傾斜	皿状		SK23→本跡	
	SK 32	L 8 a 0	3.5	N-39°-W	1.4	(0.9)	14	[長方形]	-	-	傾斜	平坦		本跡→SK33	
SI76	SK 33	L 8 a 0	3.5	N-40°-W	1.1	0.9	26	不整形長方形	-	-	傾斜	平坦		SK32→本跡	
	SK 34	K 8 j 1	3.4	N-56°-W	2.4	1.2	24	長方形	-	-	傾斜	平坦			
	SK 80	L 9 a 7	3.7	N-49°-W	1.8	1.0	28	長方形	-	-	外傾	平坦			
	SK 81	L 9 b 7	3.7	N-20°-W	1.0	0.9	4	円形	-	-	傾斜	平坦			
	SK 82	L 9 e 6	3.5	N-13°-E	0.6	0.4	46	楕円形	-	-	傾斜	皿状		SK83→本跡	
	SK 83	L 9 e 7	3.5	N-60°-W	0.8	0.4	13	楕円形	-	-	外傾	平坦		本跡→SK82	
	SK 84	L 9 e 6	3.5	-	0.5	0.5	45	円形	-	-	外傾	平坦	不明土製品		
	SK 86	L 9 d 6	3.6	-	0.4	0.4	24	円形	-	-	傾斜	皿状			
	SK 130	M 9 b 9	3.5	N-35°-W	0.9	0.7	10	長方形	3-4	-	傾斜	平坦			
	SK 141	M 9 e 9	3.3	N-77°-W	1.1	0.8	26	楕円形	-	-	傾斜	平坦			
SI77	SK 143	M 9 e 7	3.5	N-30°-E	1.0	0.8	6	長方形	2-4	-	傾斜	皿状	土師質土器(皿)		
	SK 3	L 10 g 1	4.1	N-30°-W	1.0	0.9	28	楕円形	-	-	傾斜	皿状			
SI78	SK 5	L 9 f 0	3.7	N-58°-E	0.7	0.6	14	隅丸長方形	2-6	-	傾斜	平坦			
	SK 17	M 9 a 9	3.8	N-0°	2.6	1.8	46	不定形	8-17	-	外傾	平坦		SN13→本跡	
	SK 18	L 9 b 9	3.7	N-20°-E	1.5	1.2	13	楕円形	4-13	-	傾斜	皿状			
SI79	SK 19	M 9 a 8	3.8	N-45°-W	1.6	1.3	34	不整形円形	2-17	-	外傾	皿状			
	SK 29	L 9 j 6	3.5	-	0.9	0.9	43	円形	-	-	傾斜	皿状			
	SK 33	L 9 j 7	3.3	-	1.2	1.2	40	隅丸方形	3-11	-	外傾	平坦			
	SK 34	M 9 a 8	3.6	N-54°-W	1.4	1.2	43	不整形円形	4-26	-	傾斜	皿状			
	SK 35	M 9 a 6	3.4	-	1.3	1.2	18	不整形円形	6-17	-	傾斜	皿状			



番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
SI81	SK 24	L 9 h5	3.5	N-60°-W	3.2	1.9	18	不整形円形	-	-	緩斜	平坦	土層質土器(小皿)	SK72→本跡
	SK 70	L 9 g6	3.3	N-39°-W	2.2	1.0	20	長方形	-	-	外傾	平坦		
	SK 72	L 9 h5	3.3	N-60°-W	1.1	0.8	20	長方形	3-5	-	外傾	平坦		本跡→SK24
SI82	SK 37	M10c2	4.2	N-65°-W	2.4	1.3	64	隅丸長方形	-	-	外傾	平坦		
	SK 38	M10c3	4.4	N-78°-W	0.9	0.7	22	楕円形	-	-	緩斜	平坦		本跡→SM74
	SK 40	M10e4	4.4	N-42°-E	1.5	1.0	36	楕円形	-	-	緩斜	平坦		
	SK 42	M10c3	4.2	N-27°-E	1.7	1.2	30	長方形	-	-	緩斜	平坦		SK43→本跡
SI83	SK 43	M10c3	4.2	N-32°-E	0.9	(0.6)	20	[長方形]	-	-	緩斜	平坦		本跡→SK42
	SK 27	M9 j3	4.1	-	1.1	1.1	19	円形	-	-	緩斜	皿状		
SI84	SK 31	N 9 f3	3.9	-	0.8	0.8	30	隅丸方形	-	-	緩斜	皿状		
	SK 36	N 9 g2	3.9	-	0.6	0.6	16	不整形方形	5-10	-	緩斜	皿状		
	SK 80	N 9 i3	3.6	N-62°-E	0.8	0.7	16	長方形	6-8	-	緩斜	皿状		
	SK101	N 9 g4	3.7	N-15°-W	0.9	0.8	12	楕円形	5-20	-	緩斜	平坦		
	SK 41	M 8 i5	3.8	-	0.9	0.9	14	隅丸方形	4-8	-	緩斜	平坦		
SI86	SK113	M 8 j5	3.6	-	1.1	1.0	8	楕円形	4-8	-	緩斜	皿状		
	SK114	M 8 j6	3.6	-	1.1	1.0	36	円形	-	-	緩斜	平坦	古銭	
	SK 62	M 9 f3	3.7	-	1.0	1.0	32	隅丸方形	3-7	-	外傾	平坦		
SI87	SK 69	M 9 f4	3.5	-	(1.2)	(1.2)	52	[隅丸方形]	9-27	-	緩斜	皿状		
	SK 64	M 9 a5	3.7	N-47°-W	1.5	1.3	14	不整形長方形	4-7	-	緩斜	平坦		SN30→本跡
SI88	SK 86	M 9 a1	3.7	N-68°-W	0.8	0.7	81	楕円形	-	-	外傾	平坦	不明土製品	
	SK 87	M 9 a1	3.7	-	1.1	1.0	78	円形	-	-	外傾	平坦		
	SK 97	M 9 h3	3.4	N-16°-E	1.2	1.0	10	隅丸長方形	5-14	-	緩斜	皿状		
	SK102	L 9 j3	3.6	N-53°-W	(1.4)	1.0	22	[楕円形]	-	-	緩斜	平坦		
SI89	SK108	N 8 c8	3.7	N-7°-E	0.9	0.8	27	楕円形	-	-	緩斜	平坦		

表48 5・6・8b区建物跡貝集積地一覧表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
SI81	SM 73	L 9 f6	3.7	N-65°-W	0.9	0.5	4	不整形円形	-	-	-	-		(6区 SM 1)
SI82	SM 74	M10c3	4.4	N-3°-E	0.8	0.6	10	楕円形	-	-	-	-		SK38→本跡 (6区 SM 2)
SI83	SM 75	M 9 j4	4.0	-	1.2	1.2	8	円形	-	-	-	-		(6区 SM 3)
SI85	SM 76	M 8 j9	3.8	N-27°-E	3.1	2.6	4	不定形	-	-	-	-		(6区 SM 4)
	SM 77	M 8 j8	3.8	N-41°-E	3.4	2.3	6	不定形	-	-	-	-		(6区 SM 5)

(2) 整地面

**第77号整地面** 5区HK-1 (第489~491図)

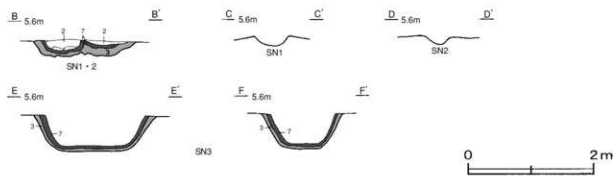
**位置** 調査区北部のK1017区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約1.4m除去し、標高約5.3mで黒色土面が確認された。黒色土面と周囲の砂層から粘土貼土坑が確認された。

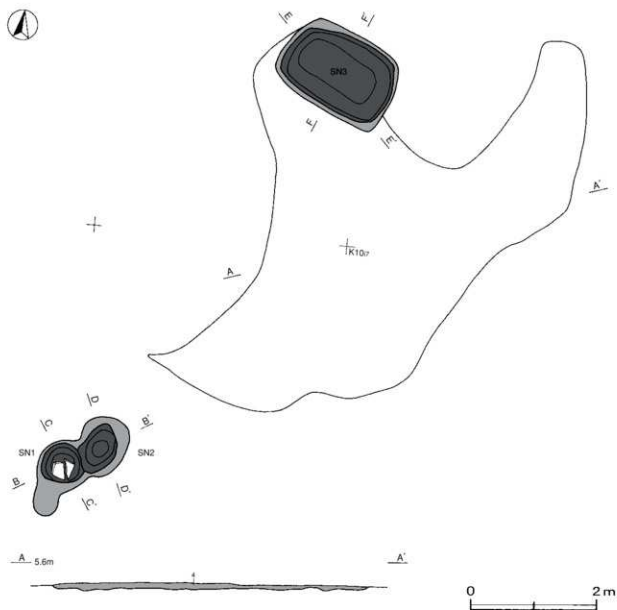
**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸8.2m、短軸5.0mの不定形で、長軸方向はN-48°-Eである。付属施設として、粘土貼土坑3基が構築されている。

**生活面** はほぼ平坦で、厚さ4~12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**土坑** (第489図) 第1・2号粘土貼土坑は南西部、第3号粘土貼土坑は北部に位置している。第1・2号粘土貼土坑は併設されている。どちらも小形のもので、第1号粘土貼土坑の底面には、長軸28・30cm、短軸20・14cm、厚さ5~6cmの平らな石が2個埋設されている。いずれも厚さ4~8cmの粘土を貼り付けて構築されている。



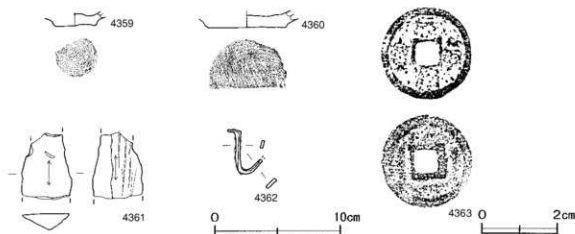
第489图 第77号整地面土坑土层图



第490图 第77号整地面实测图

**遺物出土状況** 土師質土器片8点(小皿2、皿5、鍋1)、石器1点(砥石)、金属製品3点(吊金具、古銭、不明)、瓦片1点が、遺構確認面の砂層から出土している。

**所見** 黒色土面の範囲と粘土貼土坑が確認されたのみである。建物を想定できる炉跡や柱穴が確認されなかったことから、屋外の作業場と判断した。時期は、隣接する周囲の遺構から17世紀前半と考えられる。



第491図 第77号整地面遺物実測図

第77号整地面出土遺物観察表(第491図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4359	小皿	土師質土器	-	(1.1)	3.2	長石・雲母	明赤褐	普通	底部回転糸切り	確認面砂層	10%
4360	皿	土師質土器	-	(1.3)	6.2	雲母	黄橙	普通	底部回転糸切り	確認面砂層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4361	砥石	(5.2)	4.0	1.4	(27.3)	凝灰岩	紙面2面 断面三角形 紙面に擦痕有り	確認面砂層	
4362	吊金具	3.0	0.3	1.1	(5.1)	鉄	断面長方形 先端部欠損	確認面砂層	PL93

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
4363	元符通寶	2.52	0.65	0.08	2.48	1098	銅	篆書	確認面砂層	

#### 第78号整地面 5区HK-2 (第492~494図)

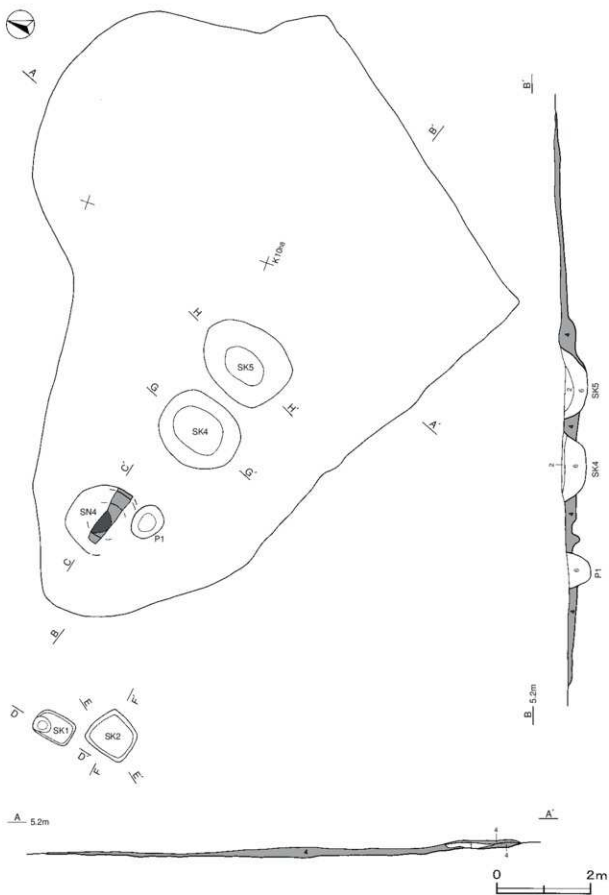
**位置** 調査区北部のK10g7区を中心に位置している。

**確認状況** 第77号整地面を約0.6m掘り下げた。標高4.5~4.7mで黒色土面が確認された。黒色土面と周囲の砂層から粘土貼土坑と土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸13.8m、短軸10.8mの不定形で、長軸方向はN-85°-Wである。付属施設として、粘土貼土坑1基、土坑4基が構築されている。

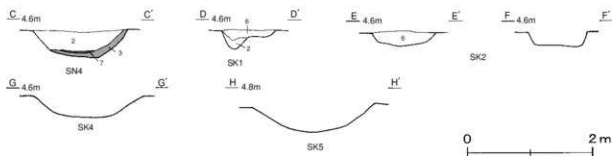
**生活面** はほぼ平坦で、厚さ10~20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは強い。

**ピット** 1か所。深さ51cmで、性格は不明である。



第492图 第78号整地面实测图

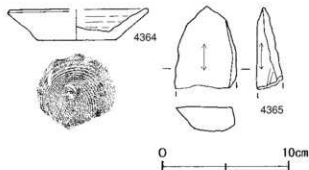
**土坑** (第493図) 第4号粘土貼土坑と第4・5号土坑は、黒色土面の西部から中央部にかけて直線的に並んでいる。第1・2号土坑は西部の砂層に位置している。第4号粘土貼土坑はかなり崩れているが、厚さ約3～5cmの粘土を貼り付けて構築されている。土坑の覆土は、第2層の砂B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第493図 第78号整地面土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片2点(皿, 鍋)、石器1点(砥石)、鉄滓1点が覆土から出土している。

**所見** 締まりのある黒色土面とそれに伴う粘土貼土坑、土坑が確認されたのみである。建物を想定できる炉跡や柱穴が確認されなかったことから、屋外の作業場と判断した。時期は、隣接する周囲の遺構から16世紀後半と考えられる。



第494図 第78号整地面出土遺物実測図

第78号整地面出土遺物観察表 (第494図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4364	皿	土師質土器 [10.7]	2.4	6.2		雲母	橙	普通	底部回転糸切り	覆土中	60% PL.77
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
4365	砥石	(6.6)	4.9	2.1	(64.3)	凝灰岩	砥面2面	他は剥離面	覆土中		

#### 第79号整地面 8b区HK-2 (第495～497図)

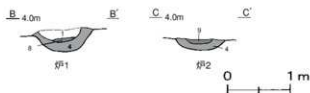
**位置** 調査区北部のK9j3区を中心に位置している。西側には第75号建物跡が位置している。

**重複関係** 第15号土坑に掘り込まれている。

**確認状況** 表砂を約2.4m除去し、標高3.8～4.0mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、さらに南部の黒色土下の砂層から炉と土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸5.1m、短軸3.4mの不定形で、長軸方向はN-16°-Wである。付属施設として、炉2基と土坑2基が構築されている。

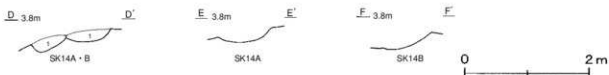
**生活面** はほぼ平坦で、厚さ10～20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層、第6層は黒色土D層で、締まりは普通である。



第495図 第79号整地面炉土層図

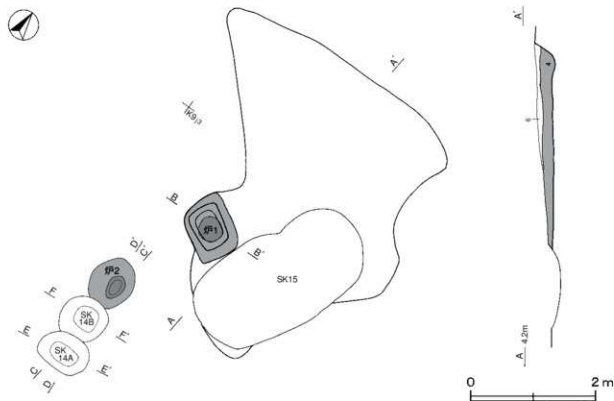
炉 (第495図) 炉1は南部の黒色土面、炉2は南部の砂層に位置している。どちらも、厚さ10~17cmの黒色土を貼り付けて構築されている。炉1の覆土から第8層の焼砂、炉2の覆土から第9層の灰が検出されている。

土坑 (第496図) 第14A号土坑が炉2の南部に隣接している。覆土は第1層の砂A層が自然堆積した層である。



第496図 第79号整地面土坑土層図

所見 炉は確認されたが、上屋を想定できる柱穴が確認できなかったことから屋外の作業場と判断した。時期は、西部に位置する第75号建物跡と標高がほぼ同じであることから、16世紀末から17世紀前半と考えられる。

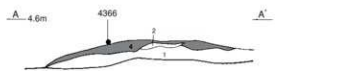
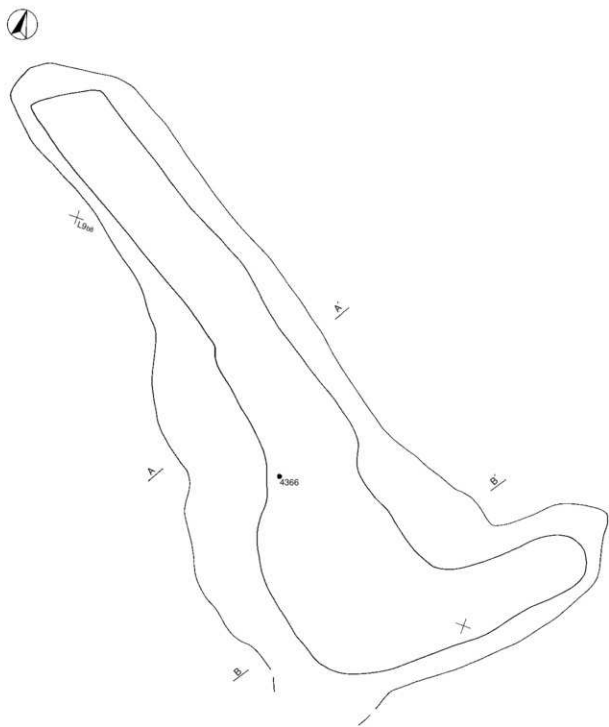


第497図 第79号整地面実測図

#### 第80号整地面 8b区HK-3 (第498・499図)

位置 調査区北部のL9b9区を中心に位置している。

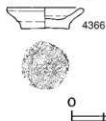
確認状況 表砂を約2.3m除去し、標高3.8~4.1mで黒色土面が確認された。



第498图 第80号整地面实测图

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸11.8m、短軸7.1mの不定形で、長軸方向はN-61°-Wである。

**生活状況** 中央部が高く盛り上がっている。厚さ16~30cmの黒色土が、砂層を挟みながら貼り付けて構築されている。土層断面図中の第2層は砂B層、第4層は黒色土B層で、締まりは強い。



第499図 第80号整地面  
出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片4点（小皿2、皿1、第1）、金属製品1点（不明）が出土している。4366は中央部の黒色土上面から出土している。

**所見** 黒色土面に伴う遺構は確認されなかった。遺存している部分は小規模であるが、黒色土が厚く貼られ締まりも強いことから、通路として機能していたと考えられる。時期は、下層から確認された第74号建物跡よりやや新しい17世紀頃と考えられる。

第80号整地面出土遺物観察表（第499図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4366	小皿	土師質土器	6.0	1.7	3.8	石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部黒色土上面	70% PL73

### 第81号整地面 8b区HK-5（第500~502図）

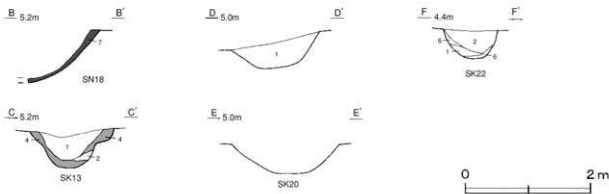
**位置** 調査区北部のL10b4区を中心に位置している。北側には第82号整地面が隣接している。

**確認状況** 表砂を約0.6m除去し、標高5.1~5.2mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑と土坑、粘土貼土坑の下から土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸6.9m、短軸5.5mの不定形で、長軸方向はN-47°-Wである。付属施設として、粘土貼土坑1基、土坑3基が構築されている。

**生活状況** はほぼ平坦で、厚さ7~16cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**土坑**（第500図）第18号粘土貼土坑と黒色土で構築された第13号土坑は黒色土面の南部、第20号土坑は北西部の砂層に位置している。第22号土坑は、第18号粘土貼土坑の下層から確認されている。第13号土坑は、厚さ5~16cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第18号粘土貼土坑は北側半分が遺存しており、径約3.2m、深さ約83cmの円形と推定される大形の粘土貼土坑で、厚さ14~33cmの粘土を貼り付けて構築されている。いずれの土坑も、覆土は第1・2層の砂A・B層と第6層の黒色土D層が自然堆積した層である。

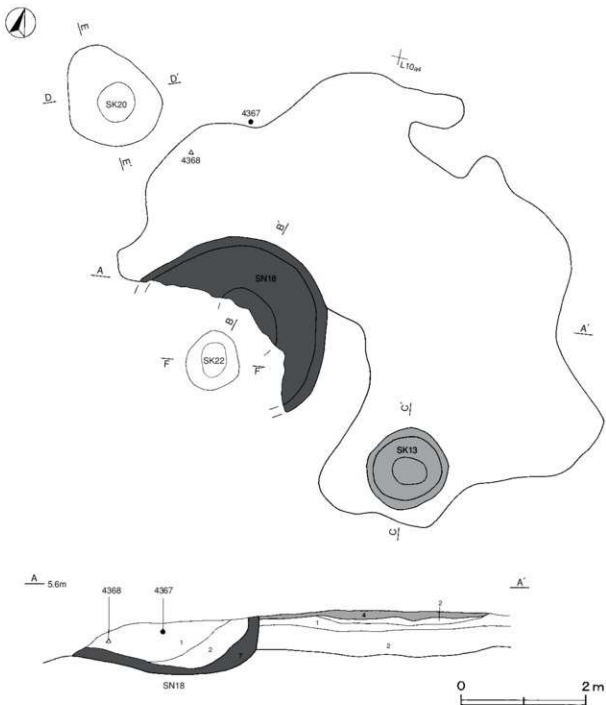


第500図 第81号整地面土坑土層図



**遺物出土状況** 土師質土器片8点(皿7, 鍋1), 石器1点(砥石), 金属製品2点(小刀)が出土している。4367は北西部の砂層, 4368は北西部の黒色土上面から出土している。

**所見** この周辺からは釜屋及び竈とみられる遺構が確認されていない。しかし, 黒色土面内に大形の第18号粘土貼土坑が伴っていることから, 製塩にかかわる小規模な屋外作業場の可能性も考えられる。時期は, この調査区で最も高い位置から確認されていることから, 17世紀頃と考えられる。



第501図 第81号整地地面実測図



第502図 第81号整地面出土遺物実測図

第81号整地面出土遺物観察表 (第502図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4367	皿	土師質土器	[10.4]	(3.0)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面口クロナゲ	北西部砂層	10%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
4368	小刀	(7.8)	1.2	0.2	(6.7)	鉄	切先部・基部一部欠損		北西部黒色土上面		

### 第82号整地面 8b区HK-6 (第503~505図)

**位置** 調査区北部のK1014区を中心に位置している。南側には第81号整地面が隣接している。

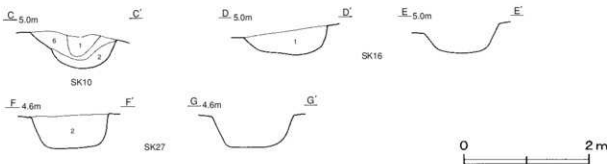
**確認状況** 表砂を約1.2m除去し、標高4.8~5.2mで黒色土面が確認された。黒色土面から土坑が確認された。

**規模と施設** 東部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、長軸8.2m、短軸は3.9mだけが確認された。平面形は不定形と推定され、長軸方向はN-5°-Eである。付属施設として、土坑3基が構築されている。

**生活面** 北部から南部にかけて緩やかに傾斜している。厚さ15~25cmの黒色土を貼り付けて構築されている。また土層断面から、北部の一部は黒色土を重ねて貼り付けている状況が認められる。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**ピット** 5カ所。深さ40~74cmである。配列に規則性はなく、性格は不明である。

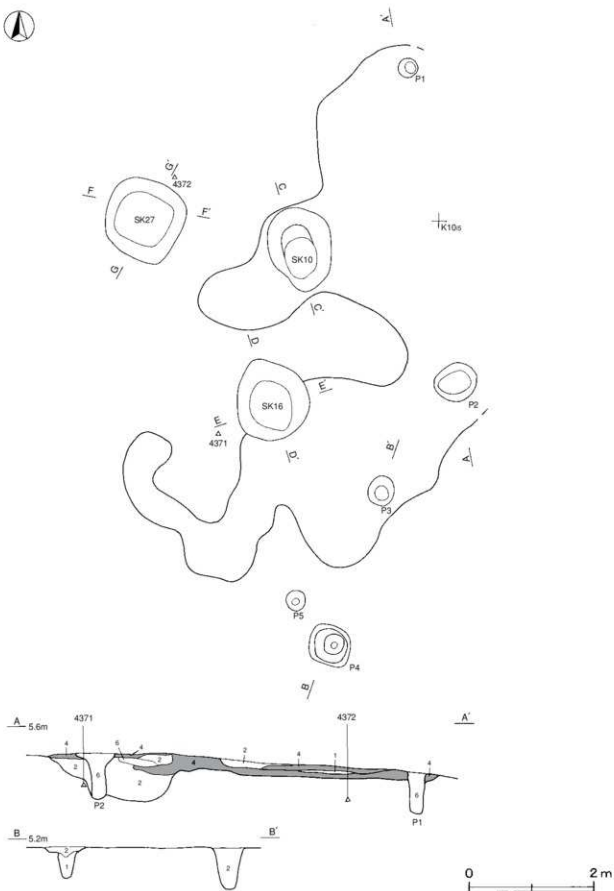
**土坑** (第503図) 第10・16号土坑は黒色土面の中央部、第27号土坑は西部の砂層に位置している。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



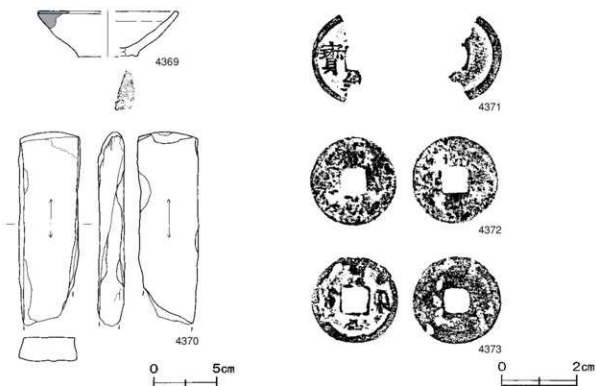
第503図 第82号整地面土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片12点(皿8、鍋4)、石器1点(砥石)、金属製品3点(古銭)が出土している。4371は第16号土坑付近、4372は第27号土坑付近の砂層から出土している。

**所見** 生活面の黒色土を重ねて貼り付けている部分が認められることから、作業場として機能したと考えられる。時期は、最初の遺構確認面から検出されており、第81号整地面とはほぼ同時期の17世紀頃と考えられる。



第504图 第82号整地面实测图



第505図 第82号整地面出土遺物実測図

第82号整地面出土遺物観察表 (第505図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4369	皿	土師質土器	[10.8]	3.6	[4.6]	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 外面保付着	覆土中	20%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
4370	砥石	(15.4)	4.9	2.1	(290.0)	千枚岩	砥面2面	断面四角形	覆土中	PL87	
番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴		出土位置	備考
4371	一葉一貫	-	-	0.12	(1.34)	1408	銅	真書 永樂通寶	欠け	SK 16付近砂層	
4372	□□□□	2.34	0.68	0.09	3.02	-	銅	判読不明		SK 27付近砂層	
4373	聖宋元寶	2.35	0.63	0.09	2.74	1101	銅	篆書	駒込み不足の穴有り	覆土中	

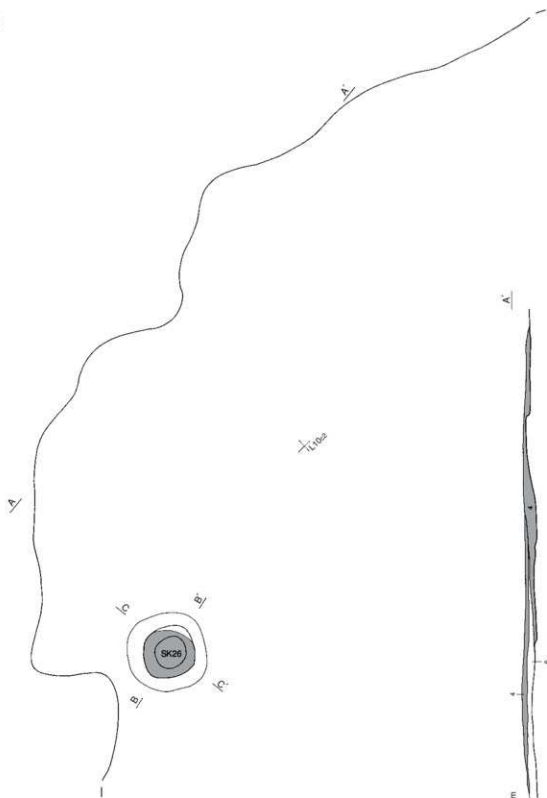
### 第83号整地面 8b区HK-7 (第506・507図)

**位置** 調査区北部のL10b2区を中心に位置している。北側には第84号整地面、西側には第74号建物跡が隣接している。

**確認状況** 第81号整地面を約0.9m掘り下げた標高約4.2mで、黒色土面が確認された。黒色土面から土坑が確認された。

**規模と施設** 南部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、南北5.3m、東西13.2mが確認された。付属施設として、土坑1基が構築されている。

**生活面** はほぼ平坦で、厚さ6～18cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層、第6層は黒色土D層で、締まりは普通である。



第506图 第83号整地面实测图

**土坑** (第507図) 黒色土で構築された第26号土坑は、西部に位置している。底部には、厚さ10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層と第5・6層の黒色土C・D層が人為堆積した層である。



第507図 第83号整地面土坑土層図

**所見** 遺構のほとんどが調査区域外に延びている。上屋を想定させる柱穴が確認できなかったことから、整地面と判断した。時期は、隣接する第74号建物跡と同時期の16世紀末から17世紀前半の可能性が高い。

#### 第84号整地面 8b区HK-8 (第508～511図)

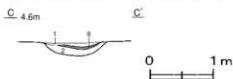
**位置** 調査区北部のK10j1区を中心に位置している。南側には第83号整地面、南西側には第74号建物跡が隣接している。

**重複関係** 第16号不明遺構に掘り込まれている。

**確認状況** 表砂を約2.3m除去し、標高4.1～4.7mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑と貝集積地が確認された。

**規模と施設** 北部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、長軸17.1m、短軸は11.8mだけが確認された。平面形は不定形と推定され、長軸方向はN-64°-Eである。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑3基、土坑1基が構築され、貝集積地が1か所確認されている。

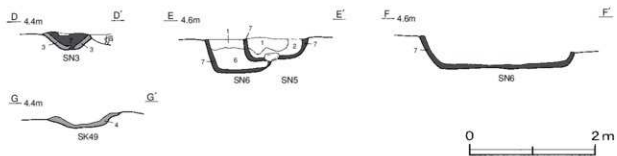
**生活面** 北部から南部にかけて緩やかに傾斜している。厚さ8～60cmの黒色土を貼り付けて構築されている。中央部付近から、薄く貼られた粘土範囲が2か所確認されている。土層断面図中の第3・4層は黒色土A・B層、第6層は黒色土D層で、締まりは普通である。



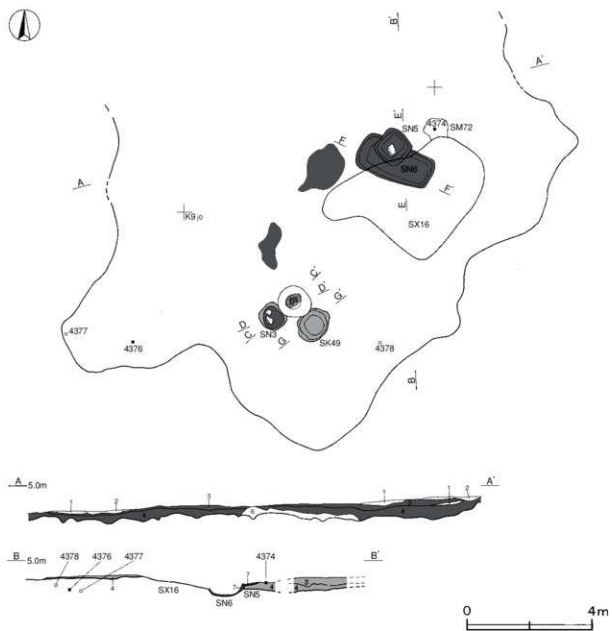
**炉** (第508図) 南部に位置し、炉は第3号粘土貼土坑と第49号土坑と併設されている。生活面の黒色土を掘り込んだだけの炉で、覆土から第1・2層の砂A・B層と第8層の焼砂が検出されている。

第508図 第84号整地面炉土層図

**土坑** (第509図) 第3号粘土貼土坑と黒色土で構築された第49号土坑は南部、第5・6号粘土貼土坑は中央部に位置している。第3号粘土貼土坑は底面のみ遺存しており、長軸30cm、短軸20cm、厚さ5cmほどの平らな石を貼り付けている。第5号粘土貼土坑は第6号粘土貼土坑の北壁を掘り込んで構築されている。第3号粘土貼土坑は厚さ16cmの粘土、第5・6号粘土貼土坑は厚さ4～6cmの粘土、第49号土坑は厚さ4～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土坑の覆土は、堆積状況から第1・2層の砂A・B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第509图 第84号整地面土坑土层图



第510图 第84号整地面实测图

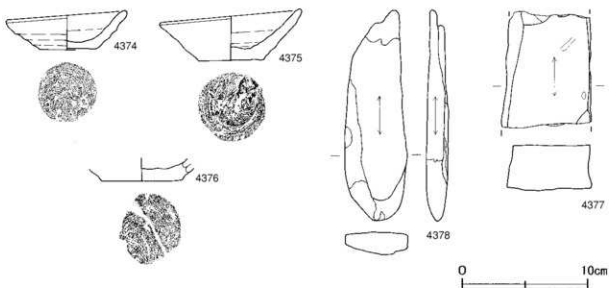
**貝集積地** 第72号貝集積地は、中央部の黒色土面に位置している。長径0.8m、短径は0.6mだけ確認され、不整形円形と推定される。貝は薄く広がった状態で確認された。

第72号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	サルボウガイ	45.0	2.35	1		3	ウバガイ	1,730.0	90.34	1=2R+1	
2	チョウセンハマグリ	50.0	2.61	2		4	ウバガイ細片	90.0	4.70		

**遺物出土状況** 土師質土器片7点（小皿3、皿4）、石器2点（砥石）、金属製品2点（釘、不明）が出土している。4376・4377は南西部、4378は南東部の黒色土下からそれぞれ出土している。また、4374は第72号貝集積地内、4375は第3号粘土貼土坑内から出土している。

**所見** 炉と粘土貼土坑や土坑が併設された黒色土面である。上屋を想定させる柱穴が確認できなかったことから、整地面と判断した。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第511図 第84号整地面出土遺物実測図

第84号整地面出土遺物観察表（第511図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4374	小皿	土師質土器	9.4	3.2	4.4	長石・赤色粒子	褐	普通	内底面渦巻状のナデ	SM72内	95% PL74
4375	皿	土師質土器	11.0	4.1	5.2	雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面渦巻状のナデ	SN3内	90% PL77
4376	皿	土師質土器	-	(1.7)	[6.4]	長石・雲母	橙	普通	内底面渦巻状のナデ	南西部黒色土下	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4377	砥石	(9.3)	7.2	3.6	(482.0)	タタキ	砥面1面 他は剝離面	南西部黒色土下	PL86
4378	砥石	16.3	5.0	1.8	226.0	雲母片岩	砥面2面 他は自然面	南東部黒色土下	PL86



**第85号整地面** 8b区HK-11 (第512~514図)

**位置** 調査区北部のK10j0区を中心に位置している。

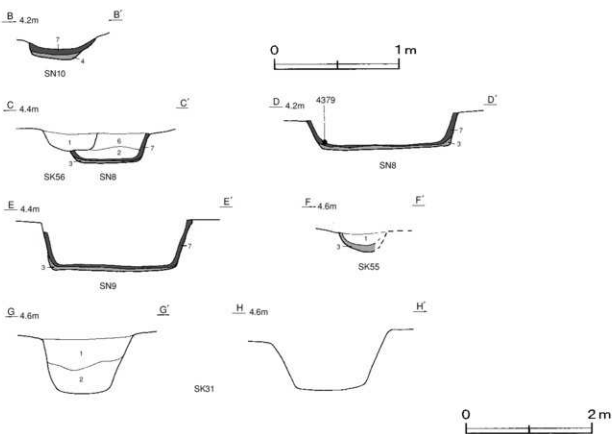
**確認状況** 第83・84号整地面を約0.4m掘り下げた。標高3.9~4.3mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑、土坑と柱穴2か所、さらに黒色土面の下から柱穴4か所が確認された。

**規模と施設** 北部と南部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、南北16.6m、東西15.9mが確認された。付属施設として、粘土貼土坑3基、土坑3基が構築されている。

**生活面** 北部から南部にかけて緩やかに傾斜している。厚さ6~17cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**ピット** 6か所。P1・P2は深さ80・75cmで黒色土面から、P3~P6は深さ18~62cmで黒色土面下からそれぞれ確認された柱穴である。いずれも配列に規則性はなく、性格は不明である。

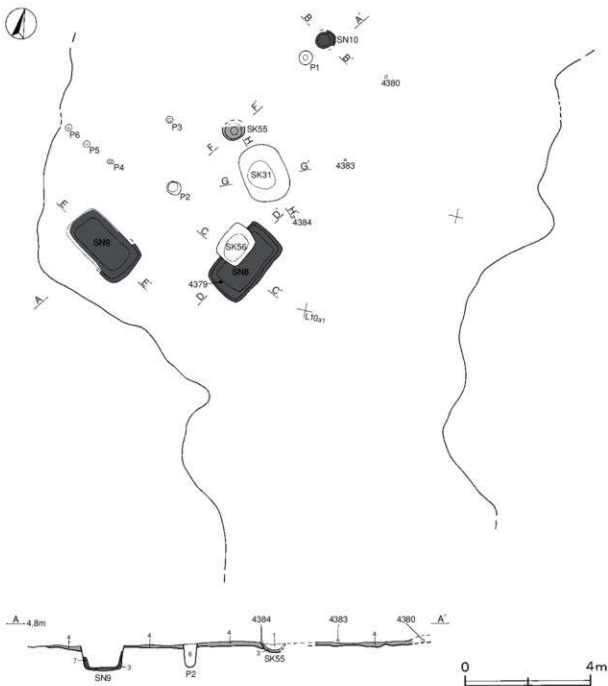
**土坑** (第512図) 粘土貼土坑及び土坑は、中央部から北部にかけて点在している。第8・9号粘土貼土坑は長軸2.4m、短軸1.3・1.4m、深さ71・45cmの隅丸長方形で、屋外に配されている水溜用の粘土貼土坑と類似している。第56号土坑は第8号粘土貼土坑を掘り込んでいる。粘土貼土坑は厚さ2~10cmの粘土、黒色土で構築された第55号土坑は厚さ5~10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。粘土貼土坑と土坑の覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



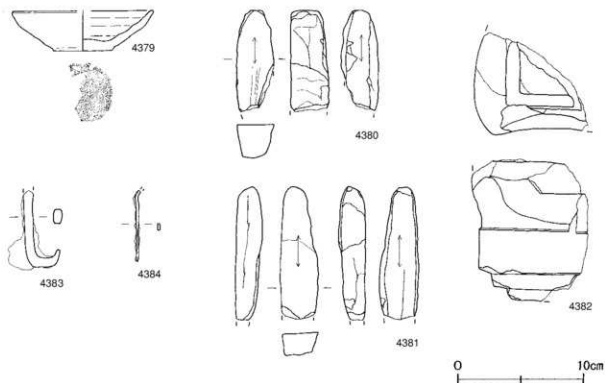
第512図 第85号整地面土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片32点（小皿10、皿21、鍋1）、石器・石製品9点（砥石7、火打石1、宝篋印塔1）、金属製品2点（吊金具、釘）が出土している。4380は北部の黒色土中、4383・4384は中央部の黒色土上面からそれぞれ出土している。また、4379は第8号粘土貼土坑内、4382は第9号粘土貼土坑内からそれぞれ出土している。

**所見** 生活面が緩やかに傾斜していることや柱穴から上屋構造が想定できないことから、屋外の作業場として機能していた可能性が高い。時期は、上面の第82号整地面とあまり時期差のない16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第513図 第85号整地面実測図



第514図 第85号整地面出土遺物実測図

第85号整地面出土遺物観察表 (第514図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4379	皿	土師質土器	[11.0]	3.2	[4.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	SN8内	40% PL78
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
4380	砥石	(8.0)	2.9	3.0	(97.5)	凝灰岩	砥面2面	側面整形時の加工痕有り	北部黒色土中		
4381	砥石	(10.5)	3.1	2.0	(97.1)	凝灰岩	砥面2面	砥面やや湾曲 側面整形時の加工痕有り	覆土中		
4382	宝篋印塔	(11.2)	(9.3)	(8.0)	(791.0)	砂岩	笠部片	隅飾突起部摩滅	SN9内	PL87	
4383	吊金具	(6.1)	0.7	1.2	(27.0)	鉄	断面長方形	頭部欠損	中央部黒色土上面	PL88	
4384	釘	(5.7)	0.2	0.5	(2.3)	鉄	断面長方形	頭部欠損	中央部黒色土上面		

#### 第86号整地面 8b区HK-13 (第515～517図)

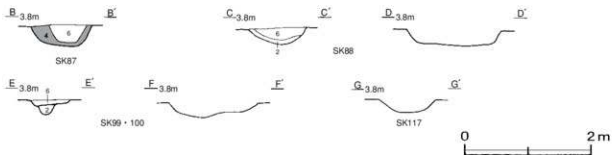
位置 調査区北部のL9d5区を中心に位置している。

確認状況 第74号建物跡を約0.4m掘り下げた。標高約3.6mで黒色土面が確認された。黒色土面と同じ高さの北西部の砂層から土坑が確認された。

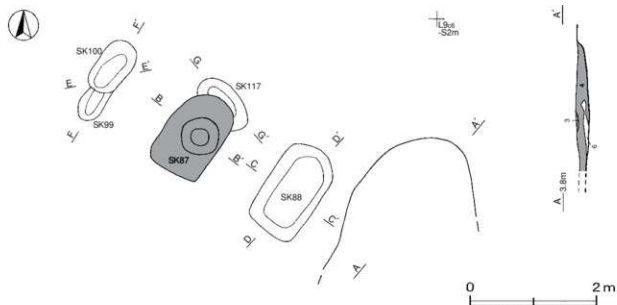
規模と施設 南部が調査区域外に延びているため、黒色土の範囲は、南北2.1m、東西2.0mが確認された。付風施設として、土坑5基が構築されている。

生活面 はほぼ平坦で、厚さ10～20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第3層は黒色土A層、第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

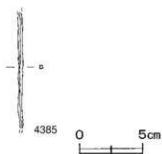
**土坑** (第515図) 土坑は北西方向に並んで構築されている。第87号土坑は第117号土坑を、第100号土坑は第99号土坑を掘り込んでいる。黒色土で構築された第87号土坑は、厚さ6~21cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第515図 第86号整地面土坑土層図



第516図 第86号整地面実測図



第517図 第86号整地面出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)、金属製品1点(紡錘カ)が出土している。4385は第88号土坑内から出土している。

**所見** 確認できた黒色土面の範囲が小さく、性格は不明である。時期は、上面から確認された第74号建物跡よりやや古い16世紀後半と考えられる。

第86号整地面出土遺物観察表 (第517図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4385	紡錘カ	(9.0)	0.2	0.2	(3.3)	鉄	断面方形 両端部欠損	SK88内	

**第87号整地面** 6区HK-1 (第518図)

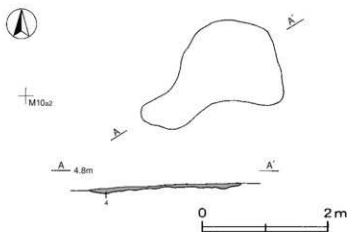
**位置** 調査区北部のL10j2区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約2.4m除去し、標高約4.6mで黒色土面が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸2.4m、短軸1.4mの不定形で、長軸方向はN-60°-Eである。

**生活面** 南西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ2~8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**所見** 黒色土面の範囲は小さく、周囲から柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。時期は、最初の遺構確認面から検出されており、北西部のやや下層から確認された第78号建物跡とはほぼ同時期の17世紀頃と考えられる。



第518図 第87号整地面実測図

**第88号整地面** 6区HK-8 (第519~521図)

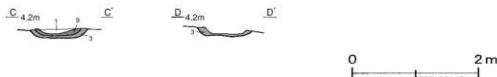
**位置** 調査区北部のL9f9区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.1m除去し、標高3.7~3.9mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑、土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸5.8m、短軸4.9mの不定形で、長軸方向はN-18°-Wである。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑1基、土坑1基が構築されている。

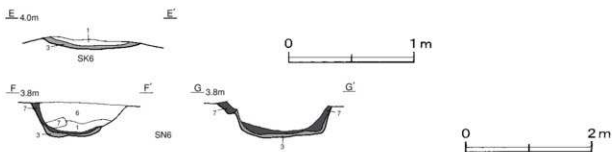
**生活面** 南西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ8~28cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第3層は黒色土A層、第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。また、炉の東側から硬化した黒色土面を確認した。

**炉** (第519図) 北部に位置している。厚さ3~8cmの黒色土を貼り付けて構築され、覆土下層から第9層の灰が検出されている。



第519図 第88号整地面炉土層図

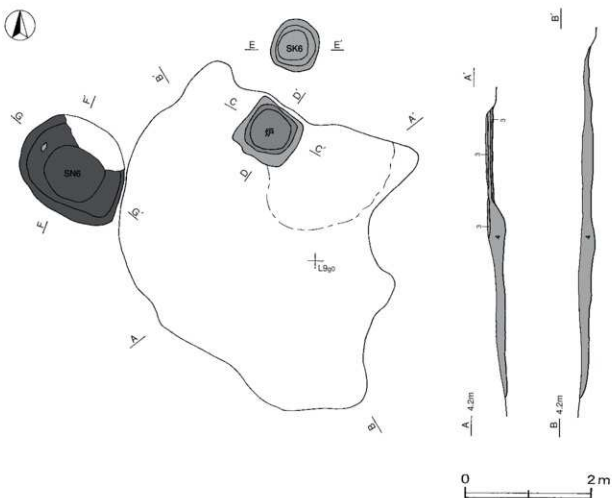
**土坑** (第520図) 第6号粘土貼土坑が西部、黒色土で構築された第6号土坑が北部に位置している。第6号粘土貼土坑は厚さ3~12cmの粘土、第6号土坑は厚さ2~5cmの黒色土を貼り付けて構築されている。第6号粘土貼土坑の覆土は、第1層の砂A層、第6層の黒色土D層、第7層の粘土ブロックを主体とした層が人為堆積している。第6号土坑の覆土は、第1層の砂A層が自然堆積した層である。



第520図 第88号整地面土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片5点(皿3, 鍋2), 土製品1点(土錘)が覆土から出土している。いずれも細片のため, 図化できなかった。

**所見** 如か確認されたが, 上屋を想定できる柱穴が確認できなかったことから屋外の作業場と判断した。時期は, 南西部のやや上面の層位で検出された第79号建物跡から, 16世紀末から17世紀前半と考えられる。



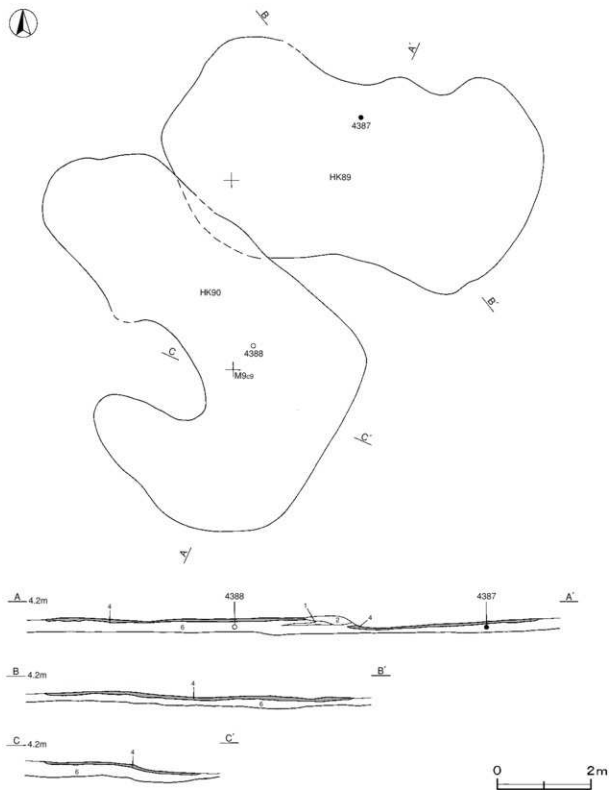
第521図 第88号整地面実測図

**第89号整地面** 6区HK-14 (第522・523図)

**位置** 調査区中央部のM9a9区を中心に位置している。東側には第99号整地面が隣接している。

**重複関係** 西部上面に第79号建物、南西部上面に第90号整地面が構築されている。

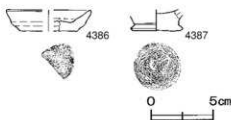
**確認状況** 第90号整地面を約0.2m掘り下げた。標高3.7~3.9mで黒色土面が確認された。



第522図 第89・90号整地面実測図

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸8.1m、短軸4.5mの不定形で、長軸方向はN-81°-Wである。

**生活面** 南西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ6～11cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の4層は黒色土B層で、締まりは普通である。



第523図 第89号整地面出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片6点(小皿1、皿4、柱状高台1)、瓦質土器片1点(甕)、土製品2点(円筒埴輪)が出土している。4387は北部の黒色土下から出土している。

**所見** 黒色土面の範囲は小さく、付属施設や柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。時期は、上面に構築されている第79号建物跡とあまり時期差のない16世紀末から17世紀前半と考えられる。

第89号整地面出土遺物観察表 (第523図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4386	小皿	土師質土器	[6.6]	1.7	[4.4]	雲母	橙	普通	底部回転糸切り後ナデ	覆土中	30%
4387	柱状高台	土師質土器	-	(1.7)	3.8	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	北部黒色土下	10% PL74

#### 第90号整地面 6区HK-15 (第522・524図)

**位置** 調査区中央部のM9c9区を中心に位置している。

**重複関係** 北西部上面に第79号建物、北部下面に第89号整地面が構築されている。

**確認状況** 第79号建物跡を約0.2m掘り下げた。標高3.6～3.9mで黒色土面が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸8.4m、短軸5.5mの不定形で、長軸方向はN-61°-Wである。

**生活面** 南東部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ4～12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の4層は黒色土B層で、締まりは普通である。



第524図 第90号整地面出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片5点(小皿2、皿3)、土製品1点(円筒埴輪)が出土している。4388は中央部の黒色土下から出土している。

**所見** 黒色土面の範囲は小さく、付属施設や柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。出土した円筒埴輪片は、黒色土を構築するために他地域から持ち込まれたことを示す資料である。時期は、上面に構築されている第79号建物跡とあまり時期差のない16世紀末から17世紀前半と考えられる。

第90号整地面出土遺物観察表 (第524図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4388	円筒埴輪	(6.1)	-	1.4	(106.4)	長石・石英	内面斜位のナデ 外面腹位のハケ目後凸帯貼り付	中央部黒色土下	



**第91号整地面** 6区HK-31 (第525～527図)

**位置** 調査区中央部のM8j9区を中心に位置している。

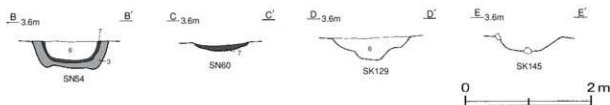
**重複関係** 第85号建物のP1に掘り込まれている。

**確認状況** 第85号建物跡を約0.5m掘り下げた標高約3.3mで、黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑と土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸3.5m、短軸3.4mの不定形で、長軸方向はN-63°-Eである。付属施設として、粘土貼土坑2基、土坑2基が構築されている。

**生活面** 中央部がややくぼんでいる。厚さ3～11cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

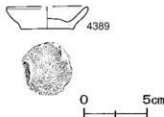
**土坑** (第525図) 第60号粘土貼土坑、第145号土坑は黒色土面、第54号粘土貼土坑、第129号土坑は南部の砂層から確認されている。第54号粘土貼土坑は厚さ2～5cm、第60号粘土貼土坑は厚さ4～8cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第525図 第91号整地面土坑土層図



第526図 第91号整地面実測図



第527図 第91号整地面  
出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿)が、覆土から出土している。

**所見** 第85号建物の柱穴に掘り込まれていることから、別遺構の整地面と判断した。黒色土面の範囲は小さいが、粘土貼土坑と土坑が伴っていることから、作業場として使用されていたと考えられる。時期は、第85号建物跡の下層から検出されていることから17世紀頃と考えられる。

第91号整地面出土遺物観察表 (第527図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4389	小皿	土師質土器	[6.4]	1.8	4.2	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転糸切り	覆土中	70% PL73

**第92号整地面** 6区HK-2 (第528図)

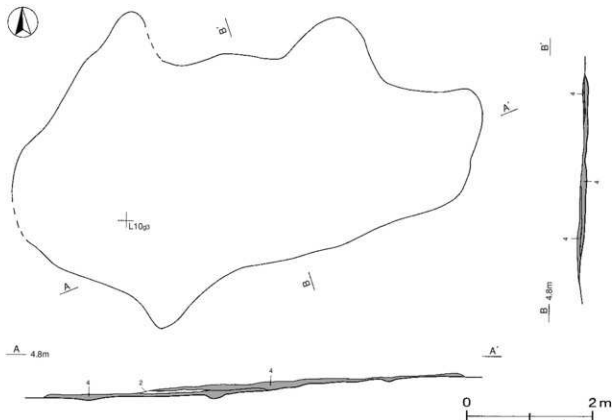
**位置** 調査区北部のL10f3区を中心に位置している。

**重複関係** 砂層をはさんだ北西部の下面に、第93号整地面が構築されている。

**確認状況** 表砂を2.5m除去し、標高4.2~4.5mで黒色土面が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸7.5m、短軸4.9mの不定形で、長軸方向はN-80°-Eである。

**生活面** 西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ5~22cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。



第528図 第92号整地面実測図

**遺物出土状況** 金属製品1点（不明）が出土している。

**所見** 黒色土面の範囲は小さく、周囲から柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。

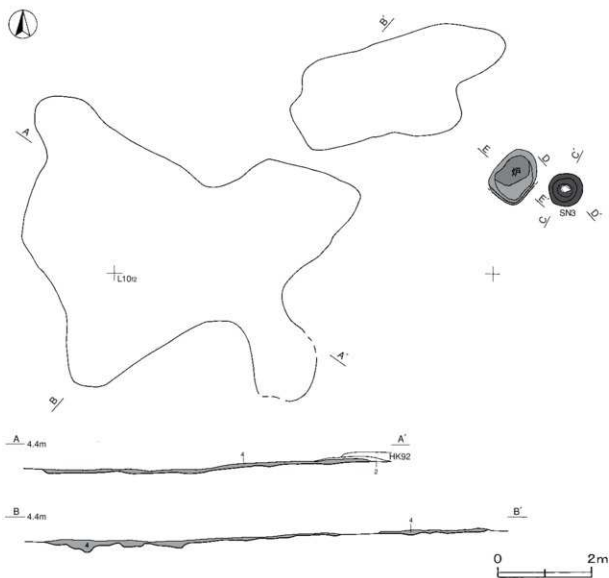
**第93号整地面** 6区HK-3（第529～531図）

**位置** 調査区北部のL10f1区を中心に位置している。

**重複関係** 砂層をはさんだ南東部上面に、第92号整地面が構築されている。

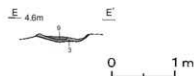
**確認状況** 第92号整地面の北西部を約0.1m掘り下げた、標高3.8～4.2mで黒色土面が確認された。黒色土面の周囲から炉と粘土貼土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸11.5m、短軸8.3mの不定形で、長軸方向はN-41°-Eである。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑1基が構築されている。



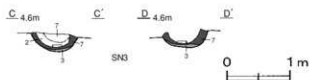
第529図 第93号整地面実測図

**生活面** 南西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ5～28cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。



第530図 第93号整地面炉土層図

**炉** (第530図) 東部の砂層に位置し、第3号粘土貼土坑と隣接している。厚さ6cmの黒色土を貼り付けて構築され、覆土から第9層の灰が検出されている。



第531図 第93号整地面土坑土層図

**土坑** (第531図) 第3号粘土貼土坑が炉の東部に位置している。厚さ3～14cmの粘土を貼り付けて構築されている。底面には、長軸24cm、短軸18cm、厚さ4cmほどの平らな砂岩が貼り付けられている。覆土は、第2層の砂B層と第7層の粘土ブロックを主体とした層が人為堆積した層である。

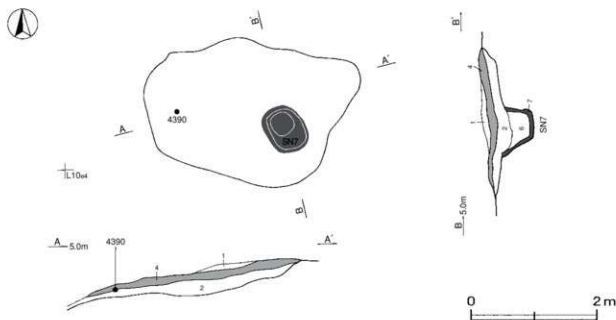
**遺物出土状況** 土師質土器片2点(皿)が出土している。細片のため、図示できなかった。

**所見** 調理場と想定される炉と粘土貼土坑が確認されているが、周囲から柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。時期は、第92号整地面とほぼ同時期の17世紀頃と考えられる。

#### 第94号整地面 6区HK-5 (第532・533図)

**位置** 調査区北部のL10d4区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約2.2m除去し、標高4.2～4.8mで黒色土面が確認された。黒色土面の下層から粘土貼土坑が確認された。



第532図 第94号整地面実測図

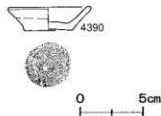
**規模と施設** 黒色土の範囲は、長径3.4m、短径2.4mの不整楕円形で、長径方向はN-81°-Eである。付属施設として、粘土貼土坑1基が構築されている。

**生活面** 西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ8～15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**土坑** (第532図) 第7号粘土貼土坑は、黒色土下から確認されている。厚さ3～7cmの粘土を貼り付けて構築され、覆土は第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片2点(皿)が出土している。4390は西部の黒色土中から出土している。

**所見** 黒色土面の範囲は小さく、周囲から柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることや周囲の遺構から、17世紀頃と考えられる。



第533図 第94号整地面出土遺物実測図

第94号整地面出土遺物観察表 (第533図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
4390	小皿	土師質土器	6.4	1.9	3.8	雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	西部黒色土中	95% PL73

#### 第95号整地面 6区HK-4 (第534図)

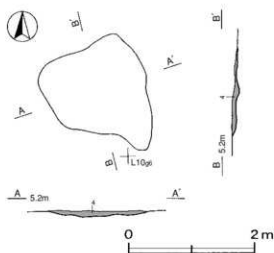
**位置** 調査区北部のL10f5区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約2.0m除去し、標高約5.0mで黒色土面が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸1.9m、短軸1.6mの不定形で、長軸方向はN-31°-Wである。

**生活面** はほぼ平坦である。厚さ4～10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**所見** 黒色土面の範囲は小さく、周囲から柱穴が検出されていないことから整地面と判断した。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることや周囲の遺構から、17世紀頃と考えられる。



第534図 第95号整地面実測図

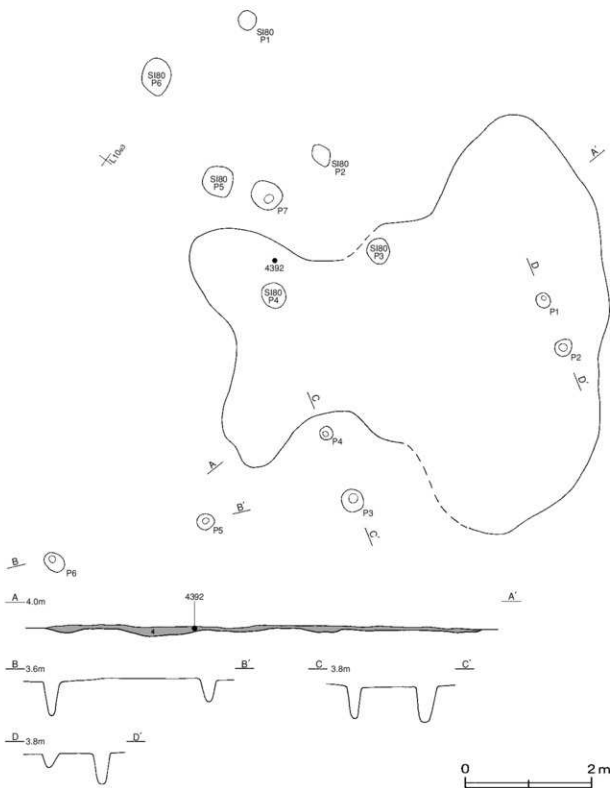
#### 第96号整地面 6区HK-9 (第535・536図)

**位置** 調査区北部のL10f3区を中心とする、第1号区画状遺構内に位置している。

**重複関係** 北部上面に構築されている第80号建物のP3・P4に掘り込まれている。

**確認状況** 第80号建物跡を約0.4m掘り下げた、標高約3.6mで黒色土面が確認された。黒色土面及び砂層から柱穴8か所が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸6.6m、短軸6.5mの不定形で、長軸方向はN-35°-Wである。



第535图 第96号整地面实测图

**生活面** ほぼ平坦で、厚さ5～15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**ピット** 8か所。深さ23～57cmで、配列に規則性がなく、性格は不明である。

**遺物出土状況** 土師質土器片4点（小皿1，皿2，鍋1），金属製品1点（不明）が出土している。4392は北部の黒色土中から出土している。

**所見** 竪などの付属施設は検出されず、柱穴の配列からも上屋構造が想定できないため整地面と判断した。時期は、最終遺構確認面から検出された黒色土面であることから、16世紀後半と考えられる。



第536図 第96号整地面出土遺物実測図

第96号整地面出土遺物観察表（第536図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4391	小皿	土師質土器	[7.2]	2.0	[4.2]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転切削り	覆土中	10%
4392	皿	土師質土器	[11.8]	(3.2)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面のクロナテ 内面刷毛	北部黒色土中	40%

### 第97号整地面 6区HK-11（第537～539図）

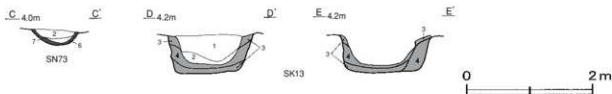
**位置** 調査区北部のL10h2区を中心に位置している。

**確認状況** 第78号建物跡を約0.4m掘り下げた、標高約3.9mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑と土坑が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸8.2m、短軸4.3mの不定形で、長軸方向はN-10°-Wである。付属施設として、粘土貼土坑1基、土坑1基が構築されている。

**生活面** ほぼ平坦で、厚さ4～8cmの黒色土を貼り付けて構築されている。北西部の黒色土面と砂層の境には、長さ3.9m、幅22～36cm、高さ8cmほどの高まりが確認されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

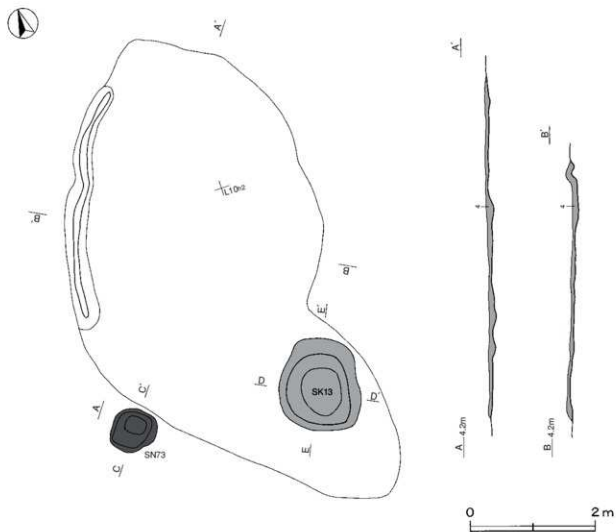
**土坑**（第537図）第73号粘土貼土坑は砂層、黒色土で構築された第13号土坑は黒色土面に位置している。第73号粘土貼土坑は厚さ2～4cmの粘土、第13号土坑は厚さ12～20cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



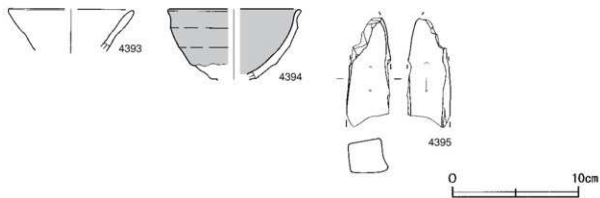
第537図 第97号整地面土坑土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片4点(皿2, 第2), 陶器片1点(碗), 石器1点(砥石)が出土している。4393～4395は、遺構確認面の覆土から出土している。

**所見** 柱穴が確認されていないことから、粘土貼土坑と土坑が伴う屋外の作業場と判断した。時期は、上面の第78号建物跡よりやや古い16世紀後半と考えられる。



第538図 第97号整地面実測図



第539図 第97号整地面出土遺物実測図



第97号整地面出土遺物観察表 (第539図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4393	小皿	土師質土器	[9.8]	(3.3)	-	雲母	にふい橙	普通	体部内・外面口クロナデ	覆土中	10%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4394	天目茶碗	陶器	[10.4]	(5.6)	-	にふい橙・菊	鉄軸	口縁部やや外反する	瀬戸・美濃	覆土中	10% 大業後期

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4395	砥石	(8.6)	3.5	2.7	(122.0)	埴質頁岩	紙面2面 他は剥離面	覆土中	

第98号整地面 6区HK-17 (第540~542図)

位置 調査区南部のN9d2区を中心に位置している。

確認状況 表砂を約2.9m除去し、標高約4.1mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑が確認された。さらに黒色土を約10cm除去した標高4.0mで、第2次面の黒色土と粘土貼土坑が確認された。

規模と施設 第1次面の黒色土の範囲は、長軸12.2m、短軸8.5mの不定形で、長軸方向はN-24°-Eである。第2次面の黒色土の範囲は、長軸10.1m、短軸9.0mの不定形で、長軸方向はN-43°-Wである。付属施設として、粘土貼土坑2基が構築されている。

生活面 両面ともほぼ平坦である。第1次面は厚さ4~8cmの黒色土、第2次面は厚さ3~9cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第3層は黒色土A層で、第4層は黒色土B層で、締まりは強い。

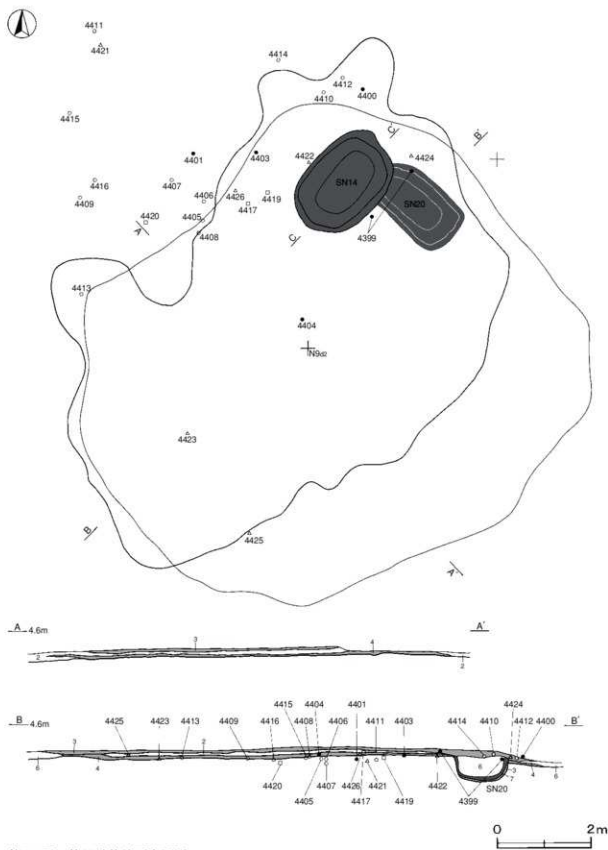
土坑 (第540図) 第14号粘土貼土坑は第1次面、第20号粘土貼土坑は第2次面から検出されている。どちらも黒色土面の北部に構築されており、第14号粘土貼土坑が第20号粘土貼土坑を掘り込んでいる。第14・20号粘土貼土坑は長軸(径)2.0m、短軸(径)1.0m以上、深さ0.5mの隅丸方形・楕円形で、屋外に配されている水溜用の粘土貼土坑と類似している。第14号粘土貼土坑は厚さ4~6cmの粘土、第20号粘土貼土坑は厚さ4~11cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



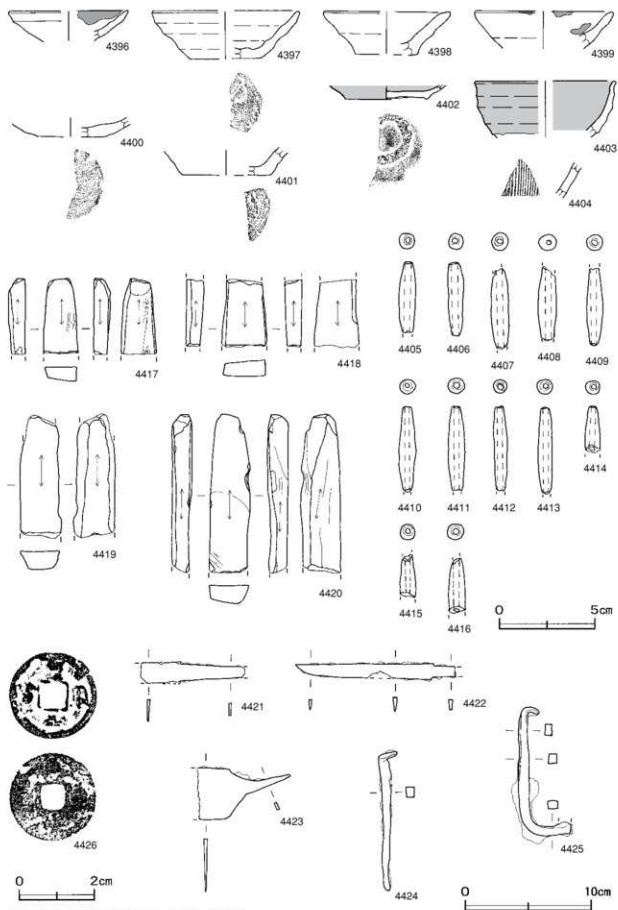
第540図 第98号整地面粘土貼土坑実測図

遺物出土状況 土師質土器片17点(皿13、鍋4)、陶器片4点(皿2、碗1、播鉢1)、土製品13点(土鍾12、円筒埴輪1)、石器5点(砥石)、金属製品8点(小刀3、包丁1、釘1、耳金カ1、古銭1、不明1)が出土している。遺物は、北西部から多く出土している。第1次面では4400が黒色土上面、4424が黒色土中、第2次面では4417・4425が黒色土上面、4404・4423・4426が黒色土中、4403・4419・4422が黒色土下からそれぞれ出土している。管状土鍾は12点出土し、北部の黒色土面から北西部の砂層にかけて散在している。また、4397・4402・4418は第20号粘土貼土坑内から出土している。

所見 硬化した黒色土面の北部に水溜用の粘土貼土坑が構築されている。出土した管状土鍾などから、漁業に関連する作業場として機能した可能性が高い。時期は、出土した4402や隣接している第83号建物跡と同時期の17世紀前半と考えられる。



第541图 第98号整地面实测图



第542图 第98号整地而出土遺物実測図

第98号整地面出土遺物観察表 (第542図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4396	小皿	土師質土器	[9.4]	(2.4)	-	長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部内・外面コロナナ 内面縦目着	覆土中	20%
4397	皿	土師質土器	[11.6]	3.8	[5.6]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面渦巻状のナデ	SN20内	30%
4398	皿	土師質土器	[10.0]	3.4	[5.0]	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転未切り	覆土中	20%
4399	皿	土師質土器	[10.8]	(3.0)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内・外面コロナナ 内・外面縦目着	1次面黒色土中・黒色土下	15%
4400	皿	土師質土器	-	(1.5)	[5.6]	雲母	にぶい赤褐	普通	内底面横ナデ	1次面黒色土上面	20%
4401	皿	土師質土器	-	(2.3)	[7.0]	長石・雲母・赤色粒子	明黄褐	普通	底部回転未切り	北西部砂層	20%

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	磁付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4402	皿	陶器	-	(1.1)	6.6	灰白・灰オリーブ	灰釉	高台内輪ドナ痕有り	瀬戸・美濃	SN20内	20% 大量期
4403	天目茶碗	陶器	[11.0]	(4.5)	-	灰白・黒褐	鉄釉	口縁部はほぼ直立する	瀬戸・美濃	2次面黒色土下	10% 大量前期
4404	権鉢	陶器	-	(2.0)	-	橙・赤灰	鉄釉	11条の耀目々	瀬戸・美濃	2次面黒色土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4405	管状土鉢	(3.7)	0.9	0.8	(2.1)	雲母	ほぼ完形 孔径0.3cm 外面ナデ	2次面黒色土下	PL84
4406	管状土鉢	3.8	0.9	0.8	2.0	雲母	完形 孔径0.3cm 外面ナデ	北西部砂層	PL84
4407	管状土鉢	(3.7)	0.9	0.9	(3.0)	長石	孔径0.3cm 外面ナデ	北西部砂層	PL84
4408	管状土鉢	(3.9)	1.0	0.9	(2.5)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	2次面黒色土中	PL84
4409	管状土鉢	(4.1)	0.9	0.8	(2.5)	長石・雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	北西部砂層	PL84
4410	管状土鉢	(4.1)	0.8	0.8	(2.2)	長石・雲母	孔径0.2cm 外面ナデ	1次面黒色土中	PL84
4411	管状土鉢	(4.5)	0.9	0.8	(2.6)	長石・雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	北西部砂層	PL84
4412	管状土鉢	(4.4)	0.7	0.7	(2.1)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	1次面黒色土上面	PL84
4413	管状土鉢	(4.5)	0.8	0.8	(2.0)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	2次面黒色土中	PL84
4414	管状土鉢	(2.4)	0.8	0.7	(1.2)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	北部砂層	
4415	管状土鉢	(2.3)	0.9	0.8	(1.1)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	北西部砂層	
4416	管状土鉢	(2.9)	0.9	0.8	(1.8)	長石・雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	北西部砂層	
4417	砥石	(6.0)	2.8	1.3	(96.2)	凝灰岩	砥面4面 砥面に擦痕	2次面黒色土上面	
4418	砥石	(5.4)	3.6	1.4	(42.0)	凝灰岩	砥面4面 断面四角形	SN20内	
4419	砥石	(9.8)	3.4	1.6	(79.5)	凝灰岩	砥面2面 側面整形時の加工痕有り	2次面黒色土下	
4420	砥石	(12.5)	3.3	1.6	(90.4)	凝灰岩	砥面4面 砥面やや湾曲 整形時の加工痕有り	北西部砂層	
4421	小刀	(8.2)	1.6	0.1	(9.3)	鉄	刃部・茎部の一部欠損 両側々	北西部砂層	
4422	小刀	(12.8)	1.3	0.2~0.3	(13.5)	鉄	茎部の一部欠損 両側	2次面黒色土下	
4423	包丁	(7.4)	4.2	0.2	(13.7)	鉄	刃部一部・茎部遺存	2次面黒色土中	PL89
4424	釘	11.0	0.7	0.8	(24.7)	鉄	一部欠損 断面長方形	1次面黒色土中	PL93
4425	耳金々	10.3	0.7	0.8	(46.4)	鉄	断面長方形 L字状に屈曲 先端部欠損	2次面黒色土上面	PL92

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4426	聖宋元寶	2.45	0.60	0.13	4.28	1101	銅	篆書	2次面黒色土中	

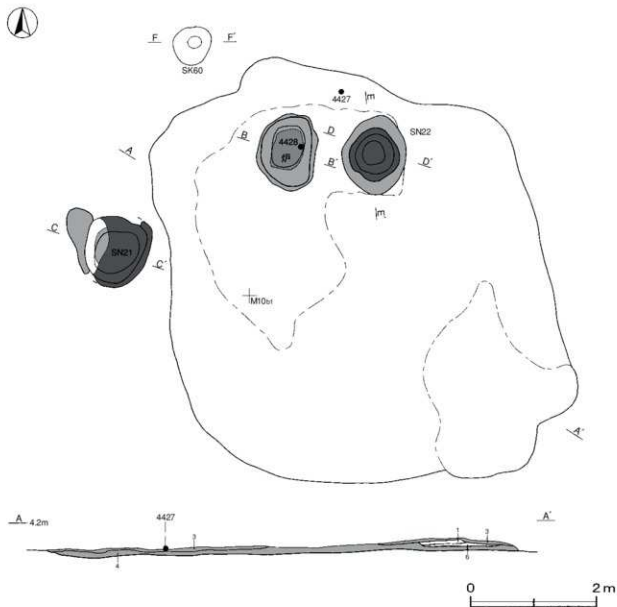
## 第99号整地面 6区HK-25 (第534~546図)

位置 調査区中央部のM10a1区を中心に位置している。西側には第89号整地面が隣接している。

確認状況 表砂を約3.1m除去し、標高約3.9mで黒色土面が確認された。黒色土面から炉、粘土貼土坑が確認された。

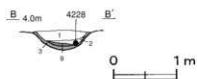
規模と施設 黒色土の範囲は、長軸7.7m、短軸6.3mの不定形で、長軸方向はN-59°-Eである。付属施設として、炉1基、粘土貼土坑2基、土坑1基が構築されている。

生活面 はほぼ平坦で、厚さ10~15cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第3層は黒色土A層、第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。炉の南部と南東部から硬化した黒色土面が確認されている。



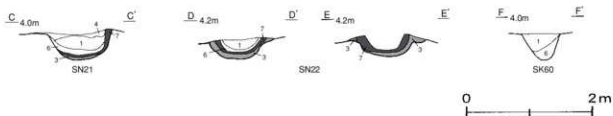
第543図 第99号整地面実測図

炉 (第544図) 北部の黑色土面に位置し、第22号粘土貼土坑と隣接している。厚さ3～6cmの黑色土を貼り付けて構築され、覆土下層から第9層の灰が検出されている。



第544図 第99号整地面炉土層図

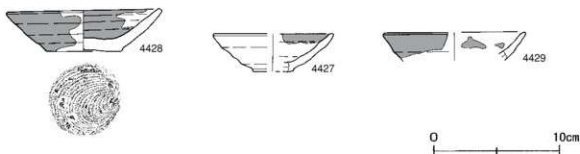
土坑 (第545図) 第21号粘土貼土坑は西部の砂層、第22号粘土貼土坑は炉の東部、第60号土坑は北西部の砂層に位置している。第21号粘土貼土坑は厚さ2～6cmの粘土、第22号粘土貼土坑は厚さ3～14cmの粘土を貼り付けて構築されている。粘土貼土坑及び土坑の覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第4・6層の黑色土B・D層が人為堆積した層である。



第545図 第99号整地面土層土層図

**遺物出土状況** 土師質土器片10点(皿)が出土している。4427は北部の黒色土上面, 4428は炉内から出土している。

**所見** 炉と粘土貼土坑が隣接し, その周囲から硬化した黒色土面が確認された。建物跡を想定したが, 出土遺物が少なく周囲から柱穴も検出されていないことから整地面と判断した。時期は, 第89号整地面とはほぼ同時期の16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第546図 第99号整地面出土遺物実測図

第99号整地面出土遺物観察表 (第546図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4427	小皿	土師質土器	[9.6]	3.0	[3.2]	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面コロナテ 内面縦行直	北部黒色土上面	10%
4428	皿	土師質土器	12.0	3.4	6.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面満色き状のナテ 内・外面縦行直	炉内	95% PL78
4429	皿	土師質土器	[11.2]	(2.2)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面コロナテ 内・外面縦行直	覆土中	20%

#### 第100号整地面 6区HK-32 (第547~549図)

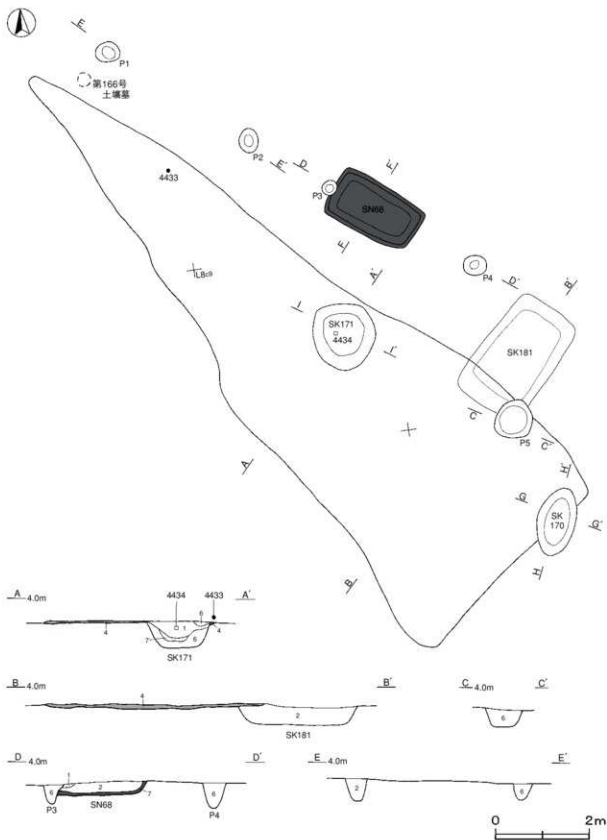
**位置** 調査区北部のL8c9区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.3m除去し, 標高3.5~3.7mで黒色土面が確認された。黒色土面から粘土貼土坑, 土坑, 主に南西に並ぶ柱穴が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は, 長軸14.5m, 短軸5.1mの不定形で, 長軸方向はN-37°-Wである。付属施設として, 粘土貼土坑1基, 土坑3基が構築されている。

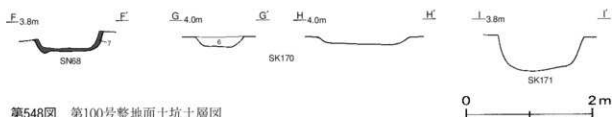
**生活面** 北西部に向かって緩やかに傾斜している。厚さ3~12cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の4層は黒色土B層で, 締まりはやや弱い。

**ピット** 5カ所。P1~P4は深さ35~56cmで, 南西軸に並ぶ柱穴と考えられる。P5は深さ42cmで, 黒色土面の南東部に位置しているが, 性格は不明である。



第547图 第100号整地面实测图

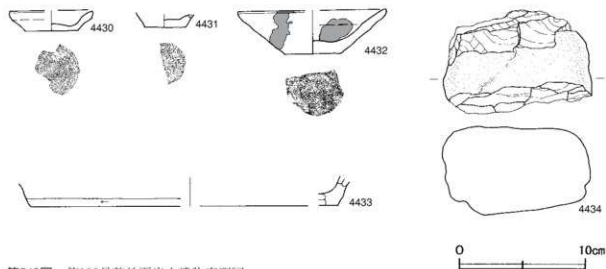
土坑 (第548図) 第68号粘土貼土坑は北部の砂層、第170・171号土坑は黑色土面に位置している。第181号土坑は、黑色土面の下層から確認されている。粘土貼土坑は厚さ7cmの粘土を貼り付けて構築されている。粘土貼土坑及び土坑の覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積し、第6層の黑色土D層と第7層の粘土ブロックを主体とした人為堆積の層である。



第548図 第100号整地面土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片5点(小皿3, 皿1, 鍋1), 石核1点が出土している。4433は北部の黑色土面から出土している。第171号土坑内から出土した4434は石英の石核で、火打石の原石と考えられる。

所見 南西軸に並ぶP1～P4は柵列の跡と考えられる。生活面の縛まりはやや弱い。黑色土面の規模から屋外の作業場と判断した。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから16世紀末から17世紀前半と考えられる。



第549図 第100号整地面出土遺物実測図

第100号整地面出土遺物観察表 (第549図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4430	小皿	土師質土器	[6.6]	1.6	[4.2]	長石	明赤褐	普通	底部回転糸切り	覆土中	40%
4431	小皿	土師質土器	-	(1.1)	[3.2]	雲母	橙	普通	底部回転糸切り 摩滅激しい	覆土中	40%
4432	皿	土師質土器	[11.8]	3.4	4.4	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り 内・外面窪付着	覆土中	40%
4433	内耳鍋	土師質土器	-	(2.3)	[24.4]	長石・赤色粒子	橙	普通	内面ナデ 体部下端へラ削り	北部黑色土上面	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
4434	石核	(8.3)	11.8	7.1	(859.0)	石英	断面楕円形	両端部剥離面	火打石の原石	SK171内	

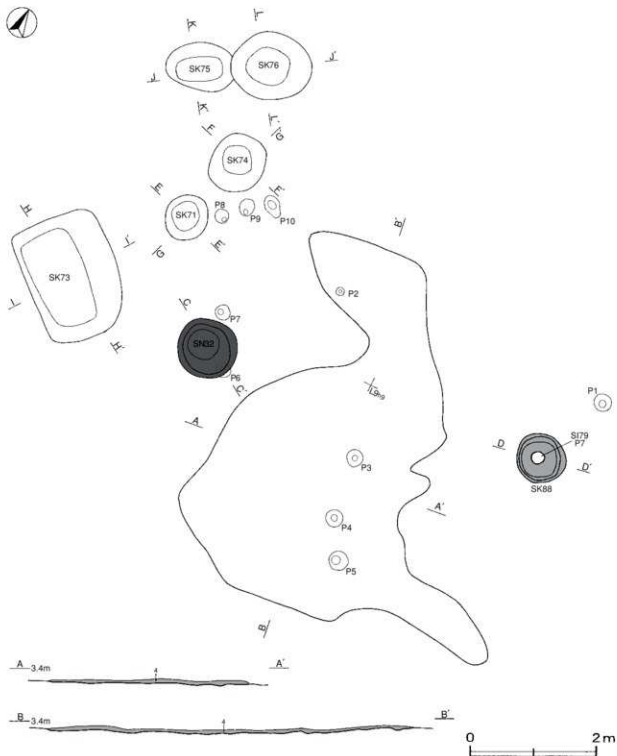


第101号整地面 6区HK-26 (第550~552図)

位置 調査区北部のL9h9区を中心に位置している。

重複関係 上面の第79号建物のP7に掘り込まれている。

確認状況 第79号建物跡を約0.8m掘り下げた。標高約3.3mで黒色土面が確認された。黒色土面の周囲の砂層から粘土貼土坑、土坑が確認された。さらに黒色土面の下から、柱穴10か所が確認された。



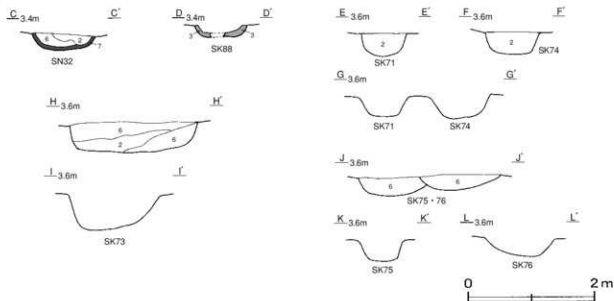
第550図 第101号整地面実測図

**規模と施設** 黒色土の範囲は、長軸6.0m、短軸3.5mの不定形で、長軸方向はN-20°-Wである。付属施設として、粘土貼土坑1基、土坑6基が構築されている。

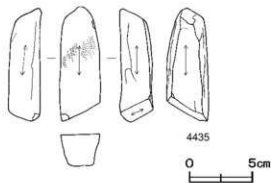
**生活面** はほぼ平坦で、厚さ3～6cmの黒色土を貼り付けて構築されている。土層断面図中の第4層は黒色土B層で、締まりは普通である。

**ピット** 10か所。深さ20～41cmで、配列に規則性はなく、性格は不明である。

**土坑** (第551図) 第32号粘土貼土坑、第71・73～76号土坑は北西部、黒色土で構築された第88号土坑は東部の砂層に位置している。第32号粘土貼土坑は厚さ4～7cmの粘土、第88号土坑は厚さ5～10cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第551図 第101号整地面土坑土層図



第552図 第101号整地面出土遺物実測図

**遺物出土状況** 石器1点(砥石)が、覆土から出土している。

**所見** 黒色土面と隣接して粘土貼土坑と土坑が確認されているが、柱穴の配列から上屋構造が想定できないことから屋外の作業場と判断した。時期は、第79号建物跡の下層から確認されていることから、16世紀後半と考えられる。

第101号整地面出土遺物観察表 (第552図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4435	砥石	9.0	2.3	2.6	114.1	凝灰岩	砥面5面 砥面に溝痕・整形時の加工痕有り	覆土中	

表49 5・6・8b区整地面一覽表

番号	旧遺構番号	位置	長軸・長径方向	黒色土			付属施設	ピット	備考 新旧関係 旧→新	
				標高 (m)	視面 長軸径 (m)	視面 短軸径 (m)				形状
77	5区HK1	K10j7	N-48°-E	5.3	8.2	5.0	不定形	4-12	SN1・2・3	-
78	5区HK2	K10g7	N-85°-W	45-47	13.8	10.8	不定形	10-20	SN4, SK1・2・4・5	1
79	8b区HK2	K9j3	N-16°-W	38-40	5.1	3.4	不定形	10-20	炉1・2, SK14A・14B	- 本跡→SK15
80	8b区HK3	L9g9	N-61°-W	38-41	11.8	7.1	不定形	16-30	-	-
81	8b区HK5	L10e4	N-47°-W	51-52	6.9	5.5	不定形	7-16	SN18, SK13・20・22	-
82	8b区HK6	K10i4	N-5°-E	48-52	8.2	(3.9)	[不定形]	15-25	SK10・16・27	5
83	8b区HK7	L10e2	-	4.2	4.2	4.2	-	6-18	SK26	-
84	8b区HK8	K10j1	N-64°-E	41-47	17.1	(11.8)	[不定形]	8-60	炉, SN3・5・6, SK49, SM72	- 本跡→SX16
85	8b区HK11	K10j0	-	39-43	4.2	4.2	-	6-17	SN8-10, SK31・55・56	6
86	8b区HK13	L9d5	-	3.6	4.2	4.2	-	10-20	SK87・88・99・100・117	-
87	6区HK1	L10j2	N-60°-E	4.6	2.4	1.4	不定形	2-8	-	-
88	6区HK8	L9f19	N-18°-W	37-39	5.8	4.9	不定形	8-28	炉, SN6, SK6	-
89	6区HK14	M9a9	N-81°-W	37-39	8.1	4.5	不定形	6-11	-	- 本跡→HK90・SI79
90	6区HK15	M9c9	N-61°-W	36-39	8.4	5.5	不定形	4-12	-	- HK89→本跡→SI79
91	6区HK31	M8j9	N-63°-E	3.3	3.5	3.4	不定形	3-11	SN54・60, SK129・145	- 本跡→SI85
92	6区HK2	L10f3	N-80°-E	42-45	7.5	4.9	不定形	5-22	-	- HK93→本跡
93	6区HK3	L10f1	N-41°-E	38-42	11.5	8.3	不定形	5-28	炉, SN3	- 本跡→HK92
94	6区HK5	L10d4	N-81°-E	42-48	3.4	2.4	不定形	8-15	SN7	-
95	6区HK4	L10f5	N-31°-W	5.0	1.9	1.6	不定形	4-10	-	-
96	6区HK9	L10f3	N-35°-W	3.6	6.6	6.5	不定形	5-15	-	8 本跡→SI80
97	6区HK11	L10e2	N-10°-W	3.9	8.2	4.3	不定形	4-8	SN73, SK13	-
98	6区HK17	N9d2 2次面	N-24°-E	4.1	12.2	8.5	不定形	4-8	SN14	-
99	6区HK25	M10a1	N-59°-E	3.9	7.7	6.3	不定形	10-15	炉, SN21・22, SK60	-
100	6区HK32	L8c9	N-37°-W	35-37	14.5	5.1	不定形	3-12	SN68, SK170・171・181	5
101	6区HK26	L9h9	N-20°-W	3.3	6.0	3.5	不定形	3-6	SN32, SK71・73-76・88	10 本跡→SI79

表50 5・6・8b区整地面炉一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (出番号)
					長軸径 (m)	短軸径 (m)	深さ (cm)							
HK79	炉1	K9j3	3.8	N-65°-W	1.0	0.7	20	長方形	15-17	-	縦斜	皿状	(8b区SK3)	
	炉2	K9j3	3.6	N-7°-W	(0.8)	0.7	8	[楕円形]	10-14	-	縦斜	皿状	本跡→SK14B (8b区SK4)	
HK84	炉	K10j9	4.2	-	1.0	1.0	11	円形	-	-	縦斜	皿状	SN3・SK49→本跡 (8b区SK25)	
HK88	炉	L9f19	4.0	-	0.9	0.9	10	方形	3-8	-	縦斜	皿状	(6区SK12)	
HK93	炉	L10e4	4.3	N-39°-E	1.1	0.9	8	楕円形	6	-	縦斜	皿状	(6区SK4)	
HK99	炉	M10a1	3.8	N-16°-E	1.2	0.9	25	楕円形	3-6	-	縦斜	皿状	土師質土器(皿) (6区SK51)	

表51 5・6・8b区整地面粘土貼土坑一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (出番号)
					長軸径 (m)	短軸径 (m)	深さ (cm)							
HK77	SN1	K10i5	5.3	-	0.8	(0.7)	16	[円形]	5-9	5-8	縦斜	皿状	本跡→SN2	
	SN2	K10i6	5.3	N-40°-E	1.0	0.8	7	楕円形	8-14	4-7	縦斜	皿状	SN1→本跡	
	SN3	K10e6	5.3	N-62°-W	1.9	1.3	48	隅丸長方形	3-7	4-8	縦斜	平坦	-	
HK78	SN4	K10g6	4.4	-	1.6	(0.9)	30	[円形]	6-10	3-5	縦斜	[平坦]	(5区SK3)	
HK81	SN18	L10e3	4.8	-	3.0	(1.1)	80	[円形]	-	14-33	縦斜	平坦	-	
HK84	SN3	K10j9	4.2	N-23°-W	0.9	(0.7)	-	楕円形	6	16	-	平坦	土師質土器(皿)	本跡→炉
	SN5	K10i1	4.3	-	1.1	1.0	28	方形	-	6	-	縦斜	平坦	SN6→本跡→SX16
SN6	K10i1	4.3	N-65°-W	2.5	1.2	46	長方形	-	4-6	外傾	平坦	本跡→SN5→SX16		

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(距)(m)	短軸(距)(m)	深さ(cm)							
HK85	SN 8	K10j1	4.0	N-29°-E	2.4	1.4	45	隅丸長方形	3-7	2-8	縦斜	平土	土師貫土器(皿)	本跡→SK56
	SN 9	L9j9	4.0	N-56°-W	2.4	1.3	71	隅丸長方形	3-5	4-10	外傾	平土	瓦葺 宝篋印塔	
	SN 10	K10h0	4.1	N-48°-E	0.7	0.5	12	楕円形	2-3	3-5	縦斜	平土		
HK88	SN 6	L9f9	3.6	N-38°-W	1.9	1.5	44	楕円形	3-7	3-12	傾・傾	平土		
HK91	SN 54	M8j0	3.3	N-52°-E	1.2	1.0	26	隅丸長方形	8-15	2-5	縦斜	平土		
	SN 60	M8j9	3.2	N-49°-W	0.9	0.6	5	不整形円形	-	4-8	縦斜	平土		
HK93	SN 3	L10e4	4.4	-	0.8	0.8	20	円形	2-5	3-14	外傾	平土		
HK94	SN 7	L10d4	4.3	N-30°-W	0.8	0.6	45	隅丸長方形	-	3-7	外傾	平土		
HK97	SN 73	L10h1	3.8	-	0.7	0.7	20	不整形円形	-	2-4	縦斜	平土		(6区 SK15)
HK98	SN 14	N9c2	4.0	N-42°-E	2.3	1.6	50	楕円形	2-4	4-6	縦斜	平土		本跡→本跡
	SN 20	N9c2	3.8	N-48°-W	(1.9)	1.2	40	[楕円形]	3-7	4-11	縦斜	平土	経緯土 踏土 瓦	本跡→SN14
HK99	SN 21	M9a0	3.8	N-18°-E	(1.2)	1.0	38	[楕円形]	3	2-6	傾・傾	平土		
	SN 22	M10a1	3.9	N-9°-E	1.3	1.0	24	楕円形	3-6	3-14	縦斜	平土		
HK100	SN 68	L8b9	3.6	N-50°-W	2.0	1.1	25	長方形	-	7	外傾	平土		
HK101	SN 32	L9b8	3.4	-	1.0	1.0	20	円形	-	4-7	縦斜	平土		

表52 5・6・8b区整地面土坑一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			形状	黒色土厚(cm)	粘土厚(cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(距)(m)	短軸(距)(m)	深さ(cm)							
HK78	SK 1	K10g5	4.4	N-10°-E	0.8	0.6	34	長方形	-	-	縦斜	平土		
	SK 2	K10h5	4.4	N-20°-E	1.0	0.9	25	長方形	-	-	傾・傾	平土		
	SK 4	K10g7	4.6	N-14°-E	1.8	1.5	34	楕円形	-	-	傾・傾	平土		
HK79	SK 5	K10h7	4.6	N-19°-E	2.0	1.6	44	楕円形	-	-	縦斜	平土		
	SK14A	L9a3	3.5	N-81°-E	0.8	0.6	20	楕円形	-	-	縦斜	平土		SK14B→本跡
HK81	SK14B	L9j3	3.6	-	0.8	(0.7)	18	[円形]	-	-	縦斜	平土		92→本跡→SK14A
	SK 13	L10h4	5.0	-	1.3	1.3	46	円形	5-16	-	縦斜	平土		
HK82	SK 20	L10a2	4.6	N-29°-W	1.7	1.4	48	楕円形	-	-	縦斜	平土		
	SK 22	L10h3	4.2	N-10°-W	0.9	0.8	45	楕円形	-	-	縦斜	平土		
HK83	SK 10	K10i4	4.8	N-17°-W	1.4	1.0	58	不整形円形	-	-	縦斜	平土		
	SK 16	K10i4	4.8	N-24°-W	1.3	1.2	40	楕円形	-	-	傾・傾	平土		
HK84	SK 27	K10i3	4.5	-	1.3	1.2	50	隅丸長方形	-	-	傾・傾	平土		
	SK 26	L10c1	4.2	-	1.3	1.3	40	円形	-	-	外傾	平土		
HK85	SK 49	K10j9	4.2	-	1.1	(0.9)	14	[円形]	4-8	-	縦斜	平土		本跡→印
	SK 31	K10i0	4.2	N-39°-W	1.9	1.4	85	楕円形	-	-	傾・傾	平土		
HK86	SK 55	K10i0	4.2	N-36°-E	0.7	[0.6]	17	[楕円形]	5-10	-	縦斜	平土		
	SK 56	K10j0	4.0	N-29°-E	1.2	1.0	25	長方形	-	-	縦斜	平土		SN 8→本跡
HK87	SK 87	L9c5	3.6	N-33°-E	1.4	0.9	30	長方形	6-21	-	傾・傾	平土		SK117→本跡
	SK 88	L9d5	3.6	N-33°-E	1.5	0.9	26	長方形	-	-	縦斜	平土		踏土*
HK88	SK 99	L9e4	3.6	N-33°-E	(0.5)	0.4	25	[楕円形]	-	-	縦斜	平土		本跡→SK100
	SK100	L9e4	3.6	N-38°-E	0.9	0.5	14	隅丸長方形	-	-	縦斜	平土		SK99→本跡
HK89	SK117	L9c5	3.6	N-36°-E	1.0	(0.4)	20	隅丸長方形	-	-	縦斜	平土		本跡→SK87
	SK 6	L9f9	3.8	N-2°-E	0.8	0.7	8	楕円形	2-5	-	縦斜	平土		
HK91	SK129	N8a9	3.3	-	1.4	1.4	35	円形	-	-	縦斜	平土		
	SK145	M8i9	3.3	N-40°-E	0.9	0.8	23	楕円形	-	-	縦斜	平土		
HK97	SK 13	L10h2	3.9	N-25°-W	1.4	1.3	46	楕円形	12-20	-	縦斜	平土		
HK99	SK 60	M9a0	3.9	-	0.6	0.6	41	円形	-	-	傾・傾	平土		
HK100	SK170	L8d0	3.7	N-23°-E	1.5	0.8	15	楕円形	-	-	縦斜	平土		SI96→本跡
	SK171	L8c9	3.5	-	1.4	1.4	54	円形	-	-	外傾	平土		
HK101	SK181	L8c0	3.6	N-40°-E	2.6	1.6	36	長方形	-	-	縦斜	平土		
	SK 71	L9g8	3.3	-	0.7	0.7	35	円形	-	-	外傾	平土		石椁
HK101	SK 73	L9b7	3.3	N-42°-W	2.0	1.5	48	長方形	-	-	傾・傾	平土		
	SK 74	L9g8	3.4	N-15°-E	1.0	0.9	35	楕円形	-	-	外傾	平土		
	SK 75	L9g7	3.4	N-58°-E	(1.0)	0.8	34	[楕円形]	-	-	縦斜	平土		本跡→SK76
	SK 76	L9g8	3.4	N-69°-E	1.3	1.1	24	楕円形	-	-	縦斜	平土		SK75→本跡
	SK 88	L9g9	3.3	-	0.8	0.8	12	円形	5-10	-	縦斜	平土		本跡→SI79

表53 5・6・8b区整地面貝集積地一覽表

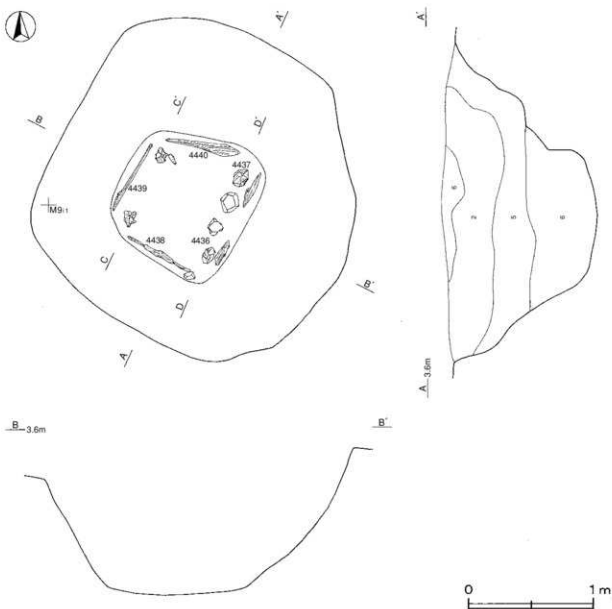
番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規 模			形状	黒土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
HK84	SM 72	K10i1	4.3	N-13°-W	0.8	(0.6)	-	〔不整形状〕	-	-	-	-	土師質土器(皿)	新田関係 旧→新 (旧番号)

(3) 井戸跡

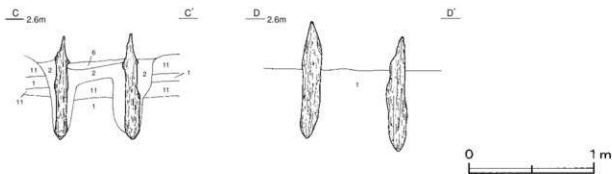
**第3号井戸跡** 6区SK-144 (第553~555図)

位置 調査区中央部のM9i1区に位置している。

確認状況 第91号建物跡を約0.4m除去した。標高約3.4mで確認された。



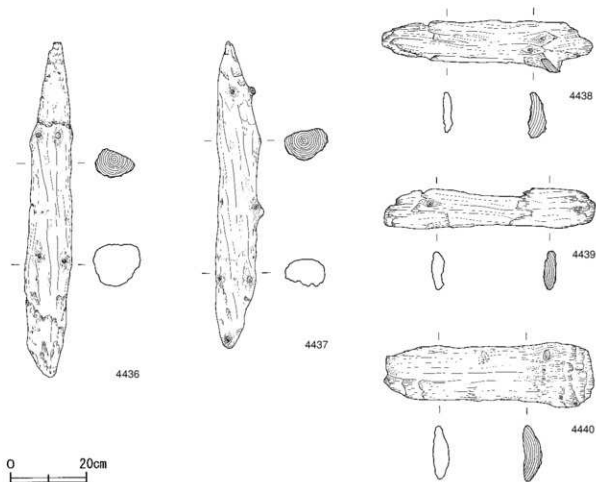
第553図 第3号井戸跡実測図(1)



第554図 第3号井戸跡実測図(2)

**規模と形状** 平面形は一辺約2.7mの不整形で、深さは1.2mである。断面形は漏斗状を呈している。覆土は、第2層の砂B層と第5・6層の黒色土C・D層が堆積している。底面から、井戸枠の一部が確認されている。規模は、一辺約1.0mの方形で、確認できた木杭の上面から井戸の底面までの深さは約0.4mである。井戸枠は、長さ0.8~1.0mの木杭を四隅に打ち込み、その外側に、平らな面を内側に向けた柱目の横板をあてて構築されている。木杭及び横板は、加工痕が認められないほど腐食している。土層断面図中の第11層は、砂粒が2~5mmの荒い砂層で、地下水脈の跡と考えられる。

**遺物出土状況** 井戸枠以外の遺物は出土していない。4436・4437は木杭、4438~4440は横板である。



第555図 第3号井戸跡出土遺物実測図

第3号井戸跡出土遺物観察表 (第555図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
4436	木杭	88.7	最大径12.4		2440.0	松*	丸木材 両端部先細り状に腐食	南部	
4437	木杭	81.2	最大径13.8		1770.0	松*	丸木材 両端部先細り状に腐食	東部	
4438	横板	55.8	13.8	3.8	310.0	松*	板目材 加工痕不明	南西部	
4439	横板	56.4	10.5	3.4	310.0	松*	板目材 加工痕不明	北西部	
4440	横板	57.1	17.3	4.8	880.0	松*	板目材 加工痕不明	北東部	

**所見** 調査第6区からは本跡のみで、遺跡全体でも3基しか確認されていない。井戸枠の樹種同定はできなかったが、第1・2号井戸跡と同様の二葉松類である可能性が高い。第91号建物跡の下層から確認されていることから、全体の黒色土面を構築する以前に機能していた井戸と考えられる。時期は、検出された層位からみて、南西部に位置している第91号整地面と同時期の16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

#### (4) 畝状遺構

黒色土面から、平行する畝状の高まりが2か所確認された。以下、その概要を記述する。

#### 第2号畝状遺構 6区第1号畝状遺構 (第556～558図)

**位置** 調査区北部のL8h9～M9a2区に位置している。東側に第88号建物跡、南側に第3号畝状遺構が隣接している。

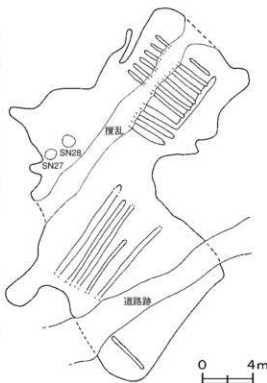
**確認状況** 表砂を約3.2m除去した、標高約3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から、北西軸と平行する畝8本と畝間9本、畝の東部には畝を区画する溝が確認された。

**規模と施設** 黒色土の範囲は、南北29.6m、東西17.5mで、畝状遺構の範囲は、南北8.6m、東西7.1mである。畝及び畝間の長さは、3.0～5.5mである。畝幅は30～50cm、畝間幅は20～50cmで、畝の高まりは認められないが畝間からの畝高は4～12cmである。

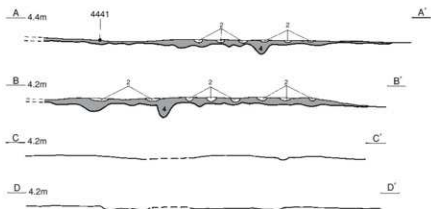
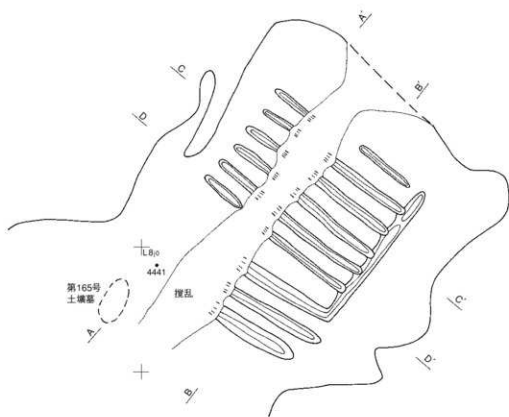
**堆積状況** 第4層の黒色土B層を主体とした、厚さ10～44cmの黒色土である。第2層は、畝間に堆積した砂B層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片2点(小皿,皿),土製品1点(円筒埴輪)が出土している。4441は中央部の黒色土中、4442・4443は覆土からそれぞれ出土している。

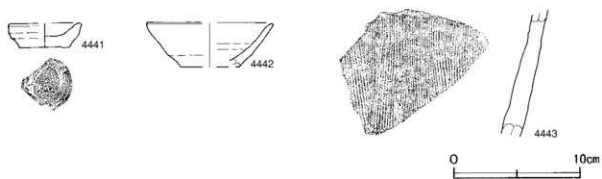
**所見** 植物珪酸体分析では、イネ科作物を含む分類群のイネ属、キビ属などが検出されている。しかし、同じ調査区内の黒色土においても近似値の分析結果であることから、ここで作物を栽培していた可能性は認められるものの、畑であるということには至っていない。詳細は、付章1・2を参照されたい。



第556図 第2・3号畝状遺構・道路跡確認図



第557图 第2号畝状遺構実測図



第558图 第2号畝状遺構出土遺物実測図



第2号畝状遺構出土物観察表 (第558図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4441	小皿	土師質土器	[5.4]	1.9	4.0	灰石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	中央部黒色土中	50%
4442	皿	土師質土器	[10.0]	4.5	[4.6]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面口クロナデ	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4443	円筒埴輪	(10.0)	-	1.3	(177.7)	灰石・石灰	内面横位のナデ 外面縦位のハケ目	覆土中	

第3号畝状遺構 6区第2号畝状遺構 (第559～561図)

位置 調査区北部のL8j8～M9e1区に位置している。北側に第88号建物跡が隣接している。

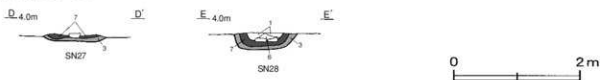
重複関係 道路に掘り込まれている。

確認状況 表砂を約3.2m除去した、標高約3.8mで黒色土面が確認された。黒色土面から、北東軸に平行する畝4本と畝間5本、粘土貼土坑2基が確認された。

規模と施設 黒色土の範囲は、南北29.6m、東西17.5mで、畝状遺構の範囲は、南北9.5m、東西8.5mである。畝及び畝間の長さは、5.0～8.5mである。畝幅は50～90cm、畝間幅は20～55cmで、畝の高まりは認められないが畝間からの畝高は5～10cmである。また、東部からは、北西軸に平行する長さ3.6m、幅30cmほどの畝間1本が確認されている。

堆積状況 第4層の黒色土B層を主体とした、厚さ10～35cmの黒色土である。

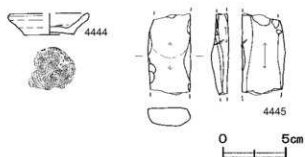
土坑 (第559図) 第27・28号粘土貼土坑が黒色土面の西部に位置している。第27号粘土貼土坑は厚さ4～8cm、第28号粘土貼土坑は厚さ10～12cmの粘土を貼り付けて構築されている。どちらの底面にも、平らな砂岩が貼り付けられている。



第559図 第3号畝状遺構粘土貼土坑土層図

遺物出土状況 土師質土器片1点(小皿)、石器1点(砥石)が出土している。4444は東部の黒色土中、4445は覆土から出土している。

所見 畝及び畝間が北東軸に並ぶ畝状遺構である。最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。

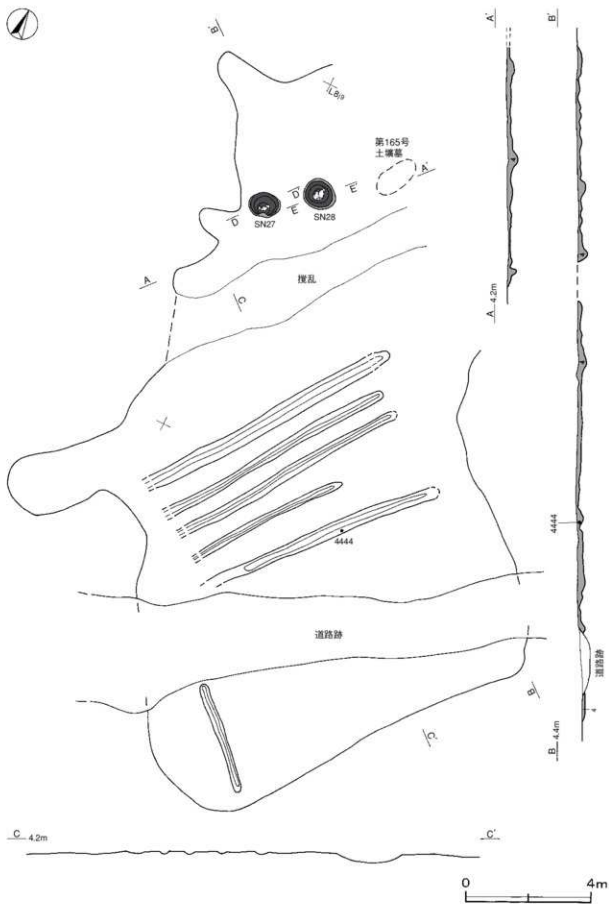


第560図 第3号畝状遺構出土物実測図

第3号畝状遺構出土物観察表 (第560図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4444	小皿	土師質土器	[6.1]	1.8	3.9	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	東部黒色土中	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4445	砥石	(6.5)	3.4	1.4	(42.2)	凝灰岩	紙面3面 紙面湾曲	覆土中	



第561図 第3号畝状遺構実測図

表54 5・6・8b区畝状遺構一覽表

番号	遺構番号	位置	黒色土			形状	厚さ (cm)	畝幅 (cm)	畝間幅 (cm)	畝高 (cm)	付属施設	備考
			標高 (m)	範囲(最大値) 南北(m) 東西(m)								
1	第2号畝状遺構	L 8 h9-M 9 a2	3.8	29.6	17.5	不定形	10~44	30~50	20~50	4~12		
2	第3号畝状遺構	L 8 j8-M 9 e1	3.8				不定形	10~35	50~90	20~55	5~10	SN 27・28

表55 畝状遺構内粘土土坑一覽表

番号	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規 模			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
					長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
第3号 畝状 遺構	SN 27	M 8 a8	3.8	N-66°E	1.0	0.8	4	楕円形	3~7	4~8	緩斜	平坦		
	SN 28	L 8 j9	3.8	-	1.0	1.0	14	円形	5~9	10~12	緩斜	平坦		

## (5) 炉跡

建物跡や整地面に組み込まれない炉跡9基が確認された。ここでは、遺物の伴う1基を取り上げ、それ以外は、実測図と一覽表で掲載する。なお、これらの遺構の時期は、確認面の層位からおおむね16世紀末から17世紀前半頃と考えられる。

## 第14号炉跡 6区SK-121 (第562図)

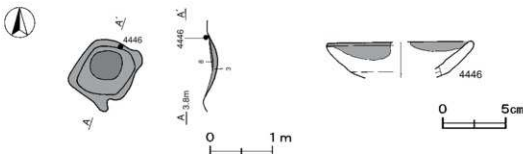
**位置** 調査区中央部のM9h5区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.1m除去し、標高約3.9mから確認された。

**規模と形状** 長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸長方形で、深さは12cmである。長軸方向はN-31°-Eである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。厚さ3~6cmの黒色土を貼り付けて構築されている。底面から、第8層の焼砂が検出されている。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)が、底面から出土している。

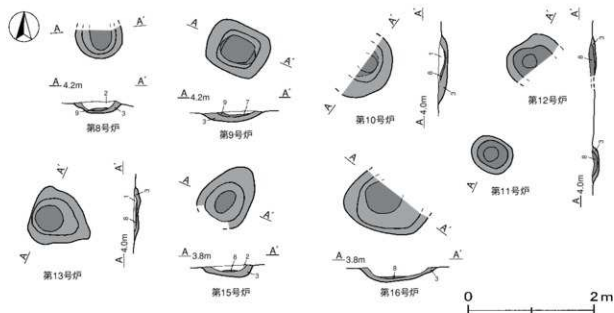
**所見** 炉の周囲に黒色土面や柱穴が確認されなかったことから、屋外炉の可能性が高い。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。



第562図 第14号炉跡・出土遺物実測図

第14号炉跡出土遺物観察表 (第562図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4446	皿	土師質土器	[11.4]	(2.8)	-	灰石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部内・判面コクロナテ	内・外側葉付	底面 30%



第563図 炉跡実測図

表56 5・6・8b区炉跡一覧表

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規 模			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
1	8b	第8号炉跡	K9h0	4.1	-	0.7	(0.4)	16	[円形]	3~8	-	緩斜	平坦		(SK69)
2	6	第9号炉跡	M9j6	4.0	N-62°-W	1.0	0.8	10	長方形	8	-	緩斜	皿状		(SK92)
3	6	第10号炉跡	M9e6	3.8	-	1.1	(0.4)	10	[円形]	4~12	-	緩斜	皿状		(SK95)
4	6	第11号炉跡	N9a6	3.8	N-56°-W	0.7	0.6	6	楕円形	2~5	-	緩斜	皿状		(SK115)
5	6	第12号炉跡	N9a6	3.9	N-47°-W	(0.9)	(0.5)	9	[不定形]	2~4	-	緩斜	皿状		(SK116)
6	6	第13号炉跡	M9j5	3.8	N-55°-W	1.0	0.9	4	不定形	2~6	-	緩斜	平坦		(SK120)
7	6	第14号炉跡	M9h5	3.9	N-31°-E	1.1	0.9	12	隅丸長方形	3~6	-	緩斜	皿状	土層貫土跡(直)	(SK121)
8	6	第15号炉跡	M9h4	3.8	N-37°-E	(1.0)	0.8	8	[楕円形]	6~13	-	緩斜	平坦		(SK122)
9	6	第16号炉跡	M9g5	3.7	N-51°-W	1.3	(0.7)	20	[楕円形]	4~6	-	緩斜	平坦		(SK128)

#### (6) 粘土貼土坑

建物跡や整地面に組み込まれない粘土貼土坑23基が確認された。規模と形状から長軸(径)1.6~2.1m、短軸(径)1.0~1.4mほどの長方形及び楕円形を呈する6基と、径(長径)が1.0mほどの円形や楕円形又は不定形を呈する17基に分けられる。ここでは、遺物の出土している粘土貼土坑と特徴的な粘土貼土坑の7基について取り上げ、それ以外は実測図と一覧表で掲載する。なお、これらの遺構の時期は、確認面の層位からおおむね16世紀末から17世紀前半と考えられる。

#### 第12号粘土貼土坑 8b区S N-12(第564図)

位置 調査区北部のK9i8区に位置している。

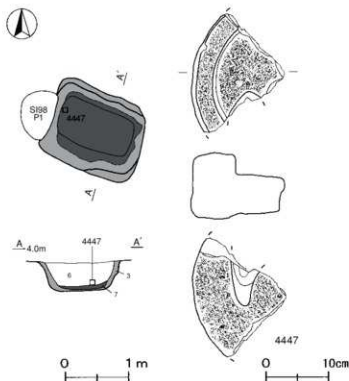
重複関係 第98号建物のP1に上面を掘り込まれている。

確認状況 第85号整地面を約0.4m掘り下げた、標高約3.9mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸は確認できた長さで1.6 m、短軸0.9mの長方形と推定され、深さは34cmである。長軸方向はN-64°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。厚さ3～9cmの黒色土と、厚さ5cmの粘土を貼り付けて構築されている。粘土を貼り付けた部分は、底面のみ遺存している。覆土は、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 石器1点(石臼)が、底面から出土している。

**所見** 黒色土と粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。規模と形状から、建物跡の屋外に配されている水溜用の粘土貼土坑と類似している。時期は、第98号建物跡に掘り込まれていることから、17世紀頃と考えられる。



第564図 第12号粘土貼土坑・出土遺物実測図

#### 第12号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第564図)

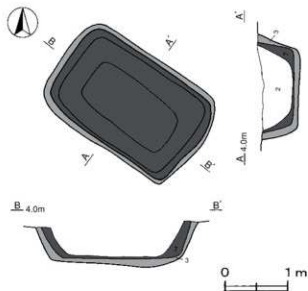
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4447	石臼	[30.6]	10.5	3.6	(2060.0)	安山岩	上臼の破片 すり合わせ部摩滅	底面	PL88

#### 第36号粘土貼土坑 6区SN-36 (第565図)

**位置** 調査区中央部のM8b7区に位置している。  
**確認状況** 表砂を約3.2m除去した、標高約3.8mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸2.6m、短軸1.7mの長方形で、深さは55cmである。長軸方向はN-55°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。厚さ5～12cmの黒色土と、厚さ2～21cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。

**所見** 黒色土と粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。規模と形状から、建物跡の屋外に配されている水溜用の粘土貼土坑と類似している。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀前半と考えられる。

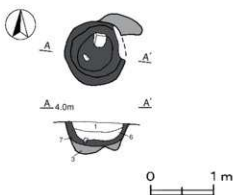


第565図 第36号粘土貼土坑実測図

**第43号粘土貼土坑** 6区SN-43 (第566図)

**位置** 調査区南部のN9d4区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.2m除去した、標高約3.8mの砂層から確認された。



第566図 第43号粘土貼土坑実測図

**規模と形状** 径1.0mほどの円形で、深さは26cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。厚さ14cmほどの黒色土と、厚さ7～10cmの粘土を貼り付けて構築されている。黒色土を貼り付けた部分は、底部のみである。底面には、径20cmほどの平らな石を貼り付けている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**所見** 黒色土と粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。規模と形状から、建物跡や整地面内の炉と併設されている小形の粘土貼土坑と類似している。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀前半と考えられる。

**第57号粘土貼土坑** 6区SN-57 (第567図)

**位置** 調査区中央部のM9j5区に位置している。

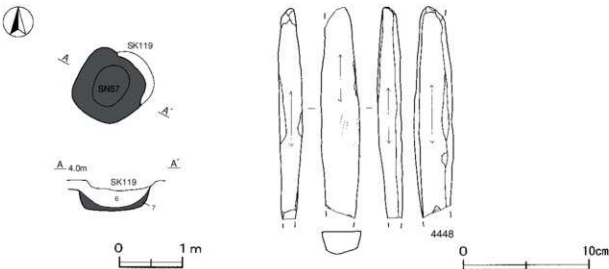
**重複関係** 第119号土坑に上面を掘り込まれている。

**確認状況** 第91号建物跡を約0.2m掘り下げた、標高約3.6mの砂層から確認された。

**規模と形状** 一辺1.1mほどの不整形で、深さは25cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。厚さ4～13cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 石器1点(砥石)が、覆土から出土している。

**所見** 粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。規模と形状から、建物跡や整地面内の炉と併設されている小形の粘土貼土坑と類似している。時期は、第91号建物跡の下層から検出されていることから、16世紀末から17世紀初頭と考えられる。



第567図 第57号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第57号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第567図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4448	瓦石	(16.7)	3.1	1.8	(127.2)	凝灰岩	紙面4面 紙面やや湾曲 紙面に捺痕有り	覆土中	PL86

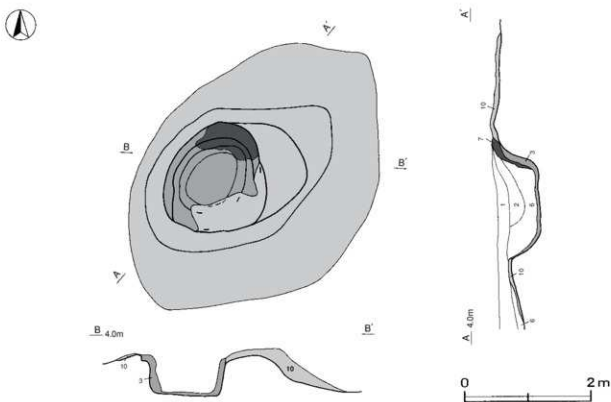
第59号粘土貼土坑 6区S N-59 (第568図)

**位置** 調査区南部のN 9 b5区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.3m除去した、標高約3.7mの砂層から確認された。

**規模と形状** 南東側が崩れている。長径1.9m、短径は確認できた長さで1.4mの楕円形と推定され、深さは67cmである。長径方向はN-40°-Eである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。粘土貼土坑の周囲は、長軸5.2m、短軸3.5m、厚さ6~26cmのローム土を貼り付けて構築されており、東側は緩やかに傾斜している。厚さ5~14cmの黒色土と、厚さ3~9cmの粘土を貼り付けて構築されている。粘土を貼り付けた部分は、北壁のみ遺存している。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**所見** 黒色土と粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。この調査区で、周囲にローム土を貼り付けて構築されている土坑は、本跡のみである。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀前半と考えられる。



第568図 第59号粘土貼土坑実測図

### 第63号粘土貼土坑 6区SN-63 (第569図)

**位置** 調査区中央部のM9e1区に位置している。

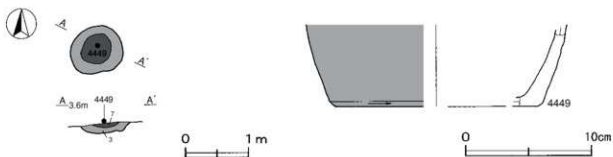
**確認状況** 第3号畝状遺構の東側を約0.5m掘り下げた、標高約3.3mの砂層から確認された。

**規模と形状** 遺構の上面は遺構確認時に削平され、底面のみ遺存している。確認できた規模は、長径0.8m、短径0.7mの楕円形で、底面及び壁の形状は不明である。長径方向はN-66°-Eである。厚さ9cmの黒色土と、厚さ6cmの粘土を貼り付けて構築されている。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(鍋)が、底面から出土している。

**所見** 黒色土と粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。規模と形状から、建物跡や整地面内の炉と併設されている小形の粘土貼土坑と類似している。

時期は、第3号畝状遺構の下層面から検出されていることから、16世紀後半から16世紀末と考えられる。



第569図 第63号粘土貼土坑・出土遺物実測図

### 第63号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第569図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4449	内耳鍋	土師質土器	-	(6.5)	[16.0]	長石・石英・雲母	赤褐色	普通	体部下端へウレリ 外面厚付着	底面	5%

### 第64号粘土貼土坑 6区SN-64 (第570図)

**位置** 調査区中央部のM8e0区に位置している。

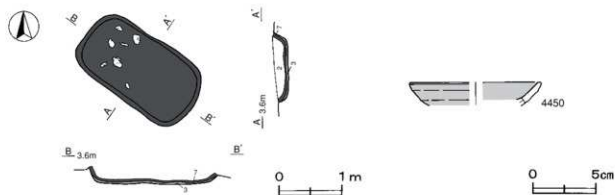
**確認状況** 第3号畝状遺構を約0.4m掘り下げた、標高約3.4mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸2.1m、短軸1.1mの長方形で、深さは15cmである。長軸方向はN-55°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。厚さ3~5cmの黒色土と、厚さ4~6cmの粘土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。

**遺物出土状況** 陶器1点(皿)が覆土、自然礫7点が底面からそれぞれ出土している。

**所見** 黒色土と粘土を貼り付けて構築された粘土貼土坑である。規模と形状から、建物跡や整地面内の炉と併設されている小形の粘土貼土坑と類似している。時期は、第3号畝状遺構の下層面から検出されていることから、16世紀後半から16世紀末と考えられる。

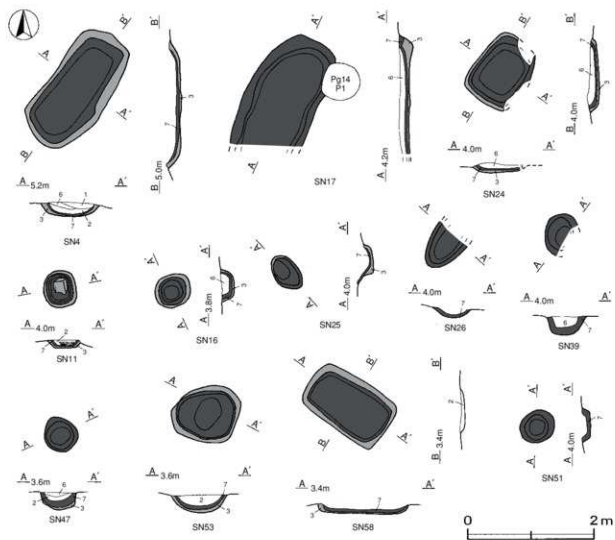




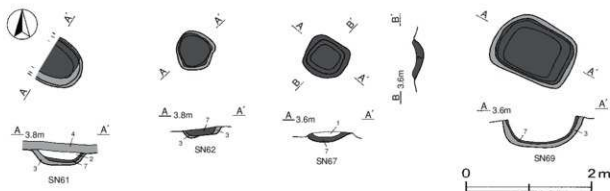
第570図 第64号粘土貼土坑・出土遺物実測図

第64号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第570図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・様式	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4450	丸皿	陶器	[10.4]	(1.8)	-	灰白・灰ナリテ	灰輪	内・外面施釉	瀬戸・美濃	覆土中	10% 大室期



第571図 粘土貼土坑実測図(1)



第572図 粘土土坑実測図(2)

表57 5・6・8b区粘土土坑一覽表

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	掘			形状	黒色土厚 (cm)	粘土土厚 (cm)	断面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
1	8b	SN 11	K 9 j 9	3.8	N-7°-W	0.6	0.5	6	長方形	3	3	緩斜	平坦		
2	8b	SN 12	K 9 i 8	3.9	N-64°-W	[1.6]	0.9	34	[長方形]	3-9	5	緩斜	平坦	石臼	本跡→SI98
3	8b	SN 16	L 9 e 8	3.6	N-69°-E	0.6	0.5	13	楕円形	6-8	4	緩斜	平坦		
4	8b	SN 17	K 10 h 3	4.0	N-28°-E	(1.9)	1.2	10	[長方形]	4-15	2	緩斜	平坦		本跡→Pg14
5	6	SN 4	M 10 c 5	4.9	N-36°-E	2.1	1.0	14	不整形長方形	3-6	2-5	緩斜	平坦		
6	6	SN 24	M 9 g 9	3.8	N-38°-E	1.2	0.9	9	長方形	2-4	2-6	緩斜	平坦		
7	6	SN 25	N 9 f 5	3.8	N-55°-W	0.6	0.4	10	楕円形	3-9	2-4	緩斜	皿状		
8	6	SN 26	N 9 e 4	3.8	N-40°-E	(0.6)	0.6	9	[楕円形]	-	4-6	緩斜	皿状		
9	6	SN 36	M 8 b 7	3.8	N-55°-W	2.6	1.7	55	長方形	5-12	2-21	緩斜	平坦		
10	6	SN 39	M 9 d 6	3.8	N-0°	[0.7]	(0.5)	15	[楕円形]	-	10-15	緩斜	平坦		
11	6	SN 43	N 9 d 4	3.8	-	1.0	1.0	26	円形	14	7-10	外傾	皿状		
12	6	SN 47	M 9 b 1	3.4	N-37°-W	0.6	0.5	12	楕円形	2	6-13	緩斜	平坦		
13	6	SN 51	M 9 j 6	3.9	N-49°-E	0.6	0.5	9	楕円形	-	5-9	緩斜	平坦		
14	6	SN 53	M 9 a 3	3.4	N-79°-W	1.0	0.9	15	不整形楕円形	3-8	6	緩斜	皿状		
15	6	SN 57	M 9 f 5	3.6	-	1.1	1.1	25	不整形形	-	4-13	緩斜	皿状	灰石	本跡→SK119
16	6	SN 58	M 9 e 2	3.2	N-54°-W	1.4	0.9	9	長方形	2-7	4-7	緩斜	平坦		
17	6	SN 59	N 9 b 5	3.7	N-40°-E	1.9	[1.4]	67	[楕円形]	5-14	3-9	外傾	平坦		
18	6	SN 61	M 9 g 3	3.5	N-31°-E	0.8	(0.6)	11	[楕円形]	4-5	3	緩斜	平坦		
19	6	SN 62	M 9 b 4	3.6	-	0.6	0.6	-	不整形形	3	9	緩斜	不明		
20	6	SN 63	M 9 e 1	3.3	N-66°-E	0.8	0.7	-	楕円形	9	6	不明	不明	土器(土器)	
21	6	SN 64	M 8 e 0	3.4	N-55°-W	2.1	1.1	15	長方形	3-5	4-6	緩斜	平坦	陶器(丸皿)	
22	6	SN 67	M 8 b 8	3.4	N-55°-W	0.7	0.6	6	長方形	-	6-9	緩斜	皿状		
23	6	SN 69	M 10 c 2	3.5	N-66°-W	1.3	1.0	38	隅丸長方形	6-8	3	外傾	平坦		

#### (7) 土坑

建物跡や整地面に組み込まれない土坑146基が確認された。土坑は、黒色土を貼り付けて構築された土坑24基と砂層を掘り込んだだけの土坑122基に分けられる。ここでは、遺物が出土している土坑と特徴的な土坑の19基、土坑群1か所について取り上げ、それ以外は実測図と一覽表で掲載する。なお、これらの遺構の時期は、おおむね16世紀後半から17世紀前半と考えられる。

#### 第11号土坑 8b区SK-11 (第573図)

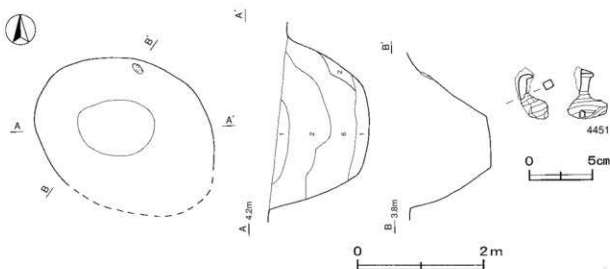
位置 調査区北部のK 8 j 0区に位置している。

確認状況 第75号建物跡を約0.3m掘り下げた、標高約3.9mの砂層から確認された。

**規模と形状** 南部が遺構確認のトレンチにより削平されている。長径は3.1mと推定され、短径2.2mの楕円形で、深さは145cmである。長径方向はN-50°-Wである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 金属製品1点(釘)が、覆土から出土している。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。深さが140cmほどあり、砂層を掘り込んだ土坑の中では極めて大形の土坑である。時期は、第75号建物跡の下層から検出されていることから、16世紀末と考えられる。



第573図 第11号土坑・出土遺物実測図

第11号土坑出土遺物観察表 (第573図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4451	釘	(3.6)	0.7	0.6	(11.8)	鉄	断面方形 先端部欠損 木質付着	覆土中	

#### 第54号土坑 8b区SK-54 (第574・575図)

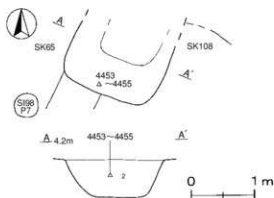
**位置** 調査区北部のK918区に位置している。

**重複関係** 第65・108号土坑を掘り込み、第98号建物跡と重複している。

**確認状況** 第85号整地面を約0.3m掘り下げた、標高約3.9mの砂層から確認された。

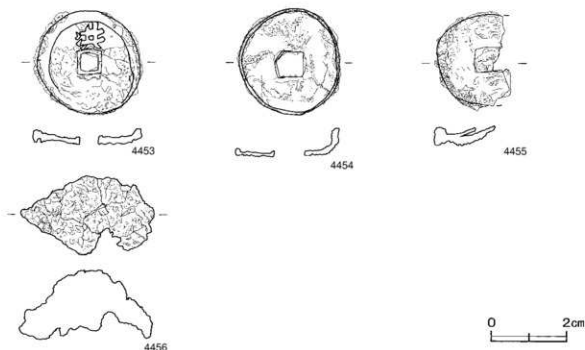
**規模と形状** 北部が調査区域外に延びている。長軸1.6m、短軸は確認できた長さで0.9mの長方形と推定され、深さは60cmである。長軸方向はN-66°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 金属製品4点(古銭)が、覆土中層からまとまって出土している。覆土の堆積状況から、埋め戻されたときに混入したものと考えられる。



第574図 第54号土坑実測図

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。3枚の古銭は火熱を受けて歪んだ状態で出土し、4453から「洪」の文字が確認できたのみである。第85号整地面を構築している黒色土面の下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。



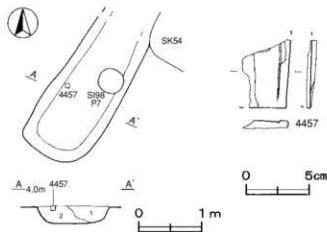
第575図 第54号土坑出土遺物実測図

第54号土坑出土遺物観察表 (第575図)

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4453	洪□□□	(2.69)	(0.38)	(0.20)	(3.74)	1368	銅	真書 洪武通寶々 二次焼成で歪み有り	覆土中層	PL96
4454	□□□□	2.79	(0.71)	(0.14)	(3.68)	-	銅	判読不明 二次焼成で歪み有り	覆土中層	PL96
4455	□□□□	2.31	(0.69)	(0.22)	(3.36)	-	銅	判読不明 欠け 二次焼成で歪み有り	覆土中層	
4456	-	2.1	3.55	1.6	7.10	-	銅	判読不明 銅滓付着 一部遺存	覆土中層	

### 第65号土坑 8b区SK-65 (第576図)

**位置** 調査区北部のK9i7区に位置している。



第576図 第65号土坑・出土遺物実測図

**重複関係** 第98号建物のP7、第54号土坑に掘り込まれている。

**確認状況** 第85号整地面を約0.5m掘り下げた、標高約3.7mの砂層から確認された。

**規模と形状** 北部が調査区域外に延びている。長軸は確認できた長さで2.4m、短軸1.1mの長方形と推定され、深さは28cmである。長軸方向はN-32°-Eである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、堆積状況から、第1・2層の砂A・B層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 石製品1点(硯)が、覆土上層から出土している。覆土の堆積状況から、埋め戻されたときに混入したものと考えられる。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第85号整地面を構築している黒色土面の下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。

第65号土坑出土遺物観察表 (第576図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4457	硯	(5.5)	(3.8)	(0.7)	(13.9)	粘板岩	硯面・縁部の破片	覆土上層	

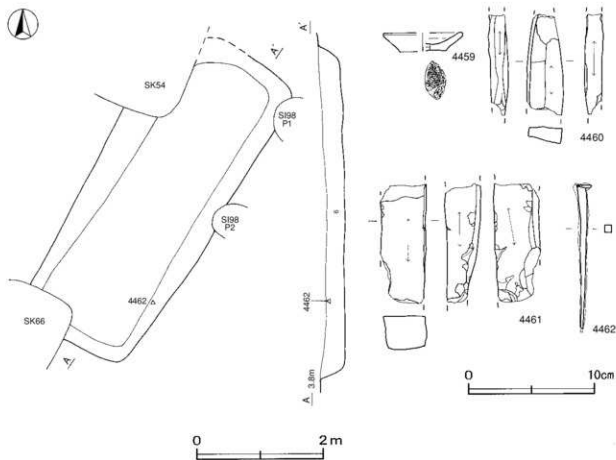
**第108号土坑** 8b区SK-108 (第577図)

**位置** 調査区北部のK9i8区に位置している。

**重複関係** 第98号建物、第54・66号土坑に掘り込まれている。

**確認状況** 第85号整地面を約0.6m掘り下げた。標高約3.6mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸5.4m、短軸2.2mの長方形で、深さは30cmである。長軸方向はN-32°-Eである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第577図 第108号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿)、石製品2点(砥石)、金属製品1点(釘)が出土している。4462は覆土上層、4459～4461は覆土からそれぞれ出土している。堆積状況から、埋め戻されたときに混入したものと考えられる。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第85号整地面を構築している黒色土面の下層から検出され、第98号建物に掘り込まれていることから、16世紀後半と考えられる。

第108号土坑出土遺物観察表(第577図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4459	小皿	土師質土器	[6.0]	1.5	[3.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面橋ナデ	覆土中	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4460	砥石	(8.0)	2.9	1.6	(40.8)	凝灰岩	砥面3面 他は滑面 砥面に整形時の加工痕有り	覆土中	
4461	砥石	(9.5)	3.7	2.9	(143.7)	凝灰岩	砥面3面 他は滑面	覆土中	
4462	釘	(11.8)	0.5	0.6	(23.5)	鉄	断面長方形 先端部欠損	覆土上層	PL93

### 第22号土坑 6区SK-22(第578図)

**位置** 調査区北部のL9g7区に位置している。

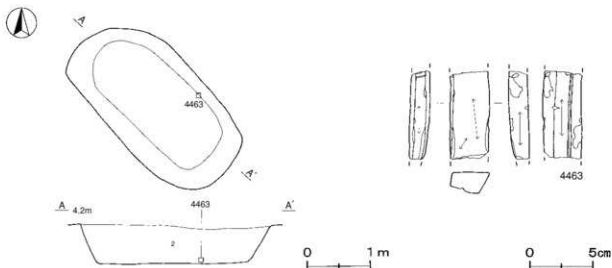
**重複関係** 第81号建物跡を掘り込んでいる。

**確認状況** 表砂を約3.0m除去した、標高約4.0mの第81号建物跡の黒色土面から確認された。

**規模と形状** 長径3.1m、短径1.6mの楕円形で、深さは61cmである。長径方向はN-45°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。

**遺物出土状況** 石器1点(砥石)が、覆土下層から出土している。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第81号建物跡を掘り込んでいることから、17世紀前半と考えられる。



第578図 第22号土坑・出土遺物実測図

第22号土坑出土遺物観察表 (第578図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4463	瓦石	(7.0)	3.2	1.7	(52.3)	凝灰岩	紙面4面 紙面に筋状の溝有り	覆土下層	

第45号土坑 6区SK-45 (第579図)

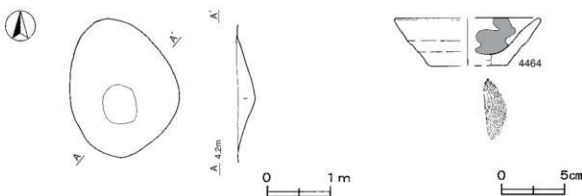
**位置** 調査区南部のN8b0区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.1m除去した、標高約3.9mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長径2.2m、短径1.7mの楕円形で、深さは25cmである。長径方向はN-12°-Wである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積した層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)が、覆土から出土している。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。



第579図 第45号土坑・出土遺物実測図

第45号土坑・出土遺物観察表 (第579図)

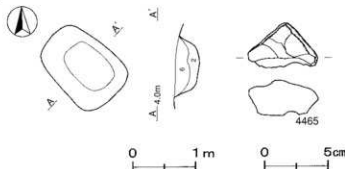
番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4464	皿	土師質土器	[11.4]	3.8	[6.0]	長石・黒母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り 内面窪付着	覆土中	20%

第103号土坑 6区SK-103 (第580図)

**位置** 調査区南部のN9e3区に位置している。

**確認状況** 第84号建物跡の北西側を約0.2m掘り下げた、標高約3.7mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸1.4m、短軸1.0mの隅丸長方形で、深さは36cmである。長軸方向はN-40°-Wである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が自然堆積した層である。



第580図 第103号土坑・出土遺物実測図

**遺物出土状況** 石器1点（火打石）が、覆土から出土している。覆土の堆積状況から、埋め戻されたときに混入したものと考えられる。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第84号建物跡を構築している黒色土面よりも下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。

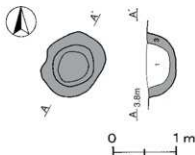
第103号土坑出土遺物観察表（第580図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4465	火打石	3.6	5.5	2.8	43.7	玉髓	一部の縁が破滅	覆土中	PL87

### 第105号土坑 6区SK-105（第581図）

**位置** 調査区南部のN9e4区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.4m除去した、標高約3.6mの砂層から確認された。



**規模と形状** 長径1.1m、短径0.9mの不整楕円形で、深さは37cmである。長径方向はN-30°-Eである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。厚さ7~20cmの黒色土を貼り付けて構築されており、締まりは極めて強い。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積した層である。

**所見** 黒色土を貼り付けて構築された土坑である。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。

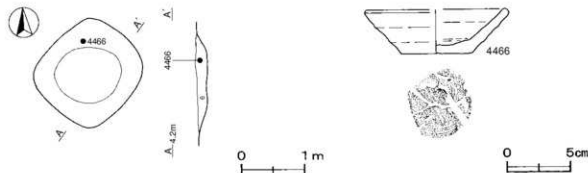
第581図 第105号土坑実測図

### 第106号土坑 6区SK-106（第582図）

**位置** 調査区南部のN9d3区に位置している。

**確認状況** 第83号建物跡の東部を約0.2m掘り下げた、標高約3.8mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸1.6m、短軸1.5mの方形で、深さは18cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。



第582図 第106号土坑・出土遺物実測図



**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)が、覆土中層から出土している。覆土の堆積状況から、埋め戻されたときに混入したものと考えられる。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第83号建物跡の黒色土面よりも下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。

#### 第106号土坑出土遺物観察表(第582図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4466	皿	土師質土器	[10.9]	3.5	3.7	雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内底面積ナデ	覆土中層	50% PL.78

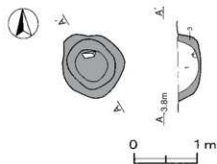
#### 第111号土坑 6区SK-111(第583図)

**位置** 調査区南部のN9e5区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.4m除去し、標高約3.6mの砂層から確認された。

**規模と形状** 径約1.1mの不整形円形で、深さは30cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。底面には、長軸22cm、短軸10cmの平らな石を貼り付けている。厚さ3～12cmの黒色土を貼り付けて構築されており、締まりは極めて強い。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積した層である。

**所見** 黒色土を貼り付けて構築された土坑である。時期は、最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。



第583図 第111号土坑実測図

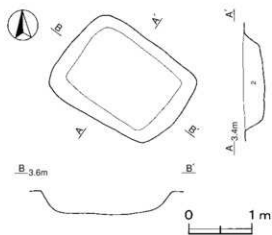
#### 第137号土坑 6区SK-137(第584図)

**位置** 調査区中央部のM9c5区に位置している。

**確認状況** 第87号建物跡の北側を約0.5m掘り下げた、標高約3.3mの砂層から確認された。

**規模と形状** 長軸2.1m、短軸0.6mの長方形で、深さは32cmである。長軸方向はN-54°-Wである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層が人為堆積した層である。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第87号建物跡の黒色土面よりも下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。



第584図 第137号土坑実測図

#### 第146号土坑 6区SK-146(第585図)

**位置** 調査区中央部のM9h3区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.3m除去し、標高約3.7mから確認された。

**規模と形状** 長軸0.8m、短軸0.7mの不整形長方形で、深さは7cmである。長軸方向はN-58°-Eである。底面はやや凹凸で、壁は緩やかに立ち上がっている。厚さ3～6cmの黒色土を貼り付けて構築されている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)が、覆土下層から出土している。

**所見** 黒色土を貼り付けて構築された土坑である。最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。



第585図 第146号土坑・出土遺物実測図

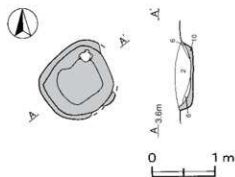
第146号土坑出土遺物観察表 (第585図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4467	皿	土師質土器	[11.0]	3.4	[5.6]	灰石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	覆土下層	20%

### 第152号土坑 6区SK-152 (第586図)

**位置** 調査区中央部のM9e1区に位置している。

**確認状況** 第3号畝状遺構の東側を約0.5m掘り下げた、標高約3.3mから確認された。



第586図 第152号土坑実測図

**規模と形状** 北東部が崩れている。一辺約1.1mの隅丸方形と推定され、深さは24cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。底面には、一辺20cmほどの平らな石を貼り付けてる。厚さ5～8cmの砂とローム土を混ぜた暗褐色土が貼り付けて構築されている。締まりは極めて強い。覆土は、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**所見** 砂とローム土を混ぜた暗褐色土を貼り付けて構築された土坑である。第3号畝状遺構の黒色土面の下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。

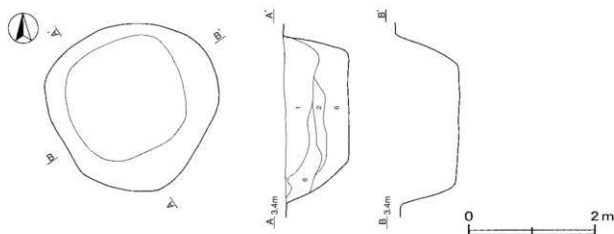
### 第157号土坑 6区SK-157 (第587図)

**位置** 調査区中央部のM8d9区に位置している。

**確認状況** 道路跡を約0.4m掘り下げた、標高約3.2mから確認された。

**規模と形状** 径約2.7mの円形で、深さは99cmである。底面は平坦で、壁は北部が外傾して、南部が緩やかに立ち上がっている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。8b区の第11号土坑と類似し、深さが1mほどあり、砂層を掘り込んだ土坑の中では極めて大形の土坑である。時期は、道路跡の下層から検出されていることと同じ層位から検出された周囲の遺構から、16世紀後半と考えられる。



第587図 第157号土坑実測図

**第161号土坑** 6区SK-161 (第588・589図)

**位置** 調査区中央部のM9d8区に位置している。

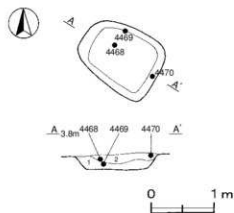
**重複関係** 第77号建物跡を掘り込んでいる。

**確認状況** 表砂を約3.5m除去し、標高約3.5mから確認された。

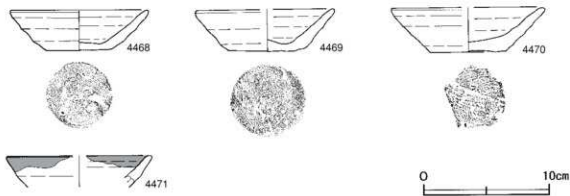
**規模と形状** 長軸1.3m、短軸1.0mの隅丸長方形で、深さは24cmである。長軸方向はN-58°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積した層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片4点(皿)が出土している。4468・4469は覆土中層、4470は覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。



第588図 第161号土坑実測図



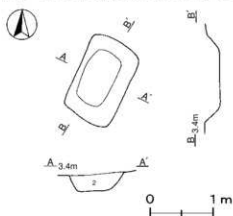
第589図 第161号土坑出土遺物実測図

第161号土坑出土遺物観察表 (第589図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4468	皿	土師質土器	10.7	3.2	5.2	灰石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	覆土上層	96% PL.77
4469	皿	土師質土器	[10.9]	3.3	6.0	灰石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面横ナデ	覆土中層	80% PL.77
4470	皿	土師質土器	[11.8]	3.5	[6.0]	灰石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面横ナデ	覆土上層	40%
4471	皿	土師質土器	[11.4]	(2.5)	-	灰石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面コクロナデ 口縁部露付	覆土中	15%

第162号土坑 6区SK-162 (第590図)

位置 調査区中央部のM9f7区に位置している。



**確認状況** 第87号建物跡の東側を約0.6m掘り下げた、標高約3.2mから確認された。

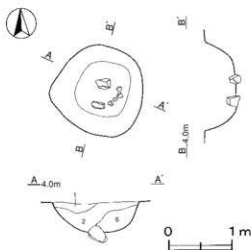
**規模と形状** 長軸1.4m、短軸0.9mの長方形で、深さは26cmである。長軸方向はN-24°-Eである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。第87号建物跡の黒色土面よりも下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。

第590図 第162号土坑実測図

第169号土坑 6区SK-169 (第591図)

位置 調査区北部のL9e1区に位置している。



**確認状況** 表砂を約3.3m除去した、標高約3.7mから確認された。

**規模と形状** 一辺約1.4mの隅丸方形で、深さは48cmである。底面は平坦で、壁は南部が外傾し、北部が緩やかに立ち上がっている。覆土は、第1層の砂A層が自然堆積、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 鏢7点が、底面から投棄された状態で出土している。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。最初の遺構確認面から検出されていることから、17世紀頃と考えられる。

第591図 第169号土坑実測図

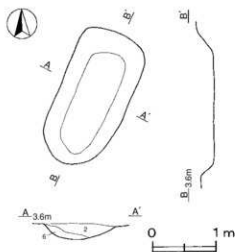
### 第176号土坑 6区SK-176 (第592図)

**位置** 調査区中央部のM10c11区に位置している。

**確認状況** 第77号建物跡を約0.3m掘り下げた、標高約3.5mから確認された。

**規模と形状** 長軸2.2m、短軸1.1mの隅丸長方形で、深さは26cmである。長軸方向はN-20°-Eである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層と第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第77号建物跡の黒色土面よりも下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。



第592図 第176号土坑実測図

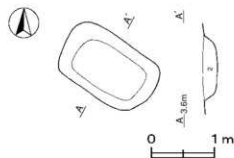
### 第178号土坑 6区SK-178 (第593図)

**位置** 調査区中央部のM10c11区に位置している。

**確認状況** 第77号建物跡を約0.5m掘り下げた、標高約3.3mから確認された。

**規模と形状** 長軸1.6m、短軸1.0mの長方形で、深さは22cmである。長軸方向はN-58°-Wである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積した層である。

**所見** 砂層を掘り込んで構築された土坑である。時期は、第77号建物跡の黒色土面よりも下層から検出されていることから、16世紀後半と考えられる。



第593図 第178号土坑実測図

### 第7号土坑群 (第594図)

**位置** 調査区北部のK10h2~L10b5区に位置している。

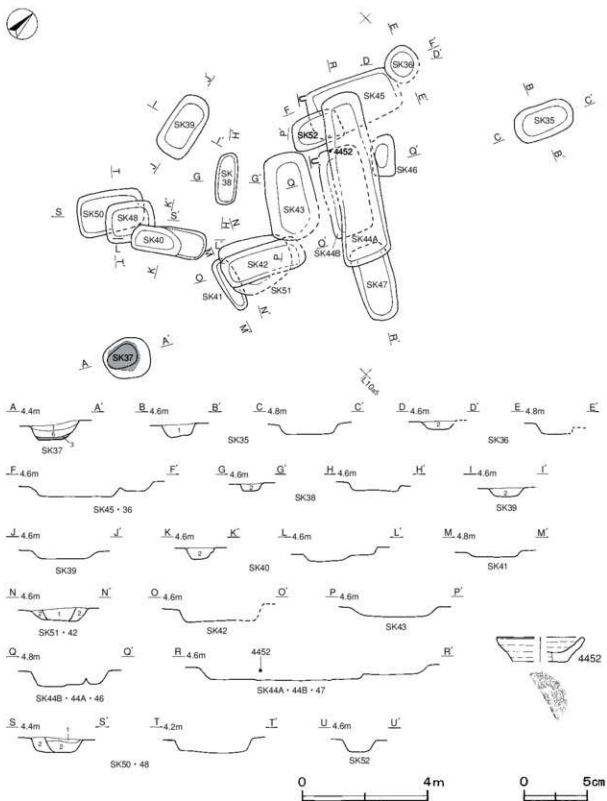
**重複関係** 第36・52号土坑は第45号土坑を、第40号土坑は第48号土坑を、第42号土坑は第41・51号土坑を、第43号土坑は第42・51号土坑を、第44A号土坑は第44B・45・47・52号土坑を、第48号土坑は第50号土坑を、第51号土坑は第41号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

**確認状況** 第82号整地面の黒色土を約0.8m除去した標高4.1~4.4mで、土坑18基が確認された。

**規模と形状** 南北17.0m、東西10.5mの範囲から、第35~48・50~52号土坑が確認された。土坑は長軸(径)が1.2~5.5mの円形や楕円形及び長方形などで、深さは18~48cmである。配置に規則性は認められない。覆土は、第1・2層の砂A・B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(小皿)が、第44A号土坑から出土している。

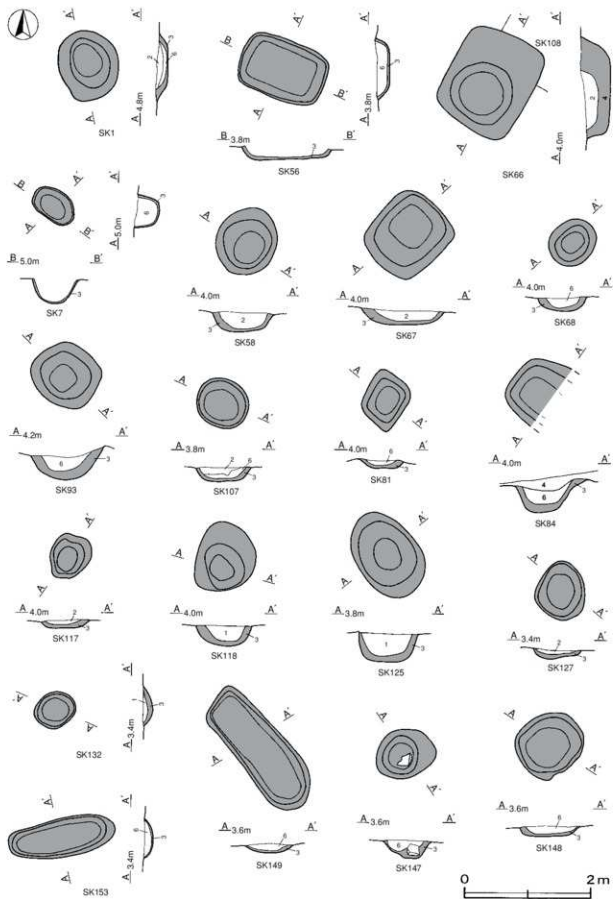
**所見** ほほぼ同じ層位から、土坑が集中して確認されている。人骨や副葬品とみられる遺物が出土していないことから土坑群と判断した。性格は不明である。時期は、第82号整地面の下層から確認されていることから、16世紀後半と考えられる。



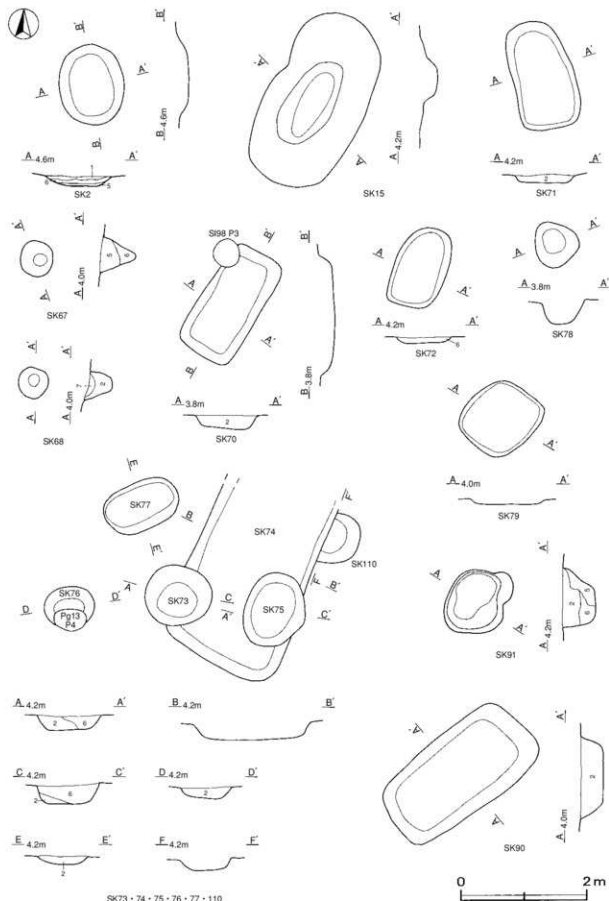
第594図 第7号土坑群・出土遺物実測図

第7号土坑群出土遺物観察表 (第594図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4452	小皿	土師質土器	[6.8]	1.9	[4.4]	長石・雲母	橙	普通	底部回転糸切り	8b区 SK44A内	40%



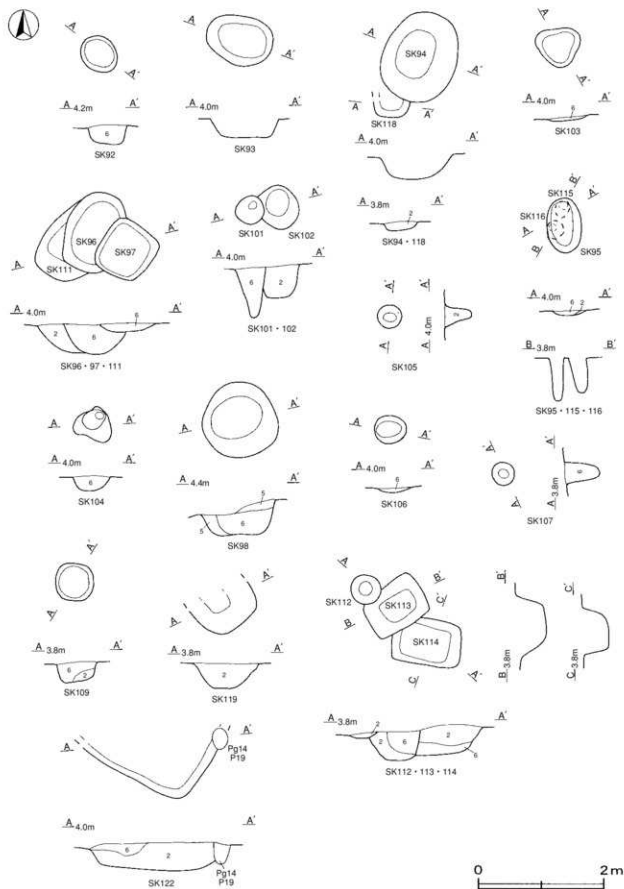
第595图 黑色土黏土坑实测图



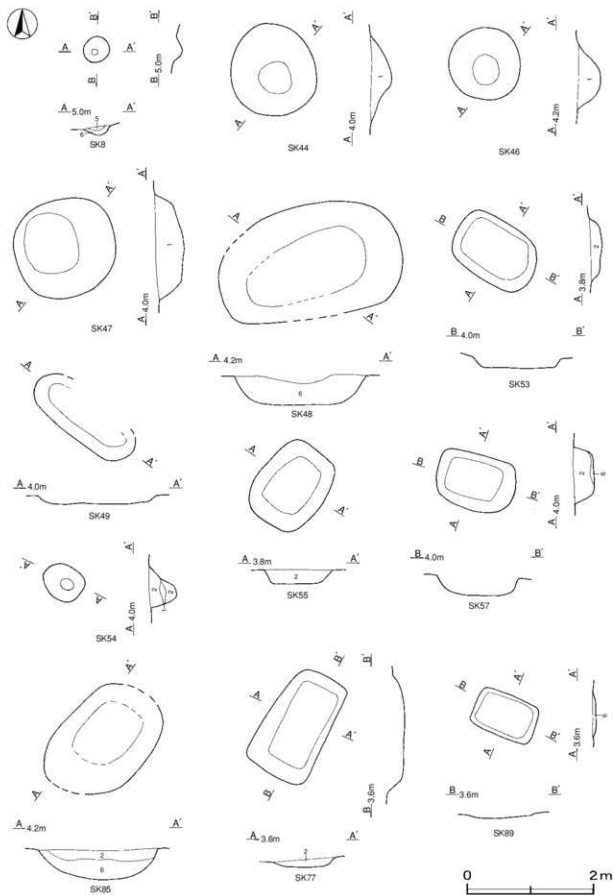
SK73 · 74 · 75 · 76 · 77 · 110

第596图 土坑实测图(1)

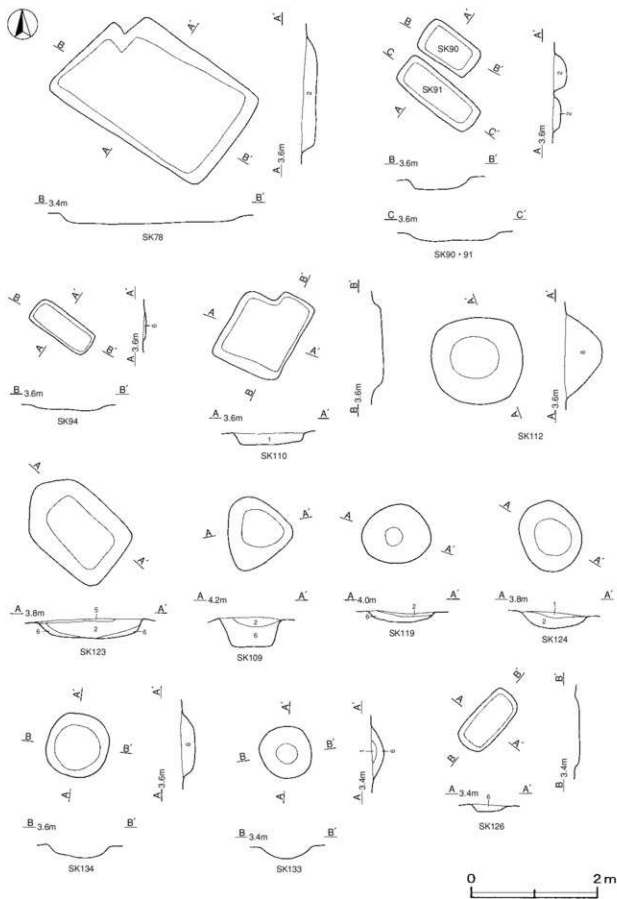




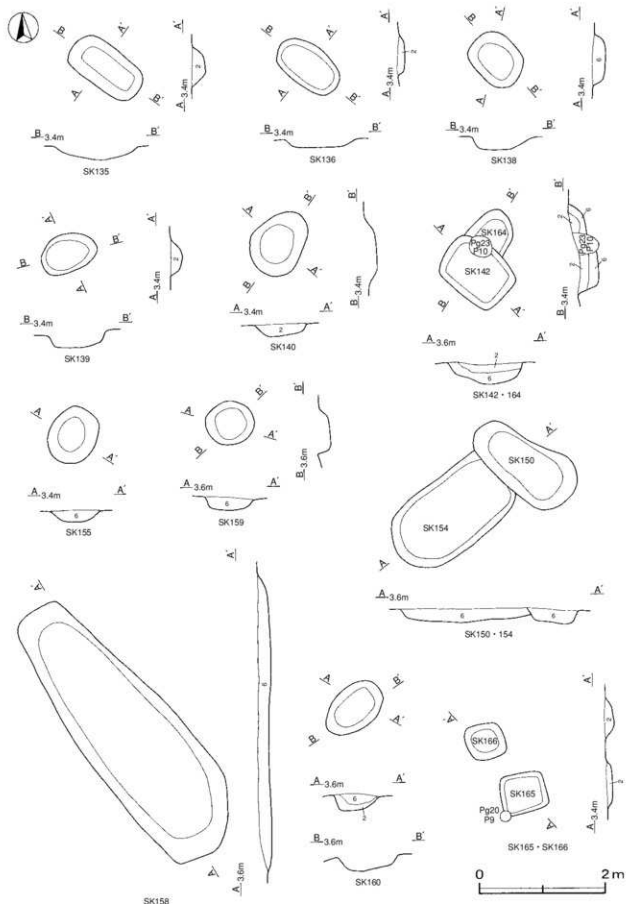
第597图 土坑实测图(2)



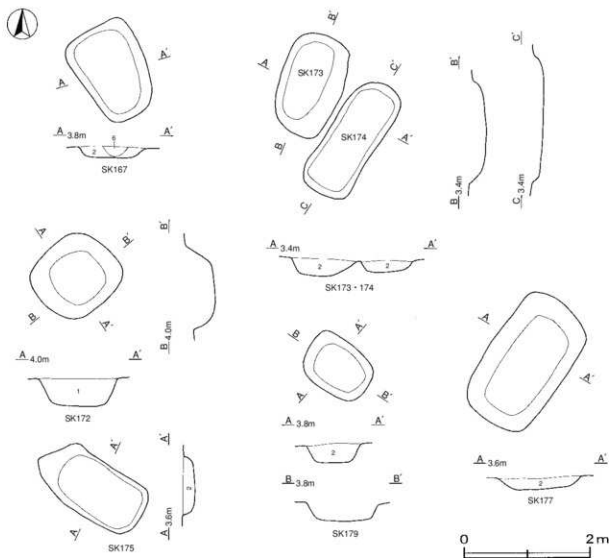
第598图 土坑实测图(3)



第599图 土坑实测图(4)



第600图 土坑实测图(5)



第601図 土坑実測図(6)

表58 5・6・8b区黒色土粘土坑一覽表

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	坑			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(径) (m)	短軸(径) (m)	深さ (cm)							
1	Rb	SK 1	K 101.2	4.5	-	1.1	1.0	15	円形	2~8	-	緩斜	平坦		
2	Rb	SK37	K 101.3	4.1	N-29°-E	1.5	1.3	44	楕円形	10	-	緩斜	平坦		
3	Rb	SK66	K 91.7	3.7	N-28°-E	1.6	1.4	20	隅丸長方形	20	-	外植	平坦		SK38→4・6・8b区黒土
4	6	SK 7	M 106.4	4.7	N-55°-W	0.7	0.5	36	楕円形	2~6	-	外植	皿状		
5	6	SK56	M 91.9	3.7	N-68°-W	1.4	1.0	17	長方形	3~6	-	緩斜	平坦		
6	6	SK58	N 94.6	3.7	-	1.1	1.0	27	円形	3~11	-	緩斜	皿状		
7	6	SK67	M 95.5	3.8	-	1.3	1.2	15	隅丸方形	5~12	-	緩斜	平坦		
8	6	SK68	M 95.5	3.8	N-54°-E	0.8	0.7	14	楕円形	6~12	-	緩斜	皿状		
9	6	SK81	N 9e.4	3.6	N-35°-W	0.8	0.7	6	長方形	4~10	-	緩斜	平坦		
10	6	SK84	N 9a.3	3.6	N-40°-E	1.1	(0.7)	20	[長方形]	8~14	-	緩斜	平坦		
11	6	SK90	M 91.6	4.0	-	1.1	1.0	28	隅丸方形	10~15	-	緩斜	皿状		
12	6	SK105	N 9e.4	3.6	N-30°-E	1.1	0.9	37	不整楕円形	7~20	-	外植	皿状		
13	6	SK107	L 10h.1	3.4	-	0.8	0.8	16	円形	4~14	-	緩斜	平坦		
14	6	SK111	N 9e.5	3.6	-	1.1	1.0	30	不整円形	3~12	-	緩斜	皿状		
15	6	SK117	M 91.6	3.9	N-35°-E	0.7	0.6	6	楕円形	5~10	-	緩斜	平坦		
16	6	SK118	M 91.6	3.8	-	1.1	1.0	23	不整円形	7~16	-	緩斜	平坦		

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(団) (m)	短軸(団) (m)	深さ (cm)							
17	6	SK125	N 9d6	3.5	N-37°-W	1.5	1.0	34	楕円形	7~16	-	緩斜	皿状		
18	6	SK127	M 9a5	3.2	N-4°-W	1.0	0.8	6	不整形円形	4~8	-	緩斜	平坦		
19	6	SK132	L 9j6	3.2	N-57°-E	0.7	0.6	8	楕円形	4~8	-	緩斜	皿状		
20	6	SK146	M 9h3	3.7	N-58°-E	0.8	0.7	7	不整形方形	3~6	-	緩斜	凸凹	土師瓦土器(皿)	
21	6	SK147	M 9f2	3.3	N-58°-E	1.0	0.8	14	楕円形	3~8	-	緩斜	平坦		
22	6	SK148	M 9f2	3.3	N-50°-E	1.1	1.0	12	楕円形	3	-	緩斜	平坦		
23	6	SK149	M 8g0	3.2	N-38°-W	2.2	0.8	12	長方形	3	-	緩斜	平坦		
24	6	SK153	M 8f0	3.2	N-77°-E	1.7	0.6	14	楕円形	2	-	緩斜	皿状		

表59 5・6・8b区土坑一覽表

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(団) (m)	短軸(団) (m)	深さ (cm)							
1	8b	SK 2	K 10j1	4.4	N-6°-W	1.3	1.0	14	楕円形	-	-	緩斜	平坦		
2	8b	SK11	K 8j0	3.9	N-50°-W	[3.1]	2.2	145	[楕円形]	-	-	外傾	平坦	釘	
3	8b	SK15	K 9j3	3.8	N-30°-E	2.9	1.6	28	楕円形	-	-	緩斜	平坦		HK79→本跡
4	8b	SK35	K 10k4	4.4	N-23°-E	1.9	1.1	38	楕円形	-	-	外傾	平坦		
5	8b	SK36	K 10j3	4.3	-	1.2	[1.1]	24	[円形]	-	-	緩斜	平坦		SK45→本跡
6	8b	SK38	K 10j3	4.3	N-40°-W	1.6	0.7	22	楕円形	-	-	外傾	平坦		
7	8b	SK39	K 10j2	4.2	N-13°-W	2.1	1.1	26	長方形	-	-	緩斜	平坦		
8	8b	SK40	L 10a3	4.2	N-53°-E	2.2	0.9	36	長方形	-	-	傾斜	平坦		SK48→本跡
9	8b	SK41	L 10a3	4.3	N-70°-W	1.8	[0.6]	18	[楕円形]	-	-	緩斜	平坦		本跡→SK42・51
10	8b	SK42	K 10j3	4.2	N-28°-E	2.7	1.0	40	長方形	-	-	外傾	平坦		SK41・51→本跡
11	8b	SK43	K 10j3	4.3	N-59°-W	2.8	1.6	30	隅丸長方形	-	-	緩斜	平坦		SK42・51→本跡
12	8b	SK44A	K 10i3	4.3	N-56°-E	5.4	1.5	39	長方形	-	-	緩斜	平坦	土師瓦土器(小皿)	SK44B・45・47・52→本跡
13	8b	SK40B	K 10i3	4.3	N-56°-E	[2.8]	[1.4]	48	[長方形]	-	-	緩斜	平坦		本跡→SK44A
14	8b	SK45	K 10i3	4.2	N-25°-E	[3.0]	[1.6]	36	[長方形]	-	-	緩斜	平坦		跡→SK3・44・32
15	8b	SK46	K 10i3	4.3	N-53°-W	1.3	[0.8]	40	[長方形]	-	-	緩斜	皿状		本跡→SK44A
16	8b	SK47	K 10j4	4.3	N-58°-E	[2.5]	1.2	26	[楕円形]	-	-	緩斜	平坦		本跡→SK44A
17	8b	SK48	L 10a2	4.0	N-37°-E	1.6	1.2	42	長方形	-	-	緩斜	平坦		SK50→本跡→SK40
18	8b	SK50	L 10a2	4.1	N-35°-E	[2.2]	1.4	44	[長方形]	-	-	外傾	平坦		本跡→SK48
19	8b	SK51	K 10j3	4.2	N-31°-E	[2.2]	1.8	50	[不定形]	-	-	緩斜	平坦		SK41→本跡→SK42
20	8b	SK52	K 10i3	4.2	N-22°-E	[1.6]	1.0	39	[長方形]	-	-	傾斜	平坦		SK45→本跡→SK44A
21	8b	SK54	K 9i8	3.9	N-66°-W	1.6	(0.9)	60	[長方形]	-	-	緩斜	平坦	古銭 銅洋金	SK65・108→本跡 SI98と重複
22	8b	SK65	K 9i7	3.7	N-32°-E	[2.4]	1.1	28	[長方形]	-	-	緩斜	平坦	硯	本跡→SI98・SK54
23	8b	SK67	L 9a9	3.7	-	5.6	5.3	58	円形	-	-	外傾	皿状		
24	8b	SK68	K 9j9	3.7	-	0.5	0.5	48	円形	-	-	傾斜	皿状		
25	8b	SK70	K 9j8	3.6	N-30°-E	1.9	1.0	23	長方形	-	-	外傾	平坦		
26	8b	SK71	K 10j2	4.0	N-19°-W	1.8	1.0	14	不整形方形	-	-	緩斜	平坦		本跡→SI98
27	8b	SK72	K 10j2	4.0	N-21°-E	1.3	0.8	10	長方形	-	-	緩斜	平坦		
28	8b	SK73	K 10i2	4.1	-	1.0	1.0	22	円形	-	-	外傾	平坦		SK74→本跡
29	8b	SK74	K 10i2	3.9	N-27°-E	(2.9)	1.9	36	[長方形]	-	-	緩斜	平坦		SK110→本跡→ SK73・74
30	8b	SK75	K 10i3	4.1	N-23°-E	1.2	1.0	28	楕円形	-	-	傾斜	平坦		SK74→本跡
31	8b	SK76	K 10i2	4.0	-	0.7	0.7	17	円形	-	-	外傾	平坦		本跡→Pg13
32	8b	SK77	K 10a2	4.0	N-60°-E	1.2	0.8	12	楕円形	-	-	緩斜	皿状		Pg13→本跡
33	8b	SK78	K 9j9	3.6	-	0.7	0.7	80	不定形	-	-	外傾	平坦		
34	8b	SK79	L 9a0	3.7	-	1.2	1.1	8	隅丸方形	-	-	緩斜	平坦		
35	8b	SK90	L 10a1	3.7	N-50°-E	2.5	1.3	36	長方形	-	-	外傾	平坦		
36	8b	SK91	L 10a2	4.0	N-27°-E	1.0	0.9	54	不整形円形	-	-	緩斜	平坦		
37	8b	SK92	L 10a2	3.9	-	0.6	0.6	31	円形	-	-	外傾	平坦		
38	8b	SK93	L 10a1	3.8	N-71°-W	1.1	0.8	27	楕円形	-	-	傾斜	平坦		
39	8b	SK94	L 10b1	3.8	N-25°-E	1.4	1.2	36	楕円形	-	-	傾斜	皿状		SK118→本跡
40	8b	SK95	L 10b1	3.8	N-4°-W	0.9	0.5	7	楕円形	-	-	緩斜	皿状		
41	8b	SK96	L 10b1	3.8	N-20°-E	1.3	1.1	47	楕円形	-	-	外傾	平坦		SK111→本跡→SK97

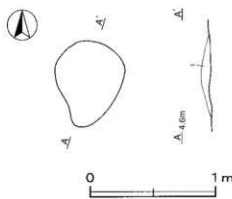
番号	区	遺構 番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規 模			形状	原土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(団) (m)	短軸(団) (m)	深さ (cm)							
42	8b	SK97	L10b1	3.8	N-30°-E	0.9	0.8	13	長方形	-	-	緩斜	平阻		SK96→本跡
43	8b	SK98	L10b3	4.0	-	1.2	1.1	48	不整形	-	-	外植	平阻		
44	8b	SK101	L10b2	3.8	-	0.4	0.4	79	円形	-	-	外植	平阻		SK102→本跡
45	8b	SK102	L10b2	3.9	N-42°-W	0.7	0.6	50	隅丸長方形	-	-	外植	平阻		本跡→SK101
46	8b	SK103	L9a7	3.8	N-40°-W	0.7	0.6	6	不定形	-	-	緩斜	皿状		
47	8b	SK104	L9a7	3.8	N-56°-E	0.6	0.5	22	不定形	-	-	緩斜	皿状		
48	8b	SK105	L10b1	3.8	-	0.4	0.4	44	円形	-	-	外植	皿状		
49	8b	SK106	L9b8	3.7	N-89°-E	0.5	0.4	7	楕円形	-	-	緩斜	皿状		
50	8b	SK107	L9b8	3.6	-	0.4	0.4	55	円形	-	-	外植	皿状		
51	8b	SK108	K9i8	3.6	N-32°-E	5.4	2.2	30	長方形	-	-	緩斜	平阻	土師黄土器(小皿) 灰石	本跡→SI98・ SK54-66
52	8b	SK109	L9c7	3.6	-	0.6	0.6	30	隅丸方形	-	-	外植	平阻		
53	8b	SK110	K10b3	4.0	N-19°-E	0.8	(0.6)	16	[楕円形]	-	-	緩斜	平阻		SK74→本跡
54	8b	SK111	L10b1	3.8	N-35°-E	(1.2)	0.9	(46)	[楕円形]	-	-	外植	不明		本跡→SK96→SK97
55	8b	SK112	L9b6	3.6	-	0.5	0.5	7	円形	-	-	緩斜	皿状		SK113→本跡
56	8b	SK113	L9b6	3.6	N-55°-E	1.0	0.7	45	長方形	-	-	外植	平阻		SK114→8b→SK112
57	8b	SK114	L9b6	3.7	N-83°-W	1.1	0.7	47	長方形	-	-	外植	平阻		SK113→本跡
58	8b	SK115	L10b1	3.6	N-47°-E	0.3	0.2	56	楕円形	-	-	外植	皿状		
59	8b	SK116	L10b1	3.6	-	0.3	0.3	69	円形	-	-	外植	皿状		
60	8b	SK118	L10b1	3.7	N-3°-E	0.6	(0.3)	14	[長方形]	-	-	傾・緩	平阻		本跡→SK94
61	8b	SK119	K9i9	3.6	-	1.0	(0.6)	38	[方形]	-	-	緩斜	平阻		
62	8b	SK122	K9i0	3.7	N-61°-W	(1.8)	(1.1)	44	[長方形]	-	-	緩斜	平阻		本跡→Pg14
63	6	SK8	M10b4	4.8	-	0.4	0.4	13	円形	-	-	緩斜	皿状		
64	6	SK22	L9g7	4.0	N-45°-W	3.1	1.6	61	楕円形	-	-	緩斜	平阻	灰石	SI81→本跡
65	6	SK44	N8a0	3.9	-	1.5	1.4	32	円形	-	-	緩斜	皿状		
66	6	SK45	N8b0	3.9	N-12°-W	2.2	1.7	25	楕円形	-	-	緩斜	皿状	土師黄土器(皿)	
67	6	SK46	N8b0	3.8	-	1.2	1.1	36	円形	-	-	緩斜	皿状		
68	6	SK47	N8c9	3.9	-	1.6	1.6	46	円形	-	-	緩斜	皿状		
69	6	SK48	N9b4	4.0	N-53°-E	3.0	1.8	46	楕円形	-	-	緩斜	平阻		
70	6	SK49	N9d5	3.9	N-50°-W	1.9	(0.6)	14	[楕円形]	-	-	緩斜	平阻		
71	6	SK53	M9b9	3.8	N-60°-W	1.4	1.0	17	隅丸長方形	-	-	緩斜	平阻		
72	6	SK54	M9b9	3.8	N-55°-W	0.7	0.5	43	楕円形	-	-	緩斜	皿状		
73	6	SK55	M9b9	3.7	N-41°-E	1.4	1.1	21	隅丸長方形	-	-	緩斜	平阻		
74	6	SK57	M9j9	3.8	N-78°-W	1.3	0.9	34	隅丸長方形	-	-	傾・緩	平阻		
75	6	SK77	L9f8	3.3	N-34°-E	1.8	1.1	12	長方形	-	-	緩斜	平阻		Pg16→本跡
76	6	SK78	L9e9	3.3	N-35°-W	2.8	1.8	20	不整形	-	-	緩斜	平阻		Pg16→本跡
77	6	SK85	M9j4	3.8	N-44°-E	[2.0]	1.4	44	[楕円形]	-	-	緩斜	平阻		
78	6	SK89	L9f0	3.1	N-68°-W	1.0	0.7	5	長方形	-	-	緩斜	皿状		
79	6	SK90	L9f0	3.2	N-53°-W	1.0	0.6	20	長方形	-	-	緩斜	平阻		
80	6	SK91	L9f0	3.2	N-50°-W	1.5	0.5	12	長方形	-	-	緩斜	平阻		
81	6	SK94	L10f1	3.3	N-56°-W	1.1	0.4	6	長方形	-	-	緩斜	平阻		
82	6	SK103	N9e3	3.7	N-40°-W	1.4	1.0	36	隅丸長方形	-	-	緩斜	皿状	火打石	
83	6	SK106	N9d3	3.8	-	1.6	1.5	18	方形	-	-	緩斜	平阻	土師黄土器(皿)	
84	6	SK109	N9e5	3.9	N-13°-W	1.2	1.0	46	不定形	-	-	外植	平阻		
85	6	SK110	L9f0	3.4	N-29°-E	1.4	1.1	17	不整形	-	-	傾・緩	平阻		
86	6	SK112	M9b1	3.4	-	1.4	1.4	58	円形	-	-	外植	皿状		
87	6	SK119	M9j5	3.8	N-68°-W	1.1	1.0	16	不整形	-	-	緩斜	皿状		SN57→本跡
88	6	SK123	M9b4	3.7	N-49°-W	1.8	1.2	30	不整形	-	-	傾・緩	平阻		
89	6	SK124	N9c6	3.7	N-20°-W	1.1	0.9	24	楕円形	-	-	緩斜	皿状		
90	6	SK126	M9b5	3.2	N-30°-E	1.1	0.6	10	長方形	-	-	緩斜	平阻		
91	6	SK133	M9d6	3.2	-	0.8	0.8	20	円形	-	-	緩斜	皿状		
92	6	SK134	M9c6	3.3	-	1.0	1.0	20	円形	-	-	緩斜	皿状		
93	6	SK135	M9c5	3.3	N-53°-W	1.3	0.7	22	長方形	-	-	緩斜	皿状		
94	6	SK136	M9b5	3.3	N-48°-W	1.1	0.7	11	楕円形	-	-	緩斜	平阻		
95	6	SK137	M9c5	3.3	N-54°-W	2.1	0.6	32	長方形	-	-	外植	平阻		
96	6	SK138	M9b2	3.2	N-41°-W	0.9	0.7	19	楕円形	-	-	緩斜	平阻		
97	6	SK139	M9d2	3.2	N-77°-E	0.9	0.6	19	楕円形	-	-	緩斜	平阻		
98	6	SK140	M9c2	3.2	N-38°-E	1.1	0.8	19	楕円形	-	-	緩斜	平阻		

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規 模			形状	原土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(長) (m)	短軸(短) (m)	深さ (cm)							
99	6	SK142	M9b1	3.2	N-49°-W	1.2	0.9	30	長方形	-	-	傾-斜	凹状		SK164→本跡→Pg22
100	6	SK150	M8d0	3.4	N-51°-W	1.8	0.9	20	楕円形	-	-	緩斜	平坦		SK154→本跡
101	6	SK152	M9e1	3.3	-	(1.1)	1.1	24	[楕円形]	ローム土 5-8	-	緩斜	平坦		
102	6	SK154	M8d0	3.4	N-51°-E	(2.0)	1.2	20	[楕円形]	-	-	外傾	平坦		本跡→SK150
103	6	SK155	M8h0	3.1	N-40°-E	0.9	0.7	16	楕円形	-	-	緩斜	凹状		
104	6	SK157	M8d9	3.2	-	2.7	2.6	99	円形	-	-	傾-斜	平坦		
105	6	SK158	M8d8	3.3	N-40°-W	4.8	1.6	19	楕円長方形	-	-	緩斜	凸凹		
106	6	SK159	M9b1	3.4	N-70°-W	0.8	0.7	22	円形	-	-	緩斜	平坦		
107	6	SK160	M9b1	3.4	N-52°-E	1.1	0.7	26	楕円形	-	-	緩斜	平坦		
108	6	SK161	M9d8	3.5	N-58°-W	1.3	1.0	24	楕円長方形	-	-	緩斜	平坦	土層貫土器(皿)	SI77→本跡
109	6	SK162	M9f7	3.2	N-24°-E	1.4	0.9	26	長方形	-	-	緩斜	平坦		
110	6	SK164	M9b1	3.3	N-41°-E	(0.7)	0.7	21	[楕円形]	-	-	緩斜	平坦		本跡→SK162→Pg23
111	6	SK165	M8c0	3.2	N-79°-E	0.7	0.6	10	長方形	-	-	緩斜	平坦		本跡→Pg20
112	6	SK166	M8c0	3.2	-	0.6	0.6	15	方形	-	-	緩斜	凹状		
113	6	SK167	L8b9	3.6	N-28°-W	1.5	1.1	16	楕円長方形	-	-	緩斜	平坦		
114	6	SK169	L9e1	3.7	-	1.4	1.4	48	楕円方形	-	-	傾-斜	平坦		
115	6	SK172	L8g9	3.7	-	1.3	1.2	44	方形	-	-	傾-斜	平坦		
116	6	SK173	M9g7	3.2	N-22°-E	1.6	1.0	25	楕円長方形	-	-	緩斜	凹状		
117	6	SK174	M9b7	3.2	N-33°-E	2.0	0.8	18	楕円長方形	-	-	緩斜	平坦		
118	6	SK175	M10d1	3.4	N-54°-W	1.9	0.9	19	不整形長方形	-	-	外傾	平坦		
119	6	SK176	M10e1	3.5	N-20°-E	2.2	1.1	26	楕円長方形	-	-	緩斜	平坦		
120	6	SK177	M10d1	3.4	N-34°-E	2.2	1.3	16	長方形	-	-	緩斜	平坦		
121	6	SK178	M10e1	3.3	N-58°-W	1.6	1.0	22	長方形	-	-	緩斜	平坦		
122	6	SK179	M10b1	3.5	N-53°-W	1.1	0.9	30	長方形	-	-	外傾	平坦		

#### (8) 貝集積地

ここでは、遺構に伴わない貝集積地3か所について、その概要を記述する。

#### 第70号貝集積地 8b区SM-1 (第602図)



第602図 第70号貝集積地実測図

**位置** 調査区北部のK10i1区で、第84号整地面の約0.2m上面に位置している。

**確認状況** 表砂を約1.9m除去し、標高約4.5mから貝が確認された。

**規模と形状** 長径0.7m、短径0.6mの不整形楕円形で、長径方向はN-19°-Eである。貝層は最も厚かったところで8cmである。

**所見** 第84号整地面を廃絶後に形成されている。ウバ貝細片を中心とした貝集積地である。

#### 第70号貝集積地出土貝種一覧表

No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No.	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	オオタニシ	8.0	0.75	1	淡水	3	ウバガイ細片	1,050.0	98.96	3	
2	フジツボ	3.0	0.28	1							



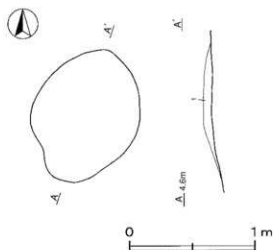
**第71号貝集積地** 8 b区SM-2 (第603図)

**位置** 調査区北部のK9j0区で、第84号整地面の約0.2m上面に位置している。

**確認状況** 表砂を約1.9m除去し、標高約4.5mから貝が確認された。

**規模と形状** 長径1.1m、短径0.9mの不整楕円形で、長径方向はN-20°-Eである。貝層は最も厚かったところで7cmである。

**所見** 第84号整地面を廃絶後に形成されている。ウバ貝細片を中心とした貝集積地である。



第603図 第71号貝集積地実測図

第71号貝集積地出土貝種一覧表

No	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	マフカサガイ細片	25.0	3.85		淡水	2	ウバガイ細片	625.0	96.15		

**第78号貝集積地** 6区SM-6 (第604図)

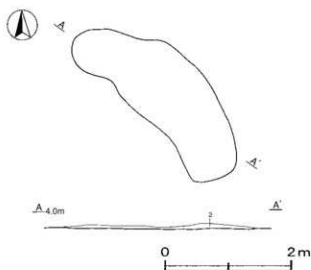
**位置** 調査区中央部のM9i4区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.2m除去し、標高約3.8mから貝が確認された。

**規模と形状** 長径3.3m、短径1.1mの不整楕円形で、長径方向はN-47°-Wである。貝層は最も厚かったところで9cmである。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)が、貝片と一緒に出土している。

**所見** ウバ貝細片を中心とした貝集積地である。



第604図 第78号貝集積地実測図

第78号貝集積地出土貝種一覧表

No	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考	No	貝種	重さ	比率	殻頂数	備考
1	ダンベイキサゴ	35.0	0.95	3		4	ウバガイ	680.0	18.40	1位1点	
2	フジツボ	10.0	0.27	2		5	ウバガイ細片	2,960.0	80.11		
3	カキ	10.0	0.27	1							

表60 5・6・8b区貝集積地一覧表

番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径 方向	規 模			形状	黒色土厚 (cm)	粘土厚 (cm)	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(団) (m)	短軸(団) (m)	深さ (cm)							
1	8b	SM70	K10i1	4.5	N-19°-E	0.7	0.6	8	不整形円形	-	-	-	-		(SM1)
2	8b	SM71	K9j0	4.5	N-20°-E	1.1	0.9	7	不整形円形	-	-	-	-		(SM2)
3	6	SM78	M9i4	3.8	N-47°-W	3.3	1.1	9	不整形円形	-	-	-	-		(SM6)

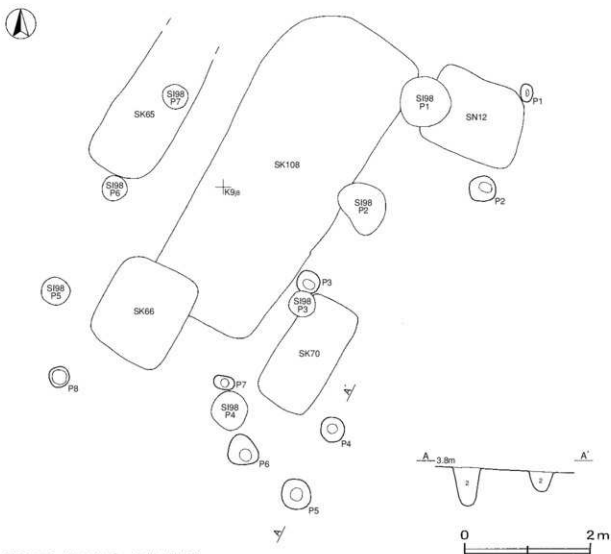
(9) ビット群

黒色土を取り除いた砂層から、建物跡や整地面に伴わないビット群13か所が確認された。以下、その概要を記述する。

第12号ビット群 8b区Pg-3 (第605図)

位置 調査区北部のK9i7~K9j9区に位置している。

重複関係 第98号建物のP3に掘り込まれている。



第605図 第12号ビット群実測図

**確認状況** 第85号整地面を約0.4m掘り下げた標高3.7～3.8mで確認された。

**規模と形状** 南北7.0m、東西8.0mの範囲から、不規則な8か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径（長径）が20～50cmの円形又は楕円形で、深さは17～70cmである。

**所見** 8か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。

第12号ピット群集計表

単位はcm

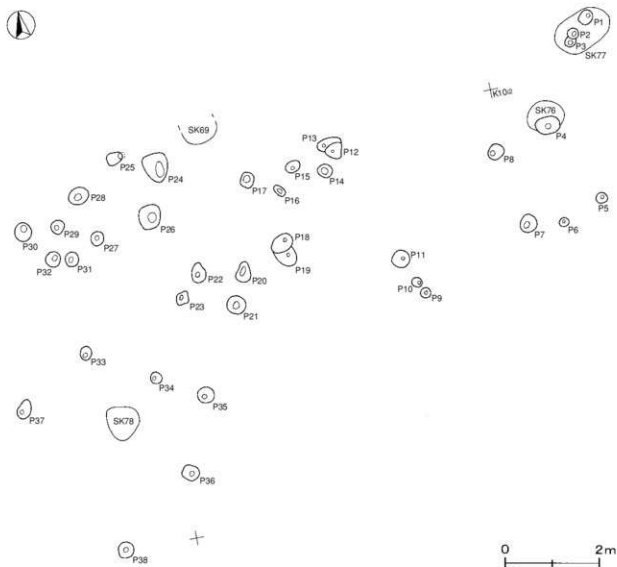
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	30	20	28	P3	40	38	48	P5	47	47	61	P7	35	23	36
P2	42	40	70	P4	38	38	33	P6	50	48	55	P8	32	32	17

**第13号ピット群** S b区P g-4 (第606図)

**位置** 調査区北部のK 9h9～L10a2区に位置している。

**重複関係** 第76号土坑をP 4が掘り込み、第77号土坑にP 1～P 3が掘り込まれている。

**確認状況** 第84号整地面を約0.8m掘り下げた標高3.6～3.9mで確認された。



第606図 第13号ピット群実測図

**規模と形状** 南北9.5m、東西14.5mの範囲から、不規則な38か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径（長径）が18～62cmの円形又は楕円形で、深さは14～68cmである。

**所見** 38か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。

第13号ピット群集計表

単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	30	28	55	P11	36	35	33	P21	38	37	43	P31	31	28	36
P2	24	21	38	P12	28	25	31	P22	40	30	60	P32	30	30	37
P3	23	(17)	38	P13	50	(24)	25	P23	25	25	55	P33	37	37	32
P4	48	35	68	P14	30	28	53	P24	62	50	57	P34	35	22	34
P5	25	22	21	P15	34	24	24	P25	31	27	39	P35	35	35	50
P6	20	19	14	P16	29	18	18	P26	49	47	57	P36	35	33	53
P7	37	33	39	P17	31	28	45	P27	29	26	32	P37	45	29	35
P8	35	33	24	P18	53	35	44	P28	41	35	50	P38	34	32	16
P9	23	21	22	P19	37	32	46	P29	29	25	54				
P10	21	20	21	P20	43	25	33	P30	37	34	59				

第14号ピット群 8b区Pg-6 (第607図)

**位置** 調査区北部のK9h9～K10j3区に位置している。

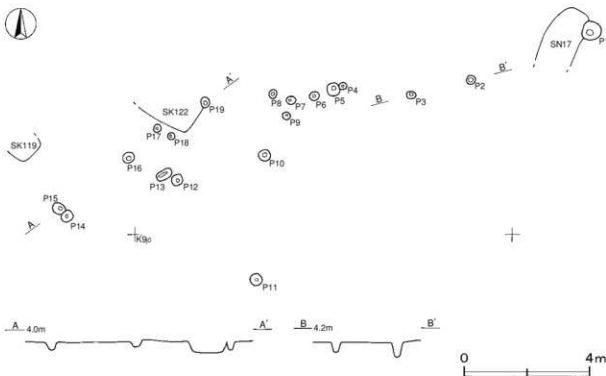
**重複関係** 第17号粘土貼土坑をP1が、第122号土坑をP19が掘り込んでいる。

**確認状況** 第13号ピット群を約0.1m掘り下げた標高3.5～3.8mで確認された。

**規模と形状** 南北7.0m、東西18.5mの範囲から、不規則な19か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径（長径）が15～61cmの円形又は楕円形で、深さは10～48cmである。

**遺物出土状況** 不明鉄製品1点が、P3内から出土している。

**所見** 19か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第607図 第14号ピット群実測図

第14号ピット群集計表

単位はcm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	61	59	12	P6	30	27	18	P11	38	38	21	P16	36	34	11
P2	30	26	48	P7	32	23	16	P12	36	34	39	P17	24	23	12
P3	29	22	31	P8	26	24	17	P13	53	15	18	P18	23	22	12
P4	(36)	22	30	P9	26	22	10	P14	40	35	15	P19	34	23	30
P5	40	40	23	P10	37	32	20	P15	36	32	16				

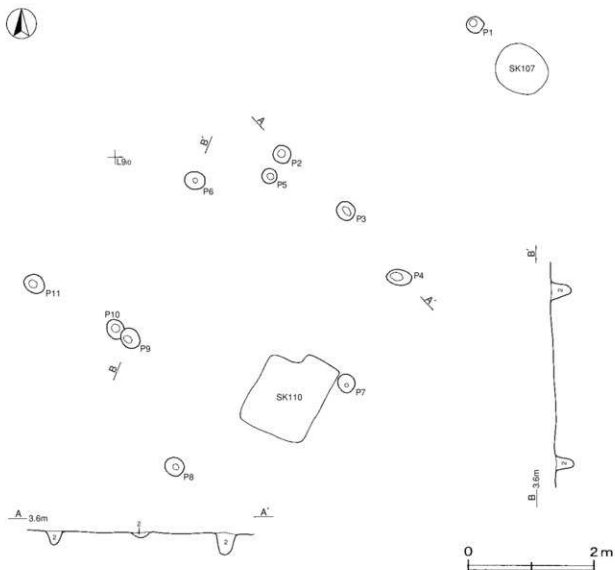
第15号ピット群 6区Pg-2A (第608図)

位置 調査区北部のL9h9～L10j1区に位置している。

確認状況 第79号建物跡を約0.7m掘り下げた標高約3.4mで確認された。

規模と形状 南北7.5m、東西8.0mの範囲から、不規則な11か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が22～40cmの円形又は楕円形で、深さは9～36cmである。

所見 11か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第608図 第15号ピット群実測図

第15号ピット群集計表

単位はcm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	26	24	20	P4	40	27	36	P7	28	24	11	P10	(30)	26	24
P2	28	26	21	P5	23	22	18	P8	30	28	18	P11	34	30	28
P3	30	28	9	P6	32	28	32	P9	34	26	28				

第16号ピット群 6区Pg-2B (第609図)

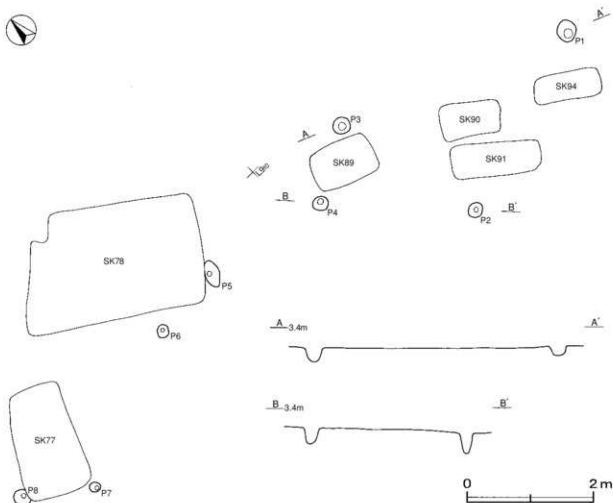
位置 調査区北部のL9f8～L10f1区に位置している。

重複関係 第77号土坑にP8、第78号土坑にP5が掘り込まれている。

確認状況 第88号整地面を約0.8m掘り下げた標高約3.1mで確認された。

規模と形状 南北3.0m、東西12.0mの範囲から、不規則な8か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が14～44cmの円形又は楕円形で、深さは16～42cmである。

所見 8か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第609図 第16号ピット群実測図

第16号ピット群集計表

単位はcm

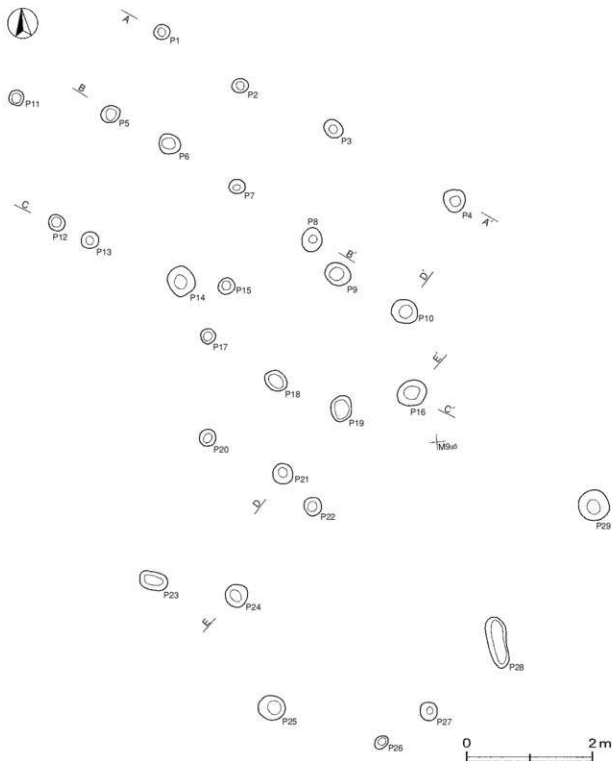
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	28	25	16	P3	26	24	23	P5	44	24	20	P7	18	14	41
P2	23	22	33	P4	24	20	26	P6	20	18	26	P8	28	25	42

第17号ピット群 6区Pg-3 (第610・611図)

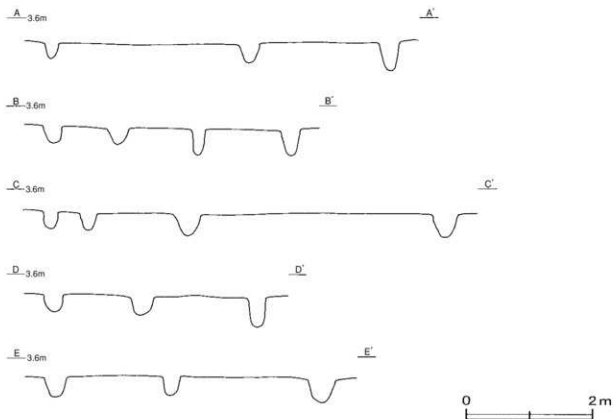
位置 調査区北部のL9i3~M9b5区に位置している。

確認状況 第88号建物跡を約0.5m掘り下げた標高約3.3mで確認された。

規模と形状 南北12.5m、東西9.5mの範囲から、不規則な29か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が23~83cmの円形又は楕円形で、深さは18~62cmである。



第610図 第17号ピット群実測図(1)



第611図 第17号ピット群実測図(2)

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(皿)がP18内から出土している。

**所見** 29か所のピットを確認した。P1～P4とP5～P8はそれぞれ北西軸に並んでいるが、上層を想定できる配列を見いだせなかった。時期・性格は不明である。

第17号ピット群集計表

単位はcm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	28	25	25	P9	43	39	43	P17	29	24	32	P25	42	40	62
P2	27	24	18	P10	44	39	50	P18	38	32	29	P26	25	24	52
P3	33	27	32	P11	27	23	26	P19	42	34	31	P27	30	28	27
P4	43	36	45	P12	27	25	30	P20	28	27	24	P28	83	28	28
P5	31	29	28	P13	29	28	28	P21	33	31	29	P29	52	50	29
P6	39	33	27	P14	50	44	36	P22	31	29	31				
P7	27	23	43	P15	28	26	47	P23	47	30	28				
P8	39	34	43	P16	48	46	37	P24	37	36	31				

#### 第18号ピット群 6区Pg-4 (第612図)

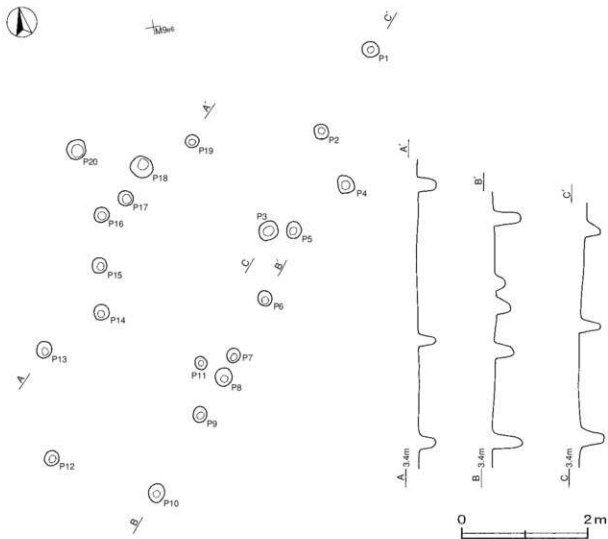
**位置** 調査区中央部のM9e5～M9f6区に位置している。

**確認状況** 第87号建物跡を約0.5m掘り下げた標高約3.3mで確認された。

**規模と形状** 南北8.0m、東西8.0mの範囲から、不規則な20か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が13～33cmの円形又は楕円形で、深さは17～49cmである。

**所見** 20か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。





第612図 第18号ピット群実測図

第18号ピット群集計表

単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	28	25	25	P6	23	22	44	P11	19	19	22	P16	25	24	37
P2	27	23	33	P7	23	21	18	P12	14	13	23	P17	23	23	17
P3	33	31	37	P8	29	26	24	P13	26	24	24	P18	37	34	19
P4	33	25	44	P9	26	24	31	P14	25	24	30	P19	20	20	30
P5	25	22	30	P10	27	26	49	P15	24	24	27	P20	33	33	43

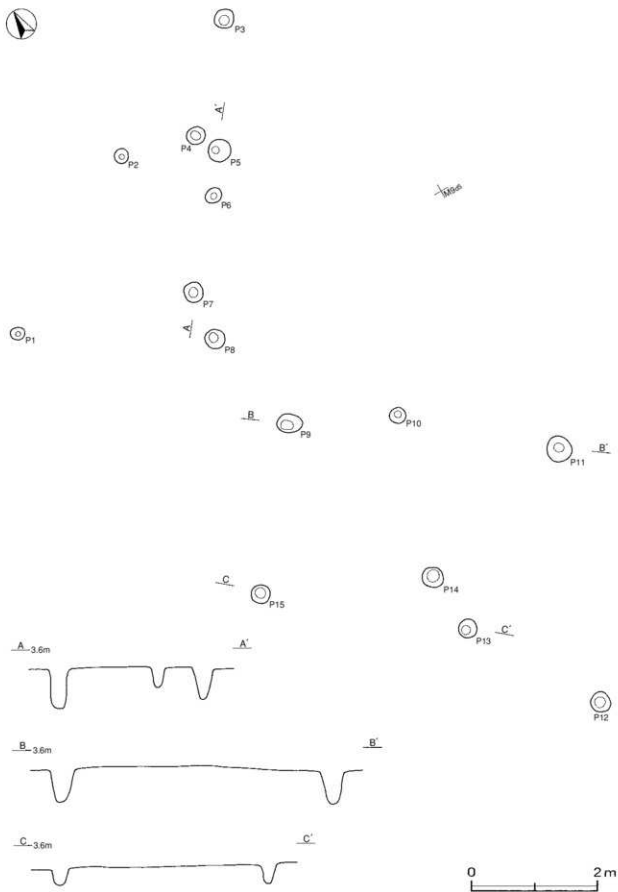
### 第19号ピット群 6区Pg-5 (第613図)

**位置** 調査区中央部のM9b3～M9f4区に位置している。

**確認状況** 第87号建物跡を約0.6m掘り下げた標高約3.2mで確認された。

**規模と形状** 南北12.0m、東西8.0mの範囲から、不規則な15か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が20～43cmの円形又は楕円形で、深さは19～62cmである。

**所見** 15か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第613図 第19号ピット群実測図

第19号ピット群集計表

単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	22	20	26	P5	37	36	50	P9	40	30	52	P13	31	30	31
P2	25	23	35	P6	28	26	32	P10	26	25	40	P14	35	32	50
P3	36	32	23	P7	33	32	62	P11	43	39	52	P15	30	29	25
P4	32	30	19	P8	32	31	51	P12	32	32	23				

第20号ピット群 6区Pg-6 (第614図)

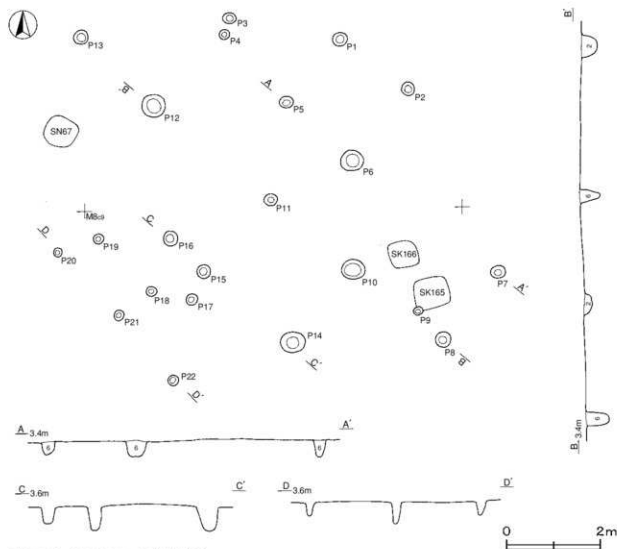
位置 調査区中央部のM8b8-M9d1区に位置している。

重複関係 第165号土坑をP9が掘り込んでいる。

確認状況 第3号畝状遺構を約0.5m掘り下げた標高約3.3mで確認された。

規模と形状 南北8.5m、東西10.0mの範囲から、不規則な22か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が18-51cmの円形又は楕円形で、深さは18-52cmである。

所見 22か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第614図 第20号ピット群実測図

第20号ビット群集計表

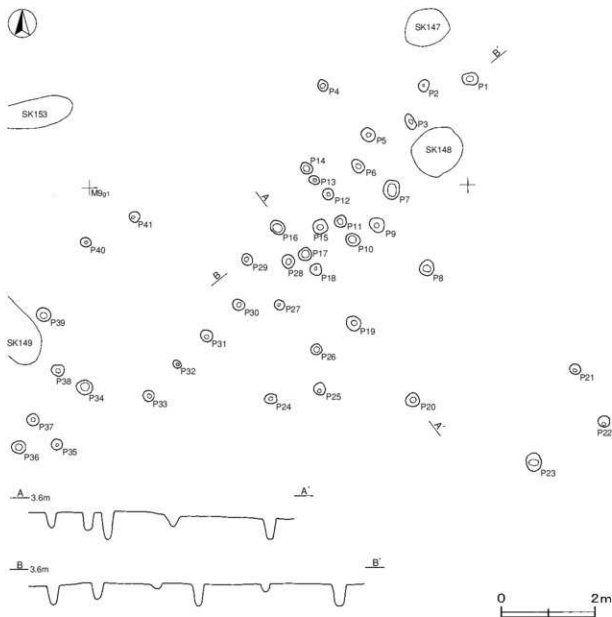
単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	33	32	36	P7	30	27	30	P13	32	31	37	P19	23	21	28
P2	29	27	48	P8	33	31	48	P14	51	44	51	P20	18	18	27
P3	30	24	25	P9	18	18	35	P15	30	29	52	P21	24	21	45
P4	23	23	42	P10	49	42	18	P16	33	33	33	P22	24	22	31
P5	30	24	26	P11	28	26	42	P17	25	24	30				
P6	50	44	31	P12	51	51	32	P18	22	21	24				

第21号ビット群 6区Pg-7 (第615図)

位置 調査区中央部のM8f0-M9h4区に位置している。

確認状況 表砂を約3.7m掘り下げた標高約3.3mで確認された。



第615図 第21号ビット群実測図

**規模と形状** 南北10.0m, 東西13.0mの範囲から, 不規則な41か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が15~40cmの円形又は楕円形で, 深さは9~68cmである。

**所見** 41か所のピットを確認したが, 配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。

第21号ピット群集計表

単位はcm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	32	28	55	P12	25	21	9	P23	40	31	30	P34	34	32	40
P2	26	21	14	P13	23	17	18	P24	25	20	31	P35	23	23	17
P3	33	20	17	P14	25	22	35	P25	26	24	41	P36	28	28	25
P4	23	21	42	P15	33	33	68	P26	23	22	17	P37	25	24	19
P5	30	27	33	P16	31	26	34	P27	22	20	55	P38	24	23	20
P6	30	23	45	P17	26	26	39	P28	29	26	40	P39	30	28	34
P7	39	32	44	P18	25	23	58	P29	25	24	40	P40	22	21	11
P8	32	29	46	P19	31	30	25	P30	23	22	32	P41	23	21	35
P9	30	29	22	P20	29	26	43	P31	25	25	30				
P10	30	29	42	P21	22	20	26	P32	19	15	36				
P11	25	24	29	P22	26	24	35	P33	22	22	26				

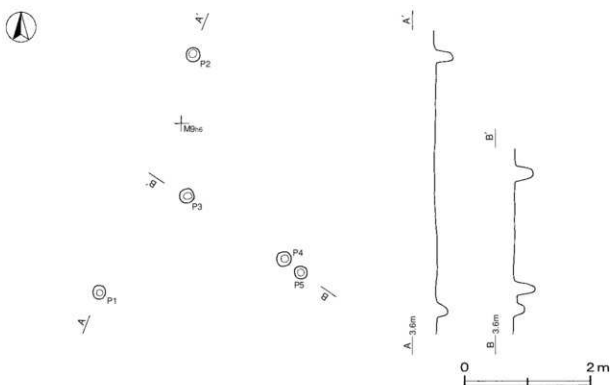
**第22号ピット群** 6区Pg-9 (第616図)

**位置** 調査区中央部のM9g5~M9h6区に位置している。

**確認状況** 表砂を約3.7m掘り下げた標高約3.3mで確認された。

**規模と形状** 南北5.0m, 東西4.0mの範囲から, 不規則な5か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径20~24cmの円形で, 深さは16~35cmである。

**所見** 5か所のピットを確認したが, 配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第616図 第22号ピット群実測図

第22号ピット群集計表

単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	20	20	19	P3	24	24	31	P5	21	20	16
P2	24	24	28	P4	24	23	35				

第23号ピット群 6区 P g -10 (第617図)

位置 調査区中央部のM9b1～M9c3区に位置している。

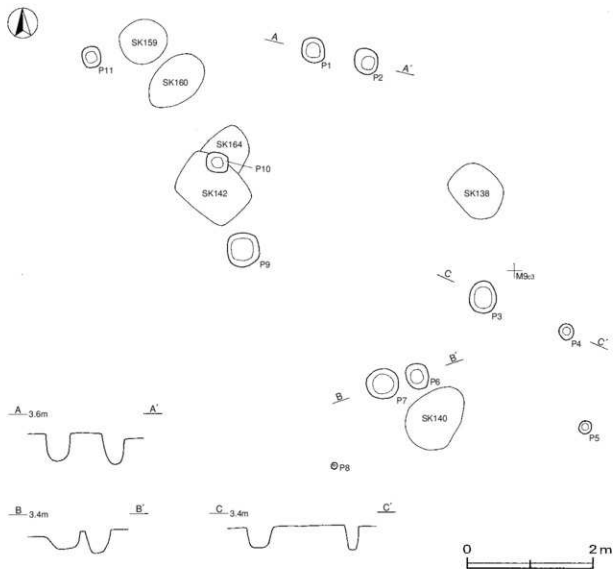
重複関係 第142・164号土坑をP10が掘り込んでいる。

確認状況 第3号畝状遺構の東部を約0.3m掘り下げた標高3.2～3.5mで確認された。

規模と形状 南北8.5m、東西7.0mの範囲から、不規則な11か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が10～55cmの円形又は楕円形で、深さは10～45cmである。

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)がP7内から出土している。

所見 11か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第617図 第23号ピット群実測図

第23号ピット群集計表

単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	41	37	45	P4	26	22	31	P7	52	52	23	P10	40	33	10
P2	42	38	43	P5	21	20	26	P8	10	10	16	P11	33	30	43
P3	51	42	40	P6	42	36	36	P9	55	51	41				

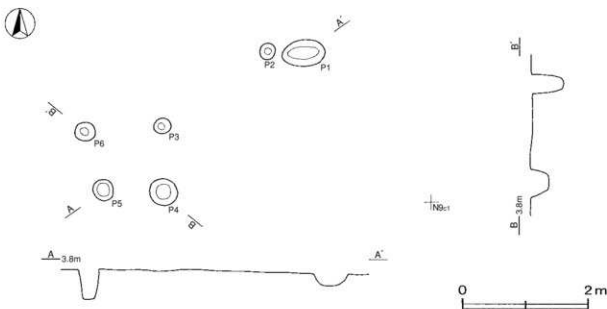
## 第24号ピット群 6区Pg-12 (第618図)

位置 調査区南部のN8b9～N8b0区に位置している。

確認状況 第92号建物跡を約0.2m掘り下げた標高約3.6mで確認された。

規模と形状 南北3.0m、東西4.5mの範囲から、不規則な6か所のピットが確認された。いずれも砂層を掘り込んでいる。径(長径)が24～70cmの円形又は楕円形で、深さは20～50cmである。

所見 6か所のピットを確認したが、配列に規則性は見られない。時期・性格は不明である。



第618図 第24号ピット群実測図

第24号ピット群集計表

単位は cm

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P1	70	40	20	P3	28	24	25	P5	34	32	47
P2	25	25	25	P4	44	42	30	P6	33	32	50

表61 5・6・8b区ピット群一覧表

番号	区	位置	標高	範囲 (m)		柱穴数	柱穴平面形	径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
				南北	東西						
12	8b	K9i7～K9j9	3.7～3.8	7.0	8.0	8	円形・楕円形	20～50	17～70	-	本跡→SI98
13	8b	K9h9～L10a2	3.6～3.9	9.5	14.5	38	円形・楕円形	18～62	14～68	-	SK76→本跡→SK77
14	8b	K9h9～K10j3	3.5～3.8	7.0	18.5	19	円形・楕円形	15～61	10～48	不明鉄製品	SN17・SK122→本跡
15	6	L9h9～L10j1	3.4	7.5	8.0	11	円形・楕円形	22～40	9～36	-	

番号	区	位置	標高	範囲 (m)		柱穴数	柱穴平面形	径 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
				南北	東西						
16	6	L9f8~L10f1	3.1	3.0	12.0	8	円形・楕円形	14~44	16~42	-	本跡→SK77・78
17	6	L9i3~M9b5	3.3	12.5	9.5	29	円形・楕円形	23~83	18~62	土師質土器 (皿)	
18	6	M9e5~M9f6	3.3	8.0	8.0	20	円形・楕円形	13~33	17~49	-	
19	6	M9b3~M9f4	3.2	12.0	8.0	15	円形・楕円形	20~43	19~62	-	
20	6	M8b8~M9d1	3.3	8.5	10.0	22	円形・楕円形	18~51	18~52	-	SK165→本跡
21	6	M8f0~M9b4	3.3	10.0	13.0	41	円形・楕円形	15~40	9~68	-	
22	6	M9g5~M9b6	3.3	5.0	4.0	5	円形	20~24	16~35	-	
23	6	M9b1~M9c3	3.2~3.5	8.5	7.0	11	円形・楕円形	10~55	10~45	-	SK164→SK142→本跡
24	6	N8b9~N8b0	3.6	3.0	4.5	6	円形・楕円形	24~70	20~80	-	

#### 00) 道路跡

##### 道路跡 6区SF-1 (第619・620図, 付図)

**位置** 調査区中央部のM8b8~M9e7区に位置している。第88号建物跡と隣接している。

**重複関係** 第3号竪状遺構を掘り込んでいる。

**確認状況** 表砂を約3.4m除去した標高約3.6mで、黒色土面を二分する1条の砂層面が確認された。

**規模と形状** M8e8区から北東方向のM9c7区に向かって緩やかな弧を描き、黒色土面を南部と北部に二分している。西部と東部の両端は自然の砂層面と合流してしまうため、長さ約47.6m、幅1.0~3.0mだけが確認された。土層断面図中の第2層は黒色土がわずかに含まれた砂B層、第6層は生活面として構築された黒色土が崩れて流れ込んだ黒色土D層である。

**遺物出土状況** 土師質土器片2点 (皿)、陶器片1点 (皿)、金属製品2点 (釘、猿手) が砂層から出土している。いずれも、生活面から流れ込んだものと考えられる。

**所見** 第3号竪状遺構や生活面の黒色土面を二分し、覆土は黒色土がわずかに含まれた砂B層を主体としている。また、生活面を構築している黒色土D層は、強く踏み込むとすぐ崩れてしまう状況であった。これらのことから、集落が廃絶された後、海岸へ向かう通路として使用されたため、黒色土面が崩れたと考えられる。時期は、最初の遺構確認面である黒色土面を壊していることから、17世紀前半以降と考えられる。



第619図 道路跡土層図



第620図 道路跡出土遺物実測図



道路跡出土遺物観察表（第620図）

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	胎付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4472	皿	陶器	-	(0.7)	[6.0]	灰白・灰青リーフ	灰釉	内野面施釉 両面内縁にナシ	瀬戸・美濃	覆土中	20%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考	
4473	釘	(2.5)	0.3	0.8	(3.5)	鉄	断面長方形 中央部から屈曲 先端部欠損		覆土中		
4474	狼手	2.3	3.3	0.8	8.8	銅	断面半円形 くの字状に屈曲		覆土中	PL90	

## 011 区画状遺構

遺構を区画するような暗褐色土の高まりが3条確認された。以下、その概要を記述する。

**第1号区画状遺構** 6区SD-1（第621図）

**位置** 調査区北部のL9e0～L10g5区に位置し、東から西へ下る緩やかな傾斜面に立地している。

**確認状況** 第92号整地地面を確認した標高約4.2mで、砂層面から1条の暗褐色土が確認された。

**規模と形状** 第92～94号整地地面の東部から南部を区画するように構築されている。L10f5区から南西方向（S-42°-W）へ延び、L10g4区から北西方向（N-62°-W）へ緩やかに曲がった後、直線的に延びている。確認できた長さ約26m、幅約0.4mで、高さは最大で45cmの暗褐色土の高まりが遺存している。土層断面図中の第10層は、ローム土混じりの暗褐色土で、締まりは強い。

**所見** 遺存状態はよくないが、整地地面を何らかの目的で区画した遺構と考えられる。時期は、第92～94号整地地面と同時期の17世紀頃と考えられる。

**第2号区画状遺構** 6区SD-2（第414図）

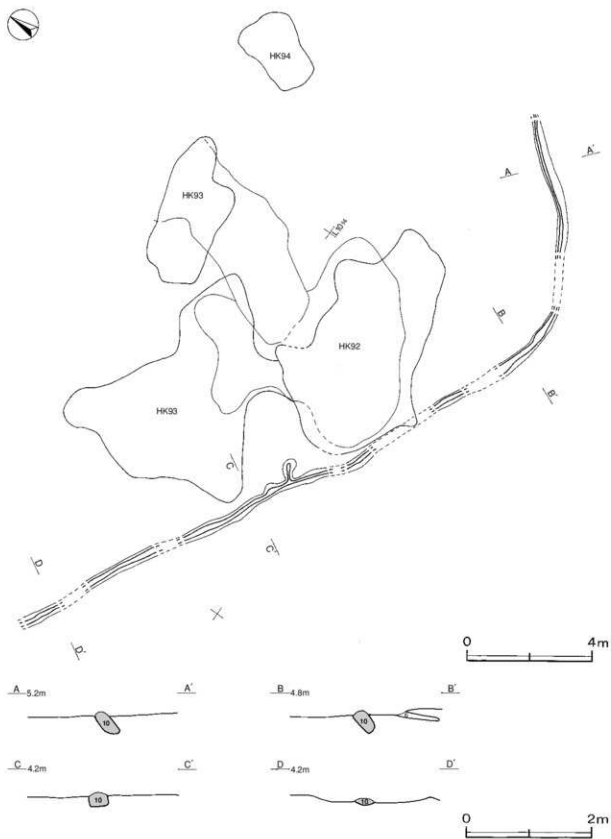
**位置** 調査区中央部のM9b7～M10g3区に位置し、東から西へ下る緩やかな傾斜面に立地している。

**重複関係** 第10号粘土貼土境に掘り込まれている。

**確認状況** 第82号建物跡を約0.4m除去した標高約4.2mで、第77号建物跡に伴う区画状遺構が確認された。

**規模と形状** 第77号建物跡の東部と南西部を区画するように構築されている。東部は、M9g0区から北東方向（N-25°-E）へ延びている。南西部は、M9f0区から北西方向（N-70°-W）へ延びている。M9f0区付近は途切れており、建物に通じる出入り口部と考えられる。確認できた長さ約35m、幅2.2～2.4mで、高さは最大で50cmの暗褐色土の高まりが遺存している。土層断面図中の第10層は、ローム土混じりの暗褐色土で、締まりは強い。2条の暗褐色土が平行しているように遺存しているが、断面形がハの字状であることから、本来は土手状の高まりであった可能性が高い。

**所見** 第77号建物跡の外側を区画していた遺構と考えられる。時期は、建物跡と同時期の16世紀末から17世紀初頭と考えられる。



第621图 第1号区画状构造实测图

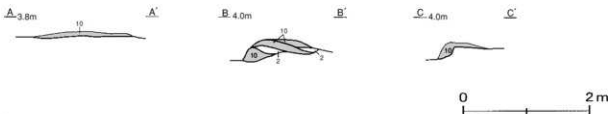
### 第3号区画状遺構 6区SD-3 (第622図, 付図)

**位置** 調査区南部のN9b5~N9f7区に位置し、確認された遺構の中で、最も南東部の平坦部に立地している。

**確認状況** 第84号建物跡を約0.4m除去した標高約3.7mで確認された。

**規模と形状** 西部に広がる建物跡や整地面などの遺構と、東部の砂堤帯とを区画するように構築されている。N9f5区から北東方向(N-25°-E)へ直線的に延びている。確認できた長さ約17.8m、幅0.7~1.8mで、高さは最大で34cmの暗褐色土の高まりが遺存している。土層断面図中の第10層は、ローム土混じりの暗褐色土で、締まりは強い。

**所見** 集落と砂堤帯とを区画していた遺構と考えられる。時期は、第84号建物跡の下層から検出されていることから、16世紀末から17世紀初頭と考えられる。



第622図 第3号区画状遺構土層図

表62 5・6・8b区画状遺構一覧表

番号	遺構番号	田番号	位置	標高(m)	方向	形状(m)	規模			構築土	出土遺物	備考 新旧関係 旧→新
							長さ(m)	幅(m)	高さ(cm)			
1	第1号区画状遺構	6区SD1	L9e0~L10g5	4.2	南西・北西方向	L字状	(26.0)	0.4	45	暗褐色土		
2	第2号区画状遺構	6区SD2	M9b7~M10g3	4.2	北東・北西方向	弧状	(35.0)	2.2~2.4	50	暗褐色土		本路→SN10
3	第3号区画状遺構	6区SD3	N9b5~N9f7	3.7	北東方向	直線	(17.8)	0.7~1.8	34	暗褐色土		

#### 02 不明遺構

性格不明の遺構2基が確認された。以下、その概要を記述する。

#### 第16号不明遺構 8b区SX-1 (第623図)

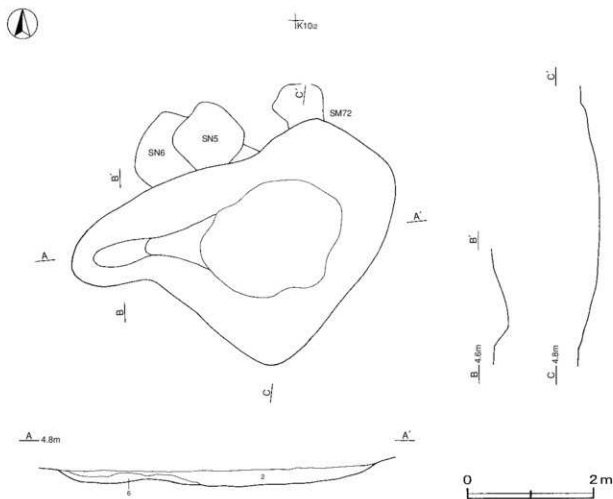
**位置** 調査区北部のK10i1区を中心に位置している。

**重複関係** 第84号整地面、第5・6号粘土貼土坑、第72号貝集積地を掘り込んでいる。

**確認状況** 表砂を2.0m除去した標高約4.4mで確認された。

**規模と施設** 長軸3.8m、短軸3.4mの西部がやや張り出したような不定形で、長軸方向はN-37°-Eである。底面は皿状で、深さは最大で26cmである。覆土は、第2層の砂B層が自然堆積、第6層の黒色土D層が人為堆積した層である。

**所見** 第84号整地面の黒色土面を掘り込んで構築されており、竈あるいは粘土貼土坑を構築するために掘り込み、製作途中で放棄した可能性が考えられる。時期は、第84号整地面より新しい17世紀前半と考えられる。



第623図 第16号不明遺構実測図

#### 第17号不明遺構 6区SX-1 (第624図)

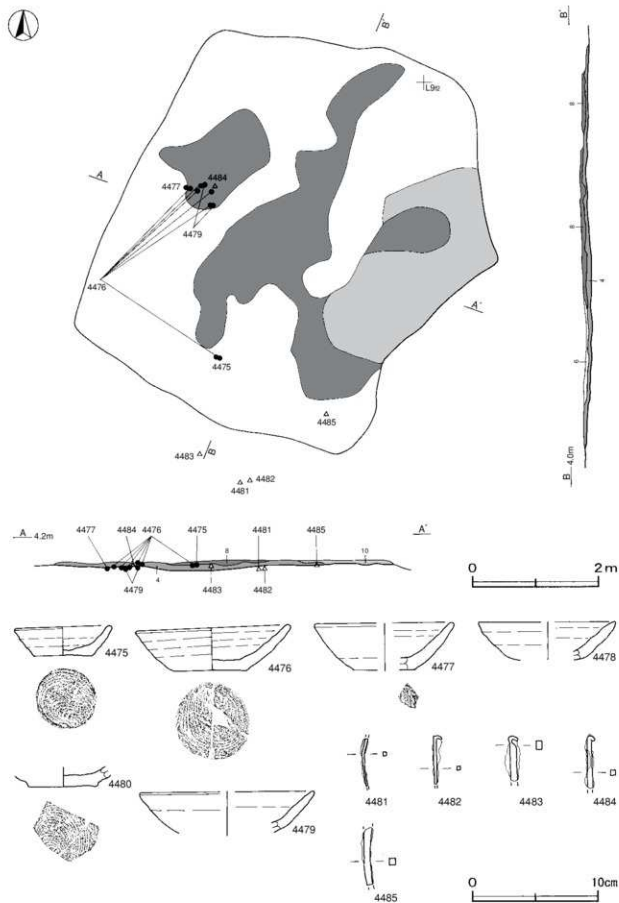
**位置** 調査区北部のL9f1区を中心に位置している。

**確認状況** 表砂を3.2m除去した、標高約3.8mで確認された。

**規模と施設** 長軸6.5m、短軸5.3mの不整長方形で、長軸方向はN-22°-Eである。厚さ8~10cmの黒色土を貼り付けて構築され、締まりは強い。また、東部には厚さ5~8cmの暗褐色のローム土が貼り付けられている。黒色土面の中央部から広範囲にわたり、厚さ3~8cmの焼土が堆積している。

**遺物出土状況** 土師質土器片32点(小皿2, 皿30)、鉄製品16点(釘5, 不明11)が出土している。遺物は、南部と西部に散在している。4475・4485は南部の黒色土中、4481~4483は南部の砂層、4477・4479・4484は西部の黒色土中からそれぞれ出土している。また、4476は南部と西部から出土した破片が接合したものである。

**所見** 建物跡や整地面よりも硬く締まった黒色土面に、焼土が厚く堆積している。付属施設もなく遺構の性格は不明である。時期は、最初の遺構確認面から検出され、第84号整地面を掘り込んでいることから、17世紀前半と推定される。



第624图 第17号不明遺構・出土遺物実測図

第17号不明遺構出土遺物観察表 (第624図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4475	小皿	土師質土器	7.3	2.3	4.7	雲母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	内底面渦巻状のナデ	南部黒色土中	90% PL73
4476	皿	土師質土器	12.0	3.6	5.6	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面横ナデ	南部・西部黒色土中	55% PL78
4477	皿	土師質土器	[10.6]	3.7	[4.8]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底面回転未切り	西部黒色土中	20%
4478	皿	土師質土器	[10.8]	(3.0)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面口クロナデ	覆土中	10%
4479	皿	土師質土器	[13.4]	(3.2)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内・外面口クロナデ	西部黒色土中	15%
4480	皿	土師質土器	-	(1.6)	[5.4]	長石・雲母	にぶい黄緑	普通	内底面横ナデ	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4481	釘	(4.0)	0.3	0.3	(1.3)	鉄	断面方形 両端部欠損	南部砂層	
4482	釘	(4.1)	0.3	0.3	(2.6)	鉄	断面方形 先端部欠損	南部砂層	
4483	釘	(3.6)	0.5	0.7	(5.8)	鉄	断面長方形 先端部欠損	南部砂層	
4484	釘	(4.2)	0.4	0.4	(3.2)	鉄	断面方形 先端部欠損	西部黒色土中	
4485	釘	(4.8)	0.5	0.5	(6.6)	鉄	断面方形 両端部欠損	南部黒色土中	

表63 5・6・8b区不明遺構一覽表

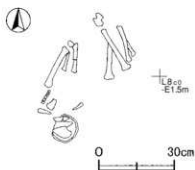
番号	区	遺構番号	位置	標高	長軸・長径方向	規模 (黒色土)			形状	壁面	床面	出土遺物	新旧関係 旧→新 (旧番号)
						長軸(旧) (m)	短軸(旧) (m)	長さ・厚さ (cm)					
16	8b	SX 1	K1011	4.4	N-37°-E	3.8	3.4	26	不定形	緩斜	皿状	-	HE84・SNS-6・SM72→本跡
17	6	SX 1	L 941	3.8	N-22°-E	6.5	5.3	8-10	不整形長方形	-	平坦	土師質土器 (小皿, 皿), 釘	

## 03 土墳墓

ここでは、人骨の埋葬が確認された4基について、その概要を記述する。

## 第163号土墳墓 8b区SK-7 (第625図)

位置 調査区北部のL8c0区で、第75号建物跡の南側4mに位置している。



第625図 第163号土墳墓実測図

**確認状況** 表砂を3.1m除去後、標高3.4mで人骨の頭部を確認した。掘り込みは確認できなかった。

**埋葬の状況** 南西頭位東面右側屈葬で埋葬されていた。頭蓋骨は崩れていたが、四肢骨の状況から、顔は東向きと推定される。

**性別と年齢** 性別不明 少年 (10歳前後)

**遺骸の特徴** ほは全身の骨格が確認された。腐朽しており、計測は困難であった。歯は乳歯と永久歯の混合歯列で、第2乳臼歯が遺存し小白歯は萌出している。

**所見** 副葬品を伴わないため、埋葬の時期は不明である。

## 第164号土墳墓 8b区SK-8 (第626図)

位置 調査区北部のK9j6区で、第85号整地面のすぐ西側に位置している。

**確認状況** 表砂を2.5m除去後、標高3.9mで人骨の頭部を確認した。掘り込みは確認できなかったが、土墳墓の最下部を認めることができた。

**規模と形状** 長径0.70m、短径0.55mの楕円形で、深さは10cmである。

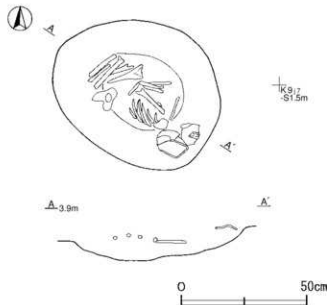
**埋葬の状況** 南東頭位北東面右側臥屈葬で埋葬されていた。上肢骨、下肢骨ともに、小さく折りたたまれ、体に密着した状態であった。

**覆土** 人骨下の覆土は、黒色土D層を主体とした埋葬時の埋め戻しである。

**性別と年齢** 性別不明 幼児（3～4歳）

**遺骸の特徴** ほぼ全身の骨格が確認され、遺存状態は良好である。歯は乳歯で、乳中切歯から第2乳臼歯までが萌出している。

**所見** 副葬品を伴わないため、埋葬の時期は不明であるが、層位から第85号整地面構築前に埋葬されたと考えられる。



第626図 第164号土墳墓実測図

#### 第165号土墳墓 6区SK-163（第627図）

**位置** 調査区北部のL8j9区に位置している。

**確認状況** 表砂を3.2m除去後、第3号畝状遺構の下層0.3mの標高3.5mで人骨の頭部を確認した。掘り込みは確認できなかったが、土墳墓の最下部を認めることができた。

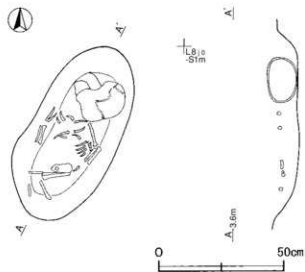
**規模と形状** 長径0.75m、短径0.35mの楕円形で、深さは9cmである。

**埋葬の状況** 北東頭位西面右側臥屈葬で埋葬されていた。

**性別と年齢** 性別不明 幼児（2～3歳）

**遺骸の特徴** ほぼ全身の骨格が確認された。歯は乳歯で、乳中切歯から第1乳臼歯までが萌出し、第2乳臼歯は未萌出であった。

**所見** 副葬品を伴わないため、埋葬の時期は不明である。層位から第3号畝状遺構構築前に埋葬されたと考えられる。

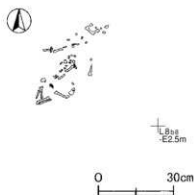


第627図 第165号土墳墓実測図

#### 第166号土墳墓 6区SK-180（第628図）

**位置** 調査区北部のL8a8区で、第100号整地面のすぐ北側に位置している。

**確認状況** 表砂を3.3m除去後、標高3.6mで人骨を確認した。掘り込みは確認できなかった。



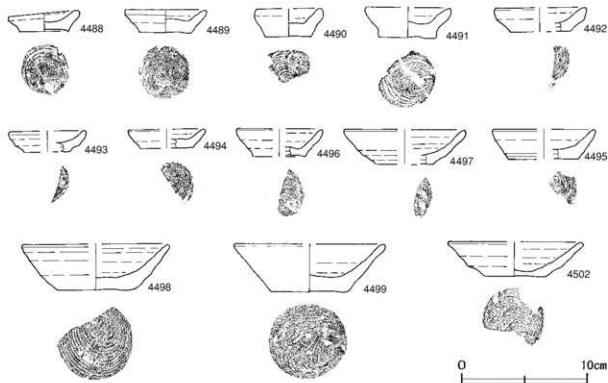
第628図 第166号土墳墓実測図

表64 5・6・8b区土墳墓一覧表

番号	区	遺構番号	位置	標高	性別	推定死亡年齢	推定身長	各四肢骨の長さ(単位cm)												備考
								上腕骨		桡骨		尺骨		大腿骨		脛骨		腓骨		
								右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
163	8b	SK 7	L 8 c0	3.4	-	少年	-	(11.6)	(12.0)	(6.3)	-	(9.1)	-	(20.3)	21.2	(15.0)	(14.4)	(9.9)	(9.3)	
164	8b	SK 8	K 9 j6	3.9	-	幼児	-	(15.0)	(11.1)	(7.0)	(11.5)	(11.8)	(12.1)	(16.4)	(15.0)	(8.3)	(11.5)	(8.7)	(9.0)	第3号坑状遺構下層
165	6	SK163	L 8 j9	3.5	-	乳幼児	-	(8.0)	(8.0)	(6.5)	(6.4)	(7.0)	(7.5)	(11.5)	(10.0)	(6.2)	(8.5)	-	-	
166	6	SK180	L 8 a8	3.6	-	新生児	-	(6.8)	(6.5)	(1.8)	(4.0)	(3.5)	(5.5)	(7.7)	(7.5)	(6.5)	(6.7)	(2.8)	(5.0)	

04 遺構外出土遺物

遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第629図 遺構外出土遺物実測図(1)

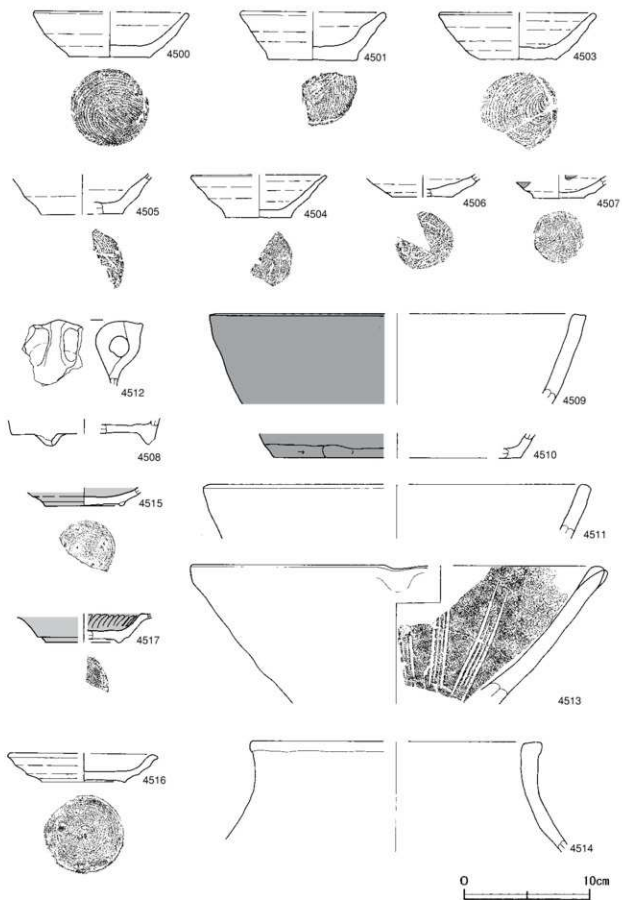
**埋葬の状況** 骨の遺存状態から、北東頭位屈葬で埋葬されていた。顔の向きは確認できなかった。

**性別と年齢** 性別不明 新生児

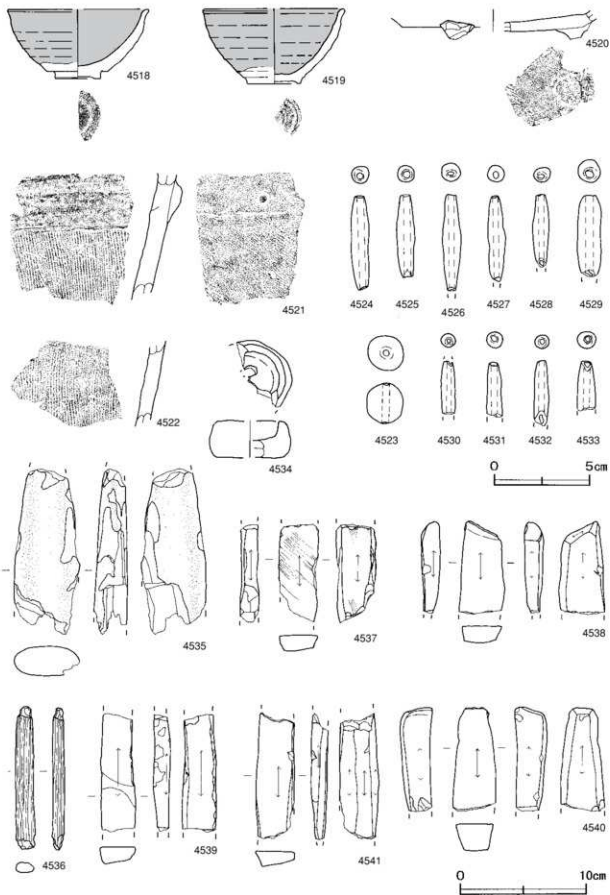
**遺骸の特徴** はほぼ全身骨格が確認されたが、腐朽していた。頭骨の一部、上腕骨、骨盤、大腿骨が確認された。歯は歯冠のみが3本確認された。

**所見** 副葬品を伴わないため、埋葬の時期は不明である。層位から第100号整地面構築前に埋葬されたと考えられる。

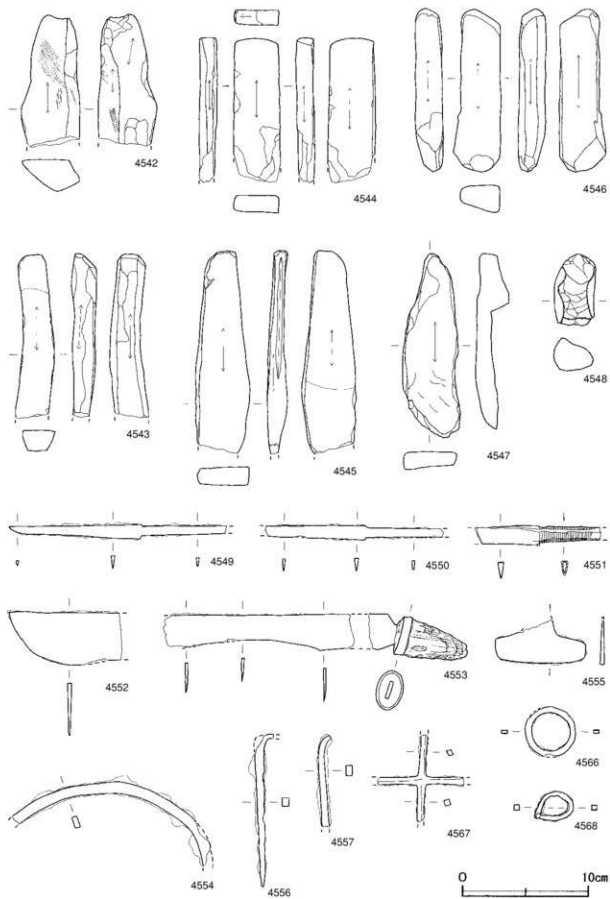




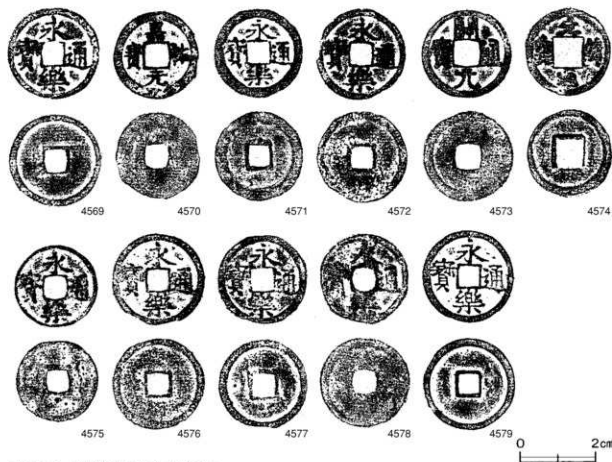
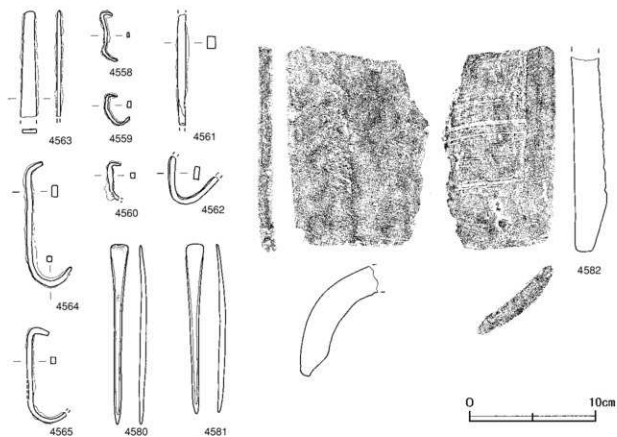
第630図 遺構外出土遺物実測図2)



第631图 遗構外出土遺物実測図(3)



第632图 遗構外出土遺物実測図4)



第633圖 遺構外出土遺物実測図(5)

第5・6・8b区遺構外出土遺物観察表 (第629~633図)

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4488	小皿	土師質土器	5.5	1.6	3.8	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	N9区	100% PL73
4489	小皿	土師質土器	6.4	1.8	4.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	8 b区	80%
4490	小皿	土師質土器	[5.0]	2.2	[3.6]	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	N8区	30%
4491	小皿	土師質土器	[6.8]	2.4	4.5	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	6区	30%
4492	小皿	土師質土器	[7.0]	1.9	[4.8]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	N9区	30%
4493	小皿	土師質土器	[5.8]	2.2	[3.6]	長石・雲母	明赤褐	普通	体部内・外面口ロナデ	6区	30%
4494	小皿	土師質土器	[6.0]	1.5	[4.2]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	M9区	30%
4495	小皿	土師質土器	[8.0]	2.4	[5.4]	長石・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	底部回転未切り	M9区	20%
4496	小皿	土師質土器	[6.8]	2.2	[4.2]	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	L9区	30%
4497	小皿	土師質土器	[9.6]	2.3	[4.6]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	N8区	30%
4498	皿	土師質土器	[11.6]	3.7	6.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面横ナデ	M9区	45% PL77
4499	皿	土師質土器	[11.8]	3.8	6.0	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	6区	60%
4500	皿	土師質土器	[12.1]	3.6	6.5	長石・雲母	橙	普通	内底面渦巻きのナデ	M9区	60%
4501	皿	土師質土器	[11.0]	3.8	7.0	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	M9区	25%
4502	皿	土師質土器	[10.5]	2.7	4.9	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転未切り	6区	40%
4503	皿	土師質土器	[12.1]	3.7	6.1	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内底面渦巻きのナデ	6区	60%
4504	皿	土師質土器	[10.6]	3.4	[5.2]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	M9区	20%
4505	皿	土師質土器	- (3.2)	[6.0]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転未切り	M9区	30%	
4506	皿	土師質土器	- (1.8)	4.8	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	内底面強い横ナデ	N9区	30%	
4507	皿	土師質土器	- (1.8)	4.0	石英・雲母	赤褐	普通	底部回転未切り 内・外面塚付	N9区	30%	
4508	香炉	土師質土器	- (2.0)	-	長石・雲母・赤色粒子	暗灰	普通	底部回転未切り後足取り付け	N8区	15%	
4509	内耳鍋	土師質土器	[15.0]	7.2	-	長石・雲母	赤褐	普通	口縁部横ナデ 外面塚付	M9区	10%
4510	内耳鍋	土師質土器	- (2.0)	[19.6]	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面下唇へ張り 外面塚付	L9区	5%	
4511	内耳鍋	土師質土器	[30.8]	(4.4)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ	M8区	5%
4512	内耳鍋	土師質土器	- (5.2)	-	長石・石英・小礫	赤褐	普通	内面ナデ 外面塚付	N9区	5%	
4513	椀鉢	土師質土器	[32.4]	(11.0)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	4条1単位の盛り目	M9区	10% PL80
4514	壺	瓦質土器	[23.0]	(8.7)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	口縁部横ナデ	N8区	5% PL82

番号	器形	器質	口径	器高	底径	胎土・色調	絵付・施装	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4515	丸皿	陶器	- (1.5)	6.1	灰白・黄褐	灰緑	青・黒線画 高台縁付	瀬戸・美濃	L9区	30%	大前期
4516	丸皿	陶器	[11.2]	2.2	6.6	灰白・灰白	長石軸	見5・高台内径3ヶ所付	瀬戸・美濃 17C前後	N9区	6% 大脚 孔8
4517	折縁皿	陶器	- (2.3)	[6.0]	灰白・オリーブ黄	灰緑	内・外面施粧 体部内径ノコ	瀬戸・見濃 BC後段-JC前	N9区	30%	大脚4
4518	天目茶碗	陶器	[11.0]	5.5	[3.6]	灰白・赤褐	鉄軸	輪高台 高台部筋軸	瀬戸・見濃 BC後段-JC前	M9区	5% 大脚 孔8
4519	天目茶碗	陶器	[11.0]	6.0	[4.2]	にぶい白・明赤褐	鉄軸	輪高台 高台部筋軸	瀬戸・見濃 BC後段-BC前	L9区	5% 大脚 孔8
4520	大皿	陶器	- (2.3)	-	灰白・浅黄	灰緑	底部片 足取り付け	瀬戸・美濃	M9区	10%	古瀬戸噴着

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4521	円筒埴輪	(10.0)	-	1.4	(265.0)	長石・石英	内面斜位のハレ目ナデ 外面縦位のハレ目筋凸部取り出	6区	PL83
4522	円筒埴輪	(6.8)	-	1.2	(104.1)	長石・石英	内面斜位のナデ 外面縦位のハレ目	M9区	PL83
4523	土鉢	2.1	1.9	1.8	7.5	砂粒	孔径0.3cm 外面ナデ	6区	
4524	管状土鉢	5.0	1.0	0.9	(3.4)	長石・雲母	ほぼ定存 孔径0.3cm 外面ナデ	6区	
4525	管状土鉢	(4.3)	0.9	0.9	(2.7)	雲母	ほぼ定存 孔径0.3cm 外面ナデ	6区	
4526	管状土鉢	(5.1)	1.0	1.0	(3.8)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	N9区	
4527	管状土鉢	(4.6)	0.9	1.0	(2.8)	長石	ほぼ定存 孔径0.3cm 外面ナデ	N9区	
4528	管状土鉢	(3.8)	0.9	0.8	(1.9)	長石・雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	M9区	
4529	管状土鉢	(4.3)	1.2	1.2	(5.9)	長石・雲母	孔径0.4cm 外面ナデ	L8区	
4530	管状土鉢	(2.8)	0.8	0.8	(1.5)	雲母	孔径0.2cm 外面ナデ	N9区	
4531	管状土鉢	(2.9)	0.8	0.8	(1.7)	長石・雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	N9区	
4532	管状土鉢	(3.6)	0.8	0.8	(2.0)	雲母	孔径0.3cm 外面ナデ	6区	
4533	管状土鉢	(2.6)	1.0	0.9	(2.1)	長石	孔径0.3cm 外面ナデ	M9区	
4534	不明	[5.2]	3.0	[5.4]	(45.1)	雲母	内・外面ナデ 底部1ヶ所穿孔	K9区	
4535	割製石芥	(13.1)	5.2	2.4	(218.0)	粘板岩	両端部欠損 断面輪内形	8 b区	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質(胎土)	特徴	出土位置	備考
4536	石棒	11.3	1.6	1.0	(26.1)	粘板岩	両面状に先端部加工 端部一部欠損	6区	PL88
4537	砥石	(7.8)	3.3	1.5	(51.5)	凝灰岩	砥面3面 砥面やや湾曲	K10区	
4538	砥石	(7.3)	3.7	1.5	(53.0)	凝灰岩	砥面5面 断面四角形	K9区	
4539	砥石	(9.4)	2.8	1.4	(54.4)	凝灰岩	砥面3面 砥面やや湾曲	6区	
4540	砥石	(8.2)	3.4	2.5	(94.3)	凝灰岩	砥面4面 断面四角形	N9区	
4541	砥石	(10.0)	3.1	1.2	(49.4)	凝灰岩	砥面5面 裏面に整形時の加工痕有り	K9区	
4542	砥石	(10.5)	4.2	2.5	(142.4)	凝灰岩	砥面3面 他は剥離面 砥面に擦痕有り	K10区	PL87
4543	砥石	(13.0)	3.1	1.9	(98.3)	凝灰岩	砥面3面 両側面に整形時の加工痕有り	6区	
4544	砥石	(11.5)	3.8	1.5	(108.0)	粘板岩	砥面5面 断面四角形	K9区	PL87
4545	砥石	(16.1)	4.3	1.6	(148.2)	凝灰岩	砥面3面 砥面やや湾曲 側面に拵状の溝有り	K10区	PL87
4546	砥石	13.0	3.8	2.3	153.6	砂岩	砥面4面 断面四角形	K10区	PL86
4547	砥石	14.7	4.6	(2.5)	(163.3)	砂岩	砥面1面 他は剥離面	N9区	
4548	火打石	5.2	3.3	2.6	59.2	石英	一部の鋭が磨滅	M9区	PL87
4549	小刀	(17.4)	1.2	0.2~0.3	(16.8)	鉄	基部の一部欠損 両面	K10区	PL91
4550	小刀	(14.1)	1.2	0.2~0.3	(12.0)	鉄	刃部・基部の一部欠損 両面	K9区	
4551	小刀	(9.9)	1.3	0.4	(20.0)	鉄	刃部・基部の一部欠損 基部に柄巻遺存	N9区	
4552	包丁*	(9.0)	4.1	0.3	(33.0)	鉄	刃部の破片	M9区	
4553	鏡	(24.2)	(3.7)	0.2	(79.9)	鉄	片刃 木質部遺存	K10区	PL89
4554	五徳*	(15.9)	0.9	0.4	(48.6)	鉄	断面長方形	N9区	
4555	火打金	7.3	(3.6)	0.3	(22.7)	鉄	山型 頂部欠損 打撃部厚い	L8区	PL94
4556	釘	12.1	0.6	0.7	(23.6)	鉄	断面長方形 頂部一部欠損	N9区	
4557	釘	(7.4)	0.5	0.8	(16.7)	鉄	断面長方形 先端部欠損	6区	
4558	釘	4.0	0.2	0.4	(3.2)	鉄	ほぼ完存 先端部湾曲	N9区	
4559	釘	3.5	0.3	0.5	3.3	鉄	断面長方形 先端部湾曲	6区	
4560	釘	(3.1)	0.4	0.4	(4.1)	鉄	断面方形 先端部欠損	N9区	
4561	釘*	(8.8)	0.6	1.0	(23.1)	鉄	断面長方形 両端部欠損	N8区	
4562	釘*	(3.9)	0.5	1.0	(16.0)	鉄	断面長方形 両端部欠損 くの字状に屈曲	M9区	
4563	楔*	(8.4)	1.3	0.3	(19.2)	鉄	断面長方形 平面は短冊状	K10区	
4564	耳金	9.9	0.5	0.8	(30.9)	鉄	ほぼ完存 断面長方形	N9区	
4565	耳金	7.6	0.4	0.5	(12.6)	鉄	ほぼ完存 断面長方形	L9区	
4566	環状金具	4.0	4.0	0.3	7.6	鉄	断面長方形 リンダ状	N9区	
4567	不明	(6.9)	(6.9)	0.6	(21.1)	鉄	断面方形 十字状に接合	K9区	
4568	不明	3.1	0.4	0.4	5.6	鉄	断面方形 環状	N9区	
4580	斧	14.3	1.4	0.4	4.7	骨	完存 やや湾曲 両面擦痕有り	6区	PL70
4581	斧	13.4	1.3	0.5	5.2	骨	完存 やや湾曲	L10区	PL70
4582	丸瓦	(16.2)	(6.2)	(2.4)	(456.0)	長石・石英	凹面布目裏 凸面ヘラナデ	L8区	

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
4569	永樂通寶	2.45	0.59	0.12	3.14	1408	銅	真書	K9区	
4570	嘉祐元寶	2.35	0.67	0.11	3.32	1056	銅	真書	K9区	
4571	永樂通寶	2.35	0.67	0.11	3.32	1408	銅	真書	M8区	
4572	永樂通寶	2.45	0.58	0.11	3.60	1408	銅	真書	L8区	
4573	開元通寶	2.40	0.65	0.08	2.32	621	銅	真書	M9区	
4574	元符通寶	2.33	0.78	0.07	1.54	1098	銅	行書	M9区	
4575	永樂通寶	2.20	0.61	0.10	2.02	1408	銅	真書	M9区	
4576	永樂通寶	2.49	0.60	0.13	3.96	1408	銅	真書	M9区	
4577	永樂通寶	2.46	0.59	0.10	2.36	1408	銅	真書	M10区	
4578	永樂通寶	2.40	0.62	0.09	2.64	1408	銅	真書	M10区	
4579	永樂通寶	2.47	0.56	0.11	3.32	1408	銅	真書	M10区	

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

村松白根遺跡の調査成果を概観する前に、この地域の歴史について簡単に確認しておきたい。中世の東海村は、主に佐竹氏の配下にあった。特に、真崎浦付近は水上交通や産業の要地とされ、佐竹氏一族の真崎氏が統括していた場所である。当遺跡は、その真崎浦にほど近い海岸付近に存在している。佐竹氏が1602年に秋田へ移封した後は、水戸藩によってこの地は統括されている。当遺跡は、これら支配者の傘下で、製塩という大きな役割を果たしていた。また、貝集積地からカキ・ウバ貝・マツカサ貝などが多量に出土し、製塩に従事しながらも真崎浦などで漁を営んでいたことが容易に推察される地域でもある。

「村松白根遺跡1」では、平成15年度の調査結果から、15世紀後半から16世紀前半にかけての大規模な製塩跡と、製塩に従事していた人々の建物跡を中心とする集落の存在が明らかにされている。また、居住や製塩作業をするために構築された黒色土の下層を中心に、100体を超える人骨が埋葬されていた墓域も確認されている<sup>1)</sup>。製塩についての文献史料として、「領地違乱書付写」(1495年)の中に「村松塩産まき違乱」とあり、真崎氏が主家筋にあたる佐竹氏の塩産を横領した記録が残されている<sup>2)</sup>。まさに、史実を表付けることのできた遺跡といえる。

今回報告する「村松白根遺跡2」では、製塩跡の西側に隣接する建物跡や整地面、黒色土の下層に広がっている墓域、さらに製塩跡から南へ約200m離れた場所に広がる建物跡・整地面・井戸跡・畝状遺構などを配する集落跡が確認された。そこからは、皿類を中心とする土師質土器や陶磁器、石臼・茶臼・火打石などの石製品、火打金・小刀・小柄・斧・煙管などの金属製品、土製の面や骨角製品のサイコロ・筭などさまざまな遺物が出土し、16世紀後半から17世紀前半にかけての集落の存在が明らかになった。

文献史料として残る「村松虚空藏堂所蔵文書」(1623年)には、製塩をしていた村人たちが大風によって居屋敷が埋もれてしまうことを理由に、虚空藏領内への移住願いが記録されている<sup>3)</sup>。今回確認された集落跡は、この文献にある人々の居屋敷だったのであろうか。ここでは、生活面である黒色土面の構築状況を確認し、製塩跡と集落の変遷を、出土遺物や<sup>14</sup>C年代測定による化学分析の結果を踏まえながら、遺跡の様相を検討していきたい。

### 2 遺構を構築している黒色土面について

当遺跡は、海岸線に近い砂丘上に立地している。そのため、生活や作業をしやすくするため、必要部分に黒色土を盛土し、生活面を構築している。この黒色土は、他の地域から運んできたものと考えられる。構築されている黒色土は、主に黒色土Aと黒色土Bに分類できる。黒色土Aは、黒色土と炭化物・炭化粒子・貝・灰を混ぜたものであり、主に釜屋や鹹水槽、建物跡と整地面の上面や炉を構築するときに使用されている。黒色土Bは、黒色土Aと比較すると貝がほとんど含まれない黒色土で、建物跡や整地面の土台として使用されている。締まりや粘性は、黒色土Aは強く黒色土Bは普通である。この黒色土を分析したところ、砂丘背後の那珂台地から持ち込まれた黒ボク土である可能性が高いという結果であった(付章1参照)。

また、黒色土が他地域から運ばれたと考えられることのひとつに、黒色土中に円筒埴輪や人物埴輪の破片、瓦や須恵器の破片などが多数含まれている点である(表65)。瓦は、1485年に磐城・常陸の兵が村松で戦った際に村松虚空藏堂が兵火で焼失していることから、その廃材が持ち込まれた可能性が高い。「村松白根遺跡1」でも指摘しているように、核燃料サイクル機構の敷地内から出土した武人埴輪は、当遺跡から近い場

所に古墳が存在していたことを示唆し、盛土されていた黒色土を容易に持ち込むことが可能であったと推測される。

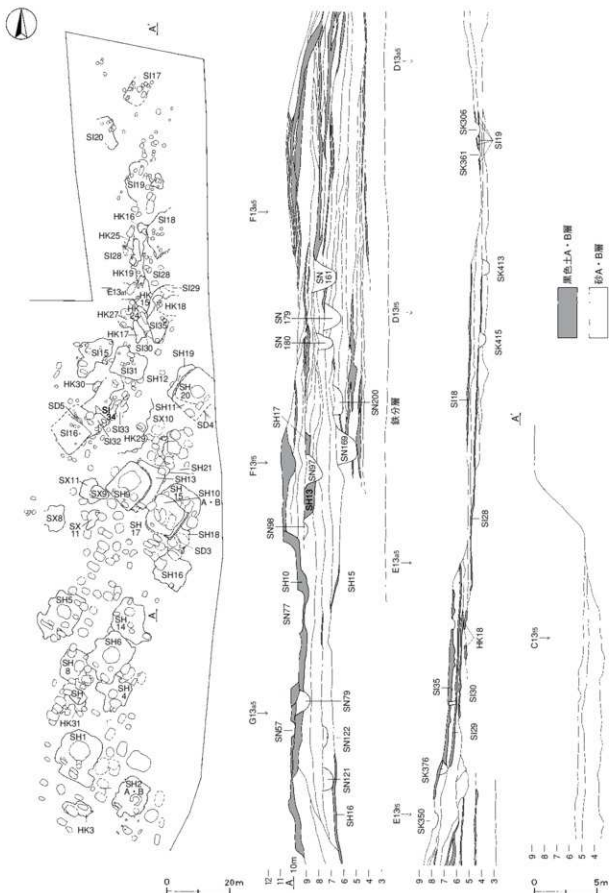
各遺構を構築している黒色土は、堆積状況からみてもかなりの量が必要である。この黒色土を、真崎浦に面して存在する古墳や久慈川右岸に位置している古墳から求めていたと想定した。そこで、真崎浦沿いに位置している真崎古墳群（1号墳）と下ノ諏訪古墳群、久慈川の右岸に位置する石神小学校内に存在する中道前古墳の黒ボク土をサンプリングし、当遺跡で使用されている黒色土と同様であるか土壌化学分析を試みたが、同一であるという結果は得られなかった（付章2参照）。ただ、黒色土A・Bは人為的に灰や炭化物などを混ぜて生成されていることや相当量の土を必要とする点から考えると、水運を利用して盛土が運ばれていた可能性は否定できないであろう。

次に、施設を構築している黒色土の堆積状況と遺構の新旧関係を知るために、調査第4区の北部（C13b5区）と南部（G13d5区）を結ぶ南北ラインの土層を観察・記録したものが第63図である。居住区域である北部においては、標高5～7mの間に建物跡や整地面の黒色土面が確認されている。E13c5区付近の土層断面からは、最下層の第18号整地面から第30・29・35号建物跡の順に砂層を交えながら黒色土が貼り付けられている状況が確認できる。また、製塩区域を中心とする南部では、標高4～11mの間に釜屋を構築するための黒色土面や粘土貼土坑の断面が確認されている。F13f5区付近の土層断面からは、第15・20号製塩跡に伴う第169・200号鹹水槽と第13・17号製塩跡に伴う第98・97号鹹水槽、更に最上面の第10号製塩跡へと黒色土を貼り付けている状況が確認できる。土層断面からもわかるように、層位の異なる黒色土の間には、必ず砂層が堆積している。これは、製塩跡を調査したひたちなか市の沢田遺跡や長砂遺跡でも同様である。その理由として、東海村の照沼・村松、ひたちなか市の馬渡・長砂・磯崎・阿字ヶ浦といった海岸線沿いの村々に語り継がれている「千々乱風」の伝説にある北東の大風によって、黒色土面に砂層が堆積していったと考えられる。さらに、製塩の操業が盛んになれば燃料である薪木も大量に必要となる。そのため、この付近の松林は塩作りのための薪木として伐採され、季節風を防ぐ防砂林としての役割を果たさなくなったことも十分に考えられる。

表65 埴輪・須恵器・瓦出土一覧表

区	遺構番号	出土遺物	区	遺構番号	出土遺物	区	遺構番号	出土遺物
2	S H 2	軒丸瓦1	8	S I 71	円筒埴輪1	9	H K 46	円筒埴輪1
2	S I 2	円筒埴輪1	8	H K 52	円筒埴輪1 平瓦1	9	S K 261	円筒埴輪1
2	S I 5	円筒埴輪1	8	H K 53	円筒埴輪1	9	S N 11	甕1
2	S I 8	蓋1 円筒埴輪1	8	H K 54	丸瓦1	9	第7号土壁	平瓦1
2	S I 25	軒丸瓦1	8	H K 55	坏1	9	遺構外	坏2 甕4 円筒埴輪1 平瓦3 丸瓦4
2	S I 38	丸瓦1	8	H K 61	甕1			
2	第6号土壁基	平瓦1	8	H K 66	甕1	8b	S I 76	坏1
2	S X 2	丸瓦1	8	H K 67	甕4	6	S I 77	甕2 瓦1
4	S I 17	軒丸瓦1	8	H K 73	甕1	6	S I 78	坏1
4	S I 34	長頸甕1	8	H K 74	短頸甕1	6	S I 79	円筒埴輪15
4	H K 18	平瓦*1	8	H K 75	坏1	6	S I 82	坏1
4	H K 24	軒丸瓦1	8	S K 277	甕1	6	S I 83	甕1
4	H K 26	軒丸瓦1	9	土手状3	坏1	6	S I 85	坏1 甕1 瓦1
2~4	遺構外	円筒埴輪2 軒丸瓦1 丸瓦1	9	S I 45	丸瓦1 平瓦1	6	H K 89	円筒埴輪2
8	S I 60	蓋1	9	S I 47	平瓦1	6	H K 90	円筒埴輪1
8	S I 62	埴輪(粟豆良片)1	9	S I 49	甕1	6	H K 98	円筒埴輪1
8	S I 67	提瓶1	9	H K 37	坏2	6	第2号竈状遺構	円筒埴輪1
8	S I 69	高台付坏1 甕1	9	H K 41	瓦1	6	遺構外	円筒埴輪2 丸瓦1





第634图 調査区北部平面図・黒色土土層断面図

### 3 遺構について

#### (1) 各調査区における遺構の様相と新旧関係

各調査区とも、砂丘上に黒色土を貼り付けて生活面を構築している。調査区によっては、黒色土面間に砂層が堆積している部分や、黒色土面が幾度となく重なり合っている部分も確認されている。そのため、遺構の新旧関係を明らかにするために、最初に確認された黒色土面を第1次面とし、その下層から確認された黒色土面や遺構を第2・3次面とした。よって、第1～3次面の区分は、上面から確認された順番と層位から新旧関係を捉えたもので、遺構の時代を区分したものではない。以下、各調査区ごとにその様相をまとめていきたい。

#### ア 第9区の様相（第635図）

東部に製塩跡、南部に建物跡が並ぶ間の調査区である。製塩跡から西側へ下がる斜面部から平坦部になった部分に位置し、南部に広がる調査第2区の集落の一部と考えられる。ここからは、土手状遺構2か所、建物跡12軒、整地面15か所、井戸跡2基が確認されている。また、建物跡や整地面に伴わないが6基、粘土貼土坑10基、土坑139基、貝集積地1か所、ピット群4か所のほか土壇墓48基、土壇6基が確認されている。遺構は、主に最初に確認された第1次面とそれより下層の第2次面に分けられる。

第1次面からは第1・2号土手状遺構、第39～48・50建物跡、第34・37・41・48号整地面、第1号井戸跡と建物跡や整地面に伴わない屋外炉2基、粘土貼土坑4基、土坑27基、土壇墓2基、土壇1基が確認されている。第39号建物跡の北東側を画するように構築された第1号土手状遺構は、調査第4区の第16号建物跡の方向へ延び、さらに東部に位置する標高約10mの第9号釜屋跡へ向かっている。北東の風から建物跡を守る役割だけでなく、居住区域と製塩区域を結ぶ通路としても使用されていたと考えられる。建物跡や整地面の中で重複関係にある遺構は、ほぼ同じ場所での建て替えが認められる。第39・40号建物跡、第41・42号建物跡、第46・48号建物跡、第37・41号整地面がそれに該当する。また、第47号建物跡は柱穴の配列から拡張のための建て替えと考えられる。

第2次面は第1次面から約0.6m下層で確認され、第49号建物跡、第35・36・38～40・42～47号整地面、第2号井戸跡、第2～5号ピット群、建物跡や整地面に伴わない屋外炉4基、粘土貼土坑6基、土坑群2か所を含む土坑112基、貝集積地1か所、土壇墓46基、土壇5基が確認されている。建物跡と判断できたものは第49号建物跡のみで、第36・39・42号整地面は作業場として、第35号整地面からは半地下式の倉庫と考えられる第124号土坑が確認されている。第1次面に比べ遺存状態は悪く、黒色土面の範囲も確認された遺構の周囲のみの状態であった。

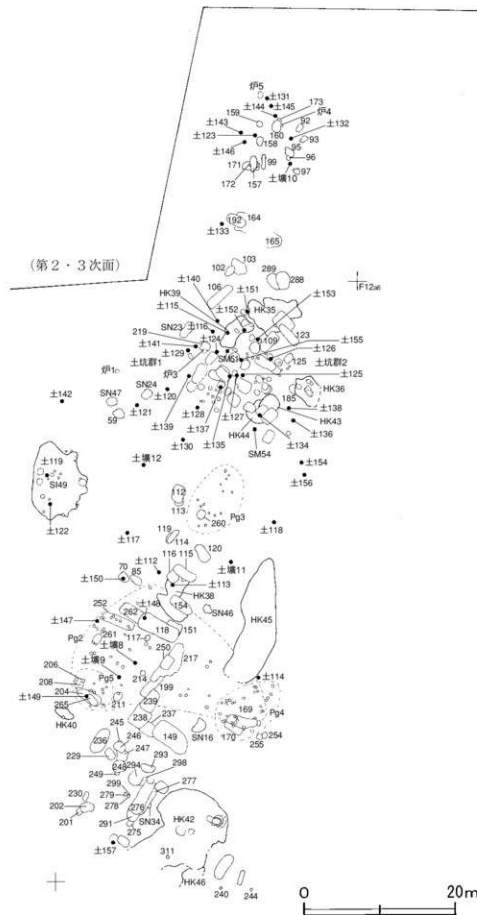
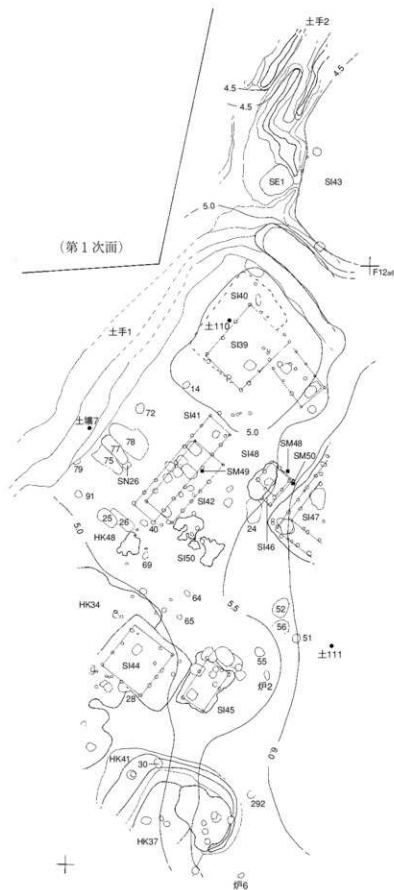
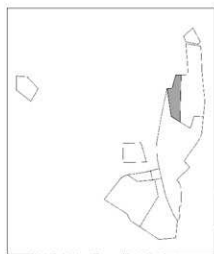
出土した陶磁器から、第1次面は16世紀前半を中心に、第2次面は15世紀後半から16世紀にかけて構築され生活が営まれていたと考えられる。

#### イ 第1区の様相（第636図）

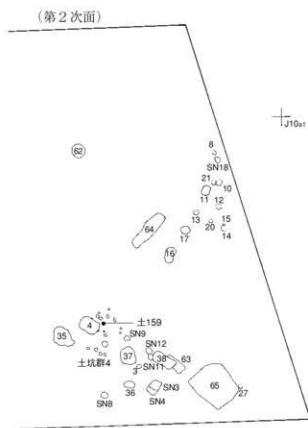
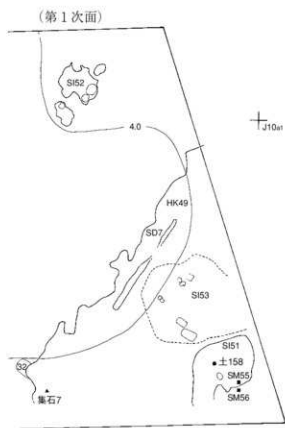
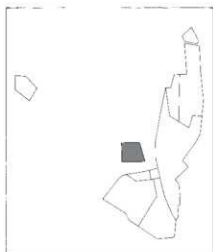
東部に位置する調査第2区と道路を隔てた調査区である。黒色土面は調査区の南東部に広がって確認され、調査第2区の西部に位置する第27号建物跡の方向へつながる黒色土面と考えられる。

第1次面は黒色土面全体を第49号整地面として捉えられ、その上面から黒色土中にかけて確認された建物跡3軒、整地面1か所、土坑5基、溝跡1条、集石1か所、土壇墓1基が確認されている。第49号整地面は厚さ5～40cmの黒色土が貼り付けられた面で、第2区の黒色土面の構築状況と類似している。

第2次面は黒色土下の砂層で、粘土貼土坑7基、土坑群1か所を含む土坑42基、土壇墓1基が確認されている。



第635図 第9区遺構全体図

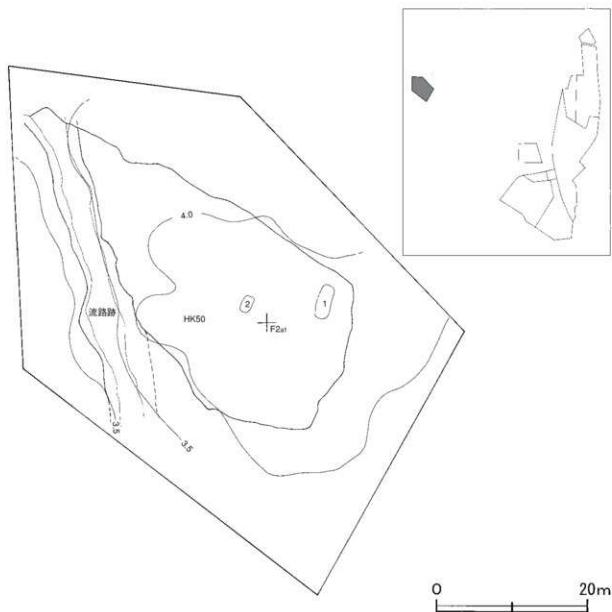


第636图 1区遺構全体図

第1・2次面の標高差は、10～30cmである。出土した陶磁器には時期差が認められないことから、この調査区は16世紀前半を中心に構築され生活が営まれていたと考えられる。

ウ 第7区の様相 (第637図)

製塩跡から西へ約400m離れた場所に位置し、他の調査区とは隔絶している。黒色土面の標高は3.5～4.5mで、調査区全体を第50号整地面として捉えることができる。その黒色土面から土坑2基、黒色土面の西部を分断するように流路跡1か所が確認されている。また、黒色土面の締まりが極めて強く製塩跡や建物跡の多い区域とは異なる様相である。生活していた痕跡は認められず、遺物もかなり摩滅した土師質土器片、砥石、軽石などがわずかに出土した程度である。黒色土面から確認された土坑は、どちらの平面形も隅丸長方形で、隣接した位置から確認されている。海岸に近い那珂台地先端部の砂丘上に



第637図 7区遺構全体図

位置している核燃料サイクル機構の敷地内からは、昭和53年の造成工事に伴い武人埴輪が出土している。また、村松大神宮から約250m西側には、白根古墳が存在している。そのため、古墳の主体部の可能性も考えて土坑内の砂及び黒色土をフレイにかけたが、遺物は認められなかった。さらに、黒色土面の縁辺部からも埴輪片は一片も出土していないことから、その可能性は極めて低いと考えられ、現段階では性格不明の遺構にとどめておきたい。

確認された遺構は1次面のみで、黒色土面から土師質土器の皿類の小破片が出土している程度である。時期を判断できる陶磁器類は出土していないが、各調査区の黒色土面の構築時期から想定すると、16世紀前半から17世紀前半にかけての時期に構築されたと考えられる。

#### エ 第8区の様相(第638・639図)

製塩施設から南へ約200m離れた場所に位置している。また、北西部に位置している第6区とは黒色土面のつながりはない。また、調査第2区の南端部と隣接しているが、建物跡の多い区域とは離れている。このことから、他の調査区域の遺構と隔絶されたように黒色土面が構築されている状態で、小集団で集落を形成していた様相がみられる。ここからは、土手状遺構1か所、建物跡20軒、整地面26か所が確認されている。また、建物跡や整地面に伴わない炉1基、粘土貼土坑12基、土坑143基、貝集積地1か所、ピット群6か所、不明遺構1基のほか土壙墓2基、土壙4基が確認されている。黒色土の構築状況とその間に堆積している砂層から、主に2面に分けられる。第1次面と2次面の間に堆積している砂層は最大50cm程度の厚さである。ただし、これは層位からみた遺構の新旧関係で、出土遺物からは大きな時期差は認められない。検出された遺構の様相と新旧関係は、次の通りである。

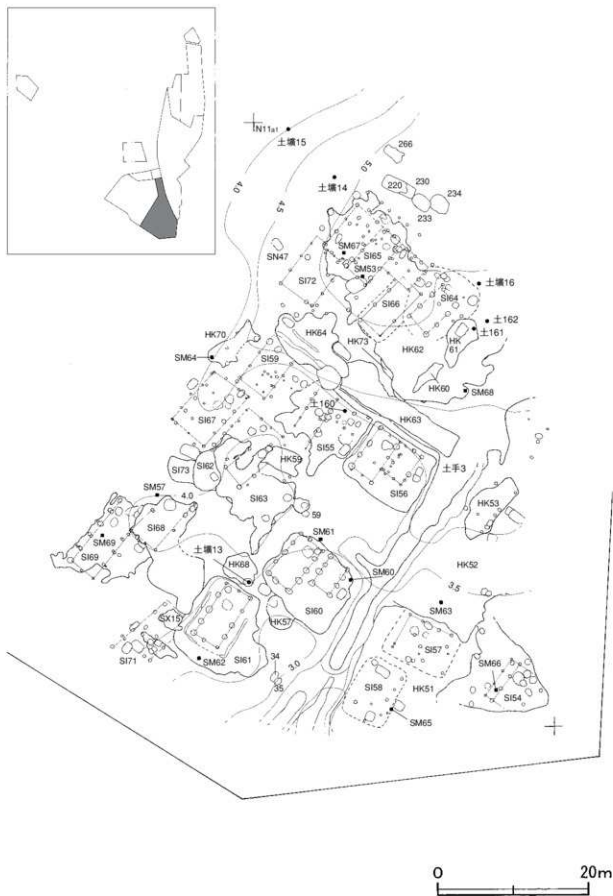
第3号土手状遺構は、調査区内の遺構を画するように南部の調査区域外から北東方向へ緩やかに高まりながら延びている。この土手状遺構を通路として利用し、建物や整地面が構成されている。主に、第62号整地面を基盤とする建物跡4軒が確認された中央部、建物跡12軒が確認された南部、第51・52号整地面を基盤とする建物跡3軒が確認された南東部に分けられる。

中央部における第1次面からは第64-66・72号建物跡、第60-64・70・73号整地面、第2次面からは第74・75号整地面、土坑群1か所などが確認されている。その中で、第65号建物跡は南東部に広場をもつ曲屋的な建物で、この調査区の中で最大の規模である。付属施設としては、建物内の北部に炉と小形の粘土貼土坑を有するほかに炉が4基確認されている。遺構全体を見わたせるような一段高い中央部に位置していることから、この集落での中心的な役割をもつ建物跡といえる。

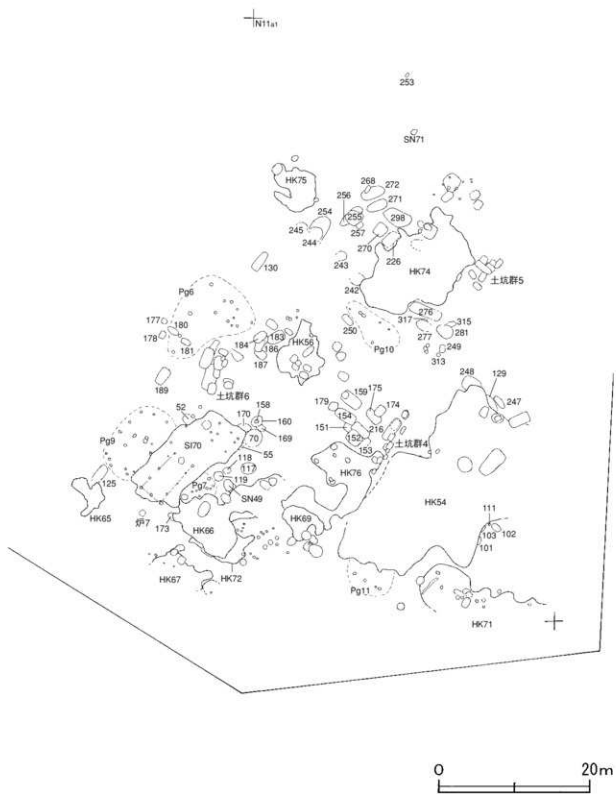
南部における第1次面からは第55・56・59-63・67-69・71・73号建物跡、第55・57-59・68号整地面などが確認されている。更に約50cm下層の第2次面からは第70号建物跡、第56・65-67・69・72・76号整地面、第6・7・9・10号ピット群、土坑群2か所を含む土坑や粘土貼土坑が確認されている。

南東部における第1次面からは第54・57・58号建物跡、第51-53号整地面、第2次面からは第54・71号整地面、第8・11号ピット群、土坑群1か所を含む土坑や粘土貼土坑などが確認されている。この区域で確認されたほとんどの遺構は、南部及び東部の調査区域外に延びているため、それぞれの遺構を十分に捉えることはできなかった。

出土した陶磁器から、第1次面は17世紀前半といえる。また、第2次面から出土している陶磁器及び土師質土器は、16世紀後半から17世紀にかけてのもので、第1次面との大きな時期差が認められない。よって、調査第8区においては、16世紀後半頃から黒色土面を貼り付けた生活面が構築されはじめ、17世紀頃がこの集落の中心であったと考えられる。



第638图 8区遺構全体図(第1次面)



第639图 8区遺構全体図(第2次面)



オ 第5, 6, 8b区の様相 (第640図)

北東部の一部が第2区に、南東部が第8区につながっている調査区である。ここからは、建物跡25軒、整地面25か所、井戸跡1基、畝状遺構2か所、道路跡1条、区画状遺構3条が確認されている。また、建物跡や整地面に伴わない炉9基、粘土貼土坑23基、土坑146基、貝集積地3か所、ピット群13か所、不明遺構2基、土壇墓4基も確認されている。黒色土の構築状況とその間に堆積している砂層から、主に3面に分けられる。第1～3次面の間に堆積している砂層の厚さは、調査区北部が最大120cm、調査区中央部から南部にかけてが最大50cm程度である。

第1次面からは第74・75・78・79・81～91建物跡、第77・79～84・87・89・90・92～95・98～100号整地面、第2・3号畝状遺構、道路跡1条、第1号区画状遺構、第16・17号不明遺構、第70・71・78号貝集積地、建物跡や整地面に伴わない炉8基、粘土貼土坑13基、土坑32基、土壇墓2基が確認されている。建物跡を中心とする各遺構は、調査区の東側に集中し、遺構の配置をみるとおおよそ北東方向に広がっている。北部から中央部にかけての建物跡は、炉と小形の粘土貼土坑がセットで確認されているものが多く、居住を目的として建てられたと考えられる。また、第88号建物跡の西部には、第2・3号畝状遺構が隣接している。同じ黒色土面で構築されていることから、この建物跡に付随した小規模な耕作地と考えられる。

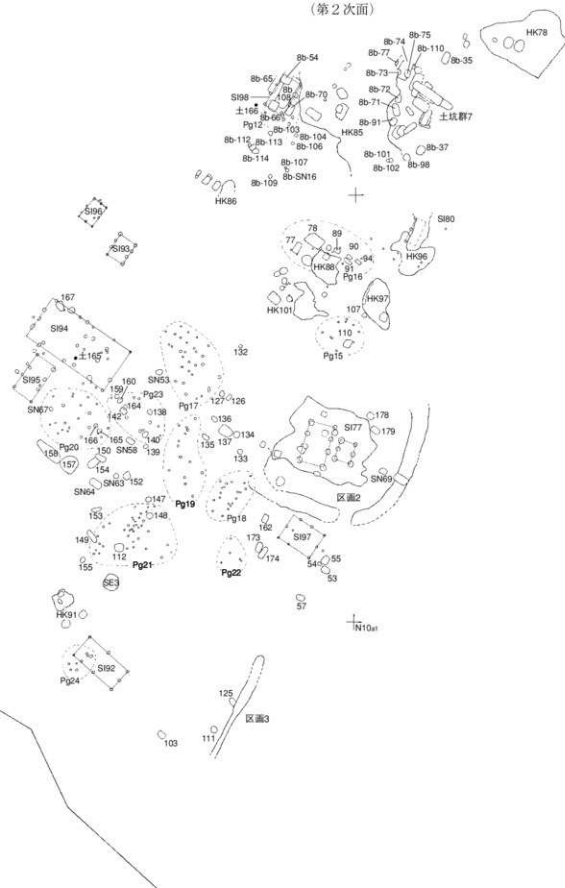
一方、南部に位置する建物跡や整地面は、その様相が異なっている。第83号建物跡は、竈・炉・小形の粘土貼土坑がセットで確認され、管状土錘、小刀・新などの鉄製品、砥石などさまざまな遺物が出土している。これらの遺物や付属施設の位置から、北部は居住を中心に南部は作業場として機能していた住居と考えられる。また、第85・86号建物跡や第98号整地面は、ほぼ直線に並んで確認されている。いずれも黒色土面の締まりが強く、炉が検出されていない共通点が挙げられる。第98号整地面からは管状土錘が13点出土しており、漁業に関する施設である可能性が高い。さらに、第98号整地面の東部からは、ローム土を上面に貼り付けた大形の第59号粘土貼土坑とその北部から単独の第9・11～13号炉が確認されている。これらをセットとしてとらえるならば、小規模な製塩など何らかの作業場であったことも想定される。このことから、南部に位置する建物跡や整地面は、居住を目的とした施設だけではなく漁業や製塩など何らかの作業場であった区域と考えられる。

第2次面からは第77・80・92～98号建物跡、第78・85・86・88・91・96・97・101号整地面、第3号井戸跡、第2・3号区画状遺構、第12・13・15～24号ピット群、建物跡や整地面に伴わない炉1基、粘土貼土坑9基、土坑108基、土壇墓2基が確認されている。中央部に位置している第77号建物跡は、桁行3間、梁行1間の北東棟と桁行2間、梁行1間の北東棟が並んでいる分棟型の建物である。さらに、建物の東部から南部を囲むようにローム土で構築された第2号区画状遺構が配されている。この調査区の中で最も大形の建物であり、当初この集落の中心的な役割を果たしていたと考えられる。区画状遺構は、第1・2次面をあわせて3条確認されており、いずれも東部あるいは南東部を意識して構築されている。また、調査区内では、区画状遺構を境にその東部から黒色土面や遺構が確認されていない。調査区全体の遺構配置をみると、南部に位置する集落の間には、約40m幅の砂堤帯が北東方向に広がっていることが確認できる。真崎浦と太平洋を結ぶこの付近の海岸線は、「向渚」と呼ばれる砂嘴を形成させて砂丘を形成し、現在も汀線は動いている地域である。この砂堤帯は、自然現象によって形成された部分であった可能性が高く、当時はやや低い地帯となっていたのであろう。この区画状遺構は、建物や黒色土面を守るための土手の一部であったと考えられる。

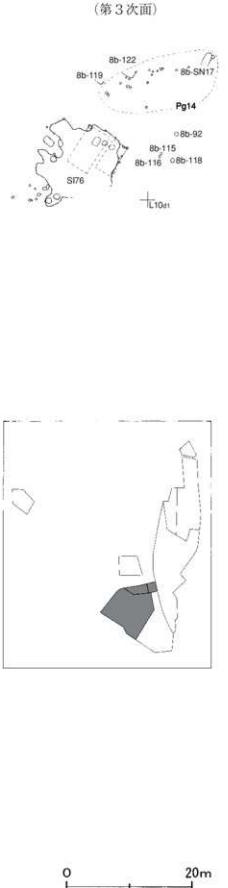
(第1次面)



(第2次面)



(第3次面)



第640図 5・6・8b区遺構全体図

第3次面からは第76号建物跡、第14号ピット群、建物跡や整地面に伴わない粘土土坑1基、土坑6基が確認され、いずれも調査区の北部に位置している。

出土した陶磁器から、第1次面は17世紀前半といえる。また、第2次面から出土している陶磁器及び土師質土器は、16世紀末から17世紀初頭にかけてのもので、第1次面との時期差がほとんど認められない。第3次面から出土しているものは土師質土器の小皿や皿の破片のみで、16世紀後半でも新しい段階と考えられる。よって、この調査区においては16世紀後半から黒色土面を貼り付けた生活面が構築されはじめ、16世紀末から17世紀前半がこの集落の中心であったと考えられる。

## (2) 集落と製塩施設の変遷

当遺跡は、中世後半から近世初頭（15世紀後半～17世紀前半）という限られた年代幅である。また、黒色土を貼り付けて構築されている遺跡の特徴から、層位による新旧関係は把握できるものの平面的にみた遺構の変遷を明確にできないのが現状である。その中で、出土遺物や遺構の検出された層位、黒色土面による新旧関係、さらには<sup>14</sup>C年代測定による化学分析の結果などから遺構の変遷を試みたい（第641図）。

### 第1期

調査区の北部から製塩跡付近の北西部にかけての建物を中心に集落が形成された時期である。この付近の建物跡や整地面の中で、第14・18～20号建物跡や第14・28・33号整地面からは、古瀬戸後期とみられる天目茶碗・緑釉小皿・折縁深皿のほか土師質土器の内耳鍋や皿などが出土している。また、「村松白根遺跡1」の中で、「北部に位置する第14号建物跡は、出土遺物から製塩の管理者が居住していた可能性が高い」<sup>41</sup>と報告されており、第14号建物跡は15世紀後半から16世紀にかけて、第19号建物跡は15世紀末頃に中心的役割を果たしていた人の建物跡と想定される。継続的に営まれていたとされる第17号建物跡を含め、この付近の建物や整地面は15世紀後半頃のものと考えられる。

### 第2期

製塩跡の西部から調査区中央部にかけての建物を中心に集落が形成された時期である。製塩施設付近の北西部から中央部にかけては、建物跡や整地面が小規模なまとまりで構成されている。具体的にいえば、釜屋の西部に隣接している第31・32号建物跡、第2号土手状遺構から南部に位置している第39～42・44～48・50号建物跡、中央部の第1～5号建物跡と第7～12・18・27号建物跡の5か所程度にまとまって構成されている。これらの建物跡やその付近の整地面からは、大室期前半の端反皿・天目茶碗・緑釉小皿などが出土している。また、中国製磁器の青磁桜花皿の完形品や青磁碗、白磁碗などの破片が土師質土器の内耳鍋や皿などと一緒に出土している。これらの中国陶磁器類は15世紀代の生産と判断されるが、ある程度生活にゆとりをもった人たちの象徴として持ち込まれていた可能性が高いであろう。よって、この付近の建物跡や整地面は、15世紀末から16世紀前半にかけてと考えられる。

この中央部に位置している第37号建物跡と第49号整地面から出土した内耳鍋片に付着していた煤を、名古屋大学の小田寛貴氏の協力により<sup>14</sup>C年代測定による化学分析を行うことができた。前者は15世紀後葉、後者は16世紀前半という結果が得られ、この付近から出土した陶器や土師質土器との年代ともおおむね一致している。また、釜屋内から出土する遺物は極めて少なく、採集時期を確定できない状況であったが、第2号製塩跡の釜屋内から出土した炭化物及び炭化材を分析することができ、16世紀前半あるいは17世紀前半という結果が得られた。これらの分析結果から、標高8.5mの最上面で確認された第2号製塩施設の採集時期は、この周囲に存在する集落の時期と一致すると考えるのが妥当であり、16世紀前半と判断したい。

つまり、製塩区域の中で最も南の最上面から確認された第1・2・6号製塩施設や標高7m付近の第15・16・18号製塩施設は、おおむね16世紀前半の操業と考えられる。さらに下層から確認された製塩跡については、北部の建物跡や整地面が構築された15世紀後半から16世紀にかけての操業となり、佐竹氏の支配下にあった製塩跡と考えることができる。

### 第Ⅲ期

製塩施設から南部に離れた場所に集落が形成された時期である。南部の遺構は、幅約40mの砂堤帯によって東側（調査8区）と西側（調査5・6・8b区）の集落に分けることができる。海岸線に近い東側の集落跡は、遺構全体図からみてもわかるように、他の遺構とは隔絶されたように形成されている。この東側の集落跡からは、瀬戸・美濃産の丸皿・鉄絵皿・折縁皿・青織部皿や肥前系の皿などが土師質土器の焙烙や皿、煙管とともに出土している。西側の集落跡からも、同様の陶器類や土師質土器が出土し、東側の集落とほぼ同時期の16世紀後半から17世紀前半と考えられる。

ここで、南部の集落と製塩とのつながりを検討してみたい。それは、両者の関係を示す遺物の存在である。ひとつは、東側の第61・68号建物跡や西側の第78・79・83号建物跡から出土している耳金や吊金具である。塩作りの竈で使用されていた可能性も高く、南部に居住していた人々も塩役としての製塩業をしていたと考えることができる。もうひとつは、製塩施設やその付近から出土した遺物との関係である。第5号製塩跡内の第14号鹹水槽からは、16世紀後半に比定される染付皿が出土している。また、第6号集石は第9・10号製塩跡を構築している黒色土の斜面部から確認され、17世紀初頭に比定される志野丸皿が出土している。この製塩施設は標高10m前後に位置し、製塩施設の中で最も高い位置に構築されている。また、これらの下層からは同様の製塩施設が確認されており、繰り返し釜屋が構築されていた場所でもある。「村松虚空藏堂文書」(1623年)の中に「塩竈役を間違ひなく勤める」とあるように、この時期にも製塩は操業されている。これらの事実から、南部に居住していた人々、つまり水戸藩の配下にあった17世紀前半の人々が使用していた製塩施設であった可能性は極めて高いといえる。

以上のことから、第1・2期は集落と製塩施設が隣接している時期、第3期は集落と製塩施設が離れている時期に分けられる。集落においては、北部から中央部へ居住する区域が移動し、さらに南部の2か所へと移動していく様相がみられる。また、製塩は佐竹氏の支配下であった15世紀後半から16世紀後半までは大規模な操業が行われ、佐竹氏の移封後の17世紀前半頃は、操業の規模も縮小されていったと考えられる。

### (3) 建物跡の特徴

建物跡は全体で98軒確認されている。ここでは、今回整理した建物跡60軒について柱穴や内部施設、出土遺物などを、「村松白根遺跡1」の分類基準に準じてⅠ～Ⅳ類に分類し、その特徴をまとめてみた。(第642～644図)なお、調査第2～4区の建物跡の特徴は、「村松白根遺跡1」を参照された。

<Ⅰ類> 柱穴の配列から、庇をもつ建物と推測されるもの

第54号建物跡が該当する。東部と南部が調査区域外に延びているため、全体の様相は明らかでないが、北東軸に平行する柱穴が並んで確認されていることから、庇をもつ可能性が高い建物である。建物内からは、灰5基が確認されている。

<Ⅱ-A類> 日常雑器類や炉が建物内から確認され、柱穴の配列が曲線的な構造と考えられるもの

第39・55・56・60・65・76・77・81・90号建物跡の9軒が該当する。第56号建物跡からは灰が検出されなかったが、柱穴の配列からここに分類した。曲線的な構造の建物跡は、西側に北東棟の主屋、東側に北東棟あ



るいは北西棟の建物が取り付くように配されている。建物内にある炉は小形の粘土貼土坑とともに、主屋の北部付近に構築されているものが多い。第76・77号建物跡は、ピットの配列から、北東棟の建物が2棟並んで確認されており、曲屋あるいは分棟型の建物と考えられる。玉井哲雄氏は17世紀の掘立柱建物について「遺構は平面的には曲屋に見えるが、民家類型の中では分棟型と呼ばれる形式に似た、主屋と馬屋が分離し屋根もおそらく構造的には現在の曲屋とは違った形態であったことが想定できる。」としている<sup>3)</sup>。この意見に従えば、当遺跡の曲屋的な構造の建物は、炉や粘土貼土坑を構築している棟が主屋、その東側にある棟が馬屋である分棟型建物といえる。しかし、2棟間の幅は狭く分棟型とは判断できないところがある。いずれにしても、主屋と馬屋で構成された曲屋的な構造の建物と考えられる建物は第55・56・60・65号建物跡が該当し、これらは南部の東側の集落跡に位置している。

#### <Ⅱ-B類> 日常雑器類や炉が建物内から確認され、柱穴が規則的に配されているもの

第41・42・44-46・48・49・57-59・61-64・67-72・74・75・80・82-84・86-88号建物跡の29軒が該当する。棟向きを北東棟とする建物がほとんどで、最も多く確認された形態である。建物内の北部あるいは北東部には、炉と粘土貼土坑がセットで確認されているものが多く認められ、内部構造の特徴といえる。中でも、第83号建物跡の北部は、黒色土面が周囲よりも15cmほど高くなっており、竈・炉・粘土貼土坑が集中している。出土遺物は、土師質土器や陶器などの生活雑器が主体である。南部には桁行3間、梁行2間の北西棟の建物が配され、建物付近の南部から西部にかけては、管状土錘などの土製品、小刀・釘などの鉄製品や砥石などが多量に出土している。これらのことから、建物の北部は居住を中心に、南部は作業場として機能していた建物と考えられ、番匠や漁業にも従事していたことも推測される。また、第61号建物跡は柱筋の通った北東棟で、柱穴に沿って雨落ち溝が確認されている。上屋構造を想定できる貴重な資料である。

第41・46・48・75・80号建物跡は、遺構の規模や出土遺物の量から、作業小屋の可能性が考えられる。第1号土手状遺構の0.8m下層から確認された第49号建物跡は、東部から炉が確認されている。柱穴は径も小さく配列もやや不規則であることから、簡易的な小屋と考えられる。

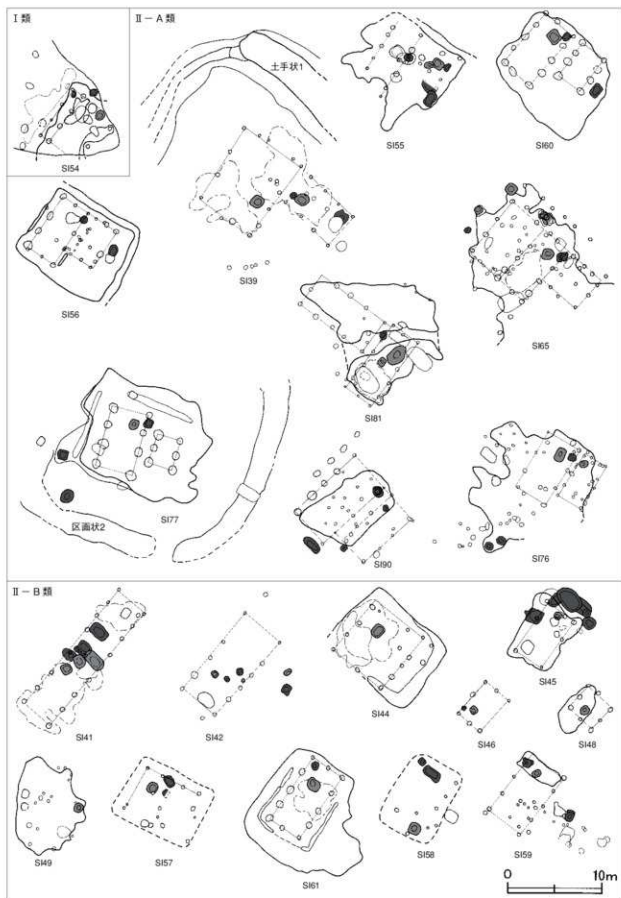
#### <Ⅲ類> 炉が建物内から確認されず、黒色土面の柱穴が不規則あるいは確認されなかったもの

第51-53号建物跡の3軒が該当する。炉と断定できるものや柱穴は確認できなかったが、生活の跡と認められる遺物や小形の粘土貼土坑が確認されている。簡易的な建物が想定される遺構である。

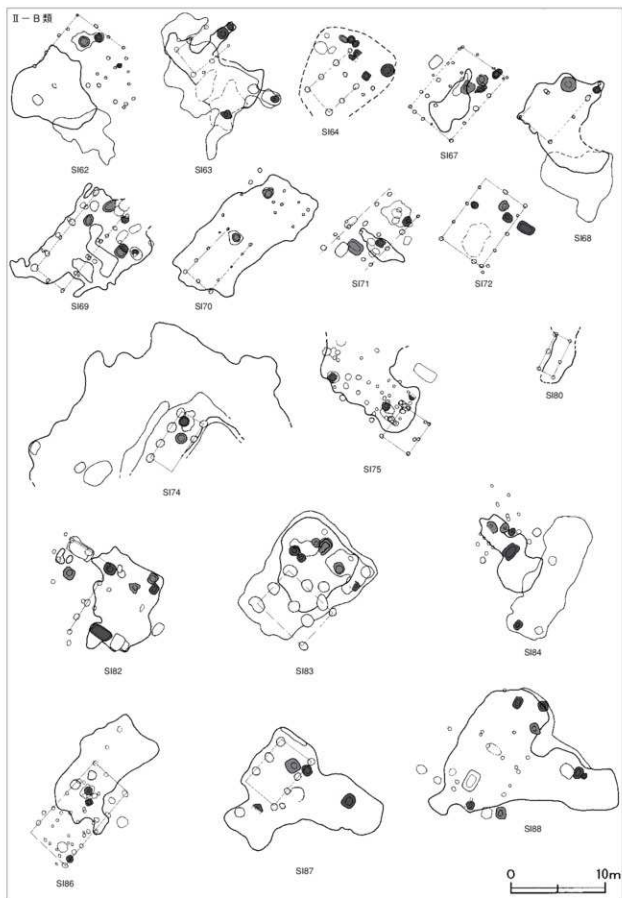
#### <Ⅳ類> Ⅰ-Ⅲ類に属さないもの

第40・50・66・73・78・79・85・89・91-98号建物跡の16軒が該当する。第43・47・89号建物跡は、調査区域外に遺構の半分以上が延びている。建物跡と想定されるが、分類基準からⅣ類とした。第66・73号建物跡は、建物内部に付属施設をもたないことから倉庫的な性格の建物と考えられる。第78・79号建物跡は、上屋を想定できる柱穴は確認されていないが、黒色土面の硬化している部分が認められ、調理場とみられる炉と粘土貼土坑が併設されている。また、生活用具も多数確認されていることから、建物であった可能性が高いと判断しⅣ類とした。第91-98号建物跡は、いずれも黒色土面を除去した後に確認され、柱穴の配列から建物と考えられる。第94・97号建物跡は北西棟で、それ以外の6軒は北東棟である。第94号建物跡は、桁行4間、梁行2間の建物で面積が110.2m<sup>2</sup>の規模であることから、母屋と考えられる。その他の5軒は桁行が2-4間、梁行が1-2間の建物で、倉庫あるいは作業小屋が想定される建物である。

また、第50号建物跡からは小さい鍛冶炉が確認され、床面から鍛造剥片や鉄滓などが出土している。「村松白根遺跡1」で報告されている第25号建物跡は、赤変硬化した炉とともに鎌や片刃の金属製品が出土し

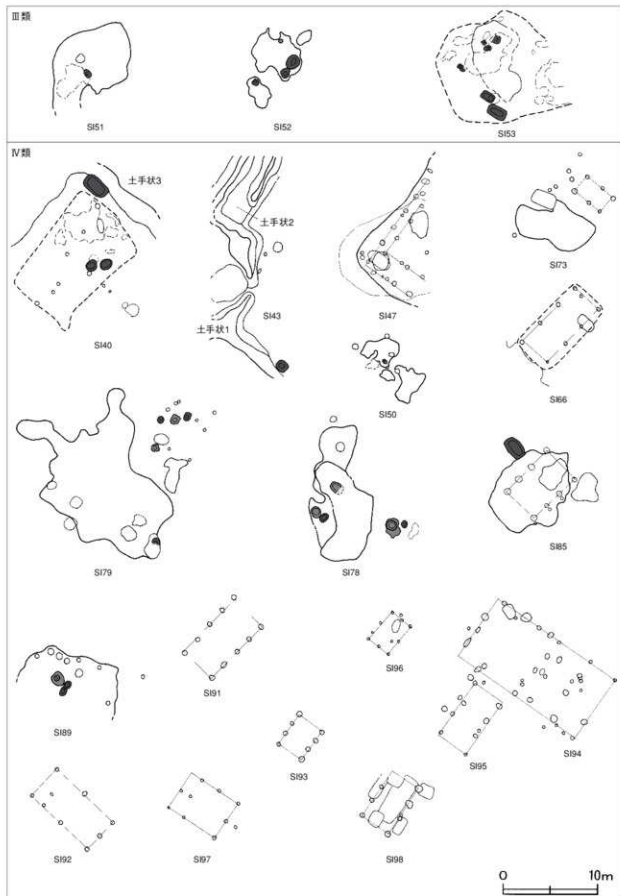


第642図 建物跡分類(図1)



第643圖 建物跡分類(図2)





第644図 建物跡分類図(3)

ている。どちらも鍛冶用の作業小屋と考えられ、この集落における金属器の生産や補修を担っていた重要な遺構といえる。

以上のように、分類されたほとんどの建物は、長軸方向をN-16°~48°-Eとする北東棟である。これは、海岸線に吹く季節風との関係が深く関係している。この地域に吹く風について、佐藤次男氏は明治43年から昭和22年の那珂湊商船所の観測資料から、「4~9月は北から東の風、10~3月は北西の風が多く、年間を通しての卓越風は北東の風である」と述べている<sup>6)</sup>。これは、村松から阿字ヶ浦にかけての海岸線に吹いた北東の大風「千々乱風」の伝説とも共通し、建物跡が北東から吹く季節風を考慮して建てられたといえる。

#### (4) 整地面の特徴

整地面は全体で101か所確認されている。ここでは、今回整理した整地面68か所について遺構の確認状況や出土遺物からA~F類に分類し、その特徴をまとめてみたい。

<A類> 建物跡を構築するための土台として広範囲に貼り付けられた黒色土面

第49・52・62号整地面の5か所が該当する。いずれも広い範囲に黒色土が貼り付けられており、その上には、建物跡などの遺構が構築されている。第51号整地面は第57・58号建物跡の土台として、第62号整地面は第64~66号建物跡の土台として整地された黒色土面である。また、第49・62号整地面は、それぞれ調査1・7区の土台として調査区全体を整地した黒色土面である。

<B類> 柱穴はほとんど伴わず、屋外の作業場のな性格をもつ黒色土面

第34・36・37・39・41・42・48・53・54・56・57・59・66・68・72・73・75~79・81・82・84・85・88・91・97~101号整地面の32か所が該当する。これらの遺構は、建物跡の柱穴と考えられるものが認められず、作業に適した黒色土面の堅さと広場を持ち合わせている遺構が多い。その中で、第36・37・39・42・54・79・88号整地面からは炉も確認され、暖をとったり火熱を使う作業が想定される。第49号整地面は床面から2か所の焼土範囲が検出され、鍛冶遺構とみられる第50号建物跡と関連する施設と考えられることから、ここに分類した。第72号整地面からは3点、第98号整地面からは8点の管状土錘が出土している。どちらも調査区の最も南部に位置しており、太平洋と真崎浦を結んでいる現在の新川にほど近いことから、漁業に関する作業場であったと考えられる。また、第81号整地面は「村松白根遺跡1」で報告されている第3号製塩跡と約60mしか離れていない。両者にはやや時期差はあるが、海岸線よりもやや内側においても製塩をしていた可能性は否定できない。

<C類> 遺存状態が悪く建物跡として認められなかった黒色土面

第55・67・70・71・74・93号整地面の6か所が該当する。第55・71・74号整地面からは土師質土器・陶器・金属製品などの生活用具が数多く出土し、第70号整地面からは黒色土を貼り付けて構築された炉が確認されている。また、第67・71・74・93号整地面は上面に別の遺構が構築されており、本来の形状や付属施設が十分にとらえられなかった遺構である。砂地という立地条件から、黒色土面を構築しては崩れ、また新しい黒色土面を貼り付ける作業が度々なくなり返され、その度に、不必要になった遺物も投棄された状況が考えられる。第74号整地面から出土した土製の面も、遺構の検出状況から投棄された遺物のひとつと考えられる。

<D類> 通路として利用されていた黒色土面

第63・64・80号整地面の3か所が該当する。第63・64号整地面は第3号土手状遺構の北西部に隣接し、

平坦な黒色土面である。出土遺物も極めて少なく、建物と建物を往来する通路の一部であった可能性が高い。

#### <E類> 土坑や粘土貼土坑に伴う黒色土面

第35・61号整地面の2か所が該当する。第35号整地面は、半地下式の倉庫のか穴蔵の性格をもつ土坑に付随する黒色土面である。第61号整地面は、粘土貼土坑が崩れないように斜めに貼り付けられた黒色土面で、どちらも特異な遺構である。

#### <F類> 性格が不明な黒色土面

第38・40・43～47・58・60・65・69・83・86・87・89・90・92・94～96の20か所が該当する。これらは、建物跡や整地面など遺構面の下から確認されたものが多い。そのため、黒色土面のみが検出された規模の小さいものや、黒色土面が傾斜しているものが該当する。ここから出土しているほとんどの遺物は破片であり、新しく黒色土面を構築する際に紛れ込んだものや、不必要になり投棄されたものと考えられる。

### (5) 貝集積地

貝集積地は、全体で78か所確認されている。ここでは、前回報告された47か所も含めて、その特徴をまとめてみたい。出土した貝は、海水・汽水・淡水に生息している貝種が混在しており、確認できたもので27種類を数えることができる(表66)。殻頂数でみると、マツカサ貝が最も多く、ウバ貝、コタマ貝が続いている。重量でみると、ウバ貝、カキ、マツカサ貝の順である。マツカサ貝は、殻頂数、重量ともに多いことから、最も食されていた貝といえる。また、ウバ貝はどの調査区からも出土し、入手しやすい貝種であったといえる。貝集積地はほとんどが小規模であり、一家族で食されたものを投棄した状況と判断できるものが多い。その中で、南部の東側の集落跡から確認された第68号建物跡に伴う第59号貝集積地は、多量のウバ貝が一括投棄された状態で出土している。確認できた殻頂数は1,768個あり、一家族で食する量ではない。また、第52号整地面に伴う第63号貝集積地は、ウバ貝を主体とした多量の貝が破砕された状態で出土している。これらの貝集積地は、この集落において生業を目的として採られたり、その貝片を再利用して漆喰などに貝を加工していたりする可能性をもつ遺構である。現に、第2・19号製塩跡からは、貝殻を砕いて粉状にした漆喰の塊が出土している。この製塩跡は、集落よりもやや古くなる時期と考えら

表66 貝種別出土量及び殻頂数一覧表

番号	貝種	全 体		番号	貝種	全 体	
		重量 (g)	殻頂数			重量 (g)	殻頂数
1	アワビ	125.0	4	15	ムラサキインコガイ	73.2	100
2	ヒザラガイ	4.4	2	16	イガイ	8.7	10
3	コザラガイ	4.2	2	17	ツキヒガイ	0.5	1
4	クボガイ	46.0	13	18	カキ (細片含む)	103,928.0	262
5	ダンベイキサゴ (細片含む)	205.9	17	19	マツカサガイ (細片含む)	31,089.2	10,012
6	タニシ類 (細片含む)	2434.0	576	20	シジミ	445.7	431
7	アカニシ	290.0	15	21	アサリ	50.0	38
8	ツメタガイ (細片含む)	206.0	36	22	コタマガイ	52,579.0	867
9	ウネレイシガイダマシ	55.0	9	23	ハマグリ・チョウセンハマグリ	3,191.9	210
10	レイシガイ	247.2	25	24	ウナムラサキガイ	921.0	11
11	サルボウガイ	571.5	95	25	シオヤガイ	1.2	1
12	アカガイ	27.5	6	26	フジツボ	13.0	2
13	タマキガイ	445.1	28	27	ウバガイ (細片含む)	358,545.6	6,070
14	バンケイガイ	856.5	128				

れるが、漆喰等の技法は後世にも残るものと推測される。真崎浦における近世資料「御用留」(照沼信邦家文書)の中で、1803年(享和3年)正月の年号をもつ「乍恐書付奉申上候事」の願書には、「一、小舟老艘 但しうばかい取舟<sup>7)</sup>」との記載があり、照沼村と村松西方村では、真崎浦で投網による漁業やウバ貝漁が行われていたことが記録されている。おそらく、江戸時代初期においても、ウバ貝や鯉などの魚介類を捕り生計を立てていたことが容易に想定される。その意味では、第59号貝集積地は当時の水産業の一端を垣間見ることのできる貴重な資料といえる。

#### (6) 土墳墓

「村松白根遺跡1」で報告された人骨も合わせると、当遺跡では185体の人骨が確認されている。ここでは、土墳墓として取り上げた166体の人骨について考察する。

##### ア 土墳墓全体の様相について

中・近世の埋葬方法として、風葬、火葬、土葬などが挙げられる。風葬ならば、「餓鬼草紙」や六道絵の「人道不淨相図」に描かれているように、野犬や鳥などの影響を少なからず受け、人骨が埋葬時の姿勢のまま現在まで維持されているとは考えにくい。火葬ならば、埋葬変形のままの人骨を確認することは、まず不可能である。遺体を地表に置いて土盛りで覆い隠す、「土饅頭」での埋葬の可能性もある。ただ、当遺跡は砂丘上に立地しており、風の影響を強く受ける。土盛りが風によって動くことで遺体が現れ、風葬と変わらなくなることが推測される。これらのことを踏まえて、確認された人骨の検出状況から判断すると、砂を掘り下り直葬された土葬といえる。直葬の土葬について、古泉弘氏は、「布にくるんだり、袋に入れたりする例もあったと思われる。」と述べている<sup>8)</sup>。第116号土墳墓から検出された乳児骨は、四肢骨が小さく折りたたまれて体幹骨に密着した状態であり、何かにくまられて埋葬された可能性も考えられる。

埋葬の姿勢については、第645図に示した通りである。頭位は、北頭位が34%、北東頭位が37%である。北西頭位も加えると、全体の75%が北方を意識して埋葬されている。また、顔の向きが確認された人骨の25%が西面で、北西面と南西面を加えると37%が西方を意識している。埋葬変形では、67%が屈葬である。齊藤忠氏は「土葬の場合、西面北首での埋葬が多い」ことを指摘している<sup>9)</sup>。当遺跡でも、北頭位西面での屈葬が7割以上を占め、一般的な埋葬変態であるといえる。なお、個体での埋葬が46%であるのは、被葬者の顔を西方に向けるために遺体を傾けたため、比率が高くなったと推測される。

死亡推定年齢別では、次のような傾向がある。新生児から若年層までの未成人の割合が64%と、壮年以上の成人の約1.6倍にあたる。未成人の中でも乳児が28%、幼児が21%であり、新生児、死産児を合わせると全体の57%を占める。特に、1歳頃までに死亡したと推定される人骨が40体あり、全体の約22%が1歳頃までに死亡している。成人では、老年に比べて壮年、熟年の死亡率が高い。性別が判断できた人骨で男女の比率をみると、男性が56%、女性が44%と約1.3:1の割合である。埋葬された人々の男女比には、格差が少ないといえる。

##### イ 土墳墓集中区について

全土墳墓のうち97%が、遺跡の北部にあたる場所から確認されている(第646図)。ここでは、人骨が集中している北部一帯を墓域と捉え、「村松白根遺跡1」の考察に若干の追考をしてみた。

墓域の範囲は、南北280m、東西120mに及んでいる。埋葬の時期差については、「村松白根遺跡1」の中でも、「標高8m以上と7m以下に大別でき、埋葬された時期には差があることが推測される」と

している。調査区北部の中では、第3号整地面の標高が8.3mと一番高く、それ以上の標高からは、生活の場と考えられる建物跡や整地面が確認されていない。このことから、標高が8.3mより高い位置で確認された人骨は、北部一帯が生活・生産の場としての機能を失ってからの埋葬と考えられる。反対に、8m以下で確認された人骨は生産・生活の場として利用されていた頃、標高4m付近の最下層から確認され、黒色土面よりも低い人骨は、それ以前に埋葬されたといえる。具体的にいえば、第6・7・11～16・86・104～106・123・131～133・143～146号土壌墓の20基は、生活の場が形成される以前に埋葬されたと考えられる。

標高4～8mで確認された土壌墓について、検出状況、出土遺物、建物跡や整地面との関係を整理すると、次のようになる。

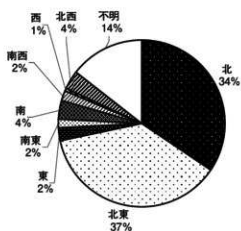
- ① 何層にも重ねて構築された黒色土面間の砂層部分から、100体以上検出されている。
- ② 土壌墓の集中している地域は、建物跡や整地面が交互に重なり合っている状況である。
- ③ 人骨の出土傾向は、新生児から若年層の割合が高く、特に1歳頃までの乳幼児が多い傾向にある。
- ④ この付近の建物跡や整地面から出土した土器や陶磁器と、土壌墓から出土した土師質土器の内耳鍋や磁器の八角小杯は、ほぼ同時代の15世紀後半から16世紀前半である。
- ⑤ この付近の建物跡からは、土師質土器の香炉片が102点出土し、遺跡全体から出土した香炉片の95.3%を占めている。
- ⑥ 西本氏、坂平氏によるDNA分析で、母系が一致した人骨が8組確認されている。また、その中でも5つの小グループが認められ、母系のつながりをもつ家族墓の存在や複数の家族の墓地である可能性も指摘している（付章4・5参照）。

以上のことから、墓域と生活域が隣接した位置に存在していた、あるいは墓域と生産・生活の場の時期が何度か繰り返されたと推測される。さらに、集落が移動しても⑥にみられるように、ほぼ同じ場所に血縁関係の墓を形成していったことも考えられる。第16・17・19・32号建物跡から出土した香炉は、いずれも出土位置が明確で、その場で使用されていたものと判断できる。これらの香炉は、死者をとむらう仏具として使用されていたのではないだろうか。

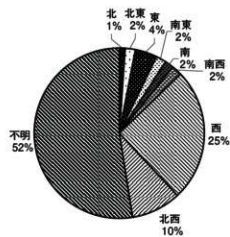
当遺跡の墓域形成について、西本氏は「複数の家族の墓地として意識されていたことは間違いない」（付章4）とする一方で、人骨のDNA分析の結果「都市型である」（付章5）と指摘している。また、齋藤忠氏は、「墓地としての立地の理想的な条件は、人里、人々の集落地と接続せず、しかも、集落地と著しく隔絶していないところ」と述べている<sup>13)</sup>。これらのことから、村松虚空藏堂の門前町として栄え他地域から多くの人々が集まっていた場所であったことも含め、多くの人々の墓域として形成されていったと考えられる。

#### ウ 副葬品について

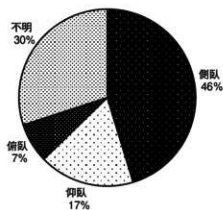
全体の約18%にあたる29基から副葬品が確認された（表67）。副葬品は古銭、貝殻、土師質土器、陶器、磁器、籬、切羽、礫である。古銭が副葬されていたものは18基で、埋葬に伴う六道銭と考えられる。成人と未成人、あるいは男性と女性の間、古銭副葬の有無や枚数の格差はみられない。また、1つの土壌墓に副葬されている六道銭の枚数は、1～46枚である。埋葬銭が出土した18基中、6枚の古銭が副葬されていたのは5基だけであった。このことから、当遺跡においては、貨幣の枚数にこだわらず副葬する習慣があったと考えられ、江戸時代初期に庶民の間に広まった六道銭の思想及び形式化する以前の習慣と一致している<sup>14)</sup>。次に、2枚以上の古銭の副葬が確認された13基の銭種をみると、すべて異



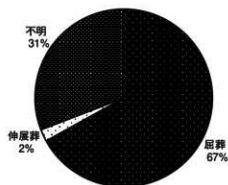
埋葬姿勢における頭の方 (人骨166体)



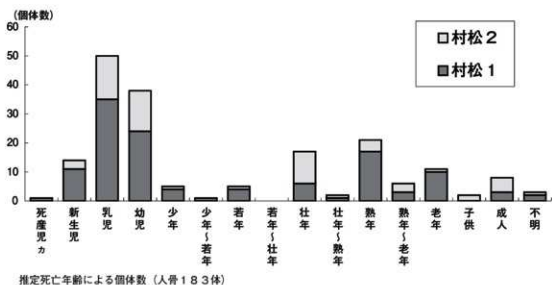
埋葬姿勢における頭の向き (人骨166体)



埋葬姿勢における体の状況① (人骨166体)



埋葬姿勢における体の状況② (人骨166体)



※ 埋葬姿勢については土壌裏として確認された166体とし、死亡推定年齢については埋葬姿勢の不明なものを含めて183体とした。

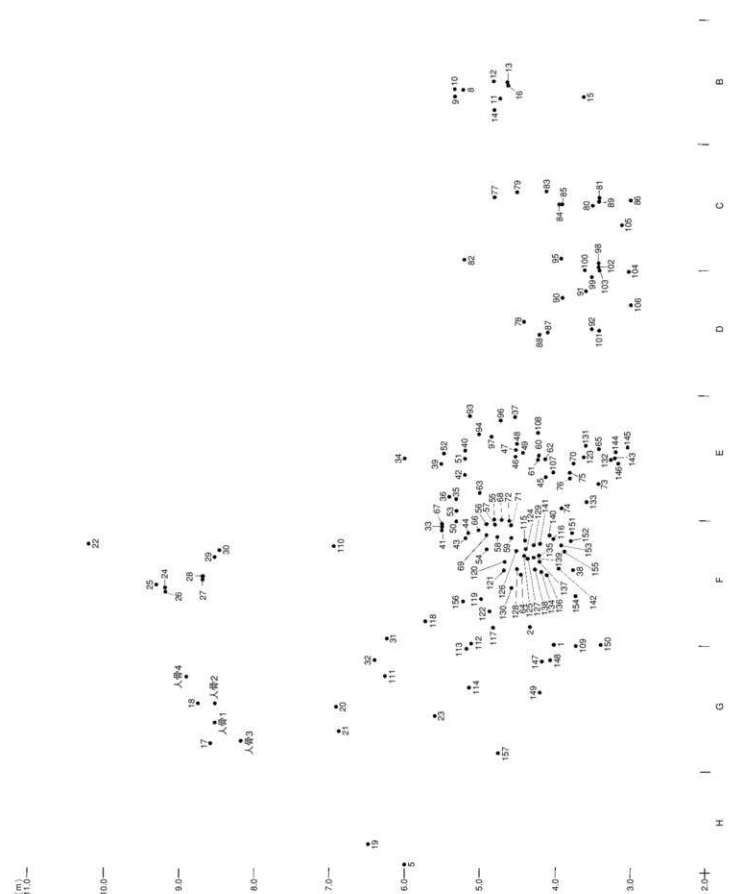
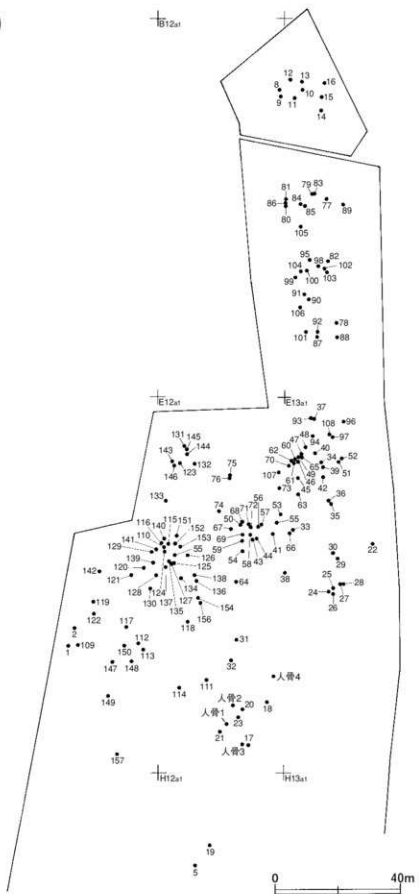
第645図 埋葬姿勢・推定死亡年齢のグラフ

なる錢種で六道銭が構成されていたのは8基である。副葬の際に、錢種を選択して六道銭にした可能性も考えられる。第124号土壙墓に埋葬された壮年男性の腹上には、布痕の残る緋銭が副葬されていた。六道銭の副葬方法について、奈良貴史氏は「六道銭は、死者の頭にかけたりする頭陀袋に入れられたり、手に握らせたり、口にくわえさせたりする。」と述べている<sup>10)</sup>。緋銭の布痕は被葬者の装束のものか、あるいは、緋銭を包んだ布の可能性が考えられる。この緋銭の錢の枚数は46枚で、緋銭の方孔内には、緋を束ねた錢繩も残っていた。

そのほか、貝殻が副葬されていたものが7基確認され、被葬者はすべて乳児または幼児である。貝種はウバ貝、タマキ貝、マツカサ貝、キンギョ貝で、ウバ貝が最も多かった。また、乳幼児が埋葬された3基からは、自然葬の副葬が確認された。そのうち、乳児が埋葬された2基からは、丸みを帯びた礫が副葬されている。貝殻や礫が乳幼児の土壙墓にしか副葬されていないことから、被葬者が生前に遊びの道具として使用していたもの、あるいは、被葬者の両親など近親者の子供に対する思いが込められたものである可能性が考えられる。

表67 副葬品一覧表

土壙墓	区	性別	年齢	副葬品	点数	錢貨名・貝種・枚数	備考
1	2	男	老年	古銭	6	開元通寶1, 天聖元寶1, 大觀通寶1, 洪武通寶2, 不明1	
9	3	男	老年	古銭	4	開元通寶1, 嘉祐通寶1, 熙寧元寶1, 永樂通寶1	
10	3	-	新生児	古銭	1	元祐通寶1	
35	4	男	熟年	古銭	6	皇宋通寶1, 紹聖元寶2(行書1・篆書1), 嘉定通寶1, 洪武通寶1, 朝鮮通寶1	
39	4	-	乳児	古銭	4	元豊通寶1, 元祐通寶1, 不明2	
40	4	-	乳児	古銭	6	熙寧元寶1, 元豊通寶2, 元符通寶1, 永樂通寶2	
44	4	-	幼児	古銭, 鎌, 貝	3	開元通寶1, 鎌(鉄製)1, ウバガイ1	
80	4	女	壮年	土師質土器	1	皿1	
85	4	-	乳児	古銭	1	不明1	
88	4	-	幼児	磁器	1	八角小杯1	
93	4	-	乳児	貝	3	ウバガイ1, タマキガイ1, マツカサガイ1	貝3枚が重なる
94	4	-	乳児	古銭	1	熙寧元寶1	
98	4	-	乳児	古銭	4	景德元寶1, 至和元寶1, 元祐通寶1, 聖宋元寶1	
102	4	-	若年	古銭	2	永樂通寶2	
109	2	女	熟年	古銭	4	祥符通寶1, 元祐通寶1, 聖宋元寶1, 洪武通寶1	
111	9	-	幼児	古銭, 貝	7	開元通寶1, 咸平元寶1, 景德元寶1, 熙寧元寶1, 政和通寶1, 永樂通寶1, ウバガイ1	
112	9	-	乳児	礫	2	自然礫2	
115	9	-	乳児	礫	1	自然礫1	
116	9	-	乳児	貝	1	ウバガイ1	
121	9	-	不明	古銭	6	開元通寶1, 熙寧元寶1, 聖宋元寶1, 政和通寶1, 不明2	
122	9	-	幼児	貝	1	ウバガイ1	
124	9	男	壮年	古銭	46	開元通寶4, 乾元重寶1, 太平通寶1, 至道元寶2, 咸平元寶1, 景德元寶2, 皇宋通寶4, 嘉祐通寶1, 熙寧元寶9, 元豊通寶1, 元祐通寶3, 紹聖元寶1, 聖宋元寶2, 紹興元寶1, 洪武通寶4, 永樂通寶2, 朝鮮通寶1, 不明6	緋銭
131	9	女	壮年	古銭	6	景德元寶1, 皇宋通寶1, 熙寧元寶1, 元符通寶1, 洪武通寶1, 永樂通寶1	
136	9	男	熟-老	古銭	2	皇宋通寶1, 熙寧元寶1	
137	9	-	乳児	貝	1	キンギョガイ1	
140	9	-	幼児	礫	2	自然礫1	
141	9	女	若年	古銭	1	永樂通寶1	
155	9	-	乳児	陶器, 貝	2	小皿1, ウバガイ1	貝の上に陶器が重なる
159	1	-	成人	切羽	1	切羽(銅製)1	



第646图 土壤采集集中区分布状况图



## エ. 遺骸の特徴

「村松白根遺跡1」での報告と同様に、骨格と筋肉の様子と歯の様子の2点が挙げられる。骨格の様子については、成人男性では大腿骨後稜の隆起が強く、筋肉の発達が推測される個体が多い。女性も骨格の割には筋肉の発達がうかがえる。歯を確認できた人骨140体について、齲歯・歯の磨滅・歯周症・脱落についてまとめてみた。新生児から若年までの未成年層102体のうち、88体で歯が確認された。そのうち2体に齲歯が、1体に歯の磨滅がみられた。一方、壮年以上の成人層60体では、52体で歯が確認された。そのうち、歯に異常が認められなかったのは6体である。未成年層が成人層より歯の異常が少ない原因として、歯が生え揃わない新生児、乳幼児骨が多いこと、乳歯から永久歯への生え替わりがあることが挙げられる。成人層に限定して歯の特徴をみると、齲歯は25%、歯周症は33%の成人骨にみられた。歯の磨滅は半数以上の58%で、歯の生前脱落は56%の人骨で確認できた。加齢と歯の状態の関係をみると、歯の磨滅と脱落について、加齢に従い磨滅が激しくなり、歯の脱落を確認できた人骨が増加する傾向にある。第136号土壙墓に埋葬された熟年～老年の男性人骨の歯は、側切歯から第2小臼歯まで同じ高さに磨滅していた。齲歯は老年層の人骨で確認することができなかった。歯周症は加齢にほとんど影響なく、全体的にみられた。これらのことから、老年層に齲歯が確認できなかったのは、齲歯が脱落あるいは抜歯したためと考えられる。また、歯の磨滅が加齢に伴い激しくなるのは、粗い食生活の影響であろう。

## 4 出土遺物について

### (1) 土器・陶磁器

遺跡全体で出土した総破片数は、11,981点にのぼる。出土した土器・陶磁器の内訳は、土師質土器11,115点、瓦質土器28点、陶磁器類716点、土師器や須恵器122点である(表68)。在地産の土師質土器を器種別にみると、小皿・皿・内耳鍋の順に多く、次に香炉・播鉢・焙烙・茶釜などが少量である。

土師質土器の小皿・皿は、すべてロクロ成形の平底である。口径が10cm以下を小皿、口径が10cm以上を中皿、20cm以上を大皿として分類した。大皿は第77号建物跡から出土した1点のみである。小皿・皿の中で、煤または油煙が付着しているものは全体で68点出土している。また、釜屋内から出土している底部が穿孔された皿8点を含めると合計72点になり、いずれも灯明具として使用されていたものである。内耳鍋は、接合関係の少ない破片が多く、完形品は出土していない。白石遺跡<sup>(4)</sup>や小泉館跡<sup>(5)</sup>から出土した内耳鍋と類似するいわゆる常陸型で、胎土には、雲母・長石・石英が含まれている。体部は、やや内傾しながら外傾して立ち上がっているものや直線的に外傾しているものが認められる。

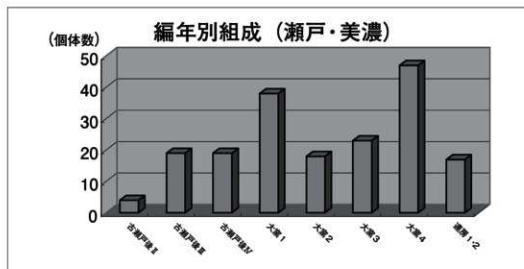
陶磁器の内訳は、皿類492点、碗類67点、鉢類26点、甕121点、その他10点で、食膳具の皿類が圧倒的に多い。陶器の皿・碗類は瀬戸・美濃産では占められているが、薬灰軸の肥前系の皿も21点出土している。

表68 出土土器破片数一覧表

	土師質土器			陶磁器類			瓦質土器			土師器・須恵器			合計
	村松1	村松2	小計	村松1	村松2	小計	村松1	村松2	小計	村松1	村松2	小計	
製塩施設	137	0	137	11	0	11	0	0	0	7	5	12	160
建物跡	2,699	1,089	3,788	112	192	304	2	2	4	13	8	21	4,117
整地面	1,232	765	1,997	49	76	125	0	0	0	13	7	20	2,142
その他	4,595	598	5,193	194	82	276	19	5	24	49	20	69	5,562
小計	8,663	2,452	11,115	366	350	716	21	7	28	82	40	122	11,981

皿の種類は、灰軸の端反皿・縁軸小皿・挟み皿・鉢皿・大皿・折縁皿・内瓦皿、長石軸の丸皿・菊皿・鉄絵皿のほか鉄軸の椀皿、青織部皿などである。碗類は平碗・天目茶碗・丸碗・筒形碗などで、天目茶碗は破片も含めて34点出土している。

出土した瀬戸・美濃産の陶器を、藤沢良祐氏の編年<sup>16)</sup>に従い時期別に分けると、古瀬戸後Ⅱ期から少しずつ増加し、大窯1期と大窯4期のものが多いという傾向を示している(第647図)。いずれにしても、古瀬戸後Ⅲ期から連房1・2期まで、途切れることなく流通していたことになる。また、肥前系の皿は、盛峰雄氏の編年<sup>17)</sup>に従えばⅠ期のものに該当し、大窯4期のものとはほぼ同時期と考えられる。その他、常滑産の甕は、赤羽・中野編年5・9形式(13世紀前半・15世紀前半)に該当する。磁器は、龍泉窯の青磁椀花皿や青磁碗などが15世紀後半、景德鎮窯や漳州窯の皿・碗類などが15世紀後半～17世紀前半に比定され、国内の陶器類とはほぼ一致している。

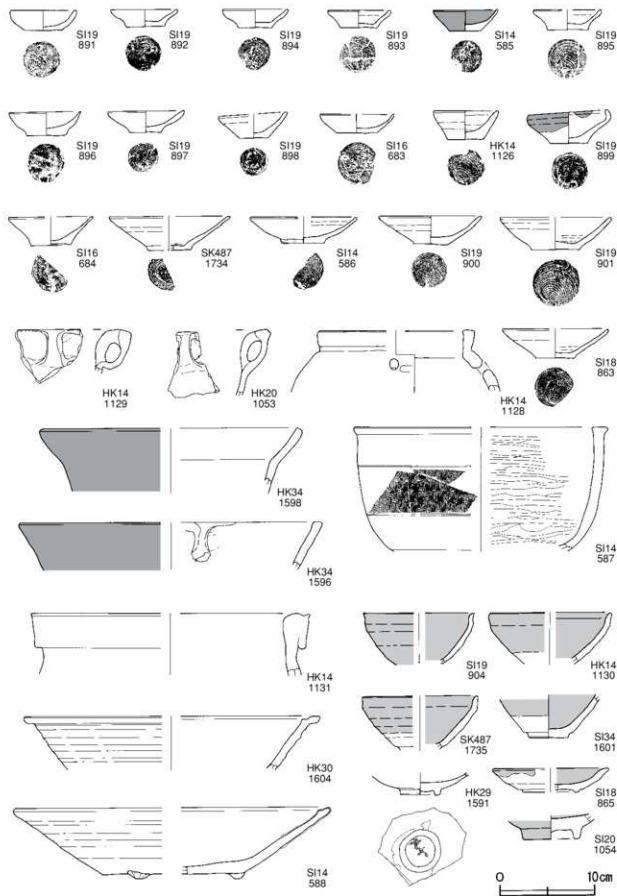


第647図 編年別組成 (瀬戸・美濃)

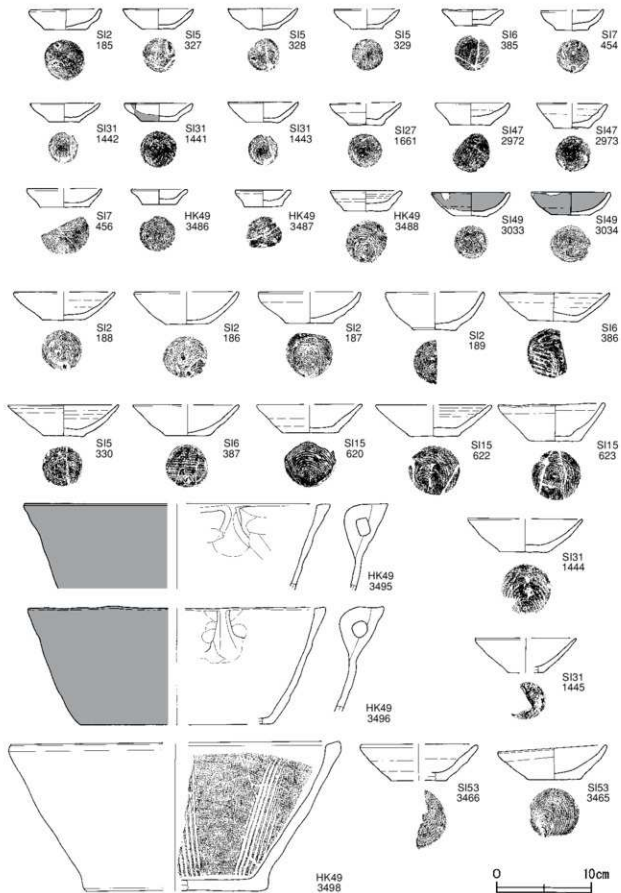
陶磁器の生産年代を基準にすると、おおむね15世紀中頃から15世紀後半を第1期、16世紀前半を第2期、16世紀後半を第3期、16世紀末から17世紀前半を第4期に分けることができる。これは、「集落と製塩施設の変遷」の第Ⅰ期が第1期、第Ⅱ期が第2・3期、第Ⅲ期が第3・4期に該当する(第648～650・652～654図)。第1～4期に分類した陶磁器と土師質土器の特徴は、次のとおりである。

第1期に位置付けられる陶磁器は、古瀬戸の折縁深皿や龍泉窯系の碗などが出土している。土師質土器の小皿は、891～895のように口径に対して器高が低く、器厚が薄いものが多く確認され、体部は直線的に立ち上がっている。皿は863・900のように底径が小さく体部がほぼ直線的に立ち上がっているものと、901のように底径はやや小さく体部が直線的に立ち上がっているものが主体である。内底面の調整は、同心円状のナダと軽い横ナダが施されているものが多く、比較的丁寧な調整である。また、901の内底面は外縁部にナダ調整が認められる。さらに、この時期に該当する第37号建物跡の内耳鍋に付着した煤は<sup>13</sup>C年代測定により15世紀後葉の年代を示す結果が得られ、陶磁器の生産年代ともほぼ一致している。

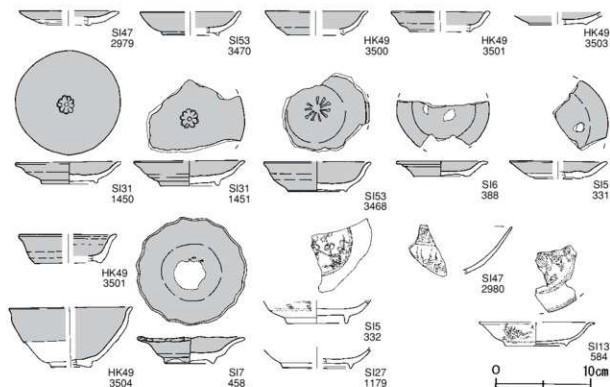
第2期に位置付けられる陶磁器は、1450・1451・3468のように内底面に印花されている灰軸の端反皿、鉄軸の椀皿、天目茶碗、染付の端反皿や漳州窯系の碗、龍泉窯系の青磁椀花皿などが出土している。土師質土器の小皿は、327～329のように器厚が薄いものと385・2972のように肉厚のものが多く認められ、



第648図 第1期の土師質土器・陶磁器



第649図 第2期の土師質土器



第650図 第2期の陶磁器

いずれも口径に対して器高が低く、体部が直線的に立ち上がっている。皿は底径がやや小さく、体部がほぼ直線的に立ち上がっているものが約半分を占めている。内底面の調整は、前段階とほぼ同様である。330・386の内底面は外縁部にナデ調整が施されており、この時期以降は認められない。また、第49号整地面から出土した3495の内耳鍋に付着した煤は<sup>14</sup>C年代測定により16世紀中葉の年代を示す結果が得られている。この時期に位置付けられる陶磁器の生産年代ともおおむね一致しており、内耳鍋がこの時期まで使用されていたことを示す貴重な資料といえる。

第3期に位置付けられる陶磁器は、灰釉や染付の端反皿、灰釉丸皿などが出土している。土師質土器の小皿・皿は13点確認されており、その特徴は前期とほぼ同様である。その他の土師質土器は、内耳鍋の口縁部片や焙烙の底部片などが混在している。

第4期に位置付けられる陶磁器は、灰釉の丸皿やソギ入りの折縁皿、長石釉の丸皿や菊皿、口縁部が輪花した椀皿、鉄絵皿、青織部皿、肥前系の皿、景徳鎮系の染付皿など種類も豊富である。土師質土器の小皿は、4136・4137のように口径がさらに小さくなる傾向にある。また、3722・4289のように器高が低く肉厚のものが主体となり、この時期の76.2%を占めている。皿は底径がやや小さく体部がほぼ直線的に立ち上がっているものと、3725・2726のように底径が広く体部がほぼ直線的に立ち上がっているものが主体となる。また、4264のように底径が広く体部の立ち上がりやや外反するものも認められる。内底面の調整は、3696のような軽い横ナデ、3656のような底面がくぼむほどの強い横ナデが施されているもの以外に、3707のような渦巻き状のナデ調整が顕著に残るものが認められるようになる(第651図)。この時期の皿は、全体的に肉厚であり、内底面や回転系切りなどの調整も粗雑である。

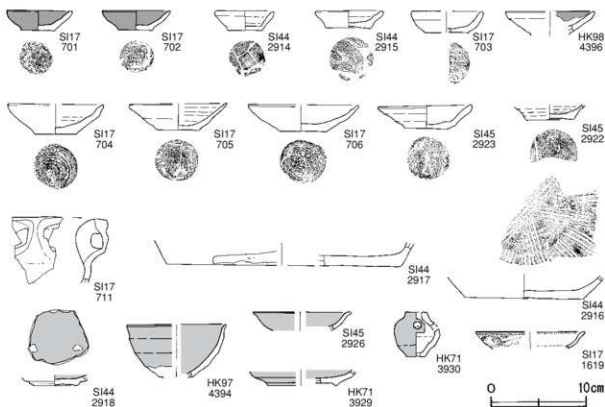
以上の結果から、土師質土器の皿類は第1～3期までは大きな変化は認められない。第4期になると、小皿は口径がさらに小さくなり、肉厚なものが主体になっていく。皿は底径が広く肉厚なものが多くなり、



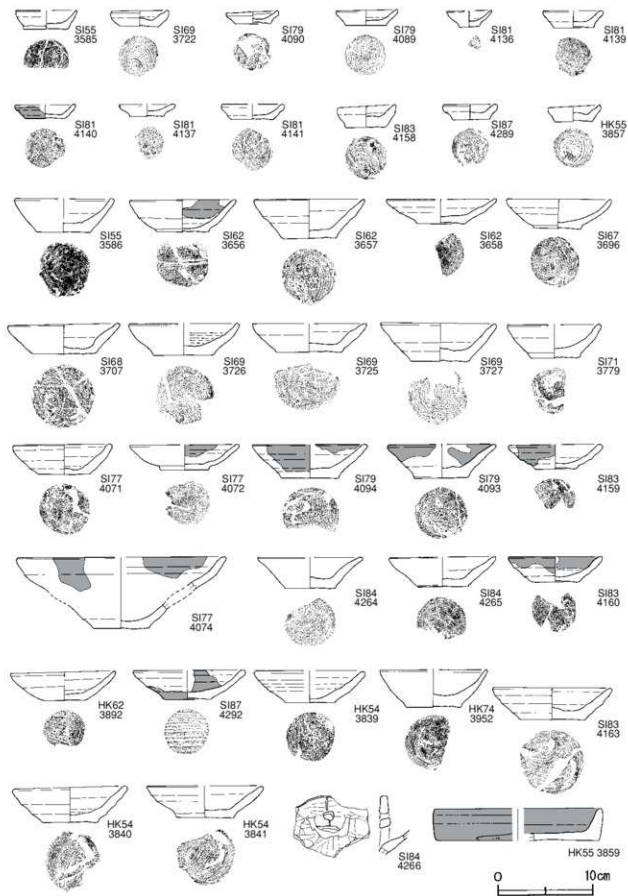
第651図 土師質土器(皿)内底面の特徴

内底面の調整や底部の回転糸切りなども粗雑になっていく傾向がみられる。

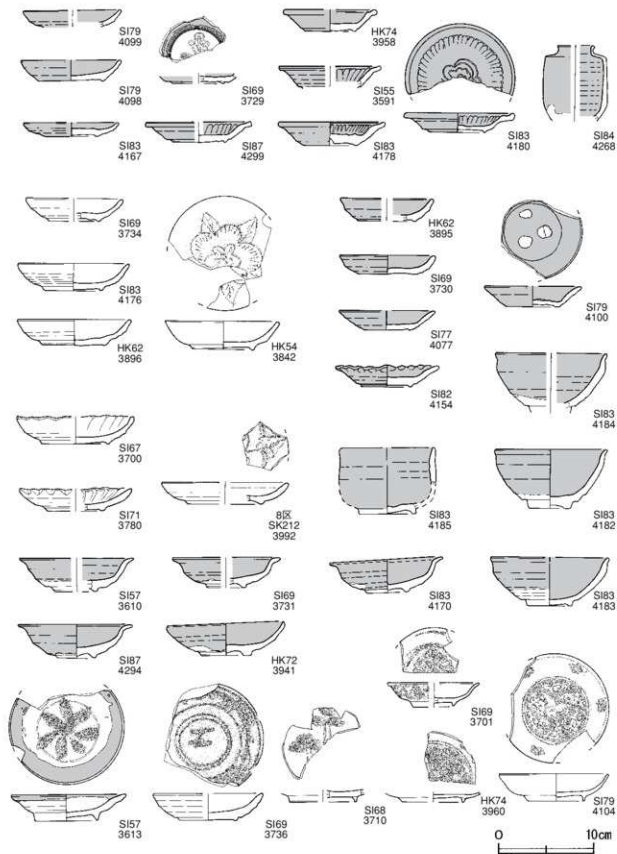
第3期から第4期にかけての時期(16世紀末から17世紀初頭)、史実には次のような点が挙げられる。1591年(天正19年)に豊臣政権公認のもと遂行された佐竹氏による常陸国統一の完成、1602年(慶長7年)に佐竹氏が秋田へ移封されたこと、1641年(寛永18年)に水戸藩によって実施された総検地などである。つまり、この地域における生活の安定、領主の入替えによる年貢や諸役の一時的な緩和、領主の移封に伴う在地の人々の動きなどによって、土師質土器の皿類に影響を与え、数多くの陶磁器類が流通したのではないだろうか。また、瀬戸・美濃産の大窯期は、生活雑器類を主流とした製品を量産し全国にその消費地を拡大した時期でもある。村松虚空藏堂の門前町は船の往来も多い東国の港町のひとつであり、これらの製品が運ばれ入手しやすい環境であったといえる。さらに、製塩は佐竹氏や水戸藩にとって重要な財源であり、それに従事していた人々は何らかの優遇や恩恵があったことも想定される。第7号建物跡から出土した完形品の青磁椀花皿や国産陶磁器類は、この集落における生活の豊かさを示す遺物といえる。



第652図 第3期の土師質土器・陶磁器



第653図 第4期の土師質土器



第654図 第4期の陶磁器



## (2) 火打金・火打石

遺構及び遺構外から、数多くの着火道具が出土している。火打金は、建物跡28点、整地面6点、その他の遺構と遺構外から12点の合計46点である(第655図)。火打石は、建物跡61点、整地面20点、その他の遺構と遺構外から29点の合計110点である(第656図)。火打金と火打石がセットで出土しているのは、建物跡9軒、整地面2か所である。火打石と火打金は、炉内や炉付近の黒色土面に多く出土している傾向にある。火打金の形態分類は、高嶋幸雄氏の分類<sup>19)</sup>をもとに、鶴見貞雄氏が山型(笠型)を細分化した論考<sup>20)</sup>に基づいて類型化した。

高嶋氏分類・・・山型(笠型) カスガイ型 短冊型 台形鉄板型

鶴見氏分類・・・IA「J」形タイプ IB「山」字タイプ IC「山」字端部渦巻きタイプ

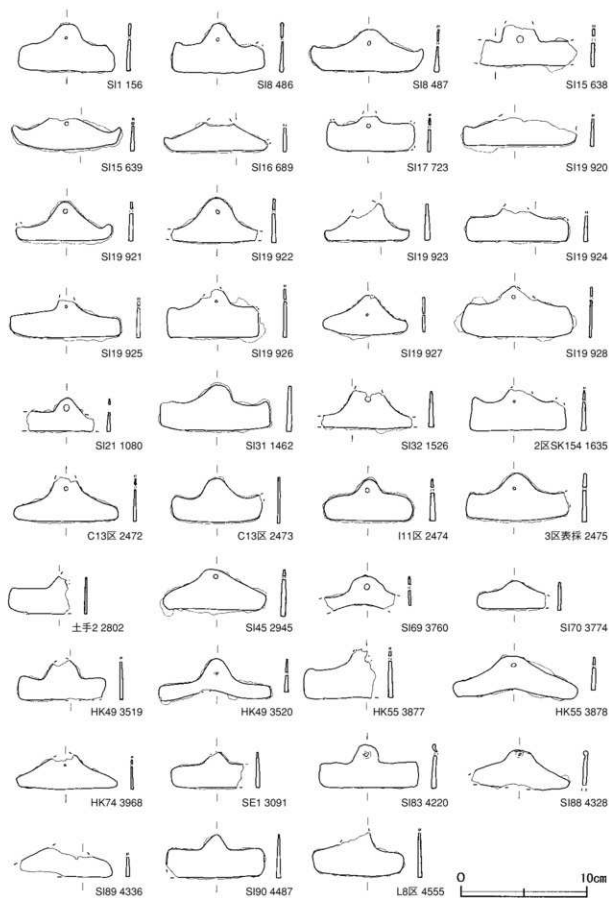
ID 笠タイプ IE 三角形タイプ IF 三角形端部合わせタイプ

IG 三角形端部渦巻きタイプ IH「凸」字端部渦巻きタイプ

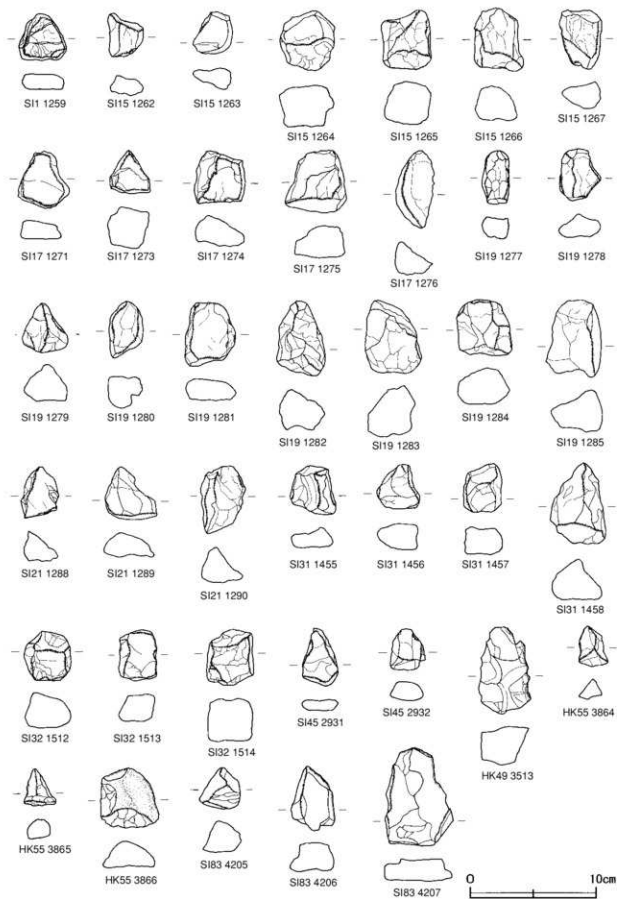
以上の類型に当てはめると、分類できたものでIA型が15点、ID型が18点、IE型が6点である。これらの類型の時期は、鶴見氏の論考によれば、IA型が13世紀から16世紀末、ID型が14世紀から17世紀前半、IE型が15世紀から16世紀末に使用されていたものに位置付けられている。IA・ID型の火打金が出土した遺構の時期は、15世紀後半から17世紀前半に該当しており、鶴見氏の見解ともほぼ一致している。また、IE型は17世紀前半を中心とする南部の調査区でしか出土しておらず、当遺跡においては新しいタイプの火打金といえる(表69)。常陸大宮市(旧那珂郡山方町)の近辺から産出される石英質の石は、江戸初期の頃に「水戸火打石」と呼ばれ、江戸にもたらされていた記録が残されている<sup>18)</sup>。那珂の産地も、茨城県北部に存在していることから、容易に入手できた石材と考えられる。第100号整地面に伴う第171号土坑内から出土した石英の石核は、火打石の原石として持ち込まれたものと考えられる。火打石は、何度も打ち割られて使用されていくうちに、稜が摩滅しだんだん小形化していく。最小のものでは長さ3.3cm、幅2.8cm、厚さ1.4cm程度で、火打石として十分に使用された後に廃棄されたものと考えられる。報告書に掲載した石材の内訳は、那珂60点、石英26点、玉髓1点、那珂が高い出土率を占めている(表70)。

表69 火打金集成一覧表

番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	類型	出土遺構	遺物番号	備考	番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	類型	出土遺構	遺物番号	備考
1	7.6	3.9	0.4	31.1	ID	S I - 1	156	村松1	21	8.1	(3.4)	0.3	(22.5)	IA	C 13区	2472	村松1
2	(7.5)	3.9	0.3	(22.0)	ID	S I - 8	486	村松1	22	7.1	3.7	0.3	39.3	ID	C 13区	2473	村松1
3	9.0	3.0	0.4	37.9	ID	S I - 8	487	村松1	23	7.1	3.3	0.4	37.1	ID	I 11区	2474	村松1
4	(7.6)	2.0	0.3	(33.4)	IA	S I - 15	638	村松1	24	6.1	3.9	0.4	48.1	ID	3区奥探	2475	村松1
5	8.8	(2.7)	0.3	(33.0)	ID	S I - 15	639	村松1	25	(4.9)	(2.9)	0.2	(11.8)	IA	土手状2	2802	村松2
6	(8.2)	(2.3)	0.3	(28.7)	ID	S I - 16	689	村松1	26	8.2	3.3	0.3	34.8	IE	S I - 45	2945	村松2
7	7.0	(2.8)	0.2	(28.3)	ID	S I - 17	723	村松1	27	(5.7)	2.9	0.2	(8.8)	IA	S I - 69	3760	村松2
8	9.0	(2.3)	0.4	(27.6)	IA	S I - 19	920	村松1	28	(5.4)	2.2	0.3	(12.2)	IA	S I - 70	3774	村松2
9	7.6	3.1	0.6	(26.1)	ID	S I - 19	921	村松1	29	8.0	3.4	0.4	37.9	IA	S I - 83	4220	村松2
10	(6.7)	3.7	0.5	(23.2)	ID	S I - 19	922	村松1	30	(7.8)	(3.1)	0.3	(21.4)	IE	S I - 88	4328	村松2
11	(6.7)	3.0	0.4	(18.6)	ID	S I - 19	923	村松1	31	(7.4)	(2.3)	0.4	(13.3)	IE	S I - 89	4336	村松2
12	8.4	(2.6)	0.4	(37.0)	IA	S I - 19	924	村松1	32	7.7	3.4	0.3	(32.7)	IA	S I - 90	4487	村松2
13	8.9	(3.4)	0.3	(34.2)	IA	S I - 19	925	村松1	33	7.0	(3.2)	0.2	(18.4)	IA	HK - 49	3519	村松2
14	(7.5)	(3.9)	0.3	(46.2)	ID	S I - 19	926	村松1	34	8.9	2.6	0.3	22.5	IA	HK - 49	3520	村松2
15	6.7	3.6	0.2	20.0	IA	S I - 19	927	村松1	35	(5.2)	(4.0)	0.4	(31.1)	IA	HK - 55	3877	村松2
16	8.8	4.0	0.2	58.0	ID	S I - 19	928	村松1	36	9.8	3.3	0.4	29.9	IE	HK - 55	3878	村松2
17	(5.3)	2.9	0.3	(20.7)	ID	S I - 21	1080	村松1	37	8.1	(2.8)	0.2	(16.1)	IE	HK - 74	3968	村松2
18	8.6	3.6	0.6	(53.4)	ID	S I - 31	1462	村松1	38	(5.7)	2.8	0.3	(9.5)	IA	SE - 1	3091	村松2
19	(7.2)	(3.0)	0.4	(18.9)	ID	S I - 32	1526	村松1	39	7.3	(3.6)	0.3	(22.7)	IE	L 8区	4555	村松2
20	7.5	3.1	0.4	31.6	ID	S I - 34(35)	1635	村松1									



第655图 火打金集成图



第656图 火打石集成图

表70 火打石集成一覧表

番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	出土遺構	発掘期	備考	番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	出土遺構	発掘期	備考
1	3.7	3.8	1.3	23.2	瑪瑙	a	S1-1	1259	村松1	45	4.7	3.1	3.7	58.9	石英	b	S1-060	1683	村松1
2	3.9	2.9	1.4	19.9	瑪瑙	a	S1-6	1260	村松1	46	4.7	3.9	2.6	53.4	石英	a	3&K表採	2413	村松1
3	4.2	3.0	2.0	29.1	瑪瑙	a	S1-10	518	村松1	47	4.7	3.9	2.9	51.0	石英	b	C13区	2414	村松1
4	4.9	3.8	4.3	76.8	石英	a	S1-10	519	村松1	48	5.3	4.0	5.6	80.7	石英	b	C13区	2415	村松1
5	3.4	2.8	1.6	15.0	瑪瑙	b	S1-15	1262	村松1	49	5.9	3.3	3.3	90.2	石英	a	C13区	2416	村松1
6	3.3	3.1	1.7	21.7	瑪瑙	b	S1-15	1263	村松1	50	6.1	6.0	3.3	127.7	石英	b	C13区	2417	村松1
7	4.7	4.3	3.3	76.5	瑪瑙	b	S1-15	1264	村松1	51	7.1	6.6	3.5	128.4	石英	b	C13区	2418	村松1
8	4.7	3.9	3.3	86.6	瑪瑙	a	S1-15	1265	村松1	52	7.9	4.3	4.3	139.0	石英	b	C14区	2419	村松1
9	5.0	3.9	2.7	75.1	石英	b	S1-15	1266	村松1	53	3.5	4.5	1.0	19.3	瑪瑙	b	土手状2	2800	村松2
10	4.7	3.3	2.2	45.7	瑪瑙	a	S1-15	1267	村松1	54	5.3	4.0	2.8	70.1	瑪瑙	b	S1-40	2871	村松2
11	4.5	4.1	1.5	31.6	石英	a	S1-17	1271	村松1	55	4.8	4.0	2.8	51.9	瑪瑙	b	S1-44	2920	村松2
12	3.5	3.3	3.3	39.3	石英	a	S1-17	1273	村松1	56	4.6	2.8	0.8	15.3	瑪瑙	b	S1-45	2931	村松2
13	4.2	4.0	2.5	52.6	瑪瑙	a	S1-17	1274	村松1	57	3.3	2.8	1.4	14.1	瑪瑙	b	S1-45	2932	村松2
14	4.9	4.9	2.6	77.5	瑪瑙	b	S1-17	1275	村松1	58	3.3	3.1	1.4	15.3	瑪瑙	b	S1-48	3004	村松2
15	7.2	3.0	2.6	46.6	瑪瑙	a	S1-17	1276	村松1	59	7.3	6.1	3.6	160.8	石英	b	S1-48	3005	村松2
16	4.2	2.2	1.7	24.2	瑪瑙	a	S1-19	1277	村松1	60	3.9	3.1	1.3	20.0	瑪瑙	b	S1-1-54	3582	村松2
17	4.1	3.3	1.8	28.8	瑪瑙	a	S1-19	1278	村松1	61	6.1	3.6	1.8	52.6	瑪瑙	b	S1-57	3620	村松2
18	3.9	3.7	2.9	35.4	瑪瑙	a	S1-19	1279	村松1	62	4.7	5.7	1.6	61.4	瑪瑙	b	S1-57	3621	村松2
19	4.5	2.7	2.5	36.5	瑪瑙	a	S1-19	1280	村松1	63	3.6	4.4	2.1	29.1	瑪瑙	b	S1-65	3688	村松2
20	5.0	4.0	1.7	46.7	石英	a	S1-19	1281	村松1	64	3.4	3.6	1.3	13.8	瑪瑙	b	S1-69	3748	村松2
21	6.0	3.9	3.2	74.6	瑪瑙	a	S1-19	1282	村松1	65	5.3	5.1	3.4	117.3	瑪瑙	b	S1-70	3773	村松2
22	5.8	4.5	4.0	112.8	石英	b	S1-19	1283	村松1	66	3.8	2.9	2.4	34.3	石英	b	S1-74	4057	村松2
23	4.4	4.5	2.8	77.8	石英	b	S1-19	1284	村松1	67	4.3	2.5	1.0	8.8	瑪瑙	b	S1-75	4064	村松2
24	6.1	4.4	3.3	96.1	石英	b	S1-19	1285	村松1	68	4.7	4.3	2.7	54.1	瑪瑙	b	S1-77	4079	村松2
25	4.1	3.0	2.4	27.2	瑪瑙	a	S1-21	1288	村松1	69	6.0	3.6	2.5	49.0	石英	b	S1-79	4119	村松2
26	4.2	4.2	1.9	32.2	瑪瑙	a	S1-21	1289	村松1	70	3.3	3.2	2.4	23.3	石英	b	S1-83	4205	村松2
27	5.4	3.5	2.8	51.5	瑪瑙	a	S1-21	1290	村松1	71	5.0	3.5	2.2	48.1	石英	b	S1-83	4206	村松2
28	3.7	4.0	1.6	27.4	瑪瑙	a	S1-31	1455	村松1	72	7.8	5.4	1.7	103.7	瑪瑙	b	S1-83	4207	村松2
29	3.5	3.4	2.0	28.3	瑪瑙	a	S1-31	1456	村松1	73	7.1	5.6	3.6	186.1	石英	b	HK-36	3300	村松2
30	3.9	3.1	2.2	35.9	瑪瑙	a	S1-31	1457	村松1	74	6.9	4.2	3.1	92.7	瑪瑙	b	HK-49	3513	村松2
31	6.5	4.4	3.2	97.9	瑪瑙	a	S1-31	1458	村松1	75	8.7	6.2	2.1	149.7	瑪瑙	b	HK-50	3556	村松2
32	3.9	3.7	2.8	45.7	瑪瑙	a	S1-32	1512	村松1	76	4.6	3.4	2.9	30.5	瑪瑙	b	HK-51	3803	村松2
33	4.0	3.0	2.1	41.9	瑪瑙	a	S1-32	1513	村松1	77	3.2	2.3	1.7	9.6	瑪瑙	b	HK-55	3864	村松2
34	4.5	3.7	3.4	78.5	瑪瑙	a	S1-32	1514	村松1	78	3.0	2.6	1.5	11.7	瑪瑙	b	HK-55	3865	村松2
35	4.0	2.8	1.1	18.3	瑪瑙	b	S1-35	1257	村松1	79	4.7	4.6	2.4	57.1	瑪瑙	b	HK-55	3866	村松2
36	4.8	2.9	2.4	52.0	瑪瑙	b	S1-35	1258	村松1	80	5.0	3.6	3.8	67.5	石英	a	HK-62	3901	村松2
37	4.0	3.2	1.0	18.4	瑪瑙	a	S1-37	1772	村松1	81	4.7	5.3	3.3	75.1	瑪瑙	a	HK-75	3970	村松2
38	3.6	3.0	2.0	26.5	瑪瑙	a	S1-37	1773	村松1	82	3.6	3.3	1.4	26.4	瑪瑙	a	HK-76	3974	村松2
39	4.6	2.7	1.6	23.6	瑪瑙	a	S1-37	1774	村松1	83	3.7	2.5	2.1	28.2	瑪瑙	b	S-E-2	3094	村松2
40	7.6	3.7	3.1	72.4	瑪瑙	a	S1-37	1775	村松1	84	5.9	4.7	3.3	97.8	石英	b	SE-090	3157	村松2
41	4.6	2.7	1.5	24.6	瑪瑙	a	HK-32	1268	村松1	85	3.6	5.5	2.8	43.7	玉髓	b	SE-090	4465	村松2
42	4.7	4.3	2.7	55.5	瑪瑙	b	HK-32	1269	村松1	86	4.0	4.2	2.4	40.5	瑪瑙	b	土坑跡1	3161	村松2
43	6.0	4.3	2.5	65.4	石英	b	HK-32	1270	村松1	87	5.2	3.3	2.6	59.2	石英	b	M9区	4548	村松2
44	5.8	3.3	1.0	20.2	瑪瑙	a	SE-050	1624	村松1										

※ a: 摩滅の集中箇所有り, b: 一部の縁が摩滅

### (3) その他の出土遺物

土器・陶磁器以外にも、金属製品・土製品・骨角製品など多種多様な遺物が出土している。これらは、当時の人々の生活がうかがえる貴重な遺物である。これらの遺物を、用途に合わせて分類した(表71)。

生活用具は、調理具としての包丁・鉄鍋のほか、小刀・毛抜などの鉄製品や茶臼・石臼・石鉢・砥石などの石製品が出土している。小刀類は総数82点出土している。出土場所の内訳は、製塩跡1点、建物跡51点、整地面15点、その他15点である。砥石は総数413点出土し、石材のほとんどが凝灰岩である。出土場所の内訳は、製塩跡2点、建物跡188点、整地面91点、その他132点である。小刀は万能に近い加工具とし

て、砥石は刃物を研ぐ道具として欠くことのできない生活必需品である。どちらも、建物跡からの出土数が最も高く、摩滅するまで使用されていたものがほとんどであった。鉄鍋は、第61号建物跡から内耳部が遺存した口縁部片を含め、合計11点出土している。

嗜好品である煙管の出土は、南部の集落に限定されている。合計8点出土し、内訳は雁首5点、吸い口3点である。雁首の火皿は大形で、肩に段を有するもの3点とそうでないもの2点に分けられる。古泉弘氏の編年<sup>21)</sup>では、第Ⅰ～Ⅲ期に該当するタイプで、陶磁器の年代と合わせるると17世紀前半に比定される。そのほか、遊具ではサイコロ5点（土製1、未製品を含む骨角製4）、おはじき1点が出土している。16世紀に栄えた戦国大名朝倉氏の一乗谷朝倉氏遺跡では、将棋・囲碁・双六などの盤上遊戯も盛んに行われ、碁石やサイコロなどの遺物が寺院や町屋と推定される遺構から出土している<sup>22)</sup>。これらの遊具は、武将のみならず僧侶や庶民まで広く愛好されていたことがうかがえる。当遺跡からの出土量は少ないが、遊びに興じていた一端を垣間見ることができる。

また、大工道具では片刃・新や釘・鋸、漁具では猪・鉛・釣り針・土錘・管状土錘などが出土し、職能民が集落内に存在していた可能性を示している。仏具としては、第18号建物跡から銅板如来座像、南部集落の遺構外から銅板製懸佛が出土している。どちらも薄い銅板を、打ち出しや細線で表現している。本来は境内の柱などに打ち付けられるものであることから、持ち込まれたものであろう。

特筆される遺物として、第74号整地面から出土した土製の「面」が挙げられる。顎部から鼻部までの破片で、胎土には、砂粒を主体に石英や長石が含まれている。色調は明褐色で、表面ともに丁寧に指ナデされている。鼻は棒状工具で表面から裏面に向かって二孔開けられている。口元はやや開き、歯がわずかにみえる端正な作りである。この面について、神社などに奉納される神楽舞との関係が想起される。遺跡に隣接している村松大宮宮は、伊勢神宮の分霊として建立されている。その伊勢神宮に奉納する舞いを太々神楽といい、伊勢の神人が村々を巡回して神楽による祝をおこなう形態が古くから残されている。江戸時代には、諸国の神楽に影響を与え、各地の有力な神社に太々神楽の方式が普及している<sup>23)</sup>。面の出土した第74号整地面は、江戸時代前半の遺構であり、少なからずこの神楽の影響を受けていた可能性は否定できない。この面を、町田市立博物館館長の田邊助三郎氏に鑑定して頂いたところ、「極めて珍しい土製の仮面である。江戸時代後期であれば土産的な製品として売られているが、この時期での類例はない貴重な遺物である。」という見解を得ている。

表71 出土遺物分類表

	金属製品	石製品	土製品	骨角製品
生活用具	包丁 小刀 鎌 鉄鍋 結碁 結練車 鏡 毛抜 はさみ	石臼 茶臼 石鉢 砥石 台石 硯		
着火道具	火打金	火打石		
漁具	猪 鉛 釣り針 鉛金*		土錘 管状土錘 土玉	
大工道具	片刃 新 釘 鋸			
製塩道具	吊金具 耳金			
嗜好品・遊具	煙管	おはじき	サイコロ	サイコロ
武器・装身具	切刃 小札 短刀 小柄 鑓 鍬 栗形 猿手 弁			弁
仏具	銅板如来座像 銅板製懸佛	宝篋印塔 五輪塔 積輪		
その他	環状金具 棒状金具 鉤状金具 髹 壺金 古銭 枝銭	磨石 砥石 軽石 鐵	面 土鈴 人物埴輪 (美豆貝) 円筒埴輪	

古銭は、合計2,137枚が出土している。出土古銭の銭種別割合をみると、「永樂通寶」11.99%、「阜宋通寶」10.63%、「開元通寶」8.10%と続いている（表72）。出土した遺構と枚数の内訳は、釜屋13枚、建物跡971枚、整地面166枚、土壇墓138枚、埋納遺構381枚、その他の遺構67枚、遺構外401枚である。さらに、出土場所ごとの遺構別数量をみてみると、調査区の北部から中央部にかけて確認された建物跡や埋納遺構からの出土数が多く、合計で2053枚確認されている（表73）。これは、総出土枚数の96.1%にあたり、先に述べた「集落と製塩施設の変遷」の第Ⅰ・Ⅱ期（15世紀後半から16世紀前半）に該当する時期である。

表72 銭種別出土枚数一覧表

銭名	枚数	比率	銭名	枚数	比率	銭名	枚数	比率
永樂通寶	256	11.99	治平元寶	22	1.03	正隆元寶	4	0.19
阜宋通寶	227	10.63	咸平元寶	22	1.03	景定元寶	3	0.14
開元通寶	173	8.10	元符通寶	22	1.03	紹熙元寶	3	0.14
熙寧元寶	164	7.68	景祐元寶	18	0.84	紹定通寶	3	0.14
洪武通寶	148	6.93	至和元寶	15	0.70	至大通寶	3	0.14
元豊通寶	136	6.32	太平通寶	14	0.66	開禧通寶	2	0.09
元祐通寶	134	6.32	大觀通寶	14	0.66	嘉泰通寶	2	0.09
大聖元寶	72	3.37	淳化元寶	11	0.51	大和通寶	1	0.05
政和通寶	64	3.00	朝鮮通寶	9	0.42	慶長通寶	1	0.05
祥符元寶	51	2.39	宋通元寶	6	0.28	熙寧重寶	1	0.05
紹聖元寶	48	2.25	治平通寶	6	0.28	紹聖通寶	1	0.05
聖宋元寶	43	2.01	淳熙元寶	5	0.23	紹興元寶	1	0.05
景德元寶	42	1.97	嘉定通寶	5	0.23	大宋元寶	1	0.05
至道元寶	28	1.31	至和通寶	5	0.23	阜宋元寶	1	0.05
嘉祐元寶	28	1.31	宣德通寶	5	0.23	大中通寶	1	0.05
嘉祐通寶	28	1.31	札元重寶	4	0.19	割読不明	209	9.78
天禧通寶	27	1.26	明道元寶	4	0.19	無文銭	15	0.70
祥符通寶	25	1.17	宣和通寶	4	0.19	合計	2,137	100.00

表73 遺構別古銭枚数一覧表

調査区	北部から中央部		中央部		南部東側		南部西側	
	村松1（2～4区）		村松2（1・9区）		村松2（8区）		村松2（5・6・8b区）	
枚数・遺構数	枚数	遺構数	枚数	遺構数	枚数	遺構数	枚数	遺構数
釜屋跡	13	21	0	0	0	0	0	0
建物跡	830	38	104	15	7	20	30	25
整地面	117	33	27	16	17	26	5	25
埋納遺構	381	0	0	0	0	0	0	0
土壇墓	67	109	71	50	0	3	0	4
その他の遺構	45	-	11	-	7	-	4	-
遺構外	295	-	92	-	3	-	11	-
合計	1,748	-	305	-	34	-	50	-

一方、調査区の南部から確認された東側の集落からは34枚、西側の集落からは45枚しか出土していない。これらの集落跡は、第Ⅲ期（16世紀後半から17世紀前半）に該当する時期である。また、第52号整地面から出土した慶長通寶は、鋳造年代が1596～1615年に限定される古銭で、この集落から出土した陶磁器とはほぼ同時期である。全国各地で発見されている埋蔵銭の時期については、13世紀中頃から16世紀中頃までのおよそ300年の間に集中しており、それ以降になると激減することが最近の出土銭調査で明らかにされている<sup>20</sup>。当遺跡から出土した古銭は、ほぼ一致する結果といえる。

次に、建物跡から確認された古銭の出土状況について触れてみたい。建物跡内の黒色土面から黒色土面

の下層にかけて、多量の古銭が散在した状態で出土していることが「村松白根遺跡1」で報告されている。中でも、第17号建物跡からは154枚、第19号建物跡からは104枚の古銭が出土している。その他、第2・6・32号建物跡では出土枚数が50枚、第4・5・11・15・21・27号建物跡では出土枚数が20枚を超えている。今回報告している第39・48号建物跡からは、それぞれ33・25枚の古銭が出土している。特に、第39号建物跡から出土した古銭は炉付近からで、火処である炉に対して何らかの意図が働いていた可能性が考えられるとする前回報告分とも共通している。

## 5 おわりに

現在の砂丘を約5m掘り下げた場所から、次々と確認された製塩跡や黒色土面に構築された建物跡などの遺構は、まさに「砂に埋もれた塩作りのムラ」といえる。また、中世から近世にかけての製塩業と製塩に携わった集落の様相を知ることのできた貴重な遺跡である。最後に、三つの文献史料について、調査成果と照らし合わせてまとめたい。

一つ目は、「村松塩竈まさき逸乱」にある製塩跡の存在である。21か所の製塩跡が確認され、その製塩に従事していた人々の建物跡から出土した土器や陶磁器類が、佐竹氏が支配していた時期と一致していることである。また、15世紀になると塩浜に対する領主の関心は高く、鹿島社の神領であった場所が次第に武家の所領となっていく時期でもある。佐竹義重も例外ではなく、1591年（天正19年）に伝書第17条の中で「船、かま諸役、如前々きふく相しらべ可申事」として、領内の製塩についても厳しく調べ釜役を納めるよう定めている<sup>20</sup>。大規模な製塩施設を構築するためには、権力を持つ支配者や人々を動かす神仏の畏敬が必要である。それが佐竹氏であり、村松虚空藏堂や村松大天宮の存在であったと考えられる。現在、村松大天宮には、境内社として鹿島神社など11の神社があるが、その中に塩竈神社も祀られている。これは、1666年（寛文6年）に水戸藩による一村一社の政策により、神仏習合の習慣を唯一神道に改め一村一社の鎮守を建立するという神社整理によって、今日に至っているものと考えられる。それ以前にあった塩竈神社の所在は不明であるが、中世から近世にかけてこの地で製塩が行われ、その心の支えや豊穡を願う場として欠かすことのできないものであったであろう。

二つ目は「千々乱風」の伝説である。今回の調査によって、人々を悩ませていた北東の大風による影響と考えられるいくつかの事実が挙げられる。建物や製塩施設を構築している黒色土は、幾層もの砂層を交えながら重なっていることである。特に、海岸線に近い製塩施設付近は、黒色土面の重なりも激しく、かなりの影響を受けていたと考えられる。また、各調査区の建物跡に注目すると、柱穴の配列から北東棟がほとんどである。これは、建物の棟向きが北東の風に対応するように建てられていたためと考えられる。さらに、この地域に吹く風は「年間を通しての卓越風が北東の風である」という佐藤次男氏による那珂湊測候所の観測資料の調査結果とも一致している。

三つ目は、「村松虚空藏堂所蔵文書」にある17名の村人たちの移住願いにある集落の存在である。南部から確認された集落跡は17世紀前半を中心としており、製塩に従事していたとみられる道具類も出土している。また、この区域から出土した慶長通寶は江戸幕府によって発行された古銭で、移住願いが出された1623年以前の製造年代である。さらに付け加えるならば、1639年に創鑄された寛永通寶は1枚も確認されていない。これらの事実から、佐竹氏移封後の水戸藩における塩役が特定の人に課せられていると仮定すれば、移住する前の集落であった可能性は高い。しかし、村松虚空藏堂から東側の海岸線までの範囲に比べて、これまでの調査区域はその一部であり、確認された集落跡がこの文書にある集落であるという確定には至っていない。

註)

- 1) 芳賀友博・寺内久水「村松白根遺跡1 大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第250集(財)茨城県教育財団 2005年3月
- 2) 茨城県史編集会『茨城県史料 中世編Ⅳ』1991年3月
- 3) a 東海村史編さん委員会「村の歴史と群像 東海村教育委員会 1991年3月  
b 東海村立図書館「東海村諸家文書史料」東海村 1996年9月
- 4) 前掲文献1に同じ
- 5) 浅川澄男・箱崎和久『埋もれた中世の住まい』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 2001年5月
- 6) 佐藤次男「伝説 千々乱風」『茨城県史研究』32 茨城県史編さん委員会 1975年8月
- 7) 東海村史編さん委員会「東海村史 通史編」東海村教育委員会 1992年10月
- 8) 江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房 2001年4月
- 9) 斉藤忠「墳墓の考古学」『斉藤忠著作選集』第4巻 雄山閣 1996年11月
- 10) 前掲文献1に同じ
- 11) 前掲文献9に同じ
- 12) 前掲文献9と同じ
- 13) 港区芝公園1丁目遺跡調査団『増上寺寺院群 光学院・貞松院跡 深淵院跡』東京都港区教育委員会 1988年3月
- 14) 櫻村宣行(仮称)水戸浄水場予完地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡『茨城県教育財団文化財調査報告』第82集(財)茨城県教育財団 1993年3月
- 15) 矢ノ倉正男「一般県道高野筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 小泉館跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第97集(財)茨城県教育財団 1995年3月
- 16) 盛峰雄ほか「九州陶磁の福年」九州近世陶磁学会 2000年2月
- 17) 瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史編Ⅳ』1993年9月
- 18) 小林克「江戸の火打石-出土資料の分析から-」『史業』50 1994年1月
- 19) 高嶋幸雄「火の道具」柏書房 1985年
- 20) 鶴見直雄「火打石を考える-遺跡出土の火打金・火打石を取り上げて-」『茨城県考古学協会誌』第11号 茨城県考古学協会誌 1999年5月
- 21) 前掲文献8と同じ
- 22) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館「越前朝倉氏・一乗谷 眠りからさめた戦国の城下町」福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館図録 2002年3月
- 23) 富士吉田市歴史民俗博物館『企画展図録 太々神楽と獅子神楽』富士吉田教育委員会 2001年8月
- 24) 舞鶴市教育委員会「引土出土銭-中世期大量埋蔵銭の調査報告-」『舞鶴市文化財調査報告第41集』舞鶴市教育委員会 2003年6月
- 25) 梅原勇『茨城製塩史の研究』常陸書房 2005年11月

#### 参考文献

- ・東海村遺跡調査会『石神城跡 -茨城県那珂郡東海村所在中世城跡の調査-』東海村教育委員会 1992年3月
- ・泉屋博古館『貨幣』財団法人泉屋博古館 1994年2月
- ・岐阜県土岐市教育委員会「元屋敷家跡地調査報告」財団法人土岐市埋蔵文化財センター 1995年3月
- ・上高津員塚ふるさと広場「埋蔵銭の物語」第2回特別展図録 出土銭から見た中世の世界 1997年2月
- ・服部敬史「内耳土銅の研究(上)」『土曜考古 第21号』土曜考古学研究会 1997年10月
- ・新谷高紀「祀・墓・霊の信仰民俗史」歴史ブックレット⑧(財)歴史民俗博物館振興会 1998年11月
- ・小野正敏ほか『図解-日本の中世遺跡』(財)東京大学出版会 2001年3月
- ・水井久美男『中世出土銭の分類図版』高志書院 2002年4月
- ・瀬戸市埋蔵文化財センター「江戸時代の瀬戸窯」財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 2002年11月
- ・瀬戸市埋蔵文化財センター「江戸時代の美濃窯」財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 2003年11月
- ・栗岡直理子「北関東の中世墓と埋葬-埼玉県の石塔を伴う埋葬について-」『中世東国の世界1 北関東』高志書院 2003年12月
- ・宇留野主視「史跡真壁城跡Ⅱ」『史跡真壁城Ⅱ-外曲輪中央部の調査概要-』真壁町教育委員会 2005年3月
- ・藤田至『日本中世の墓と葬送』吉川弘文館 2006年4月



## 付 章

1	村松白根遺跡の自然科学分析(1) .....	561
	バリノ・サーヴェイ株式会社	
2	村松白根遺跡の自然科学分析(2) .....	573
	バリノ・サーヴェイ株式会社	
3	村松白根遺跡出土遺物の <sup>14</sup> C年代測定 .....	581
	名古屋大学年代測定総合研究センター 小田寛貴、中村俊夫 高エネルギー加速器研究機構 三浦太一	
4	村松白根遺跡の人骨について .....	585
	国立歴史民俗博物館 西本豊弘	
5	村松白根遺跡出土中世人骨のDNA分析 坂平文博 .....	601
6	村松白根遺跡の動物遺体(2004年度) .....	607
	国立歴史民俗博物館 西本豊弘、浪形早季子	

## はじめに

東海村に所在する村松白根遺跡は、太平洋岸に分布する砂丘上に位置する。砂丘の背後には、久慈川と那珂川により、北縁と南縁をそれぞれ区切られた那珂台地が広がる。那珂台地の主体(上位台地A)は、下末吉海進により形成された海面により構成されているが、東端部には台地主体部の波食台を地形面とする一段低い段丘(上位台地B)が分布する(早川, 2000)。上位台地Bは、南関東における小原台面に対比されており、遺跡が位置する砂丘は、完新世において上位台地B下の海岸に広がる砂州・浜堤の砂が台地上に吹き上がって形成されたと考えられている(早川, 2000)。

村松白根遺跡の発掘調査では、建物跡や土坑、釜屋とされる遺構などが検出され、これらの遺構に伴い土師器や陶器・磁器や鉄器など多種多数の遺物が出土している。発掘調査所見では、これらの発掘成果と文献および地理的環境などから、中世から近世にかけて存在した、製塩遺構や墓跡などを含む集落跡であると考えられた。

本報告では、このような遺跡の発掘調査において提示された、遺跡の性格を考える上で生じた3つの課題について、自然科学の手法を応用した分析を行い、検討するものである。以下に各課題とそれに対する分析を述べる。

課題1: 遺構・遺物は、現地表を構成している厚さ2~5mの砂層の下位に堆積する黒色土層から検出されており、その層位は旧生活面であるとされている。黒色土には、より黒味が強くシルト質な黒色土Aとやや黒味が薄く、非常に砂質な黒色土Bの2種類が識別されており、黒色土Aは調査区内でも局所的に、黒色土Bは黒色土Aの周辺に広範にそれぞれ分布することが確認されている。さらに、黒色土Aは、分布範囲内および周辺から土坑や鹹水層、釜屋をはじめとする遺構が検出されることが多く、炭化物や貝殻等も含有することから、人為的に作られた土層であると考えられている。一方、黒色土Bについては、遺構の分布や含有物に明瞭な特徴はなく、人為か自然層かも判然としないとされている。

このような状況から、発掘調査所見では、黒色土Aおよび黒色土Bの両層についてその由来を明確にすることは、遺構・遺物の分布や遺構の構造、さらには客土である場合にはその規模に関わる重要な指標となるとした。

したがって、本報告では、黒色土の土壌理化学性および堆積環境の指標となる珪藻化石の産状を明らかにすることにより、それぞれの黒色土の由来を推定する。

課題2: 底部および側面に粘土の貼られた粘土貼土坑は、製塩過程において鹹水を貯蔵する鹹水槽である可能性があるとされている。詳細には、粘土貼土坑は、分布・規模・形状により、A・B・Cに分類され、このうち、大形とされるAについては、釜屋に付随して分布することから、屋外にある鹹水槽である可能性が高いとされている。これに対して、中形のBおよび小形のCについては、その分布から、鹹水槽以外の用途(水溜や墓坑など)もあるとされている。したがって、粘土貼土坑のA・B・C全てが鹹水槽であるか否かという問題は、製塩に関わる施設や集落の構造を考える上で非常に重要なこととなる。

本報告では、粘土貼土坑の覆土および粘土層を対象として、ナトリウムやマグネシウム等の製塩に関わる成分と炭素やリン酸など動植物に関わる成分を調べ、粘土貼土坑間および上述の黒色土とも比較を行い、鹹水槽であることの可能性について検討する。

課題3: 調査区の中央部の緩やかな斜面上で検出された畝状遺構は、5条の畝からなり、砂層の上位の黒色土層が耕作されている状況が認められている。この耕作物が明らかになれば、集落の継続期間や集落の構造に関わる重要な資料となり、さらには当時の農業生産の一端を知る資料ともなる。

本報告では、畝を構成する土壌について、花粉分析および植物珪酸体分析を行うことにより、耕作物および周辺植生に関わる情報を得、畑作の状況と環境について検討する。

## 1. 試料

課題1：Ⅱ区SH-1より採取された黒色土A、H11J6区より採取された黒色土B、さらに比較対照試料として住居跡のSI-7の床面に厚さ1cmほどで貼られたとされている黒色土(SI-7床面とする)の3点である。

課題2：粘土貼土坑AとしてSN-2、同BとしてSN-6、同CとしてSN(SK)-12の3遺構が選択された。各遺構より、覆土最下層と底部の粘土層より各1点ずつの合計6点の試料について分析を行う。

課題3：畝状遺構の畝部分から採取された試料番号4と6の2点と畝間から採取された試料番号5および比較対照試料として上述課題1の黒色土Bの合計4点を対象とする。なお、畝状遺構の試料3点と黒色土Bの土性(表1参照)はほぼ同様である。

## 2. 分析方法

### (1)土壌理化学分析

課題1および課題2の試料全点について同様の分析を行う。これは、互いに比較対照試料とするためである。分析項目は、pH、電気伝導度(EC)、リン酸吸収係数、全炭素、全硫黄、腐植形態(Melanic index)、全リン酸および水溶性ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、塩素(Cl)、硫酸(SO<sub>4</sub>)イオン濃度の各項目である。これらのうち、課題1に対しては、特にリン酸吸収係数、全炭素、全硫黄、腐植形態(Melanic index)の値が有効な指標となり、課題2に対しては、pH、電気伝導度(EC)、全硫黄、水溶性ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、塩素(Cl)、硫酸(SO<sub>4</sub>)イオン濃度の各値が指標となる。以下に分析処理過程について述べる。

pH(H<sub>2</sub>O)はガラス電極法、電気伝導度(EC)は白金電極法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法、全炭素・全硫黄は元素分析装置による乾式燃焼法、腐植形態はMelanic Indexによる簡易形態分析法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、水溶性ナトリウム、マグネシウムは水抽出-原子吸光法、水溶性塩素、硫酸イオンは水抽出-液体クロマトグラフィー法(土壌環境分析法編集委員会、1997、本名・山本、1992)でそれぞれ行う。以下に各項目の操作工程を示す。

#### 1)分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

#### 2)pH(H<sub>2</sub>O)

風乾細土10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H<sub>2</sub>O)を測定する。

#### 3)電気伝導度(EC)

風乾細土10.0gをはかりとり、50mlの蒸留水を加えて1時間振とうする。振とう後、すみやかにECメーター(白金電極法)で電気伝導度を測定する。

#### 4)リン酸吸収係数

乾土として10.0gになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸アンモニウム液(pH7.0)20mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100μlを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色a液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液(pH7.0)のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

#### 5)全炭素・全硫黄

微粉砕試料100mg前後をスズカプセルに精秤し、CHNS/O元素分析装置(PERKIN ELMER2400 II)に挿入する。挿入した試料を酸素気流中で高温燃焼させ、燃焼生成したガスをフロントルクロマトグラフ法によ

り展開し、熱伝導度検出器 (TCD) により測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの炭素量 (T-C%) と硫黄量 (T-S%) を求める。

#### 6) Melanic Index (MI)

風乾細土約1.0gを50ml容速心管に入れ、分注器で0.5% NaOH溶液約25mlを加える。速心管に蓋をしてテープで密封し、室温で1時間振とうする。振とう終了後、0.1%高分子凝集剤溶液1~2滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15分間の速心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約1mlを試験管にとり、0.1% NaOH溶液20mlを分注器で加える (NaOHの濃度は約0.1%となる)。この溶液について、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する。450nmの吸光度が1を越える場合には、さらに0.1% NaOH溶液で希釈して測定する (測定時間は抽出後、3時間以内)。結果は、MI値 =  $K450 / K520$  で表示する。

#### 7) 全リン酸

風乾細土1.00gをケルダール分解フラスコにはかり、はじめに硝酸 (HNO<sub>3</sub>) 5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO<sub>4</sub>) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液 (バナドモリブデン酸・硝酸液) 加えて分光光度計によりリン酸 (P2O<sub>5</sub>) 濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全リン酸含量 (P2O<sub>5</sub>mg/g) を求める。

#### 8) 水溶性ナトリウム、マグネシウムイオン

電気伝導度で抽出した水溶液をメンブランフィルターを用いて濾過した後、原子吸光法により各イオン濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの水溶性ナトリウムおよびマグネシウム含量 (mg/100g) を求める。

#### 9) 水溶性塩素、硫酸イオン

電気伝導度で抽出した水溶液をメンブランフィルターを用いて濾過した後、液体クロマトグラフィーにより各イオン濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの水溶性塩素および硫酸含量 (mg/100g) を求める。

#### (2) 珪藻分析

課題1の3点について分析を行う。試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する (化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、原口ほか (1998)、Krammer (1992)、Krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、Witkowski et al (2000)などを参照する。

同定結果は、海水生種、淡水~汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率20%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水~汽水生種については小杉 (1988)、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe (1995)の環境指標種を参考とする。

#### (3) 花粉分析

課題3の4点について分析を行う。試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛:比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸9:濃硫酸1の

混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

#### (4)植物珪酸体分析

花粉分析と同一試料の4点について分析を行う。湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法、重液分離法(ボリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離、濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や農耕について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の層位分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

### 3. 結果

#### (1)土壌理化学分析

分析結果を表1に示す。黒色土Aはリン酸吸収係数が1420と高く、炭素量やリン酸量も多い。ただし、腐植酸の形態はB型に分類される。一方、黒色土Bは、砂質土であり、炭素およびリン酸量が少ない。また、SI-7

表1. 土壌理化学分析結果

試料名	土性	土色	pH (H2O)	EC (mS/cm)	リン酸吸収係数 (mg/10g)	炭素含量 (%)	硫酸含量 (%)	MI	水溶性イオン (mg/100g)				
									P2O5 (mg/g)	Na	Mg	Cl	SO4
黒色土A (II区SH-1)	LiC	N1.5 黒	7.7	0.27	1420	5.42	0.01>	1.91	6.50	3.6	2.1	0.5	1.3
黒色土B (H11j)6E5)	SL	5Y2/1 黒	7.2	0.04	90	0.20	0.01>	1.81	0.57	1.2	0.5	0.1	0.8
SI-7 床面	SCL	N1.5 黒	7.7	0.19	700	2.79	0.03	1.80	3.30	1.1	0.9	0.7	1.7
SN-2 最下層	SC	5Y2/1 黒	7.8	0.11	350	0.98	0.01>	-	1.39	1.6	0.7	0.5	1.2
SN-2 粘土層	HC	7.5Y2/1 黒	7.7	0.19	720	1.28	0.05	-	1.28	3.2	1.0	0.9	4.2
SN-6 最下層	SL	5Y5/2 灰オリーブ	8.7	0.06	110	0.14	0.01>	-	0.48	1.1	0.4	0.1	0.5
SN-6 粘土層	HC	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5	0.09	810	0.41	0.03	-	0.96	2.3	0.2	0.7	1.2
SN-12 最下層	SL	5Y3/1 オリーブ黒	7.9	0.04	190	0.27	0.01>	-	0.48	0.9	0.3	0.1	0.5
SN-12 粘土	CL	2.5Y3/1 黒褐 2.5Y4/4 オリーブ褐	7.7	0.13	830	0.86	0.04	-	1.08	5.0	0.6	0.4	2.0

注: (1)土色: マンセル色表系に準じた顕微鏡土色観 (森林省農林水産技術会議編, 1967) による。

(2)土性: 土壌調査ハンドブック (パドログロソ総説会編, 1986) の野村土性による。

S.L. . . . 砂質土 (粘土0-10%, シルト0-30%, 砂45-80%)  
 CL. . . . 粘質土 (粘土15-25%, シルト20-40%, 砂3-60%)  
 S.C.L. . . . 砂質粘土 (粘土15-25%, シルト0-20%, 砂5-80%)  
 L.I.C. . . . 軽粘土 (粘土25-40%, シルト0-40%, 砂10-50%)  
 S.C. . . . 砂質土 (粘土25-45%, シルト0-20%, 砂55-75%)  
 H.C. . . . 重粘土 (粘土45-100%, シルト0-50%, 砂0-50%)

床面は、リン酸吸収係数が700と黒色土Aに比べると低いが、黒色土Bよりは遙かに高い。また、硫酸が微量含まれる一方で、MIによる腐植酸の形態はB型である。

粘土土壌の試料では、いずれの遺構においても、最下層に比べて粘土層のリン酸吸収係数が高い傾向にあり、炭素量もやや多く含まれている。また、粘土層には硫酸が僅かに含まれている。pH (H2O) は、粘土土壌の試料だけではなく黒色土も含めてアルカリ性を示す。なお、粘土土壌の粘土層と最下層では、わずかに粘土層でpHが高い傾向にある。さらに、粘土土壌試料において、電気伝導度は、最下層、粘土層ともに一般的な範囲に収まっており、各種の水溶性イオン(可溶性塩類)は全体的に少なく、特に突出する成分は認められない。

表2. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	黒色土 A ▲SH-1	黒色土 B ▲H116区	SI-7 床面
	塩分	pH	流水				
<i>Paralia sulcata</i> (Ehr.) Cleve	Euh			B	1	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh - Meh	al - il	l - ph	U	-	1	-
<i>Navicula pusilla</i> W.Smith	Ogh - Meh	ind	ind		-	1	-
<i>Navicula pusilla</i> var. <i>capitata</i> (Hust.) Lange - B.	Ogh - Meh	ind	ind		-	1	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Müller	Ogh - Meh	al - il	ind		3	-	-
<i>Achnanthes coarctata</i> (Breb.) Grunow	Ogh - ind	ind	ind	RA	-	2	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	1	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	1	-
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.) Simonsen	Ogh - ind	al - il	l - bi	N.U	2	2	1
<i>Cyclotella radiosa</i> (Grun.) Lemm.	Ogh - ind	al - il	l - bi	M.U	1	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh - ind	ind	ind	T	2	1	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh - ind	ind	r - ph	K.T	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Häse) Cleve	Ogh - ind	al - il	ind	T	1	2	-
<i>Emotia fallax</i> var. <i>gracillima</i> Krasske	Ogh - hob	ac - il	ind	RA	-	1	-
<i>Emotia</i> spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	1	1
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh - ind	al - il	l - ph	S	-	2	-
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	Ogh - hob	ac - il	l - ph		-	3	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange - Bertalot	Ogh - ind	al - il	ind		-	1	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	-	1
<i>Frustulia rhomboides</i> var. <i>saxonica</i> (Rabih.) De Toni	Ogh - hob	ac - il	l - ph	O	1	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh - ind	al - il	l - ph	O.U	-	2	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	RA.U	-	23	1
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	R.A.T	-	3	-
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnott) Hustedt	Ogh - ind	al - il	ind	R.A.T	1	2	-
<i>Navicula ignota</i> var. <i>palustris</i> (Hust.) Lund	Ogh - ind	ind	ind	RB	-	1	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh - ind	al - il	ind	R.A.S	3	30	5
<i>Navicula</i> spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh - unk	unk	ind	RA	-	-	1
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	RBS	-	-	1
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh - ind	ind	ind	RBS	-	1	-
<i>Nitzschia romana</i> Grunow	Ogh - ind	al - il	ind	U	-	1	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh - ind	ind	ind	RA	1	11	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh - ind	ind	ind	RI	-	1	-
<i>Pinnularia silvatica</i> Petersen	Ogh - ind	ind	ind	RI	-	1	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh - ind	ac - il	ind	RBS	-	1	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh - unk	unk	unk		-	1	1
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh - ind	al - il	l - ph		-	1	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh - ind	ind	ind	RB	-	1	-
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W.Smith) Hustedt	Ogh - ind	al - il	r - ph	U	-	1	-
海水生種					1	0	0
海水～汽水生種					0	0	0
汽水生種					0	0	0
淡水～汽水生種					3	3	0
淡水生種					12	100	13
珪藻化石総数					16	103	13

## 凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性

Euh : 海水生種

Ogh - Meh : 淡水～汽水生種

Ogh - hil : 貧塩好塩性種

Ogh - ind : 貧塩不定性種

Ogh - hob : 貧塩好塩性種

Ogh - unk : 貧塩不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

al - bi : 真アルカリ性種

al - il : 好アルカリ性種

ind : pH不定性種

ac - il : 好酸性種

ac - bi : 真酸性種

unk : pH不明種

C.R. : 流水に対する適応性

l - bi : 真正水性種

l - ph : 好止水性種

ind : 流水不定性種

r - ph : 好流水性種

r - bi : 真流水性種

unk : 流水不明種

## 環境指標種群

B : 内湾指標種 (小杉, 1988)

K : 中～下流性河川指標種, M : 湖沼浮遊性種, N : 湖沼沼沢地指標種, O : 沼沢湿地付着生種 (安藤, 1990)

S : 好汚濁性種, U : 広域適応性種, T : 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)

R : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群, RI : 未区分, 伊藤・堀内, 1991)

## (2) 珪藻分析

結果を表2、図1に示す。珪藻化石は、黒色土Bから産出したが、黒色土AとSI-7床面は十数個体と少なかった。完形殻の出現率約50%と化石の保存状態は良好ではない。産出分類群数は、合計で19属35種類である。

黒色土Bは、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が全体の約80%と優占する。産出種の特徴は、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica* が20~30%と多産し、同じく陸生珪藻A群の *Pinnularia borealis*、*Navicula contenta* 等を伴うことである。これらの陸生珪藻は、土壌表面に多く生育することから土壌珪藻とも言われている（Patrick, 1977）。

なお、化石の少なかった黒色土Aは、上記陸生珪藻のほかに海水生で内湾指標種群の *Paralia sulcata*、淡水~汽水性種の *Rhopalodia gibberula*、淡水浮遊性の *Aulacoseira ambigua* 等が産出している。SI-7床面は、塩分濃度の高い水域に生育するものは殆ど産出しなかったが、陸生珪藻のほかに *Aulacoseira ambigua* 等が産出している。

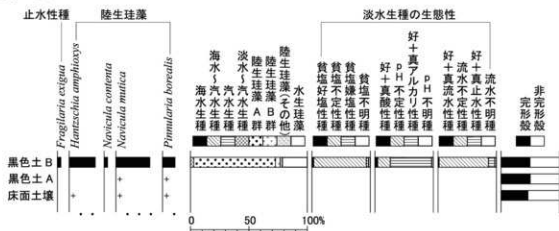


図1. 主要珪藻化石群集の層位分布

海水~汽水~淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。

いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

## (3) 花粉分析

結果を表3に示す。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。木本花粉ではスギ属、ハンノキ属、ニレ属~ケヤキ属が、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が数個体検出されただけであった。わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外膜が壊れている状態で産出していた。プレパラート内の状況写真を図版に示す。

表3. 花粉分析結果

種 類	試料番号	殻状遺構			黒色土B H11J6区
		殻	破開	殻	
木本花粉					
スギ属		-	1	1	2
ハンノキ属		1	-	-	-
ニレ属~ケヤキ属		1	-	-	-
草本花粉					
イネ科		1	-	-	1
ヨモギ属		2	-	-	-
不明花粉		2	-	-	-
シダ類胞子					
シダ類胞子		7	7	2	3
合 計					
木本花粉		2	1	1	2
草本花粉		3	0	0	1
不明花粉		2	0	0	0
シダ類胞子		7	7	2	3
総計 (不明を除く)		12	8	3	6

#### (4)植物珪酸体分析

結果を表4、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態も良好である。3点の試料からは、栽培植物であるイネ属の葉部に由来する短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出され、産出も目立つ。試料番号4では、稲穀殻に形成されるイネ属珪酸体もわずかに認められる。また、栽培種を含む分類群であるキビ属やオオムギ族も検出される。ただし、検出された植物珪酸体の形態から栽培種か否かの判別は難しい。この他には、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イネ科ギョウギ亜科、シバ属が認められ、ネザサ節やシバ属の産出が目立つ。この中には、珪化組織片として検出されるものもあり、イネ属短細胞列とネザサ節短細胞列の検出個数が多い。黒色土Bでも、畝状遺構試料と同様にイネ属やキビ属、オオムギ族が検出される。また、ネザサ節やウシクサ族、シバ属の産出が目立ち、ヨシ属、イネ科ギョウギ亜科なども認められる。

表4. 植物珪酸体分析結果

種 類	畝状遺構			黒色土 B H11j6区
	試料番号 4	試 5	試 6	
<b>イネ科葉部短細胞珪酸体</b>				
イネ族イネ属	61	14	28	26
キビ族キビ属	5	4	8	12
タケ亜科ネザサ節	54	49	41	52
タケ亜科	3	12	2	26
ヨシ属	1	4	1	4
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	6
ウシクサ族ススキ属	31	17	13	24
イネ科ギョウギ亜科オオムギ族	4	2	2	6
イネ科ギョウギ亜科	7	4	8	18
不明キビ型	37	16	22	40
不明ヒゲシバ型	10	1	4	2
不明ダンチク型	10	4	5	20
<b>イネ科葉身機動細胞珪酸体</b>				
イネ族イネ属	14	25	16	19
キビ族	6	3	6	2
タケ亜科ネザサ節	15	34	28	7
タケ亜科	3	18	5	9
ヨシ属	1	2	1	2
ウシクサ族	32	45	26	22
シバ属	54	106	44	40
不明	11	19	22	12
<b>合 計</b>				
イネ科葉部短細胞珪酸体	223	127	134	236
イネ科葉身機動細胞珪酸体	136	252	148	113
総 計	359	379	282	349
<b>珪化組織片</b>				
イネ属短細胞	2	-	-	2
イネ属短細胞列	47	7	18	17
イネ族葉部組織片	-	-	-	12
キビ族機動細胞列	-	-	2	-
ネザサ節短細胞列	16	14	17	14
ネザサ節機動細胞列	-	1	-	-
ススキ属短細胞列	4	4	3	-
ウシクサ族機動細胞列	3	3	4	-

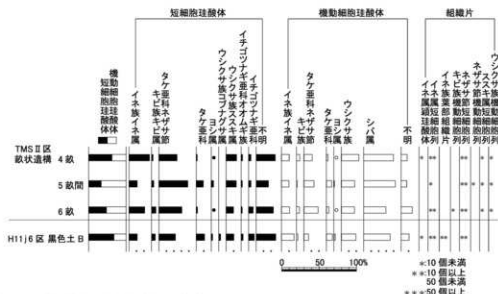


図2. 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種数を示す。また、珪化組織片と根木起源珪酸体の産状を\*で示す。



#### 4. 考察

##### (1) 黒色土の由来について

黒色土 A の特性の中で他の試料と最も異なる点は、高いリン酸吸収係数である。リン酸が多量に吸着される土壌として日本では火山灰土があげられており、1200ないし1500以上が火山灰土識別の目安とされている(庄子, 1983)。さらに、黒色土 A の土性および色調も考慮すれば、黒色土 A は砂丘背後の那珂台地表層を構成する火山灰土層最上部の黒ボク土に由来する可能性がある。これは、珪藻化石の産状が不良であったことや不良ながらも陸生珪藻を含むことと調和する。なお、海水生や淡水生が微量混在することは、黒ボク土の母材となった風成塵の中に混在していたものであろう。ところで、黒色土 A の腐植酸の形態が、一般的黒ボク土に多く見られる A 型ではない原因としては、黒色土 A が弱アルカリ土壌であることがあげられる。弱アルカリ土壌では腐植化過程が異なるために、A 型が生成しにくかったと考えられる。なお、黒色土 A が弱アルカリ土壌であることについては、海水の pH が 7.8~8.3 であることと地形的位置および後述する SI-7 床面の黒色土や粘土貼土坑覆土と粘土層の全ての試料においてほぼ同様の pH を示すことから、海水の影響によるアルカリ化であると考えられる。

黒色土 B については、砂質土であり、今回の分析結果から炭素およびリン酸量が少ないことから有機物はほとんど含まれていないことが指摘される。すなわち、黒い色調の由来は有機物ではなく、砂を構成している碎屑物に由来する可能性がある。実際に、実体顕微鏡による砂粒の観察を行ったところ、主体は石英や長石などの基本的には白色を呈する碎屑物が多いが、これに黒色を呈する安山岩と思われる円形した岩石片や輝石や角閃石などの有色鉱物粒が比較的多く混在していることが認められた。これらの暗色を呈する碎屑物により、黒色土 B の色調を黒くしていることが推定される。しかし、その一方で、黒色土 B において陸生珪藻が多産することや後述のように植物珪酸体が比較的多く検出されることは、砂丘砂の土壌化による黒色化を示唆している可能性もある。これは、炭素およびリン酸量が少ないことと整合しないが、黒色土 B が砂であることにより、これらの成分が保持されなかったと考えることができる。さらに、後述のように臥伏遺構に近接する黒色土 B から臥伏遺構と類似したイネ属等の栽培植物の珪酸体が検出されたことも、黒色土 B が耕作の対象となるような土壌であったことを示唆する。ここで、黒色土 B の黒色の由来が土壌化によるものであったとして、次に、黒色土 B がその場で土壌化したものであるか、土壌化した砂丘砂を客土として大量に散布したものであるかという問題が残る。この点については、遺跡内における黒色土 B の特徴を平面的に捉えることや、黒色土 B の上位下位の層についても情報を得ることで、比較検討することが望まれる。さらに、今後、那珂台地周縁の砂丘堆積物について広範に調査し、黒色を呈する層位と分布の状況および各所における層相を確かめる必要がある。また、同時に砂丘砂や台地を構成する砂層(那珂台地では見和層と呼ばれる海成層が開析された台地の崖に露出する(坂本ほか, 1972))などと粒径組成や碎屑物の鉱物組成を比較することも由来を推定する有効な手法になると考えられる。

黒色土の比較対照試料とした SI-7 床面は、リン酸吸収係数や炭素量では、黒色土 A とも B とも異なる。また、今回の試料全体との比較では、リン酸吸収係数と硫酸が微量含まれることにおいて、粘土貼土坑の覆土との類似性が認められる。一方で、SI-7 床面は、それらの試料に比べて炭素量およびリン酸量が多いことや MI による腐植酸の形態が B 型であることなどの違いも指摘できる。これらの結果や土性などを考慮すると、SI-7 床面と類似する特性を有する土壌は認められなかったが、SI-7 床面は黒ボク土(例えば黒色土 A)に砂(例えば黒色土 B)を混ぜ合わせたものともみることができる。今後、前述のように、本遺跡および周辺域の堆積物との比較によりさらに検討を加えることが望まれる。

以上の考察から、黒色土 A は、何らかの目的により、砂丘背後の台地から持ち込まれた黒ボク土である可能性があり、したがって、その分布と遺構の分布との関係は、遺構の性格を考える上で重要な情報の一つになり得ると考える。これに対して黒色土 B については、耕作など人為が及んだ土壌であった可能性が高いこと

が示唆されたが、それが、黒色土 A のような客土であったか否かについては、今後、遺跡内や周辺における調査例を蓄積し、比較検討する必要がある。また、SI-7床面は、黒ボク土と砂を混ぜ合わせたものである可能性が示唆された。今後の類例の調査につなげたい。

### (2)粘土貼土坑の用途・機能について

いずれの遺構においても、最下層と粘土層との間には、リン酸吸収係数、炭素量、硫黄などの値に違いが認められた。しかし、これらの違いは、粘土層とした試料が粘土（粒径上の意味での）分を多く含むことに起因するものであり、鹹水の影響とは関係しない。また、前述のように pH からは、調査区全域における海水の影響が示唆されるが、遺構ごとに異なるという評価は難しい。なお、粘土層と最下層ではわずかに粘土層で pH が高い傾向にあるが、これも最下層より多く含まれる粘土や有機物による緩衝作用によるものである。

電気伝導度については、通常は硝酸態窒素含量との間に正の相関が見られるが、臨海地においては塩素含量との相関関係が高い。各遺構の最下層、粘土層の電気伝導度は一般的な範囲に収まっていることから、遺構ごとの有意な差は認められず、過剰な塩素が集積していることを指摘することは難しい。さらに、詳細な情報を得るために各種の水溶性イオン（可溶性塩類）を測定したが、やはり可溶性塩類は全体的に少なく、塩類集積を指摘するには至らなかった。したがって、今回の分析からは、粘土貼土坑 A も含めて、それが鹹水槽であることを積極的に支持する結果を得ることができなかった。しかし、海岸砂丘という立地と数百年という時間経過を考えれば、遺構は残存しても、鹹水の痕跡は失われてしまった可能性があり、今回の分析は、粘土貼土坑が鹹水槽であったことを決して否定するものではない。

ところで、土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983；Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか, 1991；天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度であるとされている。これに従えば、今回のリン酸含量からは、いずれの遺構においても動物遺体の痕跡を支持する結果とはいえない。ただし、これについても上述の鹹水槽と同様のことが言えるため、今回の結果によって確定するものではない。

### (3) 畝状遺構について

畝状遺構の試料では、畝部分も畝間でも、黒色土 B と同様な植物珪酸体の産状が見られ、イネ属やキビ属、オオムギ族に由来する植物珪酸体や珪化組織片も検出された。土性および植物珪酸体の産状とそれぞれの採取位置を考慮すると、畝状遺構が構築された黒色土は、黒色土 B であり、黒色土 B の試料が採取された位置にはその後の時間経過により遺構が残存しなかったという可能性がある。栽培植物については、植物珪酸体の種類から、イネやキビ、ムギなどをあげることができる。ただし、黒色土 B については、前述のように客土の可能性もあることから、今回検出された植物珪酸体の一部あるいは全部の可能性もあるが、畝状遺構を作った時の耕作とは関連がないということもあり得る。これを確定するためには、黒色土 B の由来をはじめとする検討課題を解決する必要がある。

なお、花粉分析では、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。同試料で行った植物珪酸体分析の結果を見ると、植物珪酸体が豊富に産出することから、花粉が取り込まれにくかった環境とは考えにくい。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967；徳永・山内, 1971）。よって、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉、シダ類胞子が、海岸砂丘という立地とその後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。

今回の結果から植生を検討することは困難であるが、検出された花粉および植物珪酸体から、少なくとも遺跡の周囲にネザサ属やシバ属をはじめとして、ヨシ属やコブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイ

ネ科植物とヨモギ属などの草本類が生育していたことが伺え、後背の丘陵部などにスギ属が、河畔や低地などにハシノキ属、ニレ属-ケヤキ属が生育していた可能性がある。

## 文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991. 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発28-36.
- 安藤 一男, 1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- Bowen, H. J. M., 1983. 環境無機化学-元素の循環と生化学-. 浅見輝男・茅野充男(訳), 博友社, 297p.
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M., 1980. 土壤の化学. 岩田進午・三輪蓉太郎・井上隆弘・陽 捷行(訳), 学会出版センター, 309p.
- 土壤環境分析法編集委員会(編), 1997. 土壤環境分析法. 博友社, 427p.
- 土壤養分測定法委員会編, 1981. 土壤養分分析法. 養賢堂, 440p.
- 早川唯弘, 2000. 関東平野北東部-鹿島-行方隆起帯と関東平野. 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦(編)日本の地形4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会, 183-191.
- 原口 和夫・三友 清・小林 弘, 1998. 埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, 527-600.
- 伊藤 良永・堀内 誠示, 1991. 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, 23-45.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久, 1991. 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 近藤 鍊三・佐瀬 隆, 1986. 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-64.
- 小杉 正人, 1988. 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K., 1992. PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, 353p., BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1986. Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1988. Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a. Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b. Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 本名俊正・山本定博, 1992. 腐植の簡易分析法, 日本土壤肥科学会(編)土壤構成成分解析法, 博友社, 7-35.
- 大羽 裕・本名俊正, 1984. 黒ボク土判定のための腐植の分析法. 土肥誌, 55, 55-61.
- 中村 純, 1967. 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967. 新版標準土色帖.
- ベドロジスト懇談会, 1984. 野外土性の判定. ベドロジスト懇談会(編)土壤調査ハンドブック, 博友社, 39-40.
- Patrick, R., 1977. Ecology of freshwater diatoms and diatom communities. The biology of diatoms.

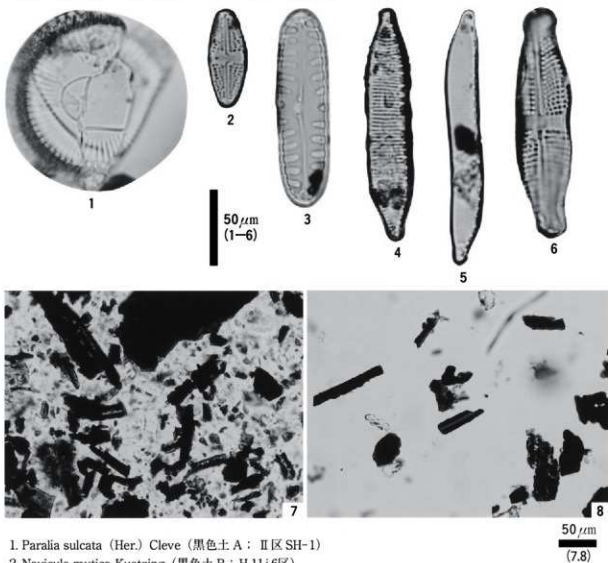
Botanical Monographs, 13, p. 284-332, Blackwell Scientific Publication, London.

庄子貞雄, 1983, 火山灰土の鉱物学的性質, 日本土壤肥糧学会(編)火山灰土-生成・性質・分類-, 博友社, 31-72.

徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

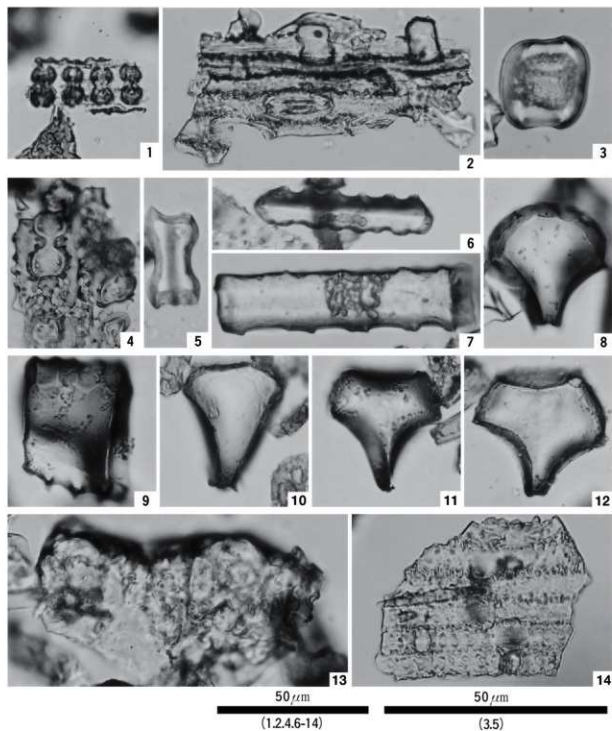
Witkowski, A., H. Lange-Bertalot, and D. Metzeltin, 2000, Diatom flora of Marine coast I Iconographia Diatomologica 7:881p., Koeltz Sci. Koenigstein.

図版1 植藻化石・花粉分析プレパラート内の状況写真



1. *Paralia sulcata* (Her.) Cleve (黒色土 A : II 区 SH-1)
2. *Navicula mutica* Kuetzing (黒色土 B : H 11j 6区)
3. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (黒色土 A : II 区 SH-1)
4. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (黒色土 B : H 11j 6区)
5. *Nitzschia brevissima* Grunow (SH-7 : 床面土壤)
6. *Achnanthes coarctata* (Breb.) Grunow (黒色土 B : H 11j 6区)
7. 状況写真 (歛部分 : 4)
8. 状況写真 (黒色土 B : H 11j 6区)

図版 2 植物珪酸体



- |                                     |                                  |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (缺部分: 4)                 | 2. ネザサ節短細胞列 (缺部分: 4)             |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (缺間: 5)                | 4. ススキ属短細胞列 (缺部分: 4)             |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体 (黒色土 B: H 11j 6区)   | 6. オオムギ属短細胞珪酸体 (缺部分: 4)          |
| 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (黒色土 B: H 11j 6区) | 8. イネ属機動細胞珪酸体 (缺部分: 4)           |
| 9. ネザサ節機動細胞珪酸体 (缺部分: 4)             | 10. ウシクサ属機動細胞珪酸体 (缺部分: 4)        |
| 11. シバ属機動細胞珪酸体 (缺部分: 4)             | 12. シバ属機動細胞珪酸体 (黒色土 B: H 11j 6区) |
| 13. イネ属類珪酸体 (黒色土 B: H 11j 6区)       | 14. イネ属葉部組織片 (黒色土 B: H 11j 6区)   |

## はじめに

東海村に所在する村松白根遺跡のⅡ区における発掘調査では、建物跡や土坑、畝状遺構などが検出され、それらに伴う多数の遺物も出土した。また、これらの遺構の分布範囲に関連するように「黒色土」とされた特徴的な土壌の分布も確認された。この発掘調査においては、1)「黒色土」の特性とその由来、2)鹹水槽とされた遺構の用途の検証、3)畝状遺構における栽培植物の検出の3課題が設定され、これらについて当社では、自然科学分析の手法を応用することにより、その検討を行った。分析結果からは、1)遺構の分布範囲と特に密接な分布を示す「黒色土A」は遺跡の背後に広がる台地上の黒ボク土が持ち込まれた可能性があるが、黒色土Aの周囲に広範に広がる「黒色土B」の由来は不明瞭であること、2)鹹水槽とされた遺構には鹹水の痕跡が残存していないこと、3)畝状遺構を構成している土壌からは、イネやキビ、ムギなどの植物珪酸体が検出されたが、畝状遺構以外の土壌からも同様の植物珪酸体が検出されたこと、などが明らかになった。

今回行われた村松白根遺跡6区の発掘調査では、Ⅱ区と同様に建物跡や土坑、そして畝状遺構が検出され、「黒色土」も認められている。本報告では、Ⅱ区における自然科学分析で課題の残された「黒色土B」の由来と、畝状遺構における栽培植物の存在について、比較対照試料を加えることなどにより検討を試みる。また、建物跡より検出された粘土貼土坑の用途・性格の検証も行う。以下に各課題について述べる。

## 1) 黒色土の由来

6区の発掘調査で認められた黒色土は、Ⅱ区と同様に建物跡などの遺構の分布と関連して分布が認められている。ただし、その色調や砂質であることなどは、Ⅱ区の黒色土Bに相当する。発掘調査所見では、6区の黒色土もⅡ区の黒色土Aと同様に持ち込まれた可能性があると考えられており、特に黒色土中から埴輪片が出土したことから、遺跡背後の台地上に分布する古墳の埴丘に用いられた土が客土されていると推定されている。今回の分析では、6区で採取された黒色土および遺跡背後の古墳の埴丘から採取された土壌について、土壌の理化学性を調べ、その比較から、黒色土と埴丘土との関連性について検討する。

## 2) 畝状遺構における栽培植物

6区で認められた畝状遺構を構成している黒色土は、上述した建物跡や作業場とされる遺構を構成している黒色土とはほぼ同様の特徴すなわち黒色土Bの外観を呈する。これらの異なる遺構間における黒色土の植物珪酸体の産状を比較することにより、畝状遺構における栽培植物の検出を試みる。

## 3) 粘土貼土坑の用途

6区の建物跡SI-1内から検出された55号および56号の2基の土坑には、底面に粘土が貼られ、「粘土貼土坑」とされた。発掘調査所見では、検出状況などから、トイレ遺構の可能性があると考えられている。ここでは、その検証を目的として、土坑最下層の覆土について寄生虫卵分析を行う。

## 1. 試料

黒色土の試料は、6区の各遺構から採取された試料番号①～⑫までの試料のうち、ここでは試料番号⑤、⑨、⑩の3点を対象とする。各試料の採取された遺構（整地面）は、試料番号⑤はHK21、試料番号⑨はHK17、試料番号⑩はHK11である。また、比較対照試料として、遺跡近隣にある古墳群の古墳の埴丘より試料A、B、Cの3点が採取されている。いずれも黒褐～暗褐色を呈するいわゆる黒ボク土であり、6区の黒色土ほど砂分は多くない。各試料の採取された古墳は、試料Aは真崎古墳群1号墳、試料Bは石上小学校内の古墳、試料Cは下ノ原古墳群である。畝状遺構の試料は、畝および畝間からそれぞれ試料番号1～7までが採取されている。また、粘土貼土坑の試料は、SI-1第55号粘土貼土坑覆土最下層の黒色土から試料D、SI-1第56号粘土貼土坑覆土最下層の黒色土から試料Eがそれぞれ採取されている。

## 2. 分析方法

### (1) 土壤理化学分析

今回の対照試料とされた古墳の墳丘の土（試料 A, B, C）は、その外観と周辺に分布する土壌から黒褐色を呈する火山灰土いわゆる黒ボク土であると考えられるから、その主な特性である、有機炭素含量、全リン酸含量、リン酸吸収係数、腐植形態の各値を求める。有機炭素はチューーリン法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法、腐植形態は Melanic Index による簡易形態分析法でそれぞれ行った（土壤環境分析法編集委員会，1997、本名・山本，1992）。

なお、ここでは、6区の黒色土のうち、比較的黑味の強く、シルト分の多い（ほとんど差はないが）試料番号⑤と⑥の2点を選択する。したがって、分析合計点数は、対照試料と合わせて5点である。以下に各項目の操作工程を示す。

#### 1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

#### 2) 有機炭素

粉砕土試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土%）を求める。

#### 3) 全リン酸

粉砕土試料1.00gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）20mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）を求める。

#### 4) リン酸吸収係数

乾土として10.00gになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸アンモニウム液（pH7.0）20mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100μlを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液（pH7.0）のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

#### 5) Melanic Index (MI)

風乾細土約1.0gを50ml容遠心管に入れ、分注器で0.5% NaOH 溶液約25mlを加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で1時間振とうする。振とう終了後、0.1%高分子凝集剤溶液1~2滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約1mlを試験管にとり、0.1% NaOH 溶液20mlを分注器で加える（NaOHの濃度は約0.1%となる）。この溶液について、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する。450nmの吸光度が1を越える場合には、さらに0.1% NaOH 溶液で希釈して測定する（測定時間は抽出後、3時間以内）。結果は、MI 値 =  $K_{450}/K_{520}$  で表示する。

### (2) 植物珪酸体分析

ここでは、畝状選播の試料から、畝の試料番号5と畝間の試料番号6の2点、上述した黒色土の試料3点の合計5点を分析する。以下に処理過程を述べる。

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリエウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や農耕について検討するために、植物珪酸体群集の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

### (3) 寄生虫卵分析

粘土貼土坑の試料の2点を対象とする。以下に処理過程を述べる。

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。

結果は、寄生虫卵については堆積物1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数を一覧表として、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として表示する。

## 3. 結果

### (1) 土壌理化学分析

分析結果を表1に示す。有機炭素量およびリン酸吸収係数において、墳丘土3点と黒色土2点との間に明確な差異が認められる。有機炭素量は、墳丘土が3～4%に対して黒色土は試料番号⑤で0.2%、試料番号⑩で0.5%程度である。リン酸吸収係数は、墳丘土はいずれも2000を越えているのに対し、黒色土は試料番号⑤で310、試料番号⑩では140しかない。全リン酸量については、墳丘土と黒色土との差異は上記項目ほど明確ではないが、墳丘土に比べて黒色土の方がやや低い傾向にある。なお、腐植酸の形態は墳丘土では試料BがA型に分類され、他の2点はB型に分類された。黒色土は、有機炭素量が微量であるため、MIの測定は不能である。

表1. 土壌理化学分析結果

試料名	採取位置	土性	土色	有機炭素 (%)	全リン酸 (mg/g)	リン酸吸収係数 (mg/100g)	MI	腐植酸の形態
A	真崎古墳群1号墳の土	LiC	10YR2/3 黒褐	4.04	1.57	2130	1.76	B
B	石神小学校内の古墳の土	LiC	10YR2/3 黒褐	3.20	2.15	2120	1.65	A
C	下ノ瀬古墳群の土	LiC	10YR4/6 褐	3.45	0.93	2200	1.94	B
⑤	HK21の黒色土	SL	2.5Y2/1 黒	0.51	1.04	310	-	-
⑩	HK11の黒色土	S	2.5Y3/2 黒褐	0.20	0.35	140	-	-

注. (1)土色：マンセル表色系に準じた表色標準土色紙（森林省森林水産技術会編製、1967）による。

(2)土性：土壌調査ハンドブック（ペドロロスト製法編、1984）の野外土性による。

S・・・砂土（粘土0～5%、シルト0～15%、砂質～100%）

SL・・・砂壤土（粘土0～15%、シルト0～35%、砂質～85%）

L1C・・・粘壤土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～35%）

### (2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出され、保存状態も良好である。以下に、各試料での産状を述べる。

#### ・建物跡や作業場跡

HK21（試料番号⑤）、HK17（試料番号⑨）、HK11（試料番号⑩）からは栽培植物であるイネ属が検出される。HK21（試料番号⑤）では、イネ属の産出も目立つ。この中には、糊殻に形成される珪酸体や葉部に形成される短細胞列も認められる。また、栽培種を含む分類群であるキビ属やオオムギ族も検出される。ただし、検



出された植物珪酸体の形態から栽培種か否かの判別は難しい。なお、これらイネ科作物を含む分類群はⅡ区の黒色土Bや畝状遺構からも検出されている。この他、チゴザサ属、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属が認められる。この中では、ネザサ節やシバ属の産出が目立つ。

#### ・畝状遺構

畝1点と畝間1点では、いずれも建物跡などの試料と同様な分類群が認められ、その産状も似ている。この中には、イネ科作物を含む分類群のイネ属、キビ属、オオムギ属も検出され、穎珪酸体や短細胞列も認められる。イネ属は特に短細胞珪酸体が建物などの試料よりも高い割合であるが、ネザサ節やシバ属よりは低い。

#### (3) 寄生虫卵分析

結果を表3に示す。いずれの試料からも、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。また、花粉化石の産出状況も悪く、試料Dで、モミ属、マツ属、シダ類胞子が数個体検出されるのみであり、試料Eは無化石であった。検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が溶解・破損しているものが多く認められた。また、いずれの試料も、分析残渣中に微細な植物片が多量に含まれていた。分析プレパラート内の状況写真を図版2に示す。

## 4. 考察

(1) 黒色土の由来について今回の分析で得られた黒色土の有機炭素量、全リン酸量およびリン酸吸収係数は、前回のⅡ区における黒色土Bの値と同程度であることから、6区の黒色土も前回の黒色土Bと類似することが確認された。黒色土と墳丘土との関連性については、結果に示された有機炭素量およびリン酸吸収係数の違いから、墳丘土が黒色土の中に混在している可能性は極めて低いといえる。特にリン酸吸収係数における甚だしい差異は、墳丘土が混入していたとしても極めて微量であることを示唆している。したがって、6区の黒色土が主に墳丘土を客土として運び入れた結果、形成されたというような状況は考え難い。6区の黒色土の黒い色調については、その低い炭素含量から、前回の報告における黒色土Bの考察でも述べ

表2 植物珪酸体分析結果

種 類	採取位置			畝 4	畝間 5
	試料名	⑤	⑥		
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	84	9	12	34	43
キビ族キビ属	11	17	8	5	8
キビ族チゴザサ属	9	7	1	-	2
タケ亜科ネザサ節	66	37	48	39	66
タケ亜科	17	14	38	-	7
ヨシ属	5	2	4	4	3
ウシクサ族ススキ属	59	42	7	14	16
イチゴツナギ亜科オオムギ族	6	3	3	-	1
イチゴツナギ亜科	4	8	4	1	3
不明キビ型	38	19	22	13	6
不明ヒゲシバ型	9	7	2	1	1
不明ダンチク型	11	3	20	10	4
イネ科葉身機械細胞珪酸体					
イネ族イネ属	15	8	5	20	22
キビ族	-	-	4	2	5
タケ亜科ネザサ節	5	9	34	37	44
タケ亜科	11	12	26	16	14
ヨシ属	4	3	3	8	3
ウシクサ族	20	28	44	27	35
シバ属	47	75	63	119	187
不明	12	10	16	12	6
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	320	168	169	121	160
イネ科葉身機械細胞珪酸体	114	145	195	241	316
総 計	434	313	364	362	476
珪化組織片					
イネ属短細胞	3	1	5	3	3
イネ属短細胞列	77	10	11	29	39
キビ属短細胞列	3	2	2	1	3
チゴザサ属短細胞列	3	-	-	-	2
キビ属機械細胞列	-	-	4	1	2
ネザサ節短細胞列	46	33	10	21	48
ネザサ節機械細胞列	2	-	5	3	7
ススキ属短細胞列	12	12	7	-	-
ウシクサ族機械細胞列	2	8	-	10	8

表3 寄生虫卵分析結果

種 類	試料名	
	D	E
寄生虫卵		
寄生虫卵 [個/cc]	0	0
本本花粉		
モミ属	1	-
マツ属	4	-
シダ類胞子		
シダ類胞子	4	-
合 計		
本本花粉	5	0
草本花粉	0	0
シダ類胞子	4	0
総 計	9	0

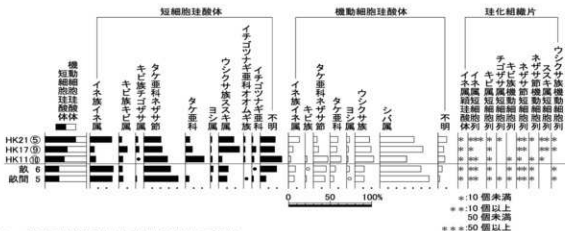


図1. 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は10%未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の産状を\*で示す。

たように、植物遺体や高植などの有機物を主たる由来とするものではないと考えられる。ただし、前回の報告では、黒色の由来を安山岩岩片や有色鉱物に求めたが、明るい色調を呈する調査区内の砂と比べたところ、これらの碎屑物の割合が黒色土において特に多いということとはなかった。この比較において、明るい色調を呈する砂と黒色土との最も顕著な違いは、シルト径以下の微細な碎屑物の割合であった。すなわち、黒色土は基本的には土壌というよりも砂であるが、それでも、明るい色調を呈する調査区内の砂と比べると、黒色土にはシルト径以下の微細な碎屑物の多いことがよくわかる。シルト径以下の微細な碎屑物は、砂粒径の主体をなす石英や長石の色に比べれば、一般に暗色を呈しており、さらに、砂粒径の石英や長石も表面がこれらの微細な碎屑物に覆われることにより暗色となる。さらに、シルト径以下の碎屑物が多い場合には水分も加わって、堆積物はより暗色となる。また、上述したように有機物は黒色の主たる要因ではないが、シルト径以下の微細な碎屑物の中には微細な植物片なども含まれており、これらも暗色の要因となり得る。このことは、今回の分析において、黒色と黒褐色という色調の違いが見られる試料番号⑤と試料番号⑥との間に、有機炭素量のわずかな差が認められることから示唆される。黒い色調がシルト径以下の微細な碎屑物に由来するとした場合、次の課題として、そのような微細な碎屑物を含有する原因があげられる。これを検討するためには、前回の報告でも述べたことであるが、那珂台地周縁の砂丘砂および海浜砂について、黒色土Bに類似した層相の堆積物の有無を確認し、その平面的な分布や層位的な分布を把握する必要がある。例えば、その平面分布が、村松白根遺跡だけではなく、他の場所においても何らかの遺構の分布と関連するとすれば、人為による砂の土壌化という成因が考えられ、また、ある特定の層位において分布するような場合は、環境変化による土壌化ということも考えられる。いずれにしても、今後は砂丘砂および海浜砂さらには台地を構成する砂層（那珂台地では見和層と呼ばれる海成層が開析された台地の崖に露出する（坂本ほか、1972））も含めて、その粒径組成や碎屑物の鉱物組成を比較することが、黒色土の由来を推定する有効な手法になると考えられる。

## (2) 畝状遺構について

6区で検出された畝状遺構では、イネ科作物を含む分類群のイネ属、キビ属、オオムギ族が検出されたが、黒色土Bに相当する建物跡などの土壌からも同様な種類が認められた。また、畝状遺構の土壌におけるイネ属、キビ属、オオムギ族の割合が特に高率とも言えない。この結果は、前回調査したⅡ区の畝状遺構の土壌と黒色土Bとの分析結果と同様といえる。したがって、今回の調査においても、畝状遺構でこれらのイネ科作物を含む分類群が栽培されていたということを積極的に支持する結果とはならなかった。本遺跡での栽培植物については、耕土中に植物珪酸体が残留しない作物（例えば、マメ類やイモ類）も視野に置き、土壌の洗い出しに

よる植物遺体の調査および炭化種実や炭化物の調査も行うことが望まれる。

なお、植物珪酸体の産状からは、遺跡の周囲にネザサ節やシバ属をはじめとして、ヨシ属やコブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ重科などのイネ科植物などの草本類が生育していたことがうかがえる。前回の調査ではⅡ区でも同様な産状が見られており、Ⅱ区からⅥ区にかけて、これらの草本類が生育していたと思われる。

### (3) 粘土土壌について

Ⅵ区の建物跡であるSI-1より検出された55号および56号粘土土壌の覆土最下層の試料からは、寄生虫卵は1個体も検出されなかった。トイレ遺構の検証例については、福岡県の鴻臚館跡や石川県の大宮坊跡で報告されており、 $1\text{ cm}^3$ あたり1万~数万個の寄生虫卵が検出されている(金原・金原, 1994; 金原ほか, 1995a)。また、 $1\text{ cm}^3$ あたり100個未満については、ある程度の人口密度を持つ集落による汚染の範囲内とみなされている(金原ほか, 1995a, b)。これらの分析例と比較すると、今回の粘土土壌がトイレであったとはいえない結果である。

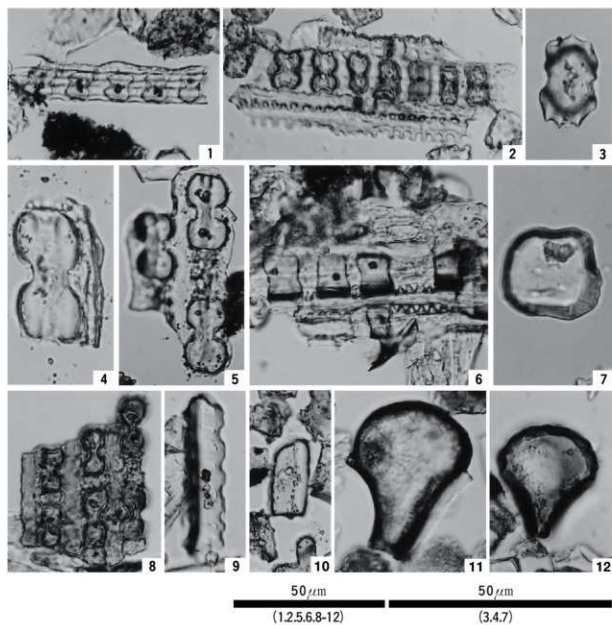
ただし、今回の試料では花粉化石の産出状況も不良であった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971)。寄生虫卵の分解に対する抵抗性は花粉化石と同程度とされていることから(黒崎ほか, 1993)、寄生虫卵も分解されている可能性がある。すなわち、今回の分析結果は、トイレ遺構であったことを完全に否定するものではない。

なお、トイレ遺構の検証については、寄生虫卵分析の他に、1) 食物残渣(可食植物の種実遺体、骨など)の産出、2) 昆虫遺骸の産出、3) 脂肪酸分析(コプロスタノールなどの多産)、4) 珪藻分析(海産物付着種などの多産)などの複数の分析項目を用いる方法も有効な場合がある。今後もさらに検討を重ねるとすれば、これらの手法を用いることも考えたい。

## 引用文献

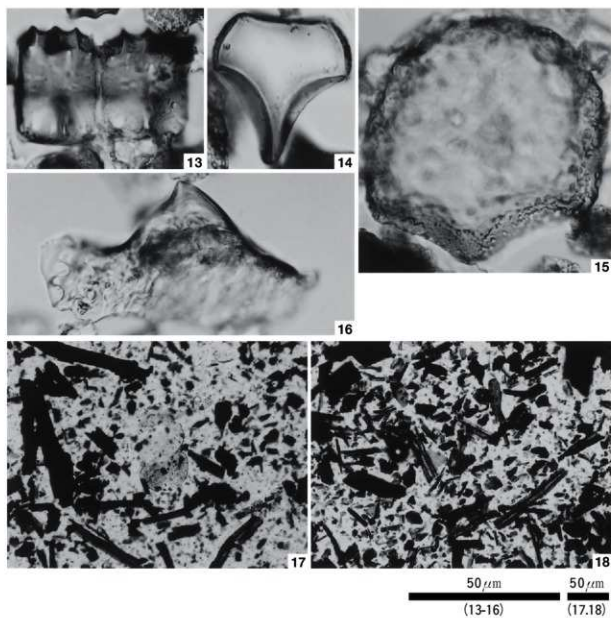
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法, 博友社, 427p.
- 金原 正明・金原 正子, 1994, 鴻臚館跡の土坑(便所遺構)における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析, 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第372集 鴻臚館跡4, 福岡市教育委員会, 25-38.
- 金原 正明・金原 正子・中村 亮仁, 1995a, 大宮坊跡(厩跡)における自然科学的分析, 史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ, 石川県鹿島町教育委員会, 51-70.
- 金原 正明・金原 正子・中村 亮仁, 1995b, 川合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析, 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第63集 川合遺跡 八反田地区Ⅱ 本文編, 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 341-354.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究, ベドロジスト, 48, 46-64.
- 黒崎 直・松井 章・金原 正明・金原 正子, 1993, 糞堆積物の分析 - 特に寄生虫卵分析について -, 日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, 115-115.
- 本名俊正・山本定博, 1992, 腐植の簡易分析法, 日本土壌肥科学会編, 土壌構成成分解析法, 博友社, 7-35.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- 大羽 裕・本名俊正, 1984, 黒ボク土判定のための腐植の分析法, 土肥誌, 55, 55-61.
- ベドロジスト懇談会, 1984, 土壌調査ハンドブック, 156p.
- 坂本 亨・田中啓策・曾屋龍典・野間泰二・松野久也, 1972, 那珂湊地域の地質, 地域地質研究報告(5 万分の1図幅), 地質調査所, 94p.
- 徳永 重元・山内 輝子, 1971, 花粉・胞子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

図版1 植物珪酸体(1)



- |                            |                         |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (HK 21 : ⑤)     | 2. イネ属短細胞列 (歛 : 6)      |
| 3. チゴサザ属短細胞珪酸体 (HK 21 : ⑤) | 4. キビ属短細胞珪酸体 (歛間 : 5)   |
| 5. キビ属短細胞列 (HK 11 : ⑩)     | 6. ネザサ節短細胞列 (HK 21 : ⑤) |
| 7. ヨシ属短細胞珪酸体 (HK 11 : ⑩)   | 8. ススキ属短細胞列 (HK 21 : ⑤) |
| 9. オオムギ属短細胞珪酸体 (HK 21 : ⑤) | 10. オオムギ属短細胞珪酸体 (歛 : ⑥) |
| 11. イネ属機動細胞珪酸体 (HK 21 : ⑤) | 12. イネ属機動細胞珪酸体 (歛 : ⑥)  |

図版2 植物珪酸体(2)・寄生虫卵分析プレパラート内の状況写真



13. イネザサ節機動細胞列 (飲:6)

14. シバ属機動細胞珪酸体 (飲:6)

15. ヨシ属機動細胞珪酸体 (HK 11:㊸)

16. イネ属穎珪酸体 (HK 11:㊸)

17. 状況写真 (資料 D)

18. 状況写真 (資料 E)

## 村松白根遺跡出土遺物の<sup>14</sup>C年代測定

名古屋大学年代測定総合研究センター 小田寛貴・中村俊夫  
高エネルギー加速器研究機構 三浦太一

### 1. はじめに

村松白根遺跡は、高エネルギー加速器研究機構 (KEK) と日本原子力研究開発機構 (JAEA) による大強度陽子加速器計画 (J-PARC: Japan Proton Accelerator Research Complex) における施設建設にともなって発見された遺跡である。茨城県那珂郡東海村大字村松字白根に位置するこの遺跡からは、中世後半以降の釜屋跡・鹹水槽などの大規模な揚浜式製塩跡と、それにとまう建物跡・畝状遺構・土壌墓などの集落跡が検出されている。

本研究では、村松白根遺跡の使用されていた時期を明らかにすることを目的とし、出土した遺物について、加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) による<sup>14</sup>C年代測定を行った。

### 2. 測定資料

測定に供した資料は表1に示したとおり、ワラ状炭化物1点・木炭1点・炭化材2点、また、内耳土器に付着した炭化物2点の計6点である。なお、第2号製塩跡のワラ状炭化物 (No.1) は、炭化材 (No.3) の周囲より出土したものである。

表1. 測定資料

資料No.	出土遺構	種類	備考
1	2区、第2号製塩跡釜屋 (SH2)	ワラ状炭化物	No.3の炭化材の周囲より出土
2	2区、第2号製塩跡釜屋 (SH2)	木炭	
3	2区、第2号製塩跡釜屋 (SH2)	炭化材	年輪の最外部付近より採取
4	2区、第2号製塩跡釜屋 (SH2) 北側	炭化材	年輪の最外部付近より採取
5	2区、第37号建物跡	内耳土器付着炭化物	外面・胴部より採取
6	1区、第49号整地面	内耳土器付着炭化物	外面・口縁部-胴上半部より採取

### 3. <sup>14</sup>C年代測定

試料調製法は、各資料の種類と状態に応じて若干異なるが、おおむね以下のとおりである。

土器付着炭化物以外の資料については、まず蒸留水中での超音波洗浄 (60分, 2回) を行った後、1.2N 塩酸 (HCl) による処理 (60-70℃, 1-10時間, 6回), 1.2N 水酸化ナトリウム (NaOH) による処理 (60-70℃, 1-10時間, 8回) に供した。再度1.2N HCl での処理 (60-70℃, 1-10時間, 6回) を行い、蒸留水で洗浄した。真空デシケーター中で乾燥させた後、約8.5mgの試料を約650mgの酸化銅 (II) とともにガラス管 (バイコール管) に入れ、真空中に封入した。

土器付着炭化物については、1.2N HCl による処理 (60-70℃, 1-10時間, 6回) の後、0.2N NaOH (室温, 1時間, 2回), 1.2N NaOH (60-70℃, 1-2時間, 5回) での処理を行った。1.2N HCl による処理 (60-70℃, 1-10時間, 6回) の後、脚に石英綿をつめた漏斗を用いてこれを濾別し、蒸留水で洗浄した。得られた試料を石英綿ごとバイコール管に押し出し、乾燥 (80℃, 2日) させた後、約650mgの酸化銅 (II) を加えて真空中に封入した。

バイコール管中の試料を、850℃で3時間加熱することでCO<sub>2</sub>に変換した。このCO<sub>2</sub>を、真空ライン中でエタノール (約-100℃), n-ペンタン (-130℃), 液体窒素 (-196℃) といった冷媒を用いて精製し、その2倍の水素および約1.5mgの鉄粉とともに、再度バイコール管に封入した。この管の下端部を650℃で6時間加熱することで、グラファイト (黒鉛) を合成した。

調製されたグラフアイトをターゲットとして、タンデム加速質量分析計（オランダ、High Voltage Engineering Europe 社製）による<sup>14</sup>C年代測定を行った。測定は、同一の試料について三回繰り返し行って行った。同位体分別効果の補正には、加速器質量分析計によって測定された<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比を用いた。また、校正曲線 INTCAL.98 (Stuiver et al., 1998) によって、<sup>14</sup>C年代を暦年代へ換算した。<sup>14</sup>C年代という自然科学的の年代にもとづいて得られる暦年代は、通常の暦年代と区別するために、「校正年代」と表現し、その単位には校正 (calibration) の意を含む [cal AD] ないしは [cal BC] が用いられる。

図1は、311±27 [BP] という<sup>14</sup>C年代を暦年代に校正した例を示したものである。図中の縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年代であり、両年代の関係を示す折れ線が校正曲線である。三本の横線のうち中央のものが<sup>14</sup>C年代の中央値311 [BP] を、上下の二本が誤差の両限を示す。これら横線と校正曲線の交点から横軸に垂線をおろすことで校正年代が求められる。<sup>14</sup>C年代の中央値311 [BP] は、1530, 1547, 1634 [cal AD] という三つの暦年代に対応し、誤差の両限は1519, 1594, 1622, 1642 [cal AD] に換算される。すなわち、

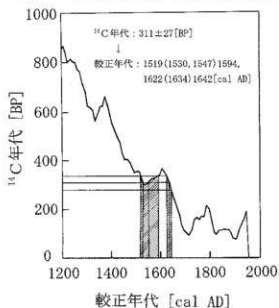


図1. 暦年代校正の例

311±27 [BP] という<sup>14</sup>C年代は、1519~1594 [cal AD] または1622~1642 [cal AD] に対応し、1530, 1547, 1634 [cal AD] が最も確率の高い年代となる。<sup>14</sup>C年代を暦年代に校正した際には、このように複数の暦年代が候補として挙がる場合がある。なお、本稿では、<sup>14</sup>C年代の中央値を校正した結果を ( ) の内側に、誤差の両限を校正した結果を ( ) の外側に示すものとした。すなわち、311±27 [BP] の校正結果は、1519 (1530, 1547) 1594, 1622 (1634) 1642 [cal AD] と表記するものとした。

表2には、各試料について測定された三つの<sup>14</sup>C年代と平均値、およびそれらの校正年代を示した。1σ (1標準偏差) の値を測定誤差に付したが、平均値については2σの値も併せて記載した。また、校正年代については図2にも示した。

表2 測定結果

資料 No.1 村松白根遺跡2区第2号製塩跡釜屋出土ワラ炭灰化物 (No.3の炭化材の周囲より出土)

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	校正年代 [cal AD]
1	282±29	1530 (1546, 1634 (1642) 1651
2	304±30	1521 (1533, 1539) 1587, 1625 (1636) 1644
3	325±32	1492 (1524, 1562) 1602, 1611 (1629) 1639
av. ±1σ	304±18	1525 (1534, 1538) 1559, 1630 (1636) 1641
±2σ	±35	1519 (1534, 1538) 1594, 1622 (1636) 1646

資料 No.2 村松白根遺跡2区第2号製塩跡釜屋出土木炭

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	校正年代 [cal AD]
1	352±29	1480 (1495, 1497, 1514) 1525, 1539 (1600, 1615) 1630
2	317±32	1516 (1527, 1553) 1599, 1616 (1632) 1641
3	309±32	1518 (1531, 1544) 1595, 1621 (1635) 1643
av. ±1σ	326±18	1517 (1523) 1532, 1542 (1563) 1597, 1619(1628) 1635
±2σ	±36	1489 (1523, 1563) 1605, 1606 (1628) 1640

資料 No.3 村松白根遺跡 2 区第 2 号製塩跡釜屋出土炭化材

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	校正年代 [cal AD]
1	329±28	1492 (1523, 1568) 1602, 1611 (1627) 1637
2	299±31	1522 () 1575, 1627 (1638) 1646
3	337±32	1486 (1520) 1533, 1539 (1589, 1624) 1636
av. ± 1σ	321 ± 17	1519 (1525) 1534, 1537 (1558) 1593, 1622 (1630) 1637
± 2σ	± 35	1491 (1525, 1558) 1602, 1610 (1630) 1641

資料 No.4 村松白根遺跡 2 区第 2 号製塩跡釜屋北側出土炭化材

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	校正年代 [cal AD]
1	385±28	1451 (1479) 1493, 1601 () 1612
2	402±37	1442 (1466) 1489, 1604 () 1607
3	373±31	1454 (1484) 1518, 1595 () 1621
av. ± 1σ	387 ± 19	1453 (1478) 1489, 1604 () 1606
± 2σ	± 37	1445 (1478) 1517, 1597 () 1618

資料 No.5 村松白根遺跡 2 区第37号建物跡出土内耳土器付着炭化物

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	校正年代 [cal AD]
1	396±30	1445 (1472) 1489, 1604 () 1607
2	344±26	1485 (1518) 1527, 1553 (1596, 1620) 1632
3	393±38	1444 (1475) 1494, 1504 () 1506, 1600 () 1613
av. ± 1σ	377 ± 18	1471 (1482) 1492, 1602 () 1611
± 2σ	± 37	1449 (1482) 1520, 1590 () 1624

資料 No.6 村松白根遺跡 1 区第49号整地面出土内耳土器付着炭化物

測定回数	<sup>14</sup> C年代 [BP]	校正年代 [cal AD]
1	317±30	1516 (1527, 1534) 1598, 1618 (1632) 1640
2	294±29	1524 () 1561, 1629 (1639) 1647
3	331±31	1489 (1522, 1577) 1604, 1607 (1626) 1638
av. ± 1σ	314 ± 17	1521 (1528, 1550) 1581, 1626 (1633) 1638
± 2σ	± 35	1515 (1528, 1550) 1599, 1616 (1633) 1643

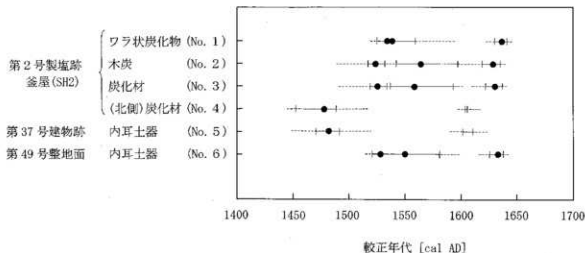


図2 出土遺物の校正年代 (実線は 1σ, 破線は 2σ の誤差範囲を示す。)



#### 4. 考察

村松白根遺跡第2区第2号製塩跡の釜屋（SH2）より出土した遺物（資料No.1~3）の較正年代は、16世紀から17世紀前半にかけての値を示している。

資料No.1は生育期間の短い植物の炭化物であり、その較正年代は釜屋の使用されていた時期を示すものと考えられる。すなわち、16世紀から17世紀前半、そのなかでも特に1520~1560年頃もしくは1630~1640年頃に使用されて可能性が高いと結論付けることができる。この結果に対して、同じく釜屋より出土した木炭・炭化材の較正年代も誤差内で一致した結果を示している。但し、一般に、樹木片や炭化物などの木製資料について得られる較正年代は、それが歴史の中で何らかの役割を持った道具として使用された年代よりも古い値を示す。測定に供された資料が木材の心材部であれば、その<sup>14</sup>C年代は伐採年代よりも古い年代を示すことになるのである。いわゆる old wood effect とよばれる現象である（Oda et al., 2004）。それゆえ、資料No.2, 3の較正年代は、厳密には木炭や材が利用された年代を直接示すものではない。しかし、これらは、確認された年輪の最外部付近より採取された試料であり、廃材などではない限り old wood effect による年代のずれは大きくとも数十年程度と考えられるため、資料No.1の測定結果を支持するものであると見てよいであろう。

釜屋の北側より出土した炭化材（資料No.4）は15世紀後半もしくは17世紀初頭という較正年代を示している。old wood effect を考慮すると、この木材は釜屋の使用されていた年代と同時期かもしくは少し以前のものであると考えられる。

資料No.5, 6は、内耳土器に付着していた煤であり、煮炊きの燃料由来の炭化物である。煮炊きには生育期間の短い木の枝などが主に用いられたとすると、この較正年代はそれぞれの土器が使用された年代を示しているものと考えられる。

東海村の村松・照沼、ひたちなか市の長砂・馬渡・阿字ヶ浦といった地域に伝わる「千々乱風伝説」と東海村村松虚空藏堂所蔵文書・ひたちなか市馬渡飛田喜久馬家所蔵文書などの文献についての研究から、室町時代から江戸時代初期にかけて、この地に人々が居住し製塩を行っていたことが指摘されている（佐藤, 1975）。本研究において得られた遺物の<sup>14</sup>C年代も、15世紀後半から17世紀前半の範囲にあり、この指摘と符合する結果を示している。

本稿は、主に<sup>14</sup>C年代測定という自然科学の側面のみから、出土遺物の年代について考察を加えたものである。今後、遺構の出土状況、土器の型式・様式、村松白根遺跡の南に位置する他の揚浜式製塩遺跡（沢田遺跡・長砂渚遺跡）との関係といった考古学の情報、また千々乱風伝説に関する民俗学の情報、村松虚空藏堂所蔵文書などについての文献史学からの情報、これらと合わせてより詳細な議論がなされることを期待したい。

#### 参考文献

- Oda, H., Nakamura, T. and Tsukamoto, T. (2004) Radiocarbon dating of the sutra container excavated at Minagi Daibutsuyama site, Fukuoka Prefecture, Japan. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223-224, 686-690.
- 佐藤次男 (1975) 伝説千々乱風. 茨城県史研究, 第32号, 42-61.
- Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Back, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plicht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40(3), 1041-1083.

## はじめに

村松白根遺跡の2003・2004年度の発掘調査で185体の人骨が出土した。それらの人骨の出土状況や年齢・性別などについては、寺内久永氏により出土地点ごとに別の項ですでに述べられている。ここでは、それらの人骨の持つ意義についてまとめた。

江戸時代の人骨は各地で多量に出土しており、人骨の形質に関する研究も行われている。その中で、この遺跡の人骨は16世紀から17世紀初頭までの比較的短い期間の一つの村の墓から出土したことから、人骨の保存状態が極めてよいことが特徴である。そのため、これらの人骨を調査することによって、当時の生活を考える上で貴重なデータとなることが予測された。たとえば、人骨の出土状態を見ると、まとめて出土している地点があり、その地点の人骨群が1家族であるのか、または1時期の流行病による死者などの要因が考えられた。そこで、人骨の形態から推測される年齢・性別だけではなく、人骨の親族関係を考える方法の一つとして、古DNA分析を行うこととした。ただし、古人骨で実施できるのは古ミトコンドリアDNA分析であるため、母系しか分からないという欠点がある。DNA分析は坂平文彦氏が分担し、その分析結果は付編として掲載した。これらのDNA分析の結果なども考慮して、この人骨群の考古学的な意味を検討した。

なお、本論で用いるデータの整理や写真撮影には浪形早季子・小林園子・太田敦子・成田裕氏の協力を得たことに感謝いたします。

## 1. 人骨の内容

2003・2004年年度に出土した人骨の一覧表を示し、その性別と年齢構成を表とグラフにまとめた(表1~4、図1~3)。人骨の性別は、成人の場合は寛骨の大坐骨切痕の角度を第1の基準とし、この部位がない場合は眼窩上隆起を観察して決定した。少年期以前のは性別判断を行っていない。年齢の区分は、乳歯か永久歯かどうかと、永久歯の磨耗の程度から推定した。従って、成人骨の年齢の細分は筆者の観察所見である。

### a. 年齢構成

これらの人骨の観察を通じて最も強く印象づけられたことは、表3と図1で示したように、未成人の死亡率が64%と高いことであった。その中でも1歳前後以下の乳幼児の死亡率が58%と高い。もともと、近代以前の社会では乳幼児や未成人の死亡率が高いことは一般的に知られていることであり、この遺跡の死亡率は、これらのデータとはほぼ同じである(図2・3)。この遺跡の未成人や乳幼児の死亡率の高さは、16世紀から17世紀の地方村落での育児事情を示しているであろう。

### b. 性別

この遺跡の人骨では、青少年以上の個体で頭蓋骨と寛骨の残っている個体について性別の判定を行った。その結果、男性36体・女性23体となった。性別不明の成人骨は7体であった。男性が多いが、性別の分からない成人骨も多いので、この割合が当時の人口の割合を示すものかどうかは分からない。むしろ、乳幼児が多いことから、この遺跡で成人女性が多く生活していたことは確かである。その点から言えば、男性が多かったとしても、男女比は人骨の性差で表わされる数字ほどの差異はなかったと思われる。

### c. 形質的特徴

この遺跡の人骨群を観察していた時、骨格のたくましい人が多い印象を受けた。男性だけではなく女性人骨でも、上腕骨や尺骨・橈骨が太く筋粗面がよく発達していた。大腿骨や脛骨も同様である。そのため、女性と判断される個体であっても、四肢骨だけを見ると男性かと思われる個体が多かった。男女ともに老年になるまで厳しい肉体労働を行っていたと想像される。

頭蓋骨では、男女ともに顔が丸く額から上が短い低顔である。女性も低顔でたくましいために頭蓋骨だけでは男性かと疑うほどである。江戸時代人骨では低顔が多いことはよく知られている。しかし、この遺跡の人骨にも低顔が多く見られたことにより、日本の庶民に低顔が多くなる現象は、江戸時代よりもかなり前から現れた特徴であろう。

## 2. 考古学的考察

### a. 墓地の時間的変遷

2003年度の発掘調査の段階で、人骨の出土地点にまとまりがあることが調査員には認識されていた。そこで、人骨の出土地点を記載し、それをまとめてみると、図5に示したように、人骨の出土地点すなわち墓がまとまっていることが明らかになった。それらの墓のまとまりがどのような意味を持つものかを検討するために、群ごとに人骨の内容をまとめてみた。そこで、A群からE群までの5グループを設定して、その中の人骨の性別と年齢別の内容を表にまとめた。それによると、A群は男性老年2体と女性老年1体・乳幼児6体であった。B群は男性老年1体・女性青年1体・少年1体・乳幼児7体であった。A・B群ともに乳幼児が多く成人が少ないことが特徴で、1家族の1～2世代の墓の可能性が高い。C群は、男性老年1体・男性熟年1体・男性壮年5体・女性壮年2体・女性青少年1体・乳幼児12体であり、1家族の1世代の墓としては多すぎるので、複数家族の可能性が高い。D・E群については、D群が女性老年2体・男性熟年3体・少年1体・乳幼児21体、E群が男性老年1体・男性熟年3体・女性熟年1体・乳幼児12体・成人1体と多いので、複数家族の共同墓地と思われる。A・B・C群の墓は、遺体の埋葬位置の標高差が1メートル以上認められるが、墓以外の遺構がないので、当時は墓地として認識されていたことは間違いない。D・E地点の墓地については、住居や作業場などの遺構と同じ地点に作られており、遺構と遺構の間で出土した遺体もあったという。その点から言えば、D・E群の墓地は、墓域として認められていた場所であったとしても、A群からC群とは異なった共同墓地の意味を持っていた可能性も考えられる。そこで、これらの人骨群で、血縁関係があるのかどうか古ミトコンドリアDNA分析を行った。

### b. DNA分析から見た人骨の親族関係

坂平文彦氏による人骨の古ミトコンドリアDNA分析の結果は、別項にまとめられているとおりである。その内容を見ると、DNAが抽出・分析された41個体に見られたDNAのハプロタイプは22であり、大部分が1～2個体であった。その中でハプロタイプ10が8個体、タイプ16が7個体と多く含まれていた。ミトコンドリアDNAは母系を示すので、この遺跡の人骨群に含まれるハプロタイプが多いことは、この人骨群には母親を異にする人が多いことを示している。一般的に、一つのグループでハプロタイプが多く、また一つのハプロタイプに属する人数が少ないことは、人の出入りが多い「都市型」と考えられる。その点から見ると、この村が特定の家族を中心に生活した閉鎖的集落ではなく、人の入れ替わりが激しい都市的性格をもっていたと推測される。

しかし、ハプロタイプ10と16は、8人と7人が含まれていたで、当時の鎌倉のような都市型とはいえない。そこで、ハプロタイプ10と16がどのように分布するかを見ると、ハプロタイプ10は、前項の墓のグループのE群に3個体・B群とC群に1個体・その他の地域3個体であった。タイプ16の7個体は、C群に3個体・C群の北側に1個体、D・E群に1個体ずつ、その他1個体となった。このように見ると、ハプロタイプ10がE群の中心的母系でハプロタイプ16がC群の中心的母系であった可能性が高い。すなわち、41個体の中での推定ではあるが、少なくともハプロタイプ10と16の二つの母系がこの村の中心的な血縁グループであったと推測される。

以前、筆者は茨城県の取手市中妻貝塚出土人骨と千葉県茂原市下太田貝塚人骨の古ミトコンドリアDNA分析を行い、縄文時代の村が母系を中心に構成されていることを指摘したことがある。中世から近世の村松白根遺跡とは時間も空間も異なるが、少なくともこの遺跡の人骨群に見られる母系の血縁関係の少なさは、この村が閉鎖的な村ではないことを示している。それと同時に、仮にAからEまでの墓域に区分した場合、C群とE群では一つの母系が中心となっていることが分かった。さらにA群とB群も、人骨の内容から1家族の墓の可能性が高い。墓D群についても、集中して墓が作られていることから、複数の家族の墓地として意識されていたことは間違いない。仮に想定したこれらの墓群の他にも、墓が集中して設けられている場所があり、それらも家族単位の墓の可能性もある。DNA分析の結果は、墓の集中と塩作りおよびその流通にかかわる村ではないかという考古学的所見と矛盾はしていない。

## まとめ

筆者は、人骨群を観察するためにこの遺跡を訪れたとき、人骨群がまとまって出土していることから、このまとまりは家族を示すのではないかと考えた。また、人骨の保存状態の良さと乳幼児の多いことに驚いた。そこで、人骨群の内容をより詳しく調べるために、古ミトコンドリアDNA分析を実施した。その結果、多くのハプロタイプが見られることが分かり、様々な家系の人々が生活していたことが分かった。当時の婚姻関係が父系の嫁入り婚であったのかどうかなどは分からないが、母系のつながりのある家族墓とみなされる墓地も認められ、一定の家族を中心に村が営まれていたことも明らかとなった。

しかも、その生活は、男も女も非常にたくましいことから、老年になるまで厳しい労働に従事していたと思われる。そして乳幼児などの死亡率が高く、乳幼児の生存条件も厳しいことも想像された。人骨群の内容について、まだ残された課題が多いが、この調査を通じて、重労働の塩作りとその流通が維持された中世から近世の人々の生活を人骨からも垣間見ることができたと思う。

最後に、これらの人骨群の調査・検討には、鯉淵和彦・荒井保雄・菅川 修・寺内久永・芳賀友博氏をはじめ茨城県教育財団の多くの方々のご協力を得たことに感謝いたします。

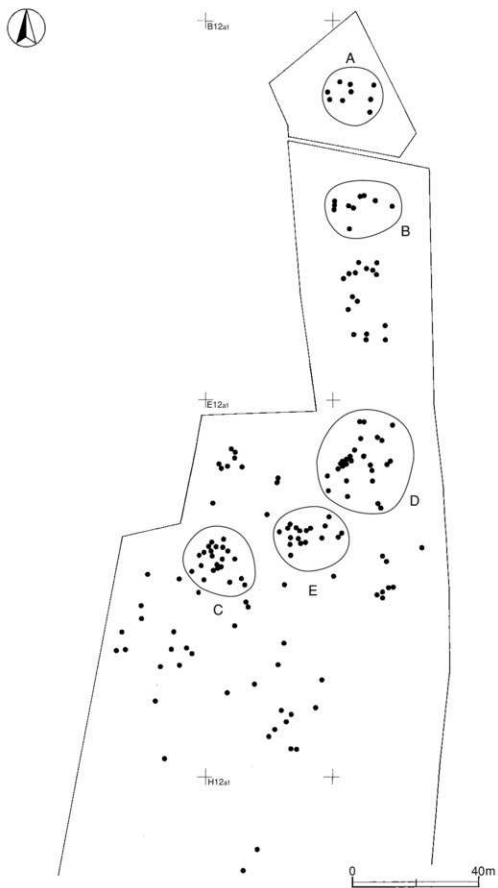


图5 土壤墓中区分布状况图



表3 年齢組成表

年齢区分	個体数	未成人：成人
死産児	1	未成人117
新生児	13	
乳児	18	
乳幼児	37	
幼児	37	
少年	5	
青少年	3	
青年	3	成人66
成年	3	
壮年	14	
熟年	23	
老年	18	
成人	8	
合計	183	

※4区 SH5人骨、9区 SK212人骨は破片であるため年齢は不明である。

図1 村松白根遺跡出土人骨の年齢組成のグラフ

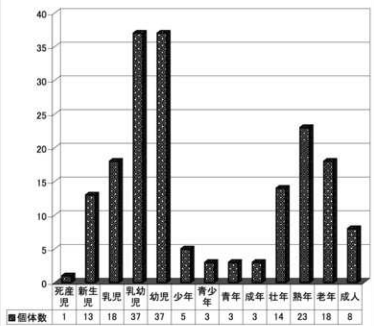


図2 未成人死亡率比較グラフ

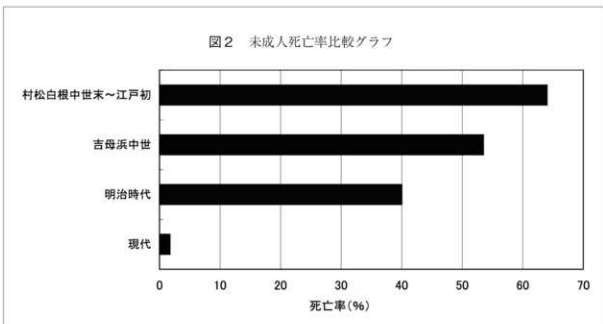


図3 死亡年齢構成比較グラフ

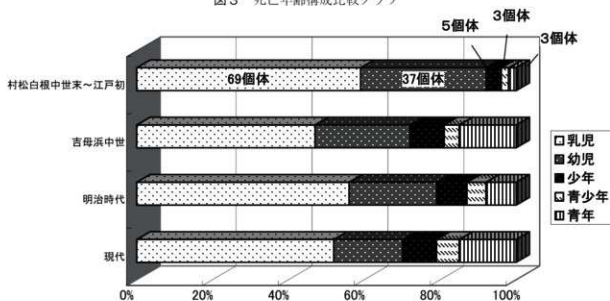


表4 集団別年齢構成表

集団 A (9個体)

年齢	性別	男性	女性	未成人：成人
新生児			1	6
乳児			2	
乳幼児			2	
幼児			1	
老年		2	1	3

集団 B (10個体)

年齢	性別	男性	女性	未成人：成人
新生児			2	9
乳幼児			5	
少年			1	
青年			1	1
老年		1		

集団 C (22個体)

年齢	性別	男性	女性	未成人：成人
乳児			2	13
乳幼児			4	
幼児			6	
青少年			1	9
壮年		5	2	
熟年		1		
老年		1		

集団 D (27個体)

年齢	性別	男性	女性	未成人：成人
死産児			1	22
新生児			2	
乳児			4	
乳幼児			6	
幼児			8	
少年			1	
熟年		3		5
老年			2	

集団 E (18個体)

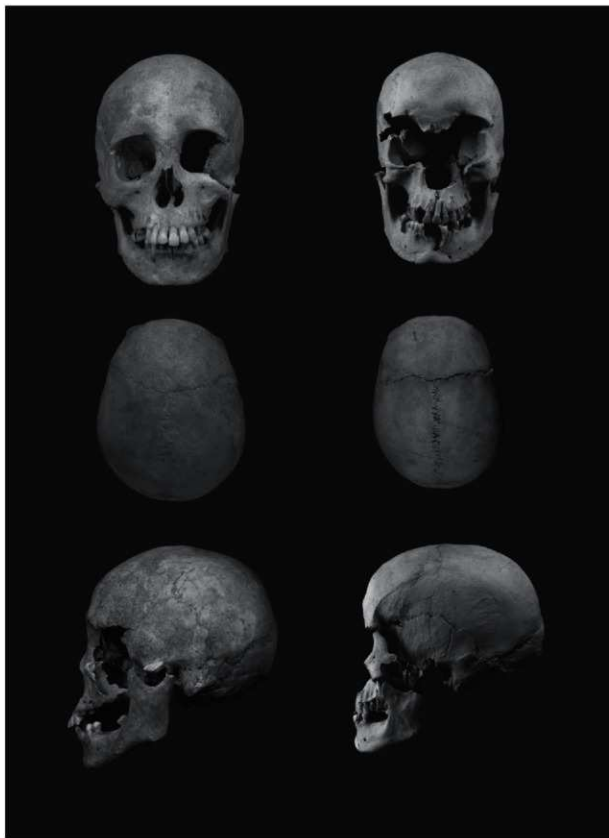
年齢	性別	男性	女性	不明	未成人：成人
乳児			4		12
乳幼児			3		
幼児			5		
熟年		3	1		5
老年		1			
成人				1	





人骨1 (約1/3)

左：男性老年頭蓋骨（4区SK-9遺構出土） 右：女性老年頭蓋骨（4区SK-3遺構出土）



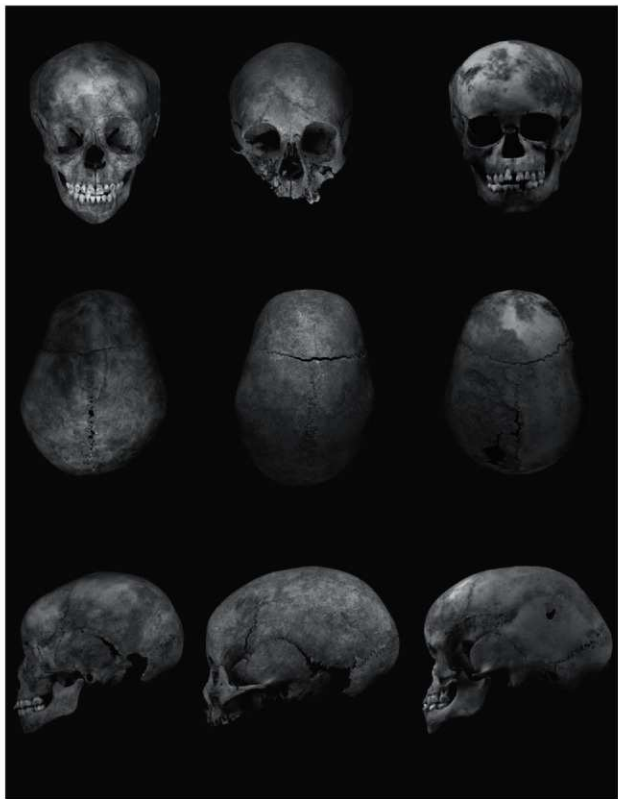
人骨2 (約1/3)

左：男性熟年頭蓋骨（4区SK-30遺構出土） 右：女性熟年頭蓋骨（4区SK-16遺構出土）



人骨3 (約1/3)

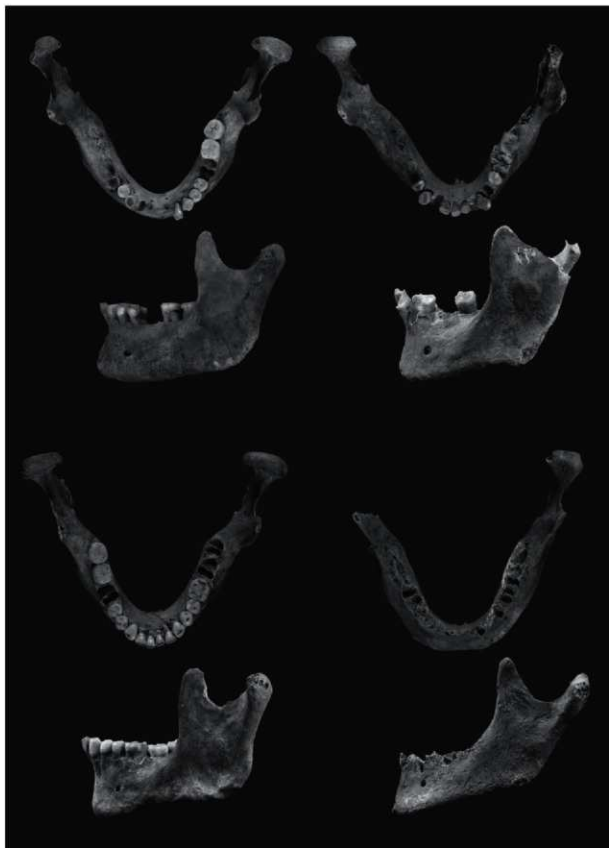
左：男性壯年頭蓋骨（3区SK-8遺構出土） 右：女性熟年頭蓋骨（4区SK-50遺構出土）



人骨4 (約1/3)

左：幼兒頭蓋骨（4区SK-381遺構出土） 中：幼兒頭蓋骨（2区SK-287遺構出土）

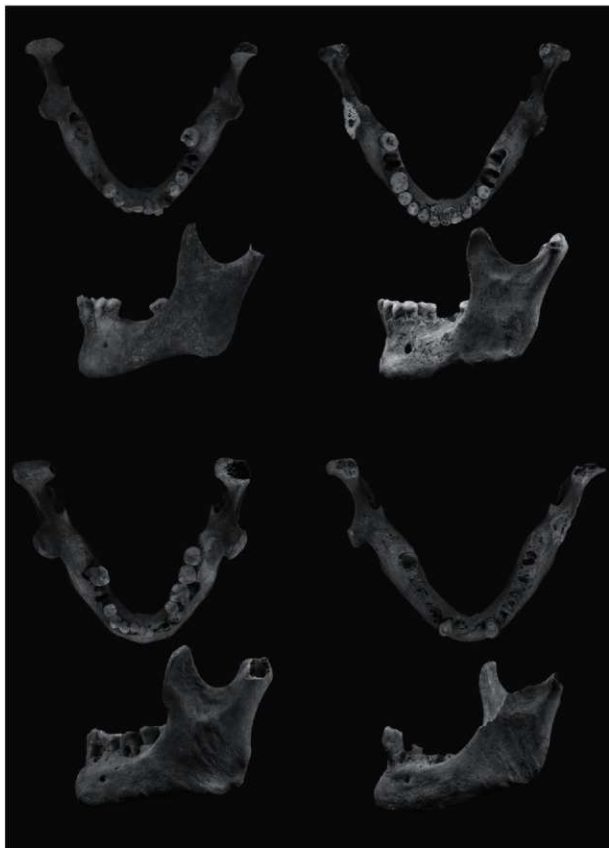
右：幼兒頭蓋骨（4区SK-78遺構出土）



人骨5 (約1/2)

左上：男性老年下顎骨（3区 SK- 8遺構出土） 右上：男性老年下顎骨（3区 SK- 5遺構出土）

左下：男性老年下顎骨（4区 SK-518遺構出土） 右下：男性老年下顎骨（2区 SK- 6遺構出土）



人骨6 (約 1 / 2)

左上：男性熟年下顎骨 (4区 SK-30遺構出土) 右上：男性熟年下顎骨 (4区 SK-19遺構出土)

左下：男性熟年下顎骨 (4区 SK-9遺構出土) 右下：男性熟年下顎骨 (4区 SK-108遺構出土)



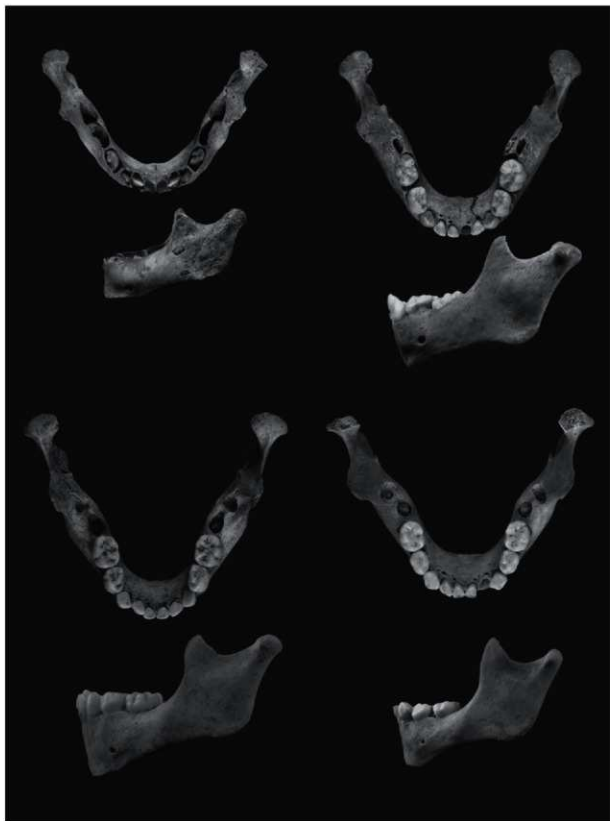
人骨7 (約1/2)

左上：女性熟年下顎骨（4区SK-16遺構出土）

右上：女性熟年下顎骨（4区SK-8遺構出土）

左下：女性熟老年下顎骨（4区SK-50遺構出土）

右下：女性老年下顎骨（4区SK-3遺構出土）



人骨8 (約4/5)

左上：幼児下顎骨（9区 SK-193遺構出土） 右上：乳児下顎骨（4区 SK-49遺構出土）

左下：幼児下顎骨（4区 SK-381遺構出土） 右下：幼児下顎骨（4区 SK-78遺構出土）





人骨9 (約1/3)

1a 女性右上腕骨 1b 男性右上腕骨 2a 女性左橈骨 2b 男性右橈骨 3a 女性左尺骨  
 3b 男性右尺骨 4a 女性右大腿骨 4b 男性右大腿骨 5a 女性左脛骨 5b 男性右脛骨  
 (女性人骨は9区SK-241遺構出土, ただし4aのみ4区SK-16遺構出土)  
 (男性人骨は4区SK-9遺構出土)

## 村松白根遺跡出土中世人骨の DNA 分析

坂平文博

(名古屋大学大学院情報科学研究科博士課程後期)

### はじめに

村松白根遺跡から中世末から近世初頭の埋葬人骨が185個体出土した。それらの保存状態はよく、しかも墓がまとまって出土したことから、当時の血縁関係を考えるための材料となると推測された。そこで、古ミトコンドリア DNA 分析を行い、それらの人骨群の母系を明らかにすることとした。

### 材料と方法

比較的保存状態のよい74個体を DNA 分析の対象とした。成人・未成人の内訳は、成人52個体、未成人22個体であった。また男・女の内訳は、男性30個体、女性21個体、性別不明は23個体であった。それぞれ個体について、歯牙または四肢骨をサンプルとして使用した(表1)。なお、分析に成功したサンプルが四肢骨の場合は、再度異なる部位を分析に使用し、結果が一致することを確かめた。サンプルは DNA 除去剤による洗浄と UV 照射を行い、サンプル表面に付着している可能性がある現代の DNA を除去した。歯牙の場合は、歯根部上部をディスクカッターで切断した後、デンタルドリルで内部の歯髄および象牙質の約150~200mgを得た。四肢骨の場合は、デンタルドリルで骨端部付近に孔をあけた後、内部からミクロスパーテルにて骨粉約300~500mgを得た。Ancient DNA の抽出の方法は Yang et al. 1998 の変法を使用した。

得られた DNA 抽出溶液のうち5 $\mu$ l をテンプレート DNA として、ミトコンドリア DNA の Hypervariable region 1 (HVR1) の194 bp (No. 16209-16402) を増幅できるプライマー (Horai et al. 1989) を用いて PCR (Polymerase chains reaction) 増幅した。これらプライマーの塩基配列は下記の通りである。

MT1-A: 5' - CCCCATGCTTACAAGCAAGT-3'

MT1-B: 5' - ATTGATTTACGGAGGATGG-3'

PCR 産物はアガロースゲル電気泳動にて増幅の成否を確かめた。PCR 増幅が確認できたサンプルのみ精製し、ダイレクトシーケンス法を用いて PCR 産物の両側から塩基配列を決定した。

### 結果と考察

74個体のうち41個体の塩基配列の決定に成功した。成人・未成人の内訳は、成人は52個体のうち29個体、未成人は22個体のうち12個体の塩基配列の決定に成功した。また男・女の内訳は、男性は30個体のうち18個体、女性は21個体のうち10個体、性別不明は23個体のうち13個体の塩基配列の決定に成功した。

得られた塩基配列から、標準配列と比較して全体で30カ所の変異を検出し、22のハプロタイプに分かれた。各ハプロタイプの個体の内訳を表2に示した。また各ハプロタイプの塩基配列を表3に示した。

各ハプロタイプのうち、ハプロタイプ10は8個体、ハプロタイプ16は7個体が持っていた。それ以外のハプロタイプは1または2個体であった。

ハプロタイプ10と同じ塩基配列を持つものは、千葉県茂原市の下太田貝塚（縄文後期）（篠田2003）と神奈川県鎌倉市の由比ヶ浜集団墓（中世）（篠田2005）で見ついている。なお、これら遺跡においてももっとも多くの個体を持っていた。ハプロタイプ16と同じ塩基配列を持つものは、茨城県取手市の中妻貝塚（縄文後期）（Shinoda and Kanai 1999）と由比ヶ浜集団墓で見ついている。ハプロタイプ20と同じ塩基配列を持つものは、下太田貝塚で見ついている。また、DNA データベース（BLAST）を用いて、各ハプロタイプと同じ塩基配列を持つ現代人のDNAを検索した。その結果、ほとんどのハプロタイプは東アジアに広くみられるものであったが、ハプロタイプ7、19、21、22は現代人のDNAのなかにはみられなかった。

ミトコンドリアDNAは母系遺伝するものなので、同一の塩基配列を持っている個体同士は母系において血縁関係がある可能性がある。しかしながら、今回多くの個体を持っていたハプロタイプ10と16は、現代日本人にも多くみられるものであることから、母系において血縁関係の可能性があると一概には言えない。このこととハプロタイプ10と16以外の他のハプロタイプも数多く見ついていることを合わせて考えると、今回の成果からだけでは、村松白根遺跡の墓域が特定の母系の血縁集団の墓地であるとは言えない。また、墓域内についても、ハプロタイプ10および16が調査区をまたがるように分布して特定の区域に集中するような傾向はみられなかったことから、墓域内の特定の区域を特定の母系の血縁集団が使用するといったことも認められなかった。しかしながら、今回の結果は分析に成功した一部の個体からのもので、今後分析に成功する個体が増えれば、何らかの傾向が現れる可能性は残されている。

村松白根遺跡のハプロタイプの頻度分布（図1）を見ると、ハプロタイプ10と16を持つ個体が多いが、それ以外のハプロタイプが数多く存在している。このことは、29個体中17個体が同じハプロタイプを持っていて母系集団の傾向を示した縄文後期中妻貝塚（Shinoda and Kanai 1999）（図2）とは、明らかに異なっている。ハプロタイプのばらつき度合いを数値として示すハプロタイプ多様度（ $h$ ）（Nei 1987）で表してみると、村松白根遺跡は0.9329であった。この値は、中妻貝塚の0.6404よりも高く、中世当時の都市部であった鎌倉の由比ヶ浜集団墓（篠田2005）（図3）の0.9231に近似していた（註1）。この高い値は、村松白根遺跡の集団は母系の多様性が高かったこと、つまり母系において多様な由来を持っていたことを示す。鎌倉の由比ヶ浜集団墓のハプロタイプ多様度の高さは、中世当時の都市部であったことから、様々な地域から多くの人々が流入した結果によるものであると考えることができる。同様に、村松白根遺跡の集団は塩作りに関する遺構の存在から製塩に従事していた集団と考えられているが、そのハプロタイプ多様度の高さは、その塩の交易等によって様々な地域からの人々が出入りした結果であると考えられる。

## おわりに

今回、行った分析はミトコンドリアDNAのごく一部の領域で、しかもHVR1の塩基配列は突然変異率が高いため、今回、同じハプロタイプであったものが、本来は異なる祖先集団から派生したものであった可能性がある。そのため、集団の特性を検討する際には、ハプロタイプよりもその祖先集団であるハプログループで比較した方が良いとされている（Yao et al. 2003）。各個体が所属するハプログループを推定することによって、村松白根遺跡の中世人の遺伝的的特性がより明らかになると考えられる。そのために今後、ハプログループの分類に関わるミトコンドリアDNAの異なる領域の塩基配列を決定していきたいと考えている。

最後に、この資料を DNA 分析にあたり、国立歴史民俗博物館の西本豊弘研究室の設備を使わせていただき感謝いたします。また、発掘調査に従事し、人骨資料を提供いただいた茨城県教育財団の皆様にも厚く感謝いたします。

註1 篠田2005では、HVR1とHVR2の2つの領域の塩基配列に基づいてハプロタイプが分類されているが、今回の結果と比較するためにHVR1の結果のみを示している。

## 引用文献

- 篠田謙一 2003「千葉県茂原市下太田貝塚出土縄文人骨のDNA分析」(財)総南文化財センター調査報告50. P201-205.
- 篠田謙一 2005「中世人骨由来のDNAデータベースの作成とその集団遺伝学的研究」文部科学省科学研究補助金 特定領域研究 中世考古学の総合的研究-学融合を目指した新領域創生- 第2回総合会議研究論文集. P188-193.
- Anderson S, Bankier A.T, Barrell B.G, de Bruijn M.H, Coulson A.R, Drouin J, Eperon I.C, Nierlich D.P, Roe B.A, Sanger F, Schreier P.H, Smith A.J, Staden R, and Young I.G. "Sequence and organization of the human mitochondrial genome" *Nature*, 290 (1981) : 457-465.
- Horai S, Hayasaka K, Mutayama K, Wate N, Koike H, and Nakai N. "DNA amplification from ancient human skeletal remains and their sequence analysis" *Proceedings of the Japan Academy*, 65 (1989) : 229-233.
- Nei M. (1987) *Molecular Evolution Genetics*. Columbia University Press. New York, NY, USA.
- Shinoda K, and Kanai S. "Intracemetery genetic analysis at the Nakazuma Jomon site in Japan by Mitochondrial DNA sequencing" *Anthropological Science*, 107 (1999) : 129-140.
- Yang D.Y, Eng B, Wave J.S, Dular J.C, and Saunders S.R. "Technical note: improved DNA extraction from ancient bones using silica-based spin columns" *American Journal of Physical Anthropology*, 105 (1998) : 539-543.
- Yao Y.G, Kong Q.P, Man X.Y, Bandelet, H-J, and Zhang Y.P. "Reconstructing the evolutionary history of China: A caveat about inferences drawn from ancient DNA" *Molecular Biology and Evolution*, 20 (2003) : 214-219.

図1 村松白根遺跡出土中世人のハプロタイプの頻度分布

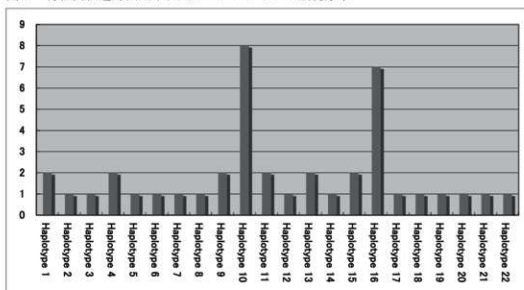


図2 中妻貝塚出土縄文人のハプロタイプの頻度分布

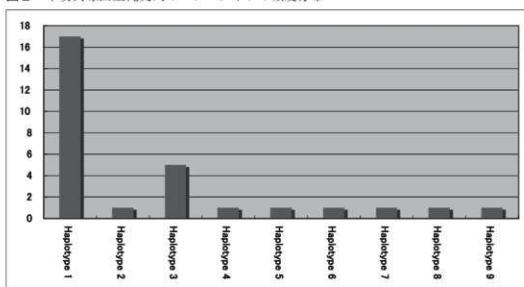


図3 由比ヶ浜集団墓出土中世人のハプロタイプの頻度分布

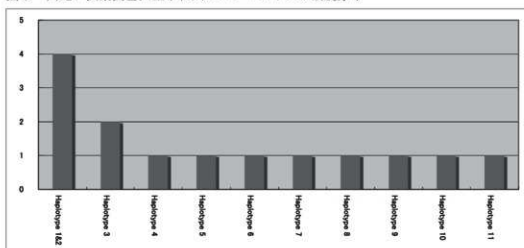


表1 サンプルの詳細

No.	土曜番号	人骨番号	性別	年齢	採取部位1	採取部位2
1	17	4区 SK -1	不明	熟年	下顎右, 第一後臼歯	
2	20	4区 SK -5	男	老年	下顎右, 第三後臼歯	
3	23	4区 SK -9	男	熟年~老年	下顎右, 第一後臼歯	
4	51	4区 SK -75	男	熟年	下顎左, 第三後臼歯	
5	21	4区 SK -6	男	熟年	下顎右, 第三後臼歯	
6	58	4区 SK -86	男	熟年	下顎左, 第一後臼歯	
7	-	4区 SN -8	男女	熟年	上顎左, 第二後臼歯	
8	30	4区 SK -19	男	熟年	下顎左, 第二後臼歯	
9	24	4区 SK -11	女	17~18歳	歯磨歯	
10	28	4区 SK -17B	男	熟年	下顎右, 第二後臼歯	
11	1	2区 SK -6	男	老年	大顎骨右, 完形	大顎骨左, 完形
12	104	4区 SK -515	女	壮年	歯磨歯	
13	-	4区 SN -21	-	15~16歳	上顎左, 第一後臼歯	
14	42	4区 SK -50	女	熟年~老年	歯磨歯	
15	56	4区 SK -84	女	熟年	大顎骨左, 近位端	
16	68	4区 SK -101	男	熟年	歯磨歯	
17	49	4区 SK -60	女	老年	歯磨歯	
18	11	3区 SK -8	男	老年	下顎左, 第一後臼歯	
19	5	2区 SK -268	男	老年	大顎骨右, 完形	大顎骨左, 完形
20	-	3区 x	-	成人	大顎骨右, 完形	大顎骨左, 遠位端
21	-	4区 F131.1	-	熟年	大顎骨左, 完形	脛骨右, 完形
22	25	4区 SK -15	男	壮年	大顎骨左, 完形	
23	-	4区 G13e.9	男	老年	下顎右, 第一後臼歯	
24	9	3区 SK -5	男	老年	歯磨歯	
25	72	4区 SK -108	男	熟年~老年	歯磨歯	
26	26	4区 SK -16	女	熟年	大顎骨右, 近位端	
27	32	4区 SK -24	女	17~18歳	下顎右, 第一後臼歯	
28	18	4区 SK -3	女	老年	歯磨歯	
29	103	4区 SK -512	男	熟年	下顎左, 第三後臼歯	
30	66	4区 SK -98	不明	成人	第一中手骨左, 完形	上腕骨左, 完形
31	53	4区 SK -78	-	5~6歳	大顎骨右, 完形	大顎骨左, 完形
32	55	4区 SK -83	-	5歳頃	大顎骨左, 完形	
33	41	4区 SK -49	-	1歳頃	大顎骨右, 完形	大顎骨左, 完形
34	82	4区 SK -381	-	4~5歳	大顎骨右, 完形	脛骨右, 完形
35	13	3区 SK -29	-	3~4歳	大顎骨右, 完形	
36	59	4区 SK -87	男	熟年	歯磨歯	
37	35	4区 SK -30	男	熟年	下顎左, 第一後臼歯	
38	8	3区 SK -4	女	老年	上腕骨右, 完形	
39	134	9区 SK -174	男	壮年	上腕骨左, 完形	大顎骨左, 完形
40	135	9区 SK -175	女	壮年	上腕骨右, 遠位端	
41	146	9区 SK -243	男	熟年	下顎右, 第三後臼歯	
42	6	2区 SK -273	男	3歳頃	大顎骨右, 完形	
43	133	9区 SK -163	女	壮年~熟年	歯磨歯	
44	152	9区 SK -286	女	30歳代	下顎左, 第二後臼歯	
45	138	9区 SK -198	男	30歳代	下顎左, 第一後臼歯	
46	-	9区 SK -266-2	-	子供	大顎骨右, 完形	
47	132	9区 SK -161	女	熟年~老年	歯磨歯 (切歯2本)	
48	123	9区 SK -98	男	老年	上腕骨右, 遠位端	
49	144	9区 SK -241	女	熟年	歯磨歯	
50	7	2区 SK -287	-	5歳頃	大顎骨左, 完形	脛骨右, 完形
51	43	4区 SK -51A	-	5歳頃	大顎骨左, 完形	大顎骨右, 完形
52	38	4区 SK -38	-	1~2歳	大顎骨右, 完形	
53	2	2区 SK -33	女	20歳代後半	下顎左, 第一後臼歯	
54	80	4区 SK -379	女	20歳前後	下顎右, 第一後臼歯	
55	47	4区 SK -54	-	8~9歳	歯磨歯	
56	105	4区 SK -518	男	老年	下顎左, 第二後臼歯	
57	89	4区 SK -428	女	9歳頃	下顎右, 第二後臼歯	
58	145	9区 SK -242	女	20歳代後半	歯磨歯	
59	151	9区 SK -285	男	壮年	歯磨歯	
60	143	9区 SK -228	女	熟年	歯磨歯	
61	141	9区 SK -218	女	13~14歳	歯磨歯	
62	129	9区 SK -110	男	40歳代	歯磨歯 (切歯3本)	
63	136	9区 SK -191	男	熟年~老年	下顎右, 第一後臼歯	
64	110	9区 SK -1	男	壮年	下顎左, 第二後臼歯	
65	131	9区 SK -153	女	壮年	歯磨歯	
66	154	9区 SK -300	男	壮年	歯磨歯	
67	140	9区 SK -216	-	3歳頃	下顎右, 第一後臼歯	
68	106	4区 SK -519	-	12~13歳	下顎右, 第一後臼歯	
69	45	4区 SK -52	男	熟年	歯磨歯	
70	142	9区 SK -223	-	4~5歳	大顎骨右, 完形	
71	102	4区 SK -511	-	13~17歳	歯磨歯	
72	82	4区 SK -381	-	4~5歳	大顎骨左, 完形	
73	124	9区 SK -101	男	壮年	第一中足骨右, 完形	
74	84	4区 SK -388	-	1~1歳半	大顎骨左, 完形	

表2 各ハプロタイプの内訳

Haplotype	土壌墓番号	人骨番号	性別	年齢	Haplotype	土壌墓番号	人骨番号	性別	年齢
1	23	4区 SK - 9	男	熟年~老年	11	42	4区 SK - 30	女	熟年~老年
	129	9区 SK - 110	男	40歳代		53	4区 SK - 78	-	5~6歳
2	43	4区 SK - 51A	-	5歳前後	12	-	4区 SN - 8	女	熟年
3	11	3区 SK - 8	男	老年	13	41	4区 SK - 49	-	1歳前後
	36	4区 SK - 16	女	熟年		-	4区 SN - 21	-	15~16歳
4	146	9区 SK - 243	男	熟年	14	17	4区 SK - 1	不明	熟年
	5	2区 SK - 268	男	壮年	15	49	4区 SK - 60	女	老年
6	145	9区 SK - 242	女	20歳代後半		106	4区 SK - 519	-	12~13歳
7	80	4区 SK - 379	女	20歳前後	30	4区 SK - 19	男	熟年	
8	-	3区 x	-	成人	51	4区 SK - 75	男	熟年	
	1	2区 SK - 6	男	老年	58	4区 SK - 86	男	熟年	
9	102	4区 SK - 511	-	13~17歳	16	134	9区 SK - 174	男	壮年
	2	2区 SK - 33	女	20歳代後半		133	9区 SK - 163	男	壮年
21	4区 SK - 6	男	熟年	140		9区 SK - 216	-	3歳前後	
59	4区 SK - 87	男	熟年	141		9区 SK - 218	女	13~14歳	
10	66	4区 SK - 98	男	老年	17	82	4区 SK - 381	-	4~5歳
	72	4区 SK - 108	男	熟年~老年	18	28	4区 SK - 17B	男	熟年
	105	4区 SK - 518	男	老年	19	47	4区 SK - 54	-	8~9歳
	-	4区 F13.1	-	熟年	20	110	9区 SK - 1	男	壮年
	153	9区 SK - 287	-	1~1歳半	21	32	4区 SK - 24	女	17~18歳
					22	132	9区 SK - 161	女	熟年~老年

表3 村松白根遺跡出土中世人の各ハプロタイプの塩基配列一覧表

Haplotype	16209 16210 16211 16212 16213 16214 16215 16216 16217 16218 16219 16220 16221 16222 16223 16224 16225 16226 16227 16228 16229 16230 16231 16232 16233 16234 16235 16236 16237 16238 16239 16240 16241 16242 16243 16244 16245 16246 16247 16248 16249 16250 16251 16252 16253 16254 16255 16256 16257 16258 16259 16260 16261 16262 16263 16264 16265 16266 16267 16268 16269 16270 16271 16272 16273 16274 16275 16276 16277 16278 16279 16280 16281 16282 16283 16284 16285 16286 16287 16288 16289 16290 16291 16292 16293 16294 16295 16296 16297 16298 16299 16300	同じ塩基配列
CRS(標準配列)	T T C C C T C C C A C C C C T T G T G C T T C T C G G C C	
1	C T	
2	C T	
3	T C	
4	C T	
5	C	
6		
7	T	
8	T	
9	T	
10	T	
11	T	
12	T	
13	T	
14	T	
15	T	
16	T	
17	T	
18	T	
19	T	
20	T	
21	T	
22	T	

標準配列 (Anderson et al. 1981) と比較して変異があった部分を示している。一番上と一番下の行の数字は、変異が検出されたミトコンドリア DNA の標準配列の番号を示している。その下の行に標準配列の塩基を示している。空白の部分は、変異がなかったことを示している。

## 村松白根遺跡の動物遺体 (2004年度)

西本豊弘・浪形早季子

この遺跡の2004年度の調査で動物遺体が出土した。その内容は、イヌとウマが主体であり、その他にニワトリ・アホウドリなどが見られた。ここでは、それらの出土内容を表に示し、概要を述べることにする。なお、この資料を分類するにあたり成田裕氏の協力を得たことに感謝いたします。

### 1. イヌ

イヌは、頭蓋骨で数えると、少なくとも8個体であり、その他に幼獣の下顎骨が1点出土している。少なくとも9体分が含まれていると思われる。1体分の骨がまとまって出土する場合とバラバラに出土する場合がある。バラバラになって出土する場合は、鳥類やウマの骨とともに出土することが多い。それらの中には、ナタなどの刃物で切断された推骨が数点含まれており、ヒトによって食料とされたと思われる。それに対して、1体分まとまって出土する場合は、食料とされずに埋葬されたと思われるが、鳥骨と混じった状態で出土する場合もある。

イヌの形態を、頭蓋骨の保存状態の良い資料で見ると、例えば、イヌNo1の8区SK-42遺構出土の例では、上腕骨で骨の大きさから体高を推定してみると約47cmとなった。この個体の頭蓋骨は、前額部の凹み(ストップ)が弱く、頬骨弓も外側に強く張り出していない。この形質は現代の関東柴犬とは異なり、頭部は細長い感じを与える。しかし、四肢骨は太くたくましく、柴犬などの在来犬の特徴を持っている。このようなタイプのイヌは、その他の個体でも見られ、この遺跡では一般的であったように思われる。在来犬の中にはこのようなタイプのイヌがいたのかもしれない。

### 2. ウマ

ウマは1体分がまとまって出土したものが多く、少なくとも12体分が出土している。その他には下顎骨が1点と出土し、少なくとも最小個体数は13個体である。ウマの年齢を見ると3から5歳の比較的若い個体のものが5体と、10歳前後の壮年個体が1体、15歳以上と思われる老齢個体が5体ある。犬歯の有無が確認されて、性別が判定できたものでは、雄5体、雌1体である。昨年度の資料でも雄が多いことが特徴であった。四肢骨から体高を復元すると、106~131cm程度となったが、110から120cm台の小さい個体が多い。なお今回の資料を見ると1体分がそろっているもの以外に骨が散乱してバラバラで出土したウマの骨が多い。そのウマの骨の中には解体痕を持つウマの上腕骨が1点が含まれていた。場合によってはウマも解体された可能性が考えられる。

### 3. その他の哺乳類

その他の動物では、ネコ・ウサギ・ドブネズミ・シカ・イノシシ・イルカ・クジラ・ニワトリ・アホウドリ・ミズナギドリなどが出土している。

イノシシはブタではなくおそらく野生のイノシシであるとあると思われる。

ネコは、イヌに比べて少なく、すべての部位をあわせても最小個体数は1個体である。ウシは小型のウシの距骨が1点出土しているだけである。この骨はウシが飼育されていたとは考えられない。

イルカは小型のイルカ類の椎骨が1点のみであり、クジラ類は体長は20メートル以上の大型のものの破片が1点と体長10数メートルのものの破片が1点の2種が見られた。これらはその他の部位が出



土していないのでおそらく寄りクジラの一部分であろう。

#### 4. 鳥類・魚類

大きな回遊をおこなう鳥類であるアホウドリとミズナギドリとカイヅブリの3種とニワトリ類の中でも大型のシャモの骨が1点見られたのみである。

魚類ではエイ類とカサザメ類・ホシザメ、種不明の大型のサメやマイワシの骨が出土した。その他に種不明の魚類の鱗が多数出土した。これらの魚類はヒトが利用したものではなく、何らかの条件で自然に混入したものがあるかもしれない。海辺の村としては魚骨の出土量が少ないのが不思議である。

#### まとめ

この遺跡ではウマがもっとも多く、次いでイヌが多い。ネコやウサギ・ニワトリは極少量である。このように動物種が少なく、またウマとイヌのみが多いという単純な動物相の特徴は定住的な村落の動物遺体とは思われない。発掘資料からみると、この遺跡は塩釜を用いた塩作りを行っていた村である。そのため海浜に近く、風害を受けていたことも文献から判明しており、生活環境も厳しかったことが想定されている。このような村の中で、ウマは塩作りの労役に用いられたのであろう。またイヌは番犬または何らかの労役に使われたのであろう。以上に述べた動物種の特徴は、塩作りの村という限られた労働の場所として利用された遺跡の性格を示すものであろう。

表1 イヌの頭蓋骨・下顎骨一覽

No	通し No	出土 地点	部位	年齢	推定 体高 (cm)	左残存歯	右残存歯	備考
1	-	8IK SK-42	頭蓋骨 下顎骨	老獣	47 (49)	L(I□□□CP1234M12)	R(I□□□CP□234M1×)	中型の柴犬タイプ、 吻部長い。ストップ小 前部の中央はあまりくぼまず、zyは後方にあり 側頭線はフレグマで交わり矢状稜が強い 最大頭蓋長:185.6± 基底頭蓋長:168± 吻部:40.2 前頭骨幅:49.9 頬骨弓幅:106.0 後頭部幅:64.6 左上顎第4前臼歯長:18.0mm
2	-	9IK SK-144	頭蓋骨	成獣	-	I123CP×234(M12)	I123CP×234(M1) M2	頭蓋骨は破損しているため形態不明 右上顎第4前臼歯長:17.5mm
3	29	9EC SK-251	頭蓋骨 右下顎骨	成獣	-	(P4M12)	(××××)	頭蓋骨は破損しているため形態不明
4	28	9EK P6群 SK-269	頭蓋骨	成獣	-	P4M1	P4(M12)	頭蓋骨は破損しているため形態不明
5	10	9EK SK-320	頭蓋骨 下顎骨	老獣	45	CP×××4 CP××××M1	C CP××××M1	頭蓋骨は破損しているため形態不明 左下顎第1後臼歯長:20.4mm
6	55	9EK F11	頭蓋骨 下顎骨	老獣	-	(I□□□CP134M××)	(I×××CP1×34M××)	頭蓋骨は破損しているため形態不明
7	40	9EK G12	頭蓋骨	成獣	(47)	P4	-	中型犬。矢状稜あり、ストップ少ない 最大頭蓋長:175.0± 前頭骨幅:48.0± 左上顎第4前臼歯長:17.0±mm
8	31	SK-225	頭蓋骨	成獣	46	-	-	破損しているが1個体分あるが歯はない
9	50	9EK E12	左下顎骨	幼獣	-	(cm1××4)	-	下顎骨は破損しているため形態不明
*	15	9EK SI-3 土器	右下顎骨	成獣	-	-	(I×××C×P××P34M12)	中型犬 下顎体厚が高い 下顎関節突起の外縁が切断され、その下部に解 体痕有 M1の内側にも解体痕有
*	25	9EK SK-312	左上顎骨	成獣	-	(×P3×M2)	-	頭蓋骨は破損しているため形態不明
*	9	9EK SK-318	左下顎骨	成獣	48	(M12×)	-	下顎骨は破損しているため形態不明 左下顎第1後臼歯長:19.25mm
*	57	9EK F12	右上顎骨	成獣	41	-	(P34M12)	上顎骨は破損しているため形態不明
*	58	9EK F12	左上顎骨	成獣	-	(I123×P×××4M12)	-	上顎骨は破損しているため形態不明
*	44	9EK G11	右下顎骨	成獣	-	-	(I×××CP1234M2×)	歯列が湾曲しており、M1後部の下顎体高く前 部へ低い 右下顎第1後臼歯長:20.0mm

\*計測部位は斎藤弘吉(1963)『犬科動物骨格計測法』に、推定体高は山内忠平(1958)『犬における骨長より体高の推定法』[鹿児島大学農学  
部学術報告]第7号 pp.125~131に従った。

残存歯のIは切歯、Cは犬歯、Pは前臼歯、Mは後臼歯を示す。( )内は上顎もしくは下顎の植立歯の歯式を示す。

歯式の×は歯が脱落していること、□は歯が生前脱落し歯槽骨が閉じていることを示す。

計測値に\*を付したものは、一部欠損した資料である。

推定体高は四肢骨から算出したものを示すが、( )のあるものは頭蓋骨の最大頭蓋長から算出した。

完は完存、近は近位部、遠は遠位部、幹は骨幹部(中間部)を示す。

上顎骨・上顎歯の区分は歯のみのものを上顎骨とし、骨も残存し歯が植立しているものを上顎骨とした。下顎骨・下顎歯も同様である。

頭蓋骨から最小個体数を9個体としたため、左端欄には便宜上のNoを示した。\*は出土地点が異なるが同一個体の可能性もあるため1個体  
分とみなさないものに記した。

表2 イヌの遺構別出土一覧

No.	通し No.	遺物 No.	調査 区	大 グリッド	出土地点・遺構	部位・左右・残存部分・備考・個数
	105	9	8I区		HK-26(SK-122内)	中手・中足骨破片1, 中節骨1, 末節骨完存1
	78		8I区		SB-9	大腸骨左はは完(骨幹部少し欠く)1
1	-	-	8I区		SK-42	頭蓋骨完存1, 左右下顎骨各1, 左肩甲骨白1, 右肩甲骨骨一連1, 左右上腕骨完存各1 左右腕骨完存各1, 左右尺骨完存各1, 左右大腸骨各1, 左右脛骨各1, 左腓骨1, 左右寛骨各1 (同一個体, 老獣)
	81	x	8I区		SK-88	肩甲骨右完存成獣1
	85	7	8I区	K9		脛骨左幹一連成獣1
	18	x	9I区		HK-7	肩甲骨左白1, 第3中足骨右完存1
	19	1	9I区		HK-16	脛骨左幹1, 肩甲骨右幹一連1, 頸椎破片1, 胸椎破片6, 肋骨破片5(同一個体, 幼獣)
	20	1	9I区		HK-18	上腕骨右はは完成獣1
	14	71	9I区		SI-1	軸骨はは完成獣解体直有1
	14	71	9I区		SI-1	上顎第3前臼歯?成獣1
*	15	2	9I区		SI-3土壘	右下顎成獣1
	30	x-2	9I区		SK-22(HK-1内)	第2中手骨左1
	-	-	9I区		SK-88	橈骨右はは完存1
2	-	-	9I区		SK-144	左右上顎骨1, 右下顎第1後臼歯1, 頭蓋骨破片1個体分, 耳骨2(同一個体, 成獣)
	34	x-1	9I区		SK-154	頭頂骨左右成獣1, 腰椎成獣1
	35	1	9I区		SK-186	軸骨若獣1
3	29	1	9I区		SK-251	頭蓋骨左頰骨1, 頭蓋骨破片20, 左右上顎骨各1, 右下顎骨1(同一個体, 成獣)
	29	1	9I区		SK-251	大腸骨左幹1, 椎骨破片4
4	28	1	9I区		P6群 SK-269	頭蓋骨破片1個体分, 右上顎骨1, 右第4前臼歯1, 右第1後臼歯1, 切歯2, 臼歯1(同一個体, 成獣)
*	25	1	9I区		SK-312	左上顎骨1
	32	-	9I区		SK-317	上腕骨左はは完成獣1
*	9	-	9I区		SK-318	左下顎骨1, 上腕骨左完存1, 上腕骨右幹一連1, 橈尺骨右完存1, 脛骨左近一幹成獣1, 脛骨右完存1, 左右中手骨完存各1, 左右中足骨完存各1, 寛骨右はは完存1, 距骨左1, 基節骨7, 中節骨4, 末節骨3, 胸椎1, 椎骨6, 肋骨11
5	10	-	9I区		SK-320	頭蓋骨破片1個体分, 左右上下顎大歯各1, 上顎左第4前臼歯1, 左右下顎第1後臼歯各1, 右肩甲骨1, 左右上腕骨各1, 左右腕骨各1, 左尺骨幹1, 右大腸骨幹1, 左脛骨はは完1, 右脛骨幹1, 中手・中足骨12, 基節骨7, 中節骨10, 末節骨5, 肋骨破片30, 椎骨3(同一個体, 老獣)
	26	-	9I区		SK-321	橈骨左はは完成獣1, 尺骨左はは完成獣1, 中手骨完存4, 基節骨5, 末節骨1
	7	-	9I区		SK-324	頭蓋完存1
	24	1	9I区		SK-325	上腕骨左幹一連成獣1, 肋骨破片3, 胸椎5
	47	8	9I区	E12		右下顎第1後臼歯成獣1
	48	12	9I区	E12		大腸骨右はは完成獣1
	49	13	9I区	E12		尺骨左近一幹成獣1
9	50	14	9I区	E12		左下顎骨幼獣1, 腰椎3
	52	23	9I区	E12		大腸骨右幹1
6	55	8	9I区	F11		頭蓋骨破片1個体分, 左右上顎骨各1, 左右下顎骨各1(同一個体, 老獣)
*	57	x	9I区	F12		右上顎骨右成獣1, 上腕骨左幹一連成獣1, 橈骨右完存1, 大腸骨左近成獣1, 大腸骨右近一幹成獣1, 踵骨右完存1, 頭椎1, 腰椎1
*	58	x	9I区	F12		左上顎骨成獣1, 頰骨右1, 胸椎1, 仙椎1
*	44	2	9I区	G11		右下顎骨成獣1, 脛骨右破片1
	38	21	9I区	G12		下顎骨破片1
7	40	49	9I区	G12		頭蓋骨破片1個体分, 左上顎第4前臼歯成獣1
	42	x	9I区	G12		橈骨右近一幹1, 胸椎1, 腰椎2
61	x-2	9I区			最終確認トレンチ	橈骨左完成獣1, 第2中足骨右完存1, 肋骨1
62	x	9I区			東西トレンチ	頭蓋骨破片1, 中手骨右完存1, 寛骨右成獣1, 頭椎1, 腰椎2, 肋骨3
64	x	9I区			-	左右寛骨完存各1, 環椎解体直有1, 軸椎1, 頰椎解体直有4, 胸椎6, 腰椎切断直有1, 仙骨1, 肋骨3
8	31	x	-		SK-225	頭蓋骨破片9, 上腕骨右幹1, 橈骨左近一幹1, 橈骨右幹一連1, 尺骨左はは完存1, 尺骨右幹1, 左右踵骨完存各1, 距骨左完存1, 距骨右幹一連1, 第5中手骨左近一幹1, 第2・3・4・5中手骨右完存各1, 第3・4・5中足骨左完存各1, 基節骨9, 中節骨4, 末節骨1, 頭椎3(同一個体, 成獣)

\*左端欄のNo.は表1のイヌの頭蓋骨・下顎骨表のNo.に対応する。

表3 ウマの頭蓋骨・下顎骨一覽

No	通し No	出土 地点	部位	推定 体高 (cm)	年齢	種別	左残存歯	右残存歯	歯牙計測値 (1mm)								
									第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯			
1	65	6区 庭ノ原の塚	上顎歯 下顎歯		4-5歳		P2×M×3 P2	P2									
2	74	8区 SK-24	下顎歯		壮獣		I12	I12×C2×M×2									
3	89	8区 SK-71	上顎歯 下顎歯		3-4歳		P4M123 P234M123	P34M123 P234M123									
4	90	8区 SK-72	上顎骨 下顎骨	109		♂	I12CP2M12 I12CP2M12	I12CP2M12 I12CP2M12	長さ:35.7 幅:21.0	長さ:26.0 幅:24.7	長さ:23.5 幅:25.0	長さ:19.6 幅:22.9	長さ:22.1 幅:21.4	長さ:23.9 幅:19.9			
5	92	8区 SK-285	下顎骨			♂	I12CP2M12 (I123C)	(I123C)	長さ:29.3 後幅:15.6	長さ:27.3 前幅:13.3 後幅:15.2	長さ:25.7 前幅:14.5 後幅:17.1	長さ:22.4 前幅:15.4 後幅:13.7	長さ:23.8 前幅:13.1 後幅:12.6	長さ:33.8 前幅:11.3			
6	-	9区 SK-74	上顎骨 下顎骨	122	3-3.5歳	♂	I12CP2M12 I12CP2M12	I12CP2M12 I12CP2M12	長さ:37.7 幅:23.7	長さ:30.6 幅:25.4	-	長さ:36.0 幅:25.5	長さ:36.7 幅:23.6				
7	-	9区 SK-88	上顎骨 下顎骨	112	3-4歳	♀?	I12P×M12 I2×P2M12	IP24M123 (P234M123)	長さ:32.8 幅:22.6	長さ:26.9 幅:25.1	長さ:25.4 幅:24.7	長さ:23.0 幅:23.1	長さ:23.4 幅:22.6	長さ:23.3 幅:19.4			
8	-	9区 SK-89	上顎骨 下顎骨	116	老獣	♂	I2×CP2M12 I2CP2M12	I2CP2M12 I2CP2M12									
9	-	9区 SK-161	上顎骨 下顎骨			老獣	I1 I2×P×3or4	P3(M1×3) (M12×)									
10	7	9区 SK-324	上顎骨 下顎骨			老獣	I×CP2M12 (I1××P2)	I×CP2M12 (I123CP2)									
11	-	9区 SK-162	上顎骨 下顎骨			老獣	P234M123 P234M123	P234M123 P21P34M123									
12	-	9区 SK-162	上顎骨			老獣	P234M123	(P234M123)									
13	64	9区	頭蓋骨 下顎骨	131	成獣		- -	- -									

\* I は切歯, C は犬歯, P は前臼歯, M は後臼歯, 数字は歯列の順番を示す。

歯式の×は歯が脱落していること, □は歯が生前脱落し歯槽骨が閉じていることを示す。

計測値に=を付したものは、一部欠損した資料である。

上顎歯の幅は中央部を計測したが、P2では後幅、M3では前幅を計測した。

下顎歯の幅はP2では後幅のみ、M3では前幅のみを計測するものとする。

計測はすべてエナメル質の外側を計測点とした。

計測には基本的には左歯を使用した。No7のみ右歯を使用した。

推定体高は四肢骨から算出した。

上顎骨・上顎歯の区分は歯のみのものを上顎骨とし、骨も残存し歯が植立しているものを上顎骨とした。下顎骨・下顎歯も同様である。

頭蓋骨から最小個体数を13個体としたため、左端には便宜上のNoを示した。

No13は頭蓋骨片1個体分、左右下顎骨があるが、歯はみられない。

表4 ウマの遺構別一覧(4/6)

No.	通し No.	遺物 No.	調査 区	大 グリッド	出土地点 -遺構	種	部位・左右・残存部分・備考・個数
1	65	-	6区		-	ウマ	左右上下顎第2前臼歯各1, 左上顎第3後臼歯1, 左下顎骨片1 (同一個体, 4-5歳)
	86		7区		x	ウマ	左右上顎第3後臼歯老獣各1, 上顎骨片1(同一個体)
	94	7	7区		HK-1	ウマ?	肋骨片1
	70	45	8区		HK-1	ウマ	頭椎1
	73		8区		HK-8	ウマ	中足骨幹-遠成獣1
	98	24	8区		HK-13	ウマ	中手・中足骨破片1, 距骨左1
	134	33	8区		HK-14	ウマ	恥骨右破片1
	75	x-10	8区		HK-16	ウマ	下顎骨片1
	110	22	8区		HK-21	ウマ	肩甲骨右ほぼ完存1
	110	8	8区		HK-33	ウマ	右下顎第2後臼歯壯獣1
	111	12	8区		HK-34	ウマ	中手骨右近位端-骨幹部1
	133	17	8区		SB-7	ウマ	右下顎第4前臼歯?老獣1
	78		8区		SB-9	ウマ	左上顎第3後臼歯壯獣1
	132	18	8区		SI-2	ウマ	右上顎第3前臼歯完存成獣1
2	74	-	8区		SK-24	ウマ	左右下顎第1・2切歯各1, 右下顎犬歯1, 右下顎第2前臼歯・第23後臼歯1 下顎骨片(同一個体, 牡獣)
3	89	-	8区		SK-71	ウマ	左上顎第4前臼歯-第3後臼歯各1, 右上顎第3前臼歯-第3後臼歯各1 左右下顎第2前臼歯-第3後臼歯各1, 頭蓋骨片, 上腕骨右遠老獣? 1 距骨1, 膝蓋骨1, 手根骨1, 胸椎1, 肋骨片約80(同一個体, 推定体高109cm)
4	90	-	8区		SK-72	ウマ	左右上下顎骨各1, 頭蓋骨片5, 右肩甲骨1, 大腸骨左完存1, 脛骨左完存1 左右寛骨各1, 胸椎12, 腰椎6, 仙椎1, 尾椎?4, 肋骨片50(同一個体, 雄, 成獣)
	120	1	8区		SK-254	ウマ	上腕骨左完存1, 桡尺骨ほぼ完存1(同一個体, 推定体高122cm)
	123	x-4	8区		SK-276	ウマ	末節骨1
5	92	-	8区		SK-285	ウマ	左右下顎骨各1, 肩甲骨右臼1, 頭椎5, 胸椎17, 腰椎5, 仙椎1, 手根・足根骨 肋骨約1個体分(同一個体, 雄, 成獣)
	92	-	8区		SK-285	ウマ	右上顎第1切歯老獣?1
	135	x-1	8区		SK-308	ウマ	肩甲骨破片成獣?1
	116	x-2	8区		SN-37断ち割	ウマ	右下顎第3後臼歯壯獣1
	117	x-1	8区		SN-58	ウマ?	肋骨片1
	83		8区	N10		ウマ	左上顎第3後臼歯成獣直後小型1
	125	x-2	8区	N11		ウマ	中手骨右完存1, 右第2・4中手骨各1(同一個体, 成獣, 推定体高125cm)
	129	14	8区	N11		ウマ	膝蓋骨左1
	127	x	8区	O11		ウマ	中手骨左完存1(推定体高118cm)
	88		8区		トレンチ11	ウマ	桡尺骨右完存1(推定体高125cm)
	115	x-15	8区		土罫1	ウマ	右上顎第2後臼歯老獣小型1
	138	4	8区	B	HK-8	ウマ	左上顎第2後臼歯成獣直後小型1
	67	x	8区	B	表土除去 ほぼ中央部	ウマ	中足骨左近-幹小型1, 脛骨左幹-遠成獣1, 胸椎1
	18	x	9区		HK-7	ウマ	脛骨右幹1, 中節骨2
	137	x-2	9区		HK-19	ウマ	上腕骨右幹小型1, 肋骨1
	21	1	9区		SD-1	ウマ	寛骨右臼-腸成獣骨増殖有1
	22	3	9区		SD-1	ウマ	中節骨解体根有1
	23	2	9区		SD-2	ウマ	左上顎第4前臼歯壯獣1
	136	3	9区		SE-2	ウマ	右上顎第2後臼歯中型1, 右下顎第4前臼歯中型1
	12	16	9区		SI-1	ウマ	右上顎第3前臼歯壯-老1
	13	3	9区		SI-1	ウマ	上腕骨右幹1
	14	71	9区		SI-1	ウマ	左下顎第3後臼歯壯1
	15	2	9区		SI-3土罫	ウマ	肋骨1, 基節骨1
	16	x	9区		SI-3	ウマ	右上顎第4前臼歯-第3後臼歯壯獣1, 左個頭骨1, 口蓋骨片1(同一個体)

表4 ウマの遺構別一覧 (5/6)

No.	通し No.	遺物 No.	調査 区	大 グリッド	出土地点 - 遺構	種	部位・左右・残存部分・備考・個数
	17	8	9区		SI-7	ウマ	上腕骨左遠成獣小型1
	30	x-2	9区		SK-22 (HK-1内)	ウマ	左上顎第1後臼歯老獣1
6	-	-	9区		SK-74	ウマ	左右上顎第1切歯-第3後臼歯各1, 左右下顎骨各1, 肩甲骨左1, 肩甲骨右幹1 上腕骨左右完(近位端未癒合)各1, 橈骨左右完各1, 尺骨左右完(近位端未癒合)各1 中手骨左右完各1, 大腸骨左完存(遠位端未癒合)1, 大腸骨右幹-遠(遠位端未癒合)1 脛骨左完存各1, 中足骨左右はは完存各1, 左右寛骨各1, 左右膝蓋骨各1 左右距骨各1, 左右踵骨各1, 基節骨4, 中節骨1, 末節骨1, 頸椎2, 胸椎6, 腰椎1, 肋骨片70 (同一個体, ♂, 3-3.5歳, 推定体高123cm)
7	-	-	9区		SK-88	ウマ	頭蓋骨片, 左右上下顎骨各1, 肩甲骨左右各1大腸骨左完存1, 大腸骨右遠1 脛骨左右完存1, 中足骨左完存病変有1, 中足骨右完存1, 第2・4中手・中足骨各1 寛骨左右白各1, 踵骨左右各1, 距骨左右各1, 膝蓋骨左右各1, 基節骨3, 中節骨4, 末節骨1 頸椎3, 胸椎4, 肋骨片20, 手根・足根骨病変有1(同一個体, 3-4歳, 推定体高113cm)
	-	-	9区		SK-88	ウマ	左下顎骨老獣1, 脛骨左遠成獣1, 中足骨左完存1(推定体高115cm)
8	-	-	9区		SK-89	ウマ	左右上顎第1切歯-第3後臼歯各1, 下顎骨左右各1, 上腕骨左右幹-遠1 橈骨左右完-幹各1, 尺骨左右各1, 大腸骨左右幹-遠各1, 脛骨左右完存各1, 中手骨遠1 中手骨?幹1, 中足骨右近-幹1, 中手・中足骨遠1, 踵骨左右各1, 距骨左右各1, 基節骨2 中節骨1, 四肢骨破片10(同一個体, ♀, 老獣, 推定体高116cm)
	33	x-1	9区		SK-124	ウマ?	腰椎はは完成獣1, 四肢骨破片2
	-	-	9区		SK-161	ウマ	上腕骨左幹1, 肩甲骨右1, 上腕骨右幹骨増殖有1, 橈骨左幹1, 脛骨左遠1, 中手骨右近1 中手骨幹1, 中手・中足骨遠骨増殖有1, 中足骨左近-幹1, 中足骨右?幹1, 距骨左1 基節骨1, 肋骨片3
9	-	-	9区		SK-161	ウマ	左?上顎第1切歯1, 右上顎第3前臼歯1, 左下顎第2切歯?1, 下顎第3/4前臼歯1 右上下顎骨各1(同一個体, 老獣)
	35	1	9区		SK-186	ウマ	尺骨左成獣8, 第2・3中手骨左完成獣1(推定体高123cm), 基節骨1
	29	1	9区		SK-251	ウマ	距骨左1
	25	1	9区		SK-312	ウマ	橈骨破片1
	25	1	9区		SK-312	ウマ	第2中手骨破片1
	8	1	9区		SK-314	ウマ	第3後臼歯左壯獣1, 頸椎1, 椎骨片7, 肋骨完存1, 肋骨片7
	9	-	9区		SK-318	ウマ	寛骨左完成獣小型1
	11		9区		SK-322	ウマ	肩甲骨左白成獣1
10	7	-	9区		SK-324	ウマ	頭蓋骨片1個体分, 左右上下顎骨各1, 大腸骨左幹-遠1, 大腸骨右第三転子のみ1 第4中足骨左近-幹1(同一個体, ♀, 老獣)
	46	7	9区	E12		ウマ	左上顎骨成獣♂1, 右下顎骨成獣♂1
	47	8	9区	E12		ウマ	右老獣1右第4前臼歯老獣1
	49	13	9区	E12		ウマ	中足骨右完存1, 第2中足骨近1, 第4中足骨近-幹1, 踵骨右1, 足根骨5 (同一個体, 成獣, 推定体高126cm)
	54	x-0	9区	E12		ウマ	脛骨左幹-遠成獣1, 右下顎第3後臼歯成獣1, 末節骨1
	56	x	9区	F11		ウマ	寛骨左右各1(同一個体, 成獣)
	57	x	9区	F12		ウマ	尺骨右1, 大腸骨破片1, 下顎骨右(歯なし)1
	38	21	9区	G12		ウマ	左上顎第1後臼歯?右老獣1, 左第2前臼歯成獣1
	42	x	9区	G12		ウマ	肋骨1
	43	x	9区	G12		ウマ	中手骨(第2・4付)左-幹老獣骨増殖有1, 手根骨1, 基節骨1
	59	x-2	9区	トレンチ3		ウマ	上腕骨右幹-遠成獣解体痕有1, 尺骨右近成獣1第3・4中手骨左完成獣1(推定体高106cm)
	60	x	9区	トレンチ3		ウマ	橈尺骨右完存1(推定体高115cm), 基節骨完存1
	61	x-2	9区	最終確認 トレンチ		ウマ	中節骨完存1
	63	x	9区	-		ウマ	腰椎はは完(左横突起欠, 棘突起破損)成獣1
13	64	x	9区	-		ウマ	頭蓋骨後頭部1個体分, 上顎骨片約30, 下顎骨左右各1, 上腕骨左幹骨増殖有1 橈骨右幹1, 尺骨右幹-遠1, 中手骨幹1, 中足骨右完存1, 胸椎1, 肋骨片約20 (同一個体, 成獣, 131cm)
	11	-	9区		SK-162	ウマ	左右上顎第2前臼歯-第3後臼歯各1, 左下顎第2前臼歯-第3後臼歯1, 右下顎骨1 (同一個体, 老獣)
	12	-	9区		SK-162	ウマ	左右上顎骨各1(同一個体, 老獣)

※ 左端欄のNoは表3のウマの頭蓋骨・下顎骨表のNoに対応する。

表5 イヌ・ウマ以外の哺乳類一覧

通しNo	遺物No	調査区	大グリッド	出土地点・遺構	種	部位・左右・残存部分・備考・個数
68	x	9区			ウサギ	大腿骨左近一碎成獣1
76	16	8区		HK-10	ドブネズミ	下顎骨左右各1 (同一個体)
18	x	9区		HK-7	ドブネズミ	脛骨左完存着獣1
30	x-2	9区		SK-22 (HK-1内)	ドブネズミ	大腿骨左完存1
27	x-1	-		SK-38	ドブネズミ	寛骨左成獣1
82	1	8区B		SK-122	イノシシ	距骨右成獣大型1
54	x-41	9区	E12		イノシシ	大腿骨左骨幹部1
49	13	9区	E12		シカ	角先端部1
106	x	8区		HK-31	イルカ	椎骨1
113		8区		SI-2 (トレンチ12内)	クジラ	椎骨中型1
33	x-1	9区		SK-124	クジラ (大型)	破片1
114	19	8区		土器1	クジラ (中型)	肋骨破片1
36		9区		SN-8 (トレンチ6内)	ネコ	脛骨右幹一碎成獣1
66	x	9区		327	ネコ	肩甲骨右近1, 大腿骨右完存1, 寛骨左右完存1 基節骨1, 中節骨2, 胸椎6, 仙骨1, 尾椎6, 椎骨片13
53	37	9区	E12		ネコ	尺骨右近一碎成獣小型1
106	6	8区		HK-28	ウシ	距骨右完存1
128	13	8区	N11		ウシ/ウマ	肋骨破片1

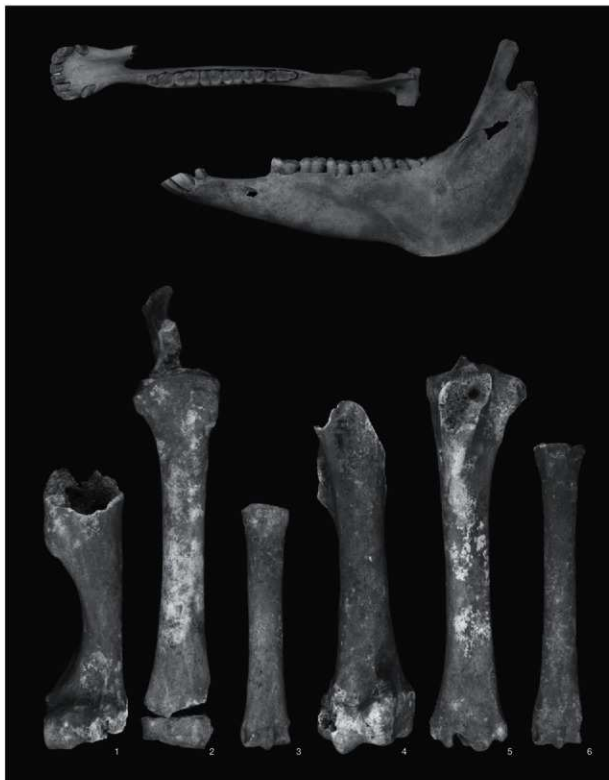
表6 鳥類・魚類一覧

通しNo	遺物No	調査区	大グリッド	出土地点・遺構	種	部位・左右・残存部分・備考・個数
98	24	8区		HK-13	アホウドリ	脛骨右幹1
83		8区	N10		アホウドリ	脛骨左近1
98	24	8区		HK-13	カイツブリ類 (大型)	脛骨左遠1
119	x-1	8区		SK-248	シャモ	中足骨左小小型1
37	13	9区	G12		ミズナギドリ類	上腕骨右近1
74	x	8区		HK-8	エイ?	椎骨1
50	14	9区	E12		カサザメ?	椎骨完存1
104	x-10	8区		HK-26 (SN-46)	魚類	破片1
112	20	8区		HK-34	魚類	破片4, 鱗10
120	-	8区		SB-2 (トレンチ5内)	魚類	鱗多数
77	x	8区		SB-7	魚類	破片2
106	x-1	8区		HK-27	サメ (大型)	椎骨2
51		9区	E12		種不明魚類	椎骨破片少々
97	23	8区		HK-13	ホシザメ?	椎骨3
69	-	8区B		トレンチ6	マイワシ	主上顎骨左右各2, 歯骨左5右3 角骨左2右3, 方骨左2右3, 舌顎骨左5右3 前鰓蓋骨左右各6, 主鰓蓋骨左7右3 耳骨20, 基後頭骨4, 椎骨82 (最小個体数10)



動物遺体1 イヌ全身骨格 (8区SK-42出土)(約2/5)





動物遺体2 ウマ (約1/3)

上段：ウマ下顎骨 (8区 SK-285遺構出土)

下段：ウマ四肢骨 (9区 SK-74遺構出土)

(1.右腕骨 2.右橈尺骨 3.左手骨 4.右大腿骨 5.左脛骨 6.右中足骨)



動物遺体3 病変がみられるイヌの四肢骨（約1/2）

上段：右橈尺骨（9区 SK-318遺構出土） 下段：右大腿骨（4区 SK-42遺構出土）

# 写真図版



陶磁器集合 (表)



陶磁器集合 (裏)



9区遺構確認状況（中央部）



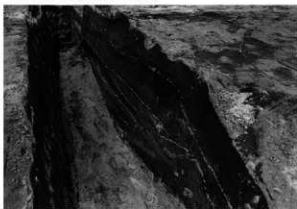
9区遺構確認状況（北部）



9区遺構確認状況（南部）



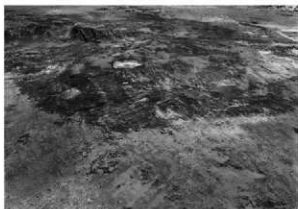
第2号土手状遺構完掘状況



第1号土手状遺構土層断面



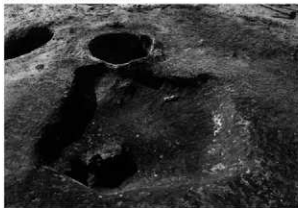
第39号建物跡完掘状況



第39号建物跡確認状況



第39号建物跡炉1完掘状況



第39号建物跡炉2完掘状況



第39号建物跡内第1号粘土貼土坑土層断面



第41号建物跡完掘状況



第41号建物跡炉 2 完掘状況



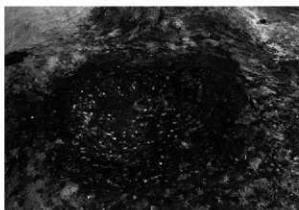
第41号建物跡内第 4 号粘土貼土坑完掘状況



第44号建物跡完掘状況



第48号建物跡完掘状況



第48号建物跡炉完掘状況



第48号貝集積地確認状況



第43号建物跡完掘状況



第47号建物跡完掘状況



第46号建物跡完掘状況



第50号貝集積地確認状況



第49号建物跡完掘状況



第1号土坑群完掘状況





第1・2号井戸跡完掘状況



第1号井戸跡確認状況（上面）



第1号井戸跡土層断面



第2号井戸跡遺物出土状況



第1号井戸跡完掘状況



第75·77号土坑  
完掘状况(9区)



第75号土坑  
土层断面(9区)



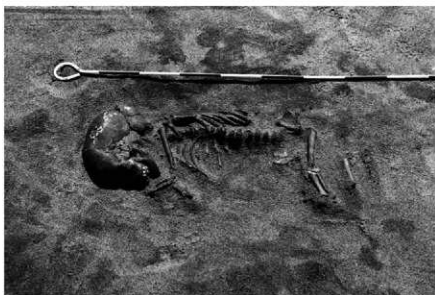
第124号土坑  
完掘状况(9区)



第24号粘土貼土坑  
完掘狀況（9区）



第117号土坑墓  
人骨出土狀況



第120号土坑墓  
人骨出土狀況



第 1 2 2 号 土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 1 2 3 号 土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 1 2 4 号 土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 125 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 128 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 132 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 133 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 135 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 136 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 138 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 141 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况

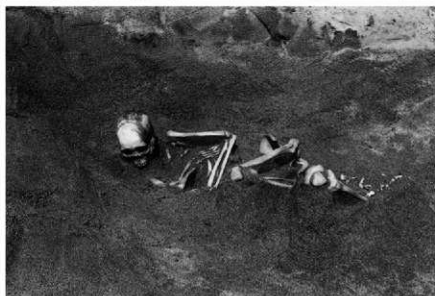


第 142 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况

第145号土坑墓  
人骨出土状况



第148号土坑墓  
人骨出土状况



第149号土坑墓  
人骨出土状况







第 155 号 土 壙 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 9 号 土 壙  
馬 骨 出 土 状 况



第 11 号 土 壙  
犬 骨 出 土 状 况



1区遺構確認状況



第7号集石遺物出土状況



南北トレンチ土層断面



第7号溝跡完掘状況



第32号土坑完掘状況



第52号建物跡完掘状況



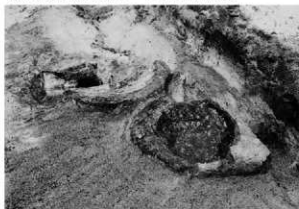
第52号建物跡内第5号粘土貼土坑完掘状況



第52号建物跡内第6・7号粘土貼土状況



第53号建物跡内第1号粘土貼土坑完掘状況



第11・12号粘土貼土坑完掘状況(1区)



7区完掘全景



7区遺構確認状況



流路跡完掘状況



第1号土坑完掘状況（7区）



第2号土坑完掘状況（7区）



8区全景



8区完掘全景 (中央部)



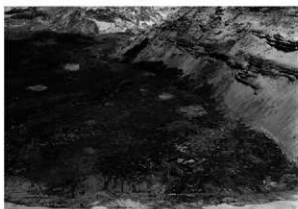
8区遺構確認状況（中央部）



第3号土手状遺構確認状況



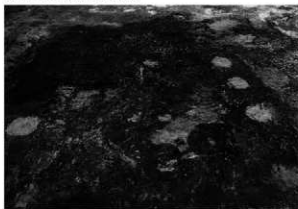
第54号建物跡完掘状況



第54号建物跡確認状況



第56号建物跡完掘状況



第56号建物跡確認状況



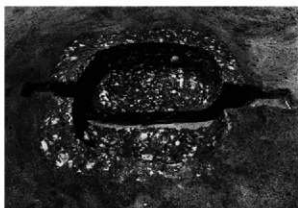
第56号建物跡内第6号土坑完掘



第55号建物跡完掘状況



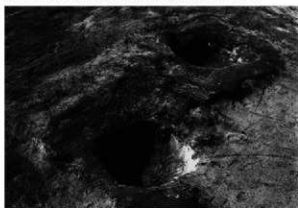
第55号建物跡内第24号粘土貼土坑完掘状況



第55号建物跡内第23号粘土貼土坑土層断面



第55号建物跡内第68号土坑土層断面



第55号建物跡内第50・51号土坑完掘状況





第60号建物跡完掘状況



第60号建物跡内第5号粘土貼土坑土層断面



第60号建物跡内第6号粘土貼土坑土層断面



第64号建物跡完掘状況



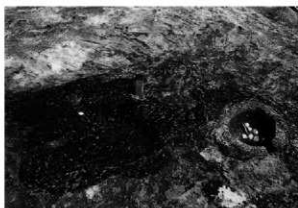
第64号建物跡内第55・57号粘土貼土坑土層断面



第61号建物跡完掘状況



第61号建物跡確認状況



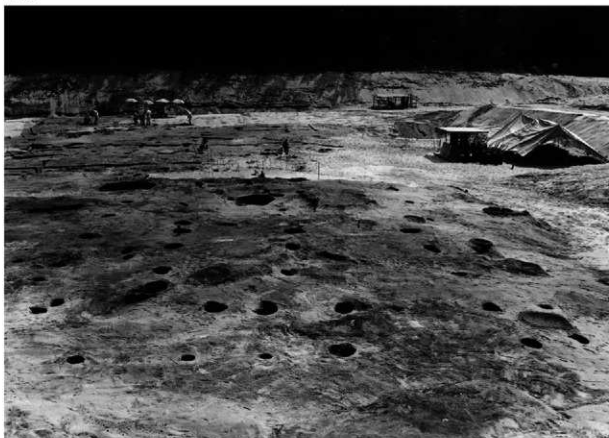
第61号建物跡炉・第19号粘土貼土坑完掘状況



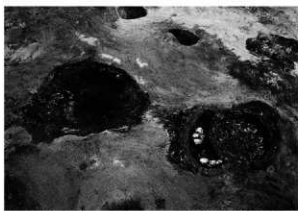
第62号建物跡完掘状況



第66号建物跡完掘状況



第65号建物跡完掘状況



第65号建物跡炉1・第35・36号粘土貼土坑完掘状況



第65号建物跡炉3完掘状況



第65号建物跡内第43号粘土貼土坑土層断面



第69号建物跡完掘状況



第68号建物跡完掘状況



第68号建物跡内第1号粘土貼土坑完掘状況



第57号貝集積地確認状況



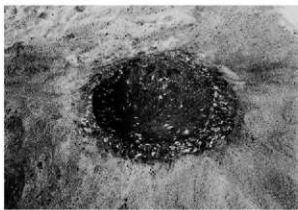
第59号貝集積地遺物出土状況



第59号貝集積地貝集合写真



第71号建物跡・第15号不明遺構完掘状況



第72号建物跡内第41号粘土貼土坑完掘状況



第71号建物跡内第43号土土層断面



第71号建物跡遺物出土状況



第15号不明遺構土層断面

第68号粘土贴土坑  
完掘状况(8区)



第72号粘土贴土坑  
遗物出土状况(8区)



第55号整地面  
完掘状况(8区)

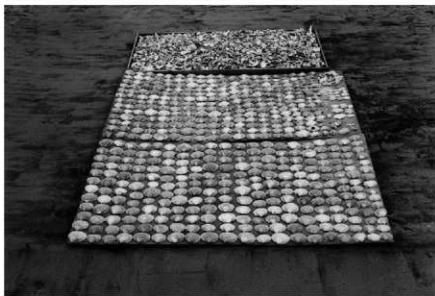




第64号整地面  
完掘状況



第63号貝集積地  
確認状況



第63号貝集積地  
貝集合写真



第46号粘土貼土坑  
完掘狀況（8区）

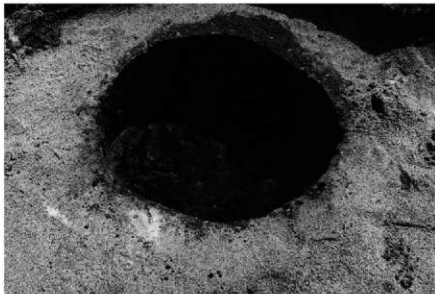


第58号粘土貼土坑・  
第141号土坑  
完掘狀況（8区）



第207号土坑  
土層断面（8区）





第 207 号土坑  
完掘状况 (8区)



第 229 号土坑  
完掘状况 (8区)



第 233 号土坑  
完掘状况 (8区)

第199~205号土坑  
完掘状况(8区)



第161号土坑墓  
人骨出土状况



第15号土坑  
馬骨出土状况





8b区1次面確認状況（西から東へ）



8b区1次面完掘状況



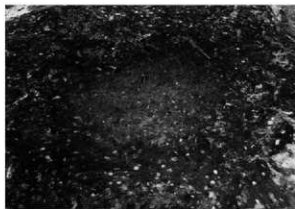
6区完掘全景（南から北へ）



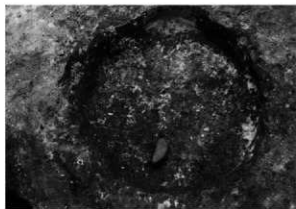
6区完掘全景（西から東へ）



第74号建物跡完掘状況



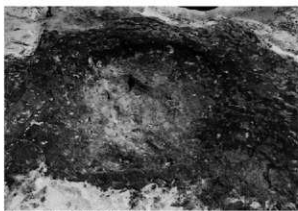
第74号建物跡炉完掘状況



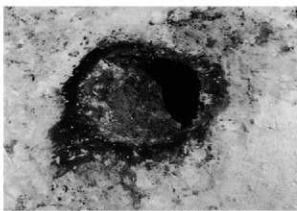
第74号建物跡内第4号粘土貼土坑完掘状況



第77号建物跡完掘状況



第77号建物跡炉完掘状況



第77号建物跡内第23号粘土貼土坑完掘状況



第77号建物跡内第55号粘土貼土坑完掘状況



第2号区画溝土層断面



第78号建物跡炉1・第1号粘土貼土坑完掘状況



第78号建物跡内第2号粘土貼土坑土層断面



第79号建物跡内第35号土坑完掘状況



第79号建物跡遺物出土状況



第80号建物跡完掘状況



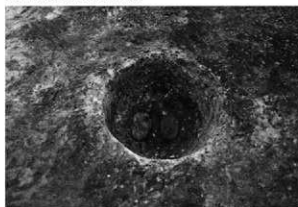
第83号建物跡完掘状況



第83号建物跡確認状況



第83号建物跡竈完掘状況



第83号建物跡内第12号粘土貼土坑完掘状況



第83号建物跡完掘状況





第79号整地面確認状況



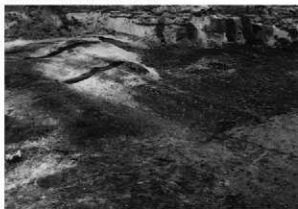
第79号整地面炉 1 完掘状況



第79号整地面炉 2 完掘状況



第79号整地面内第14号土坑A・B完掘状況



第80号整地面完掘状況



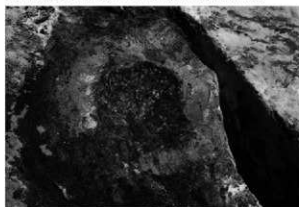
第85号整地面確認状況



第85号整地面内第8号粘土貼土坑完掘状況



第85号整地面内第9号粘土貼土坑完掘状況



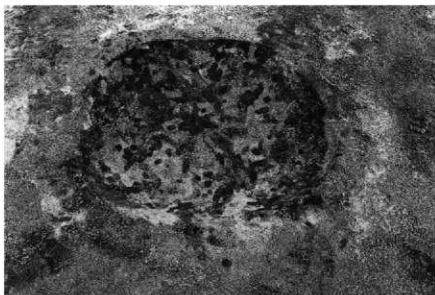
第85号整地面内第10号粘土貼土坑完掘状況



第85号整地面内第31号土坑完掘状況



第75号建物跡  
完掘状況



第75号建物跡内  
第17号土坑  
完掘状況



第81号建物跡  
2次面ビット  
完掘状況

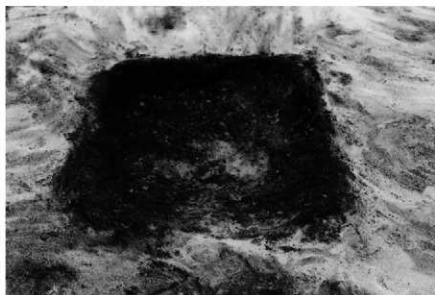
第 8 1 号 建 物 迹  
炉 1 完 掘 状 况



第 8 1 号 建 物 迹  
炉 2 完 掘 状 况



第 8 2 号 建 物 迹  
炉 1 完 掘 状 况





第 82 号 建物跡内  
第 9 号 粘土貼土坑  
完 掘 状 况



第 82 号 建物跡内  
第 74 号 貝集積地  
遺物出土状况



第 84 号 建物跡  
完 掘 状 况

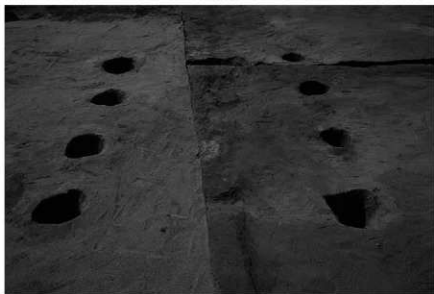
第84号建物跡内  
第17号粘土貼土坑  
完掘状況

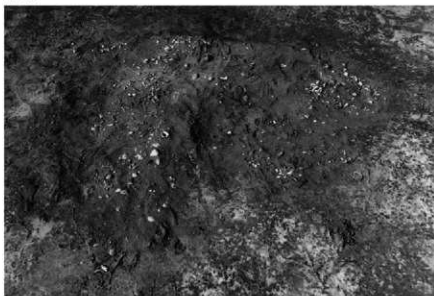


第84号建物跡  
遺物出土状況



第85号建物跡  
完掘状況





第 85 号 建物跡内  
第 76 号 貝集積地  
遺物出土狀況



第 86 号 建物跡  
完 掘 状 況



第 87 号 建物跡  
完 掘 状 況

第 88 号 建 物 迹  
完 掘 状 况



第 89 号 建 物 迹  
完 掘 状 况



第 91 号 建 物 迹  
完 掘 状 况







第 9 2 号 建 物 跡  
完 掘 状 况



第 9 6 号 建 物 跡  
完 掘 状 况



第 9 8 号 建 物 跡  
完 掘 状 况



第77号整地面  
遺構確認状況



第77号整地面内  
第1・2号粘土貼土坑  
完掘状況



第77号整地面内  
第3号粘土貼土坑  
完掘状況



第78号整地面  
土層断面(南から北へ)

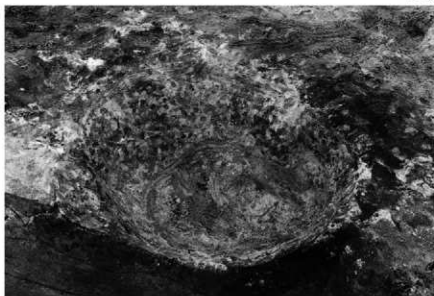


第78号整地面  
土層断面(西から東へ)



第78号整地面内  
第4号土坑  
完掘状況

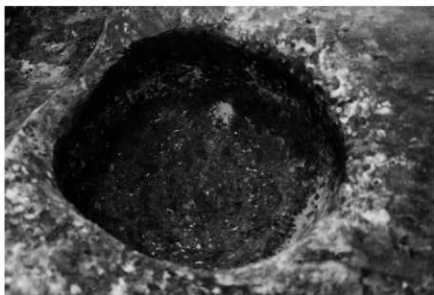
第 81 号整地面内  
第 13 号土坑  
完掘状况



第 81 号整地面内  
第 18 号粘土贴土坑·  
第 22 号土坑完掘状况



第 81 号整地面内  
第 22 号土坑  
完掘状况





第 84 号 整地面内  
第 5 号 土 坑  
完 掘 状 况



第 88 号 整地面内  
第 12 号 炉 完 掘 状 况



第 88 号 整地面内  
第 6 号 粘 土 粘 土 坑  
土 层 断 面

第88号整地面内  
第6号土坑  
完掘状况



第91号整地面内  
第54号粘土贴土坑  
完掘状况



第94号整地面  
完掘状况





第98号整地面  
完掘状况



第98号整地面内  
第14号粘土貼土坑  
完掘状况

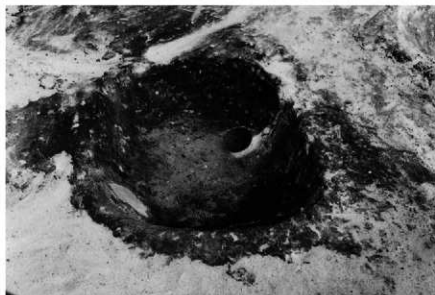


第98号整地面内  
第20号粘土貼土坑  
完掘状况

第99号整地面  
完掘状况



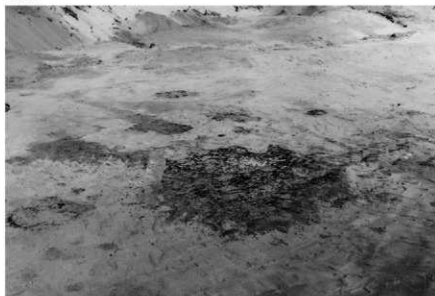
第99号整地面  
炉完掘状况



第99号整地内  
第22号粘土贴土坑  
完掘状况







第101号整地面  
確認状況



第3号井戸跡  
確認状況



第3号井戸跡  
木杭部分  
土層断面



第 2 号 欵 状 遗 构  
完 掘 状 况



第 2·3 号 欵 状 遗 构  
完 掘 状 况



第 1 3 号 炉 迹  
完 掘 状 况



第4号粘土贴土坑  
完掘状况(6区)



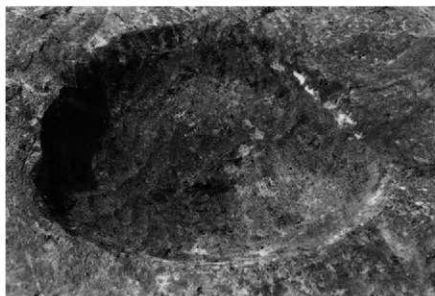
第12号粘土贴土坑  
完掘状况(8b区)



第24号粘土贴土坑  
完掘状况(6区)



第36号粘土貼土坑  
完掘狀況(6区)



第2号土坑  
完掘狀況(8b区)



第11号土坑  
完掘狀況(8b区)



第 38 号 土 坑  
完 掘 状 况 (8b 区)

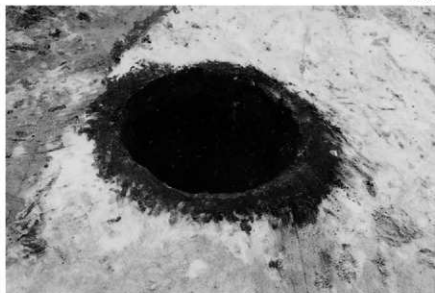


第 48·50 号 土 坑  
完 掘 状 况 (8b 区)



第 58 号 土 坑  
完 掘 状 况 (6 区)

第105号土坑  
完掘状况(6区)



第111号土坑  
完掘状况(6区)

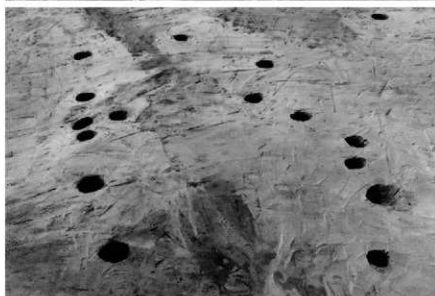


第147号土坑  
完掘状况(6区)





第13号ピット群  
完掘状況



第18号ピット群  
完掘状況



第21号ピット群  
完掘状況



第1号区画状遺構  
確認状況



道路跡  
土層断面



第17号不明遺構  
確認状況





第 163 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 164 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



第 165 号土 壤 墓  
人 骨 出 土 状 况



SI40-2865



SI53-3468



土壕墓155-3457



SI57-3610

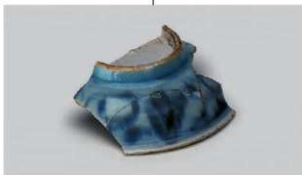


SI57-3613



SI65-3680







SI69-3731



SI69-3730



SI69-3736



SI71-3782



SI71-3780



HK54-3842



HK52-3805





HK53-3830



HK55-3861



HK56-3885



HK62-3896



HK71-3930



68 SK212-3992



HK72-3941



HK74-3958





8区遺構外-4018



8区遺構外-4023



SI79-4100



SI82-4154



SI83-4176



SI83-4169



SI83-4171



SI83-4170











SI69-3729



SI49-3036



HK49-3502



HK52-3809



SI63-3666

第3号土手状遺構-3574

SI71-3787



SI39-2859

HK34-3055

HK67-3920

HK62-3906

HK89-4338

6区遺構外-4580

L10区遺構外-4581

HK34-3051

陶器・金属製品・骨角製品



9区遺構外-3195



HK36-3058



SI68-3709



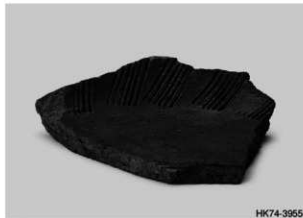
HK49-3496



HK55-3859



9区遺構外-3221

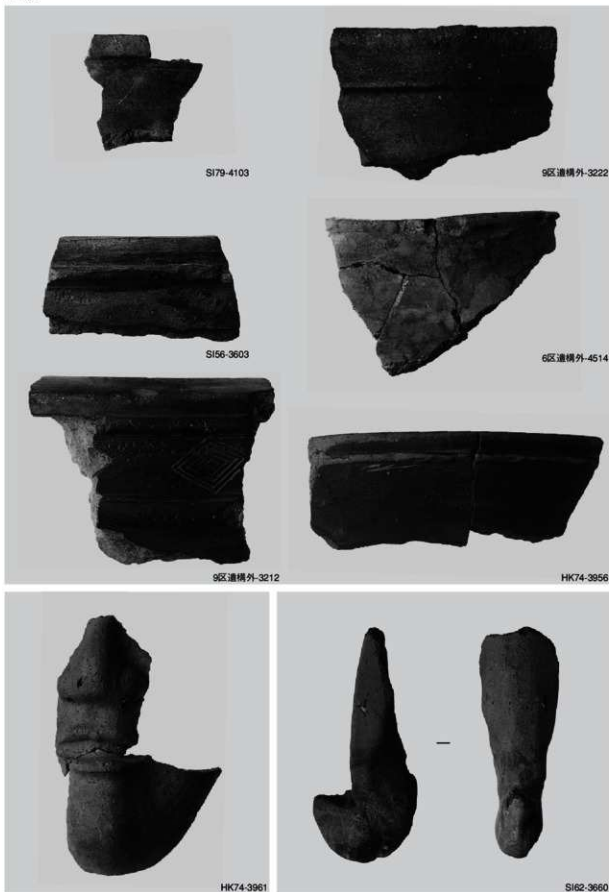


HK74-3955

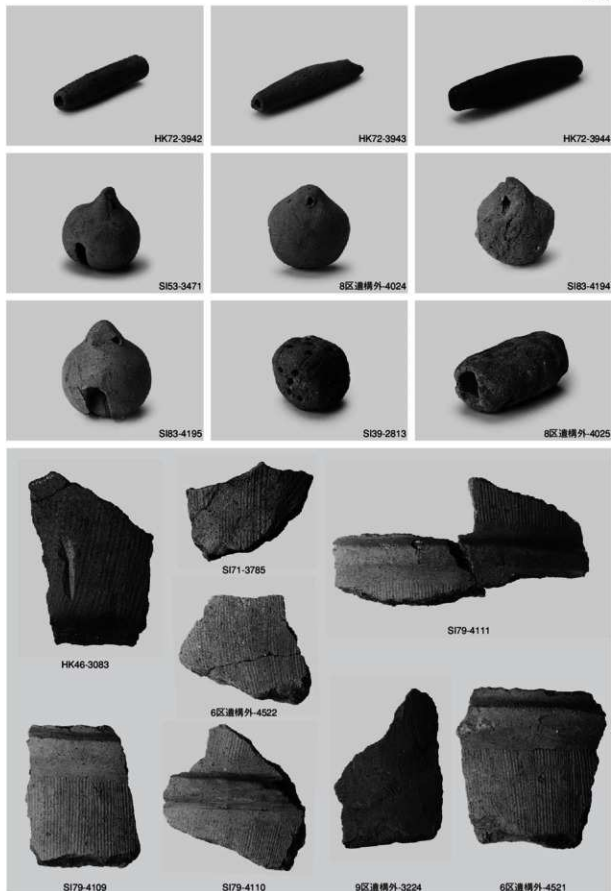


HK49-3498

土師質土器・陶器・瓦質土器



土師質土器・陶器・瓦質土器・土製品

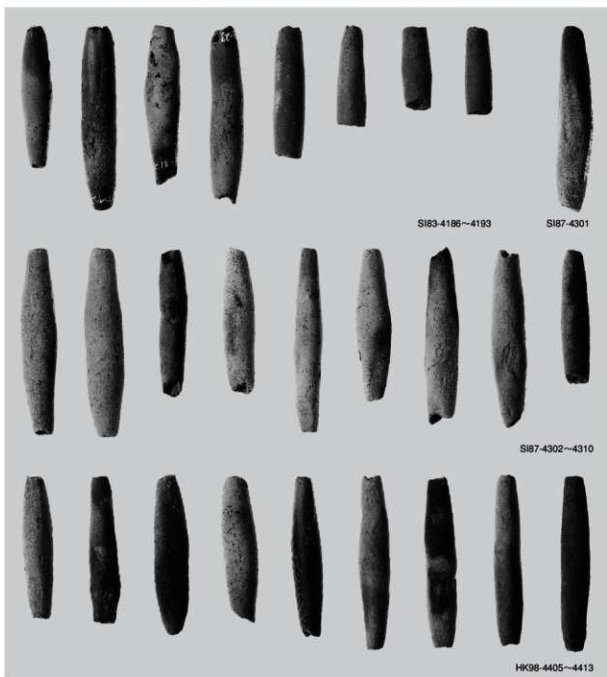


土製品



SI83-4196

SI88-4324



SI83-4186~4193

SI87-4301

SI87-4302~4310

HK98-4405~4413



HK71-3932



HK74-3964



SI65-3685



SI69-3745



SI69-3746



S区遺構外-3232



SI42-2893



HK62-3900



SI41-2881



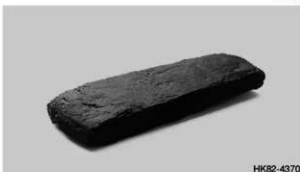
HK64-3913

石器

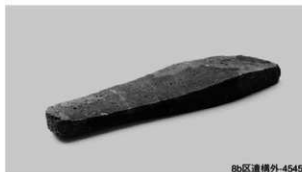




HK85-4381



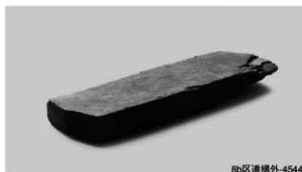
HK82-4370



8b区遺構外-4545



SI74-4056



8b区遺構外-4544



8b区遺構外-4542



SI83-4205

SI74-4057

6区SK103-4465

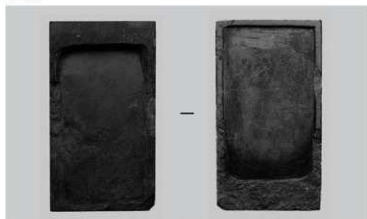
SI83-4207

SI83-4206

6区遺構外-4548

SI79-4119

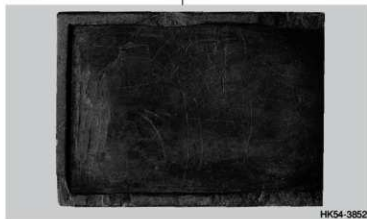




HK52-3815



6区遺構外-4536



HK54-3852



SI45-2934



SI79-4122



HK85-4382



6b区SN12-4447



9区SK196-3162



SI45-2933



SI55-3593



HK55-3867



HK98-4423



SI87-4315



SI83-4243



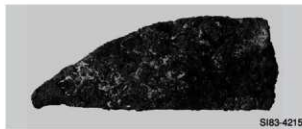
SI83-4242



8区遺構外-4036



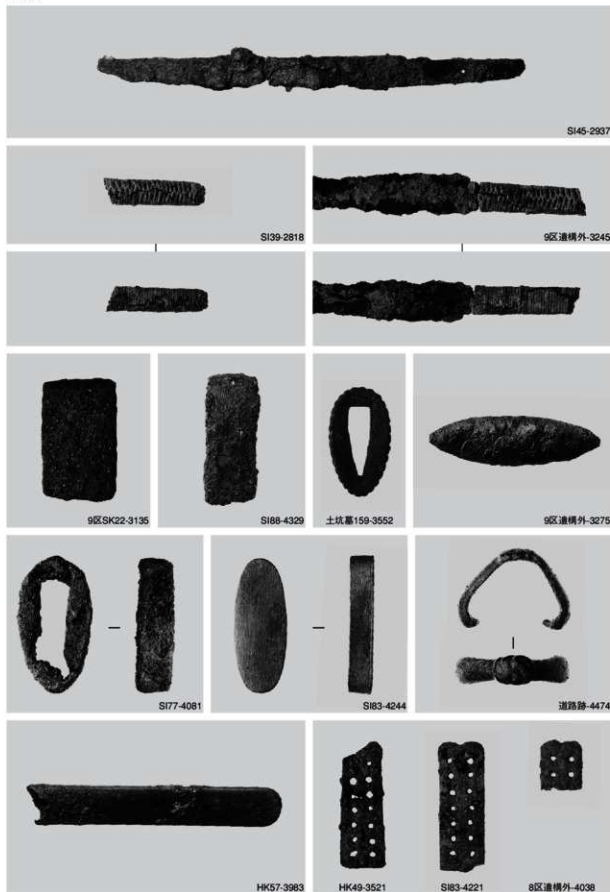
SI83-4216



SI83-4215



6区遺構外-4553





SI43-2906



9区SK24-3137



9区SK75-3147



HK49-3486



HK49-3487



第3号土手状遺構-3563



SI69-3722



HK51-3795



HK55-3857



8区遺構外-4012

土師質土器





SI76-4066



SI87-4289



SI83-4158



SI79-4089



SI92-4341



HK80-4366



HK91-4389



HK94-4390

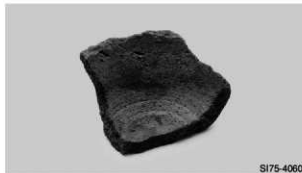


6区遺構外-4488



SX17-4475

土師質土器





土師質土器







SI92-4345



SI92-4346



SI92-4349



HK78-4364



HK84-4375



6区SK161-4468



6区SK161-4469



6区遺構外-4498

土師質土器





SI39-2808



SI45-2923



9区遺構外-3184



SI55-3586



SI57-3608



SI62-3657



SI64-3669



SI65-3675

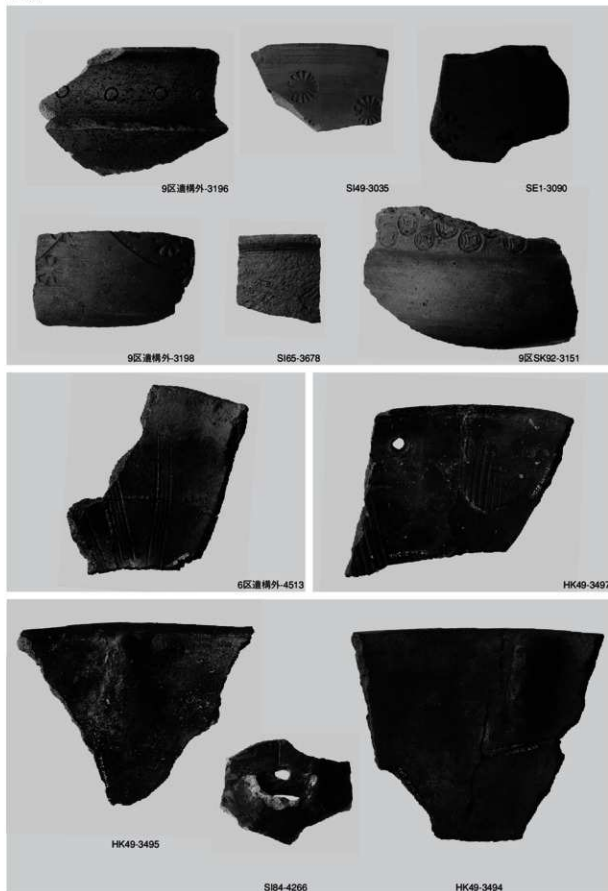


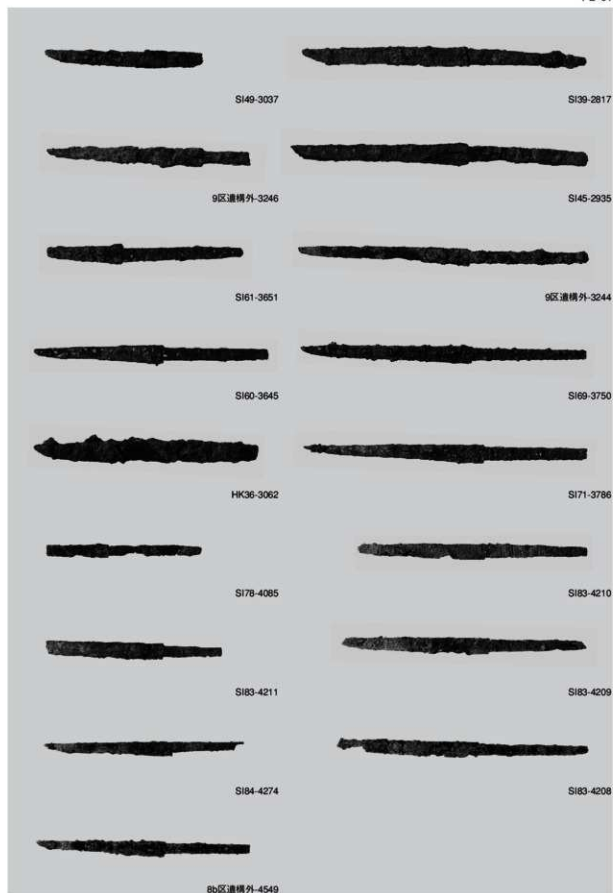
SI69-3725

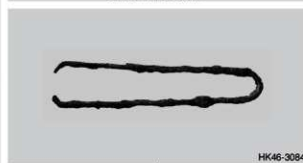
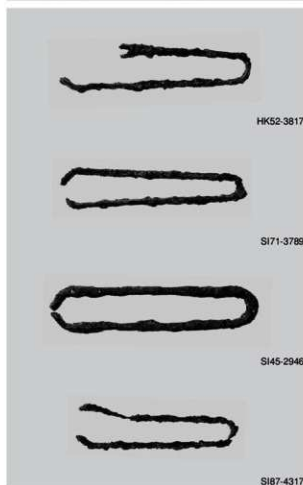
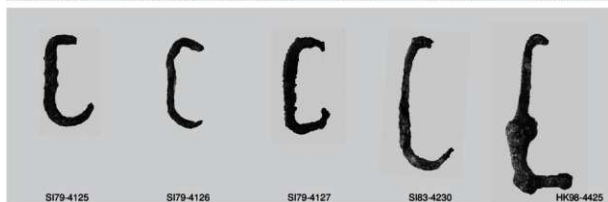


8区遺構外-4016

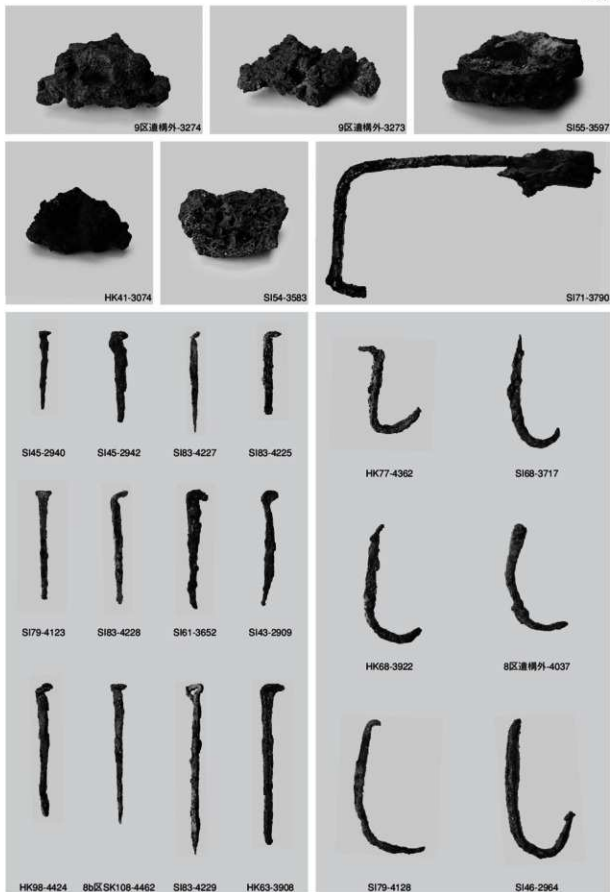
土師質土器





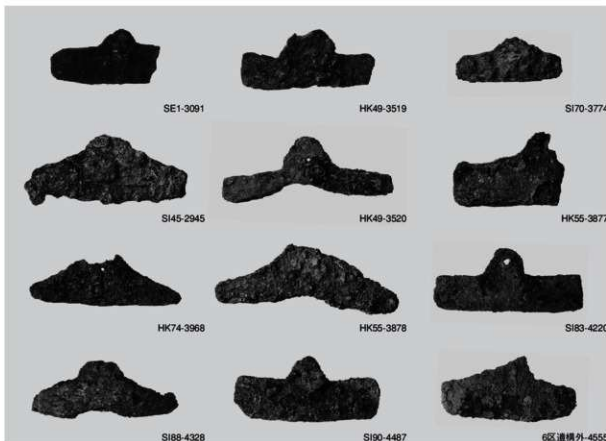
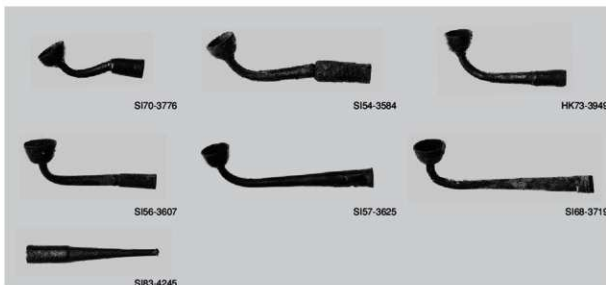
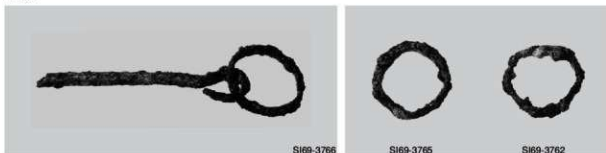


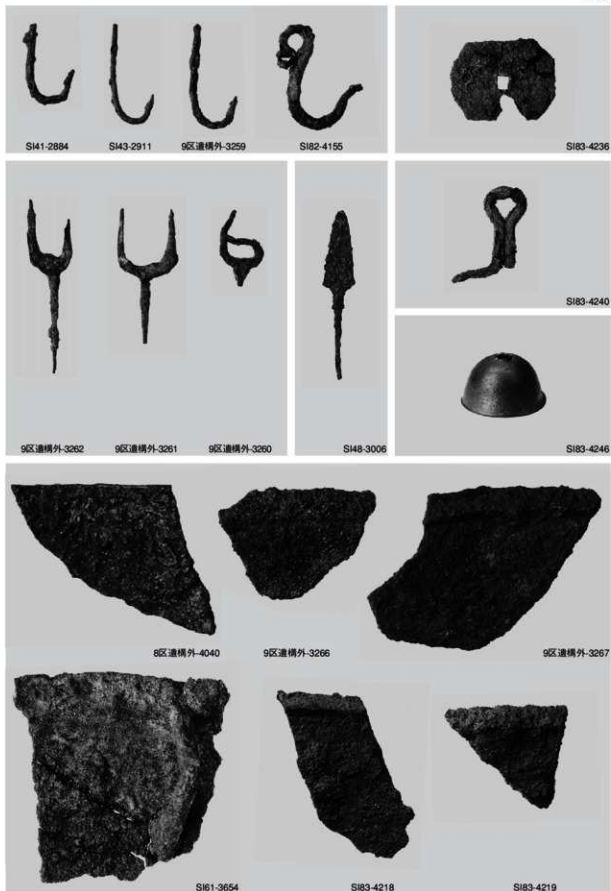
金属製品



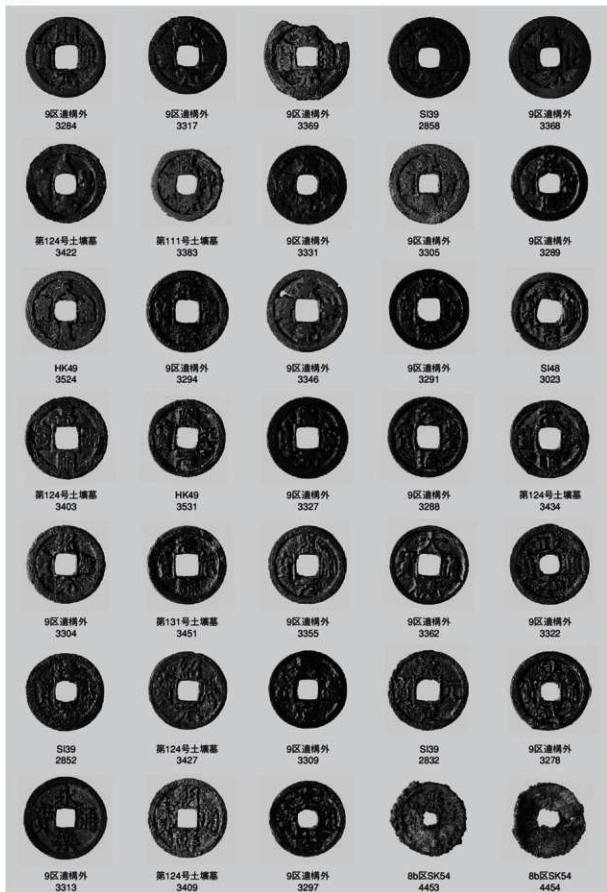
金属製品







金属製品





HK49-3539



9区遺構外-3382



SE1-3098・3099



SE1-3100・3101



SE2-3111・3112



SE2-3109

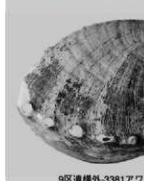
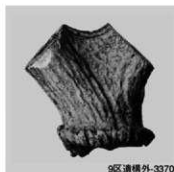


SE1-3104



SE1-3103

貝加工品・木器



茨城県教育財団文化財調査報告第284集

## 村松白根遺跡 2

大強度陽子加速器施設事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

### 下 巻

平成19(2007)年3月19日 印刷

平成19(2007)年3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷  
〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122  
T E L 029-305-5588